

F33-B33ウ



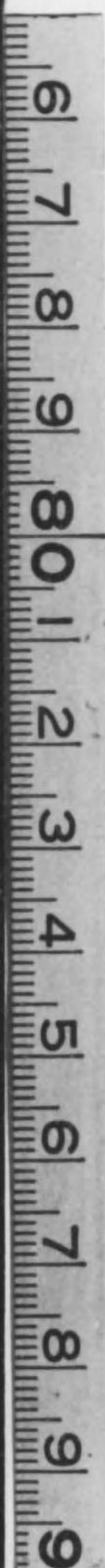
1200500764391

F33

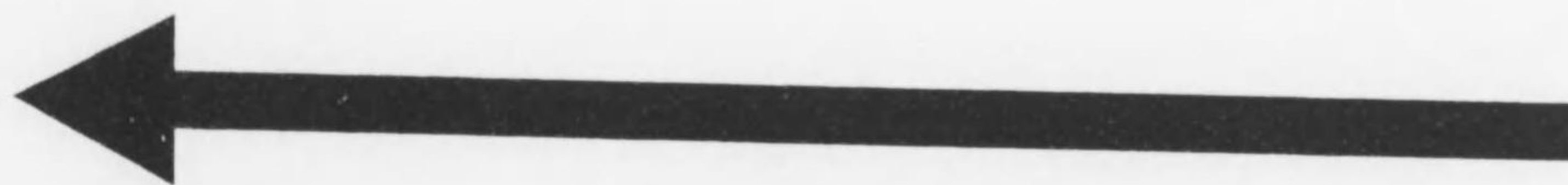
B33



×
複
写



始



1:33-142

143
3
429
429
4720

F33
B33

平井廣五郎譯

百集後の社会

東京

警醒社書店



1072
83

注 意

本書中往々固有名詞に日本名を用ひたるは聊か不相應の嫌あれ
 ども原名の儘にては不便を感じるものあるべきが故成るべく日
 本音に近き名に變更して譯述したり即ち左の如し

西重連 折戸先生 服部悦子 山井丸齋 庄兵衛 馬藤氏 米蘭 花鹿 杉澤氏

Julian West Dr. Leete Edith Bartlett Pillsbury Sawyer Mr. Barton Bertian Storiol Mr. Sweetser

寧齋 鴨亭 米津善助 龍山 國町 南河邊 共富町 鳥門町 丸振岬 女人國帝

Nesmith
Oates
John Jones
Mount Auburn
State Street
The South Cove
Commonwealth Avenue
Tremont Street
Marblehead
Penthesilea
太古黒海濱に有りたりと傳ふる
女人國アマゾン人種の女王の名

百季後の社會

第二回

米國 エドワード・ペラミー著

平井廣五郎譯

余が始めて此浮世に産聲を揚げたのは波士頓の市中で、時は恰も紀元千八百五十七年の事である、諸君は定めて言はれよう「何とです、千八百五十七年とは！こりや、どうも咄々の怪事だ、なかに、つい、口が滑つて言ひ損なつたのだ、屹度千八百五十七年の事に相違ない」と、否や失敬乍ら全く間違ては居ない、儲かに千九百、では無い、千八百五十七年で、頃は師走の廿六日、即ち耶蘇誕生祭の明けて翌日午後の四時こそ、余が始めて人間世界に落ちて来て、波士頓の東風に呼吸した時である、左様、波士頓の東風と云へば随分鋭い者で、斯る遠い昔も矢張尙は紀元二千年の今日と同じく強く吹きすさんで、同市の名物であつた、

左なきだに馬鹿氣た話に聞ゆる者を、況てや余は今一見三十歳前後と見ゆる少壯者であると云へば、尙更以て途方途微もない話と思はれ、或は人を欺く謔言と此書を棄て、顧みない人が有かも知ぬが、如何にも無理ならぬ事である、併し詐りは決して語らない、どうか数頁の間辛抱して讀で下さるは、其詐でない事が明白になるであらうし、且や又余の生時を知る者は余に如かずと言へぬでも無うから、去來是より談話を進める事としよう、抑も第十九世紀の後半期の頃には、今日の文明を開發すべき原素こそ己に醗酵しつゝあつたものゝ、逆も今日の文明其者の如きは、未だ露程も無つたのは、小學校の生徒さへ知て居る所で、何時の昔よりか社會を類別し來た四種の區別すら改變の様なことは一つも無かつた、其區別とは、富だ者と貧い者と、教育を受けた者と、無學文盲な者とで、其相互の間にある差違は、今日世界の國々の間にある差違よりも遙かに著しい、左すれば之を四部類に別れて有たと云ふよりも、四國民に別れて有たと云ふ方が至當かも知れぬ、余も富で且つ教育を受けた部類の者で、思ふ存分の快樂を盡し得べき結構な境界に贅澤と嫺雅をのみ貪り、自分の生活を支ふる源は、皆之を他人の勞役より取て、何の酬ひをも爲た事は無い、元來余の父母も祖父母も、其流儀で生活したので、余も亦た子孫が出来たら、ごうか同じ流儀で氣樂な生計を享けさせたいと望んで居つた、此處で諸君に不審が起ろう、「全体此世に何の爲す所もなくして、如何して生きて居られたらうか、

此世界も世界である、手足が動ひて立派に働ける人を、何故にぶら／＼坐食させて置たいらうかと、左ればなり、余の高祖父が若干の金を溜て置いたので、子孫は常に其金で生活して居たのである、斯く云へば諸君は又推して云はれよう、「父子三代も續て坐食しながら遣ひ盡せなんだとして見れば、大變な金額で有たに相違ない」と、如何にも尤千萬であるが、全く左様では無い、其金額は固大した者では無つたのに、三代坐食した後に至て、却て始めの額よりもズット大さふ成た、斯く薪を焚かずして煖を得る様に、幾ら用ても耗らないとは、實に不思議で魔術かと思はれるが、其實は自分の暮し向きの重荷を他人の肩に擔はせるといふ狡猾な工夫を用たのに過ぎない、此術は今でこそ幸ひに失せてしまふたが、諸君の祖先等は盛んに行つたので、之を甘く行ふ者を稱して、資本の利得で暮す人とか名け、人々の求めた目的は、畢竟此に在たのである、左れば昔の職業法では一鉢ごうして其様な事が出来たのかと云ふ問題を今爰に説明するのは、却て肝腎の談話を遅延せしめる恐れがあるから、唯手短かに申さば、資本の利益と云へば、金銭を持つ人とか、金銭を譲受た人が、勞役者の汗血より成る生産物に對して永久に掛けた一種の税である、尤もこんな社會の立て方は、方今より見ると奇怪千萬不條理千萬であるが、諸君の祖先も之を批評譴責せなんだでもない、否な、利金といふ者を全廢するとか、假令全廢せぬまでも、責ては之を成るべく最少の割合に引縮めようとして、立法者や預言者が、極めて

古い時代より骨を折たものである、けれども昔時の社會の立て方が勢力を得て居る間は致し方がない、折角の盡力も遂に水泡に歸してしまつて、十九世紀の後半期の頃には、諸國の政府は概ね利益減廢問題を全く放棄して、手を着けぬ事とした、

其頃人は如何な風に生活して居たか、殊に富者と貧者と相互の關係は如何様で有たかと云ふことを、略讀者に會得せしめるには、次に示すが如き喩を假るに若くは無かろう、抑も當時の社會は、恰も一つの大四輪車で、許多の人が胸に繩を掛けて、砂多き坂道を辛苦難難して引て行た様な者で、引く人は身体が幾ら疲勞衰弱して休みたたくても、饑餓にせがまれて休むことは出来ず、珠なす汗を絞りながら、難路險坂の厭ひなく、晝夜寒暑の別もなく、曳々と挽て行く苦しさよ、それに引換へて車上に滿つる乗客は如何に嶮峻な峻坂を登るときさへ、決して降りる者はなく、香氣に袂を輕風に飄はして高く塵埃の上に出で、或は優々と好景に目を浮べて自適する者もあれば、或は車引の力の優劣を評判する者もあり、實に見るさへ羨ましき境界である、誰しも此車上に座を占めたいのは無論で、身親から其座を占めて更に之を子孫に遺そうと云ふのが、各人畢生の目的で有たから、其競争の劇しいことは一通りではない、偕此箱車の規則に由ると、車上の客は皆自分の欲する人に其座を譲ることが出来るのであるが、又屢々不慮の出來事のため、何時我座を失ひ果さぬにも限らないから、車上は甚だ安易

なるにも拘はらず、亦た頗る劍呑で、車が俄かに動揺する度毎に、滑つて地に落る者が幾人もある、地に落れば復た急に昇ることが出來ず、といつて倒れても居れぬから、止むを得ず直ぐに繩に倚て、今迄自分が愉快に乘て居た車を、共に手傳ふて引かざるを得ない、そこで、自分の座を失ふのは恐ろしい不運と考へられたのは勿論のこと、車上の人々は、自分や朋友が此の如き不運に出逢ひはしないかとの心配のために、乗客の幸福は常に曇り勝であつた、

諸君或は疑はれよう、「車上の客は唯自分の事ばかり考へて、他人の事に顧着しなかつたのであるか」車を引く己の兄弟姉妹の不運を憐れみ、自分の重量は正しく兄弟姉妹の勞苦を増す所以なることを知て、我が贅澤を心づらく思ひはしなかつたか」幸不幸の運の爲めに苦樂の境遇を異にされて居る憐れな同胞に對して、惻隱の心を起さんだのか」と、左様、乗客は屢々車を引く者に向て、少からず憐愍の情を漏らしたので、道の難所や極めて峻しき丘陵等に乗り掛る時などは、殊に憐れを催はしたので有た、斯云ふ時になると、車引の必死になつて努力する様、飢餓に逼られ悲痛を忍んで跳ね躍る様、肉落ち力盡き繩に寄り縋つて勞歩する様、泥に塗れて脚の下に蹂にじられる様、嗚呼眞に酸鼻の極、悲絶！慘絶！乗客は諸共に心の底より尊い同感の情を洩らし、或は未來に幸福を受くべき善根を植へて居るのだからと勞役者を勵まして、現世に受けおる辛慘な境界を忍耐せよと奨める人もあり、

或は不具となつた者や、傷つけられた者に施す薬價を義捐する人もあつた、詰り箱車を引くのに辛い目をしなければならんのは實に残念、何とか仕様もあれば善いにと誰しも思ては居るものゝ、難路を越してしまへば乗客は皆やれゝと思て、心痛の助かる思をした、けれ共これは車を引く者を思ひやつて心痛が助かつたのではない、全く自分の爲めに助かつたのである、何故かと云へば、斯かる難路になると何時も車が覆つて、兎角乗客が轉で落ちる様な剣呑な事が出来るから、自分等が其様な目に逢いはしないかと、心を非常に痛めて居た所が、漸くの事に難關を越して、早や覆へる憂の無い所に來たから、安心して氣が休まつたので有る、

乗客は繩牽きの慘狀を見るに付け、益々車上の座の直打ある事を感じ、益々必死に其座に喰い付く心に成た、若し誰も轉げ落ちる氣遣は無いと安心したことなら、唯だ膏藥代と綱帶代とを義捐するに止つて、引き手の艱苦を露聊かも思ひ遣らなうであらう、

第二十世紀の男女に取ては、是れ實に信ぜられない程の無慈悲不人情と見へるに極つておる、けれども實に妙な事實が二つ有て、幾分か其説明になる、先づ第一には、當時の人々はかう確信して居た「多數の人が繩を引て、少數の者が乗るより外に、社會の立ち行き様がないのみならず、牽き繩や箱車の構造も、道路の高低も、勞苦の分擔法も、之を根本的に改良するのは六つかしい、已に大昔から

も今の通りで有たので、此から後も矢張り今日の有様と變つた事はあるまい、如何さま痛ましい事ではある、が何としよう是非が無い」と、マア斯云ふ一般の確信で有て、哲學さへも、治はし様の無い事に徒らに惻隱の情を浪費するのは無用であると教へた、

も一つの事實は今一層奇怪である、即ち箱車の上に在る人々が思ふたには、自分等は車を引き居る奴等と同じ者ではなく、もつと上等の物質から出來ておる上等の動物なので、彼等に車を引かせる資格を持て居るのだと、斯云ふ無茶苦茶な誤謬を抱て居て、車上の人は何れも皆此病に罹て居た、是は如何にも譯の解らぬ話であるけれども、余も現在右の箱車に乗て、同様の病に罹つたから、實際の事として信じてもらわねばならぬ、所が爰に尤も奇怪なのは、たつた今地から車上へ攀ち登つた者が、其手の繩痕の未だ癒へない内に、早や已に此病に傳染する事である、増てや父母祖先から車上の坐を譲り受けた人々に至ては、自分と車引社會の根本的に種が違て居るといふ信は堅い者で、何と説いても解つたことではない、あたら衆人の慘苦を見て湧き出る熱い憐情を冷し、理窟の上の憐みに止まる冷淡な心に硬化せしめたのは、明かに此謬見の結果である、其頃余も同胞兄弟の慘狀に對して冷淡な態度を取て居つたが、聊か其申譯までに之を爰に示して置のである、

第千八百八十七年に余は三十歳になつた、未だ結婚こそ爲なかつたけれども、服部悦子といふ女を

娶る約束をした、此女も余と同じく箱車の上の族、解り易く言へば富有な家柄で有た、此頃は金銭さへあれば、思ふ存分の快樂が極められた時分で、女と云はゞ彼是婚姻を申込む者の有る様に、富有であらば事が足りるのであつた、所がこの服部悦子は、それ丈で無く美人であつて、且つ品のよい婦人であつた、

婦人の讀者は必らず言はれよう、それは立派な女で有たかも知ぬ、けれども、品がよいなどとは決して受取れない、全株其頃流行した衣服は奇怪千萬なもので、頭上には高さ一呎もある塔の様な物を戴だき、衣の裾は恐ろしく長く後へに擴がつて、連も人間と思へぬ不都合な形に見へる、其様な者を身に着けて、品がよいも無いものだ、と、成程御説は感服である、如何にも二十世紀の婦人は、適當な衣服が女の優美を鮮かにする効果あることを證明して居る、けれ共方今の婦人の方の高祖母などを今から思ひ返して見ると、奇怪な衣服を着たのが強がち婦女の姿を無恰好にする者で無いと主張するところが出来る、

此頃余は、家内が住む爲めに家を建て、居て、家が建つと直ぐ結婚の式を擧げる筈で有た、其場所は波士頓市中の尤も好ましい所で、金満家が簇つて居た所であるが、人々が住居とするのに何處が善い彼處が好ましいと云の、決して自然の形勝を占めるからでは無い、實は近郷に住む人の柄を標準

としたので、近隣に金持が澤山住めば、あそこは場所柄だと云て人が望んだのである、そこで金持は金持、貧乏は貧乏と、夫れ／＼相異なる場所に類を以て聚たので、若し貧乏町に金持が居るか、無學社會に物識りが居れば、恰も嫉妬深い他國人の間に孤客となつて居る様な者で、誰も相手にする者が無い、俗余が家を建てる時には、千八百八十六年の冬までに落成する筈で有たのに、其翌年の春に至ても未だ落成せず、随つて結婚も、もつと先きになるといふ迷惑、余は方さに情に切なる戀人、心は矢々に速やるのみで癪癪に障るけれども致し方がない、斯く仕事に延引する抑もの原因は、此頃頻りに同盟罷工が起つたからである、同盟罷工とは職人や労働者共が協議して仕事をしないことで、煉瓦工、石工、大工、塗壁師、鉛工、其他建築に従事する職工等が、幾日幾週、時としては幾月にも彌つて仕事に就かない事がある、當時處々にあつた同盟罷工が各々／＼な原因から起たのであるか、今日余は之を記憶して居ない、全体此頃同盟罷工の大流行で、餘り繁々／＼ある所から、人は皆其原因を一々調べない様になつたが、千八百七十三年は實業界の危急存亡の時、其時以來何れの職業にも同盟罷工は殆んど絶間がなく、萬一労働者が二三ヶ月以上も續けて一つの職業に従事することがあらば、人は實に珍らしい事だと云た、

職業上簡様な混亂は、結局近世の職業組織と之より起る社會上の結果とに新生面を開くべき大運動

の發端であることは、余が申して來た年代に眼を止める讀者が承認せられる所であるのは勿論で、今より往時を振り顧みれば、子供でも會得ができる程明白な事である、けれ共當時の人々は預言者でないから、全体如何なる事が起らんとするのであるか解らず、唯だ我邦が職業上實に變な模様であること云ふこと斗り目に止まり、勞役者と雇主との關係も、勤勞と資本との關係も、滅茶く崩れて始末に終へぬ様に見えた、一体一般の勞働者共は、俄かに自分の境界を痛たく不滿に思ふて、手始めの道さへついたらば之を大改良しられるといふ觀念に浮かされぬ者はなく、何方を向ても彼等は揃ひも揃ふて、賃金の増加と、勞働時間の短縮と、住宅の改良と、教育の普及と、費澤文雅の生活を冀ふ者はばかりで有たが、斯いふ要求は、世界がズット遙に富有にならなければ、許せる道が無つたのである、勞働者等とても、右様の希望を心に抱きながら、どうして其希望を果すことが出来るか、其方便が丸きり解らない、そこで譯の解つておるらしい人があれば、熱心になつて其周りに群集するので、俄かに名譽を受けた自稱首領が澤山出來たが、往々詰らない人物で、此問題の上に何等の光明をも放たなんだ、大体勞働者共の希望は幾ら空想と思はれたにせよ、其唯一の武器なる同盟罷工を行つて相互に扶け合ふ熱心は、如何にも眞面であつて、決して陽氣や浮氣の沙汰ではなかつた、上に述べた同盟罷工の結局は、どうなるかといふ詰りに至ては、同じ我々金持仲間でも、人々の氣

質に従つて違つてあつた、その激烈な人物の議論は中々猛烈で、マア斯云ふ風にやる、勞働者の希望を満足させることは、事物の自然として到底出來ない事である、世界がもつと富で來れば、いざ知らず、何様かう貧しい以上は、銘々の希望の満足させ様がないじやないか、抑も人間が餓死せずに生き長らへて居るのは、必竟する多數の者が我々と勞役に服し、不足な賃錢でカツ／＼生活して居るから、左なくば人間諸共に倒れて死せば成るまい、左すれば今日の勞働者は、詰り人間の境遇を取巻ておる鉄柵と争ふて居るので、資本主と争ふて居るのではない、早晩目が覺めて今迄の過を悔ひ、到底治し難き弊害を忍ぶ様になるだらうが、之を悟道するの遲速は、畢竟彼等の腦蓋骨の厚薄に由るのであると、

氣焔の左まで暴くれない者も、此説には同意であつたが、其議論を聞くに、曰く、成程勞働者の希望は、自然の道理から云へば、無論遂げ難い事である、然れども、社會を慘然たる渾沌の有様にするまでは、彼等は到底其希望の達し難い事に氣付かないと云ふ掛念がある、といふのは、彼等社會は世の中を渾沌にしようと思ふ慾望もあれば、又其力をも持て居て、首領株の者共さへ其腹で居るのだと、此流儀の論者の中には、更に説を進めて曰く、社會の大變亂は今にも來らんとして居る、人類は已に文明の梯子を登り詰めて、早や頂上に達して居るので、これから更に復た混沌蒙昧の有様に退步する

のである、そうやつて一旦退歩し極まれば、又候梯子をデリ／＼と登り初めるといふ寸法で、古往今來絶えず此梯子を昇降してゐる、此は抑も歴史以前の時分から、人類が幾回となく経験して來た事で、頭蓋骨にある突所は、骨相學者が夫々の智慧のある所だと云ふけれども、梯子の上より投付られた時に出來た瘤である、元來人間の歴史といふものは、日月星辰の運行と同じく、始終輪轉循環して、幾度となく其出達點に復歸する者である、何時までも不定限に一直線に進む一方、原へ歸らぬと云ふ様な論は、畢竟幻想の沙汰で、天地間に類のない怪事、到底人類の進路を説明するに足らない、人類の進路は寧ろ彗星の軌道に類してゐる、彗星の軌道は拋物線で、太陽は其一の燒點にあるが、彗星が太陽に尤も近い處を近日點といひ、尤も遠き處を遠日點といひ、遠日點より段々太陽に近づて遂に近日點へ來り、それから復段々太陽に遠かつて、再び遠日點へ來るのである、人間も其通りで、始めは野蠻の遠日點より段々と文明の近日點に向て來るが、一旦其點まで來ると、又候文明に遠かつて、復た原の遠日點なる渾沌たる状態に戻るのであると、

此は勿論極端な論であつたのだけれども、余の友人間には、同様の見解を抱きたる眞面目な人物も有て、思慮ある人は皆な、社會は危急な時に近付てゐるので、この詰り大變化を來すかも知れぬといふ意見であつた、此時分には新聞雑誌を讀でも、眞面目な談話を聞ても、先だつ者は勞働問題だの、

罷工の原因だの、其成行はさう成て居るか、どうすれば治まるかと云ふ様な事はばかりであつた、

此時世の人心が競々として安んじなかつたことは、丁度米國にある少數の一群が、自ら無政府黨と名乗り、其意見通りにしなければ大亂暴を加へんとて、米國人民を恐怖せしめた時と同様で、恰も一大國中半数の人民が反亂し、漸く之を鎮壓するや、其政法を維持せんが爲め、恐怖の餘り、新社會組織を採用するに至る時の如く、我國人が氣を揉んだことは容易でなかつた、

余も金持の一人であつて當時の世態が自分等に取て至極重寶で有た者だから、無論この騒々しい世の中の有様を見て恐懼を抱いたが、同盟罷工のために結婚が延引するといふ歎かばしい事が、當時の勞働社會を特の外憎み嫌ふ原因となつたのに相違ない、

第二回

紀元千八百八十七年五月三十日は、恰も月曜日であつたが、當日は招魂祭日と名けて、合衆聯邦を保護するために南北戦争に出た北軍兵士の記念日で、第十九世紀の末年には、合衆國で大祭日の一つであつた、此日には、戦争に生き長らへた者が、文武官や樂隊に護衛せられ、戦死者の墳墓に詣でて香花を手向るのが例で、誠に嚴肅で感動すべき儀式で有た、彼の服部悦子の兄も戦死者の一人なので當日には家族一同が其屍を埋みたる麓山に詣る筈であつた、

余も參詣人の仲間入を許されて其々に行たが、夕暮時分に波士頓市へ戻て來て、悦子の家族と食事をした、偕て客室で、ある新聞紙を取上て讀んだ所が、大工仲間にも又もや新同盟罷工が起た由が載てあるので、余の家の落成がどうやらまた延引しそである、そこで餘り痼癪に障て堪らないから、側に居合せた婦人連中に失禮にならぬ限り、思ふ存分勞力者を痛罵し、殊に今讀みつゝある同盟罷工の職人共を甚しう罵つた、側に居た人々も、大層余に同情を寄せて、勞働煽動者の無分別な舉動を周りから散々に罵倒して、其騒しき警へん様もなく、何れも雲行は日々益宜しくない方で、追付どんな事になるか知れぬといふ一同の議論であつた、中にも悦子の父の説では、「どうも情ない事には、世

界中何處も彼處も勞働社會は皆發狂してゐる、歐羅巴では中々以て合衆國どころの騒ぎではありませぬ、まだ激烈な者でございまして、彼様の所に住まふなどは決して思ひませぬ」と、余は同氏に向て、「若し社會黨が揚言して居るやうな事が、ごん／＼實際に湧て來た節には、何處へ移れば宜しうございませう」と問たが、同氏は「さればです、グリーンランド、バタゴニア、支那の外には、安固な社會を申す者は存じませぬ」と答へた、所が横合から一人が服部氏の話を繼ひて、「其支那人といふのが中々利巧な人間で、西洋の文明を輸入したなら如何様になるか、詰りダイナマイトの様な危険な者を國內に入れるのだと云ふ事を、我々歐米人よりも善く存じて居るのでございますから、西洋の文明を引入れる事を拒んだのであります」と云た、

この談話が済でから、余は悦子を側へ招ひて、「家屋の落成を待たずに、寧直ぐに結婚してしまつて、落成時分まで方々を旅行しやうではありませぬか」と説き勧めた、當夜悦子は戦死者記念日の事であるから、喪服を着て居たので、却て何となく一際美しく見へて、今だに眼の前に髣髴として見えて居る、余が此家を去る時嬢は玄關迄送つて來て、平生の通りの挨拶で別れたが、偕此別れがいつもの通り一夜や一日の別れをした時の事情と少しも異つた事なく、是ぞ永の訣れであらうとは、神ならぬ身の知るべき筈はなく、悦子も亦た斯くあるべしとは悟らなんだに違いない、

嗚呼さても、悲しい事よ！

余が戀しい悦子に別れたのは、戀する余に取てはチト時刻が早や過たのである、所が余は平素から眠入られぬ癖が有て、二晩前から一向眠られなしたのであるから、當日は大層草臥て居た、悦子は之を承知して居た者だから、九時には歸宅して、直ぐに床に御就なさい」と懇々勧めた、

當時余が住でおつた家は余の父祖から三代も續ひて住で來たので、正統の血筋の中で生き殘て居るのは余一人である、其家は木造の大きな古い建物で、内部は古風で雅美な經營であつた、けれ共何様借家や製造場が雲集してゐる雜駁な場所だから、決して所柄とは云へないので、夙より住度もない所となつて居た、此様な所に所詮花嫁を連れて來られる者でない、況しく悦子の様な美しい可愛女房を、どうして、呼んで來られよう、そこで余は廣告して其家を賣に出し、寐るだけは此處で濟せておいて、食事は俱樂部でする事にし、而して家には庄兵衛といふ僕が一人居て、忙しからの用事を辨して居た、所が若し此家を他へ譲て外へ移るとすると、一つ惜い事がある、といふのは、若し市中の家の二階にでも寢たものなら、夜通し八釜しい物音で、寐入れた事でないから、地下に寢部屋を拵へて置た、此部屋に立て籠て戸を閉てしまへば、周囲は閑として静かで、頭の上の騒々しい響は未塵も漏れて入る憂は無い、尤も地の下から濕氣が室内を侵さない様に、周囲の壁も床も悉くセメントで厚く塗り固めてあり、又重寶な金品をも貯藏する穴藏になる様に、石の板で天井を張り詰め、外部の戸は鍍製で厚く石絨を衣せて、暴力にも火力にも堪へる様に仕つらへ、又室内の空氣を交換させる爲に小さい管を一本通じて、家の頂に備付けた風車に接続したい、

斯云ふ部屋に寢たら無論眠られねばならぬ筈に考へられる、それに二晩と續けて甘く眠たことがないので、遂には癖となつて、一夜位眠られないのは一向平氣になつた、けれ共或る時二晩目に床へ入らずに讀書室で夜を明したところが、大層疲れてしまつた事が有て、若し此上眠られずに居れば、神經が錯亂する掛念があると思ひ、彼此思案した末、遂に善く眠れる最後の手段を手に入れた、それは二晩も眠られなだ後に、三晩目も眠られぬらう成た時分には、山井丸齋といふ醫師を迎へたのであつた、

山井丸齋は只だ愛相のみで醫者となつて居つて、當時こゝにいふ風の醫者を、顧問醫者又は藪醫者と云たのだが、彼は自ら動物電氣博士と自稱しておつた、余は物好きに動物電氣の現象を少々取調べた事があつて、其の頃此人物に邂逅して知て居たのである、彼は固より醫學の事は何も知らなかつたのであらうが、催眠術に掛ては何でもスバシイ手際であつたのだ、それで三晩目に眠られない氣色になる度に、いつも此男を呼びに遣たが、それは其技術で眠れる様にこの積りで、非常に神經が興奮すると

か、兎角の物思ひが甚しい節でも、此丸齋が屹度瞬く間に熟睡させてくれて、曾て遺しくじることはない、斯やつて一旦眠てしまへば、眠を覺ます術を行ふまでは、何時までも白川夜舟で氣樂に寝ていられた、所が眠りを覺ませる術は、眠らせる術よりもズツト手輕いのであるから、余は便利の爲に庄兵衛に覺眠術を學ばせた、

山井が何の爲に來るのであるかは、忠僕庄兵衛のみが知て居る、所が悦子の愈妻となる晩には、其實を打明けねばならぬのは無論である、併し余は是迄まだ其由を語つた事は無つた、と云ふのは、催眠術で眠ると、何でも多少劍呑な事があるのは疑もないことで、若し是々だと打明る日には、悦子は必定冠を横に振て承知しないからである、劍呑な事とは外でない、動もすると深く睡り過ぎて、到底催眠術遣ひの力も及ばない程まで失神して、とうとう寂滅往生することが無いにも限らない、けれ共始終之を實行して見ると、相當の豫防さへして居れば、左まで恐しい者でない、十分信ぜられておつた、そこで其儀を悦子にも説て納得させ様とは思たが、聊か覺束ないことゝ考へた、招魂祭日の當夜も、悦子に別れを告て歸宅するや否や、又侯庄兵衛に山井丸齋を呼びに遣はし、其間に余は地下の寢部屋に這い込で衣服を着換へ、卓上に置てある數通の郵便を讀んだ、

其中一通は新宅建築の棟梁から來た者で、其文意で見ると、兼々新聞紙上の説から臆測して居た事

と符合してあつて、雇ひ主も勞働者も雙方争點を固く執て少しも譲歩しないから、建築の約束期限が何時まで延引するとも知れぬといふ事である、エーイいまゝいゝ幾萬の勞働者め、頸の骨が一本なれば一刀兩斷にふち切てしまつてくれるのにと、彼此思ひ煩つて居たが、其内に庄兵衛は醫者を連れて歸たので、胸を曇らせる有像無像の考へが散てしまつた、

所が山井は職業上大層有望な事が遠方に出來たので、機を逸せず當夜直ぐに波士頓を出立する準備をして居る際中であるから、漸うくにして迎へて來たらし、そこで所詮長く其施術を受けられないらしいから、此後眠りたい時には如何しようと思ひ、問た、所が先生は波士頓市で有名な催眠術師を數人指名して「これらの人々は皆私と同等の術力を持ておりますから仔細ありませぬ」と請合た、

筒様に聞て心が稍落付た、そこで「明朝九時に起して呉れ」と庄兵衛に言付けて、其儘寢床に臥し、愉快な態度を取て催眠術を受けた、當夜は何でも非常に神經に異常を來して居たと見えて、平素よりは眠を催すのに隙が費へた、けれ共頭睡む氣が刺いてきて愉快に眠つた、

第三回

「おや、目が開かけておる、マア誰れか一人に目が止まれば善いが、」

「目が開きしても、どうか此人に物仰しやつて下さいますなよ」

最初のは男の聲で、次のは女の聲、兩方ともひそ／＼と囁やき話であつた、

「どういふ風か見たい者だが」と男の聲、

「いえ／＼どうぞ相手にならずに御居でくださいまし」と女が止めた、

「この娘の申す通りに御任かしなさいな」と尙又一人の女の囁き、

「ではそふしませう、疾く彼方へ行きなさい、それ／＼目を覺ましかけるよ」と答ふる者は以前の男、

衣服のサラ／＼鳴る聲がする、目を開いて見れば、六十歳と覺しき立派な容貌の男が前に屈んで余の顔を見ておる、情け深い面色に珍しうな氣色、是迄頼と見覺へのない人、はてなと寢床の上に肘を支へて身邊を見廻せば、室は全く空虚で、加之まだ來たことの無い處、再び頭をあげて件の男を見返せば、男は微笑を含む体、

「氣分はどうです」と彼は尋ねた、

「私は何處に居るのでございます」と問ひ返した、

「貴下は私の宅にいらつしやるので」との答、

「どうして爰へは参りましたのか」と問ふた、

「御氣分が、もつと健かに、おなりなかつた上で御話仕りませうから、どうが決して御掛念なう、

貴下は親切な友人の處に入つしやるのでございます、御氣分は如何でございますか、」

「ハイ些と變で、併し宜しい様でございますが、全体どうして御厄介に成ることに成たのでございます、一体私の身に何事が起つて、どうして爰へは参たのでございます、私が眠りましたのは私の宅でございましたのに、」

見知らぬ主人は微笑し乍ら「イヤもそつとすれば解る時がございませう、モ些と正氣に御返りなさいます迄は、靜かにして御話なさらない方が宜しうございます、どうか之を一杯御飲みなさいませぬか、大層精神が涼やかになつて、宜しうございますから、チエ、私は醫師でございますよ」と、

余は手で其盃を押しのけて、漸くのこと寢床の上に坐した、頭が不思議に軽くあつたので、

「全体私は今何處に居るのであるか、今迄私をどう成さつて入つしやつたのか、イザ伺ひたう

存じます」と言つたが、

向ふの答へに「どうか、まあ、そう騒がずに静かに成さい、其譯を言へど仰しやれば、御得心が行く様に説明致しませうが、先づ此飲物を一盃御飲に成た上でのこと、此はごうも大層宜しい物で、精神を確かに致しますから」、

そこで余は到頭それを飲だ、件の男が語るよう「貴下が爰へ御越なされた仔細を御話申すのは、中々容易な儀ではございせんが、貴下も亦た四方山の御話もございませう、が詰り貴下は唯だ今熟睡が覺めた斗り、否な貴下は殆んど精神昏迷しておゐでなされたので、ございませう、御話申上ることは唯是しか有ませぬ、貴下は自宅で御寝みなされた様に仰せでございませうが、全体それは何時の事でございませうか」、

「何時の事とね、はい昨夜十時頃の事で、今朝九時に起こす様に、下僕の庄兵衛に言付けて置いたので、す、アノ庄兵衛は如何致しましたのですか」、

件の男は不審そうな顔付で「イヤそれは、ごうも確かに申せませぬが、其庄兵衛とやらが茲に居らぬのも最な次第、そして貴下が御寝みなされた時日を、今少し詳に承りたうございませうが」、

「はい無論昨夜のこと、それは先きに申上たではありませぬか、一日も眠り越したのならば兎も角、

そんな事は有う筈が御座いせん、イヤ併し大分長い間眠たような心持が致しますわい、アノー私が眠りましたは招魂祭の日でございませう」、

「招魂祭の日とね」、

「左様、月曜日、即ち三十日なので」、

「イヤそれは何月の三十日ですか」、

「なに、勿論今月の三十日ですとも、六月まで眠込でしまつた者ではありますまいし」、

「ねい今月は九月でございませう」、

「九月ね！なあに五月から九月まで眠つてしまふ者が有てはありますまいし、そんな事が何ぞいまして」、

「はてな！貴下の仰せでは寢たのは五月の三十日であるとね」、

「左様五月の三十日なので」、

「左ればそれは何年の事で」、

かう問はれて余は餘りの馬鹿々々しさに開た口が塞がらず、暫しあきれて其顔を見つめ、稍あつて小聲で「何年の事！」

「左様、何年でございましたか、それを承つた上で、貴下がどれ程長く御眠りなされたかを御話申すことができます」

「固より千八百八十七年ですとも」

向ふも餘り變に思て、余が精神が狂つて居たとても考へた者か、もう一杯御飲なさいと強ひ付けて、余の脈膊を見た、

「御話致せば嘸御驚きでございませう、御見受申した處では、三十になるか、ならずかと思はれまするし、身体の御容態も稍長い熟睡から目を覺した人と大した異りは無い様でございまするが、今日は正しく紀元二千年九月の十日でございます、貴下は丁度百十三年三ヶ月十一日の間御寝みに成たのでございます」

「かくと聞て心聊か惑乱したが、此男の指圖にまかせて肉汁の様なものを一杯飲た、所が忽ち睡む氣を催ふして熟睡してしまつた、

「まだ睡らない内は室内を人工で照して有たが、熟睡の後、目を覺せば已に白晝で、室内残る限なく明るくなつて居た、例の不思議な主人は、矢張身近な椅子に倚て居て、余が目を覺した時に余を見ておらなかつたから、丁度好都合と思て其人となり考へたり、或は我身の怪しからぬ状態を熟ら考

へたり、兎角する内に眩暈も失せ去り、心持も十分爽かになつて來た、所が前刻百十三年も睡ておつた由を何心なく聞ては居たが善く／＼考へて見れば、其様な事は道理に於て有れぬ事で、必定人をたばかる説だと見えた、

此様な見覺へのない人の見知らない家に、余の身が現在居るのであるからには、屹度非常な事が起たに違はない、けれ共夫れは全体どんな事で有たかは一向解らず、尤で雲擾ひ様であつた、或は何か隠謀でもたくまれて其犠牲に落たのではあるまいか、夫にしても若し人相が果して善く人の是非善惡を現はす者であるとするれば、これ程高尚雅美な顔付をして居る男が、そういふ悪い事に加擔する筈は無からう、但しは又友人等が、地下に眠る秘密をどうにか見付だし、催眠術を行ふ危険を余に忠告するのために、斯く念の入た滑稽を演じたのではあるまいか、夫にしても庄兵衛は余が密事を漏らしはすまいし、友人の間にも其様な事を仕そうな者もない筈、が併し兎に角滑稽の犠牲になつたと思ふより外に想像しやうが無い、そこで誰か知た者が椅子か幕の後から窺ふて笑つて居はせぬかと思ひ乍ら、そつと室内を見廻はして居た處が、件の男が丁度余に目を止めて居た、

彼はすばやく語るよう「貴下は十二時間善く御寝みでございました、餘程御氣分が宜しい様に見受まするし、面色も善く目付も涼やかでございます、どうです御氣分は」

余は寢床の上に座りながら、「難有う、どうもこんな心持の善い事はございません」と言た、

「前刻御目醒に成たことは御承知でございまするか、又大層長らく寢て御居でなされた事を申上ました時の御驚き、ナント御記憶でございますか」

「左様、百十三年も寢たと仰せでございましたねえ、

「如何にもそう申上りました」

「けれどもそんな事は有る筈が御座いせんわチー」とせゝら笑ひ乍ら言た、

「サアどうも如何にも不思議な事、併し其道を以てすれば無論有り得べき事なり、且は失神の状態に付て吾々共の存じておる事に符合する邊もございまして、若し貴下の様に精神の昏迷が極まりますれば、五体の活動する機能は全く息まして、筋肉は少しも廢滅しませぬ、又外部から身体を害することさへ無れば、何時までも限りなく失神の状態に成ておりまする、貴下のは實に記録に残つておる内でも一番長かつたので、若し誰も發見せずんば、寢室が毀損されない限りは、何時までも活動が中止した儘になつて居ますので、幾千年幾万年の終りに地球が段々冷却して、筋肉を破り魂魄を分離するに至て止むのでございます」

余は人に玩ばれて居るとしても、感心な人物を撰んで余を欺かせた者だと思つた、此男は實に雄辨

な人で、人の心を感得させる魔力は、月は豆粉餅で拵へてあるとでも言ひ籠める程に思はれ、段々其論旨を進めた時に、此方から笑ひ顔で待つても、未塵も應せず滔々と辯じてのけた、

「私が寢て居た部屋と、私の身体とを御發見になりました一分始終を御話下さい、面白い小説を聞くのが好でございますから」と余はやつた、

男は眞面目に答ふらく「唯今御話申すのは、小説よりもまだ珍らしい事實で、決して作り事ではありませぬ、私は化學の實驗が大好きなので、當家の側の大花園中に實驗室を建てようといふ幾年以來思っておりまして、去ぬる木曜日にどうも穴藏を掘り始めましたが、其夜仕上てしまつて明けて金曜日に石工が来る筈でありました、所が木曜日の夜は滅法界な大雨降りて、翌朝行て見ますと、穴藏は蛙の鳴かぬ斗りの池に變じて、周囲の壁はスツバリ洗ひ去られておりました、丁度側に私の娘も來ておりまして、不圖壁の崩れ去ておる所に石仕掛の物がちよろりと露はれて居るのに目が止りましたので、少し土を除て見ます所が、どうやら大きな物らしい思はれましたから、愈之を調べて見ようといふ氣になりまして、職人を呼びにやつて土を掘せて見ますと、果せる哉地下凡八尺の所に長方形の穴藏が有て、其上には灰や木炭が堆かくなつて居ましたから、以前そこに在た家は焼け落たのであるといふことが解りました、偕右の穴藏はちつとも損じてなく、セメントも恙なかつたのですが、

どうも戸が開きませぬから、其屋根に成てある鋪石を一枚除けて入口を拵へました、中から上て来る空氣は停滯しておつた者でありましたけれども、能く乾て冷やかで而かも純粹でありました、そこで提燈を提げて穴の中へ降りて見ますと、第十九世紀の風で拵らへた寢部屋に仕つらへてございまして、床の上に若い男が臥ておりました、勿論死んだ人で、死でから百年も経ておるに相違ないと思はれました、同じ醫者仲間を招ひて段々研究して見ますと、肉体が腐敗しておるどころでない、如何にも善く保存せられておりましたので、諸共に大層驚きました次第でございしますが、是ほど能く人間を木乃伊にする術が知られて居たとは、吾等が平生から信じて居ない所でございしましたけれども、現在此人体を見るからには、吾々の近い祖先がそういう術を持て居たのだと論結すべき證據らしく思はれまして、醫者仲間は急實驗の手術に取掛て、どういふ手段で木乃伊をこさへたかを調べようと云ふのでございしました、けれども私は思ふ仔細があつて之を止めました、と云ふのは第十九世紀の人は催眠術を行つたことがあると書物で讀たことがありまして、貴下が其術に掛て失神して入つしやるのかも知れぬので、斯まで長い間身体が恙ないのは、全く生きて入つしやるのであつて、決して木乃伊術の力でないといふ考が起りました、是逆も自身にさへ餘り空想らしふ思はれた位で、醫者仲間に嘲られるのを掛念しましたから、まさかそうとは言へず、外に理窟を付けて實驗を猶豫させましたけれども

も一同が歸り去りますや否や私は直ぐに蘇生法に着手しまして、其結果御承知の通り御氣が付たのでございします」と、

倍此話が今一層架空であるとしても、話の次第が眞に迫つておる上に、演者の動作と人品が如何にも人を納得せしめる様であるから、聴者を恍惚とせしめん許りで、余は頗る奇怪に思ひかけておつた、丁度其時此男の話が途切れたが、不圖壁に掛てある鏡に映つた余の姿がちらりと見へたから、立て鏡の方に近寄て見ると、百十三年前だ此男が言ておる招魂祭日に、悦子の宅に行きかけ、頸飾を結びつゝ鏡の中に見た時の姿と違ては居ず、否毛一本も皺一筋も違て居らない、サア愈以て大山師に掛て居のだといふ考が又候胸に湧て、人を馬鹿にするも程があると、むつとしてきた、

そこで例の男が云ふには「アノ地下の室に御寝なされた時より百年も齡が寄ておるのに、容子が少しも變つて居らぬとは、定めて御不審でございませう、けれども何も御驚きなさる事はございませぬ、必竟する活動機能が全く熄で有たからのごとで、若し身体に聊でも變化が出来ておる位なれば、今時中々生きて居られるどころではありませぬ、疾ふに肉体は腐敗分解して、貴下は此世の人ではございませぬ」と、

余は彼に向て答ふらく「君、マア此滅方界は無茶苦茶を眞顔に成て縷々と御話なされるのは何たる

御心であるか、誠に怪訝の至りに堪えませぬ、餘程の愚物で無れば、其様な事で喘着せられないと云ふ事が解らない貴下でも有ますまい、もう御念の入た謔言は御控下さつて、どうか此處は何處で又如何して私が此處へ来たといふ仔細を、得心の行く様に御聞かせ下さい、左すれば如何なりともしして私自身で其居り所を極めて見ますから、

「左すれば今は紀元二千年だといふことを貴下は信ぜられませぬか、

「貴下は實に左様な事を答へる必要が私にあると御考なさるか」と余は答へた、

「では此上御得心の行く様に出來ませぬから、愈合點の行く様にしてあげませう、如何です、二階へ私について來られますか、

余は怫然として「ハイ相變らず強健で足許は大丈夫、此上私を玩れる者か一番試ませう」と云つた、

「欺かれておると餘り一隨に思込で入つしやると、私の申した事が愈事實となつて來る曉には、きつい反動が參りますぞ」と相手が答へた、

彼の話振には懸念の調子に憐みの語勢が含んであり、余の劇しい言葉を聞て毛頭怒る氣色が無いので、余は變に心を挫かれ、彼此入り交つた感動を抱きつゝ、其尻から尾いて行くと、彼の人は二流れ

の上り段と、更に短い段階から、遂に家根の上の物見臺に上つて、「さあ、どうか周りを御覽下さい、此は第十九世紀の波士頓であるかどうかでしょう」と、

足の下を見下ろせば、誠に大きな都市、樹木の蔭に庇はれたる廣い街々に美しい家屋は薨を連ねて建ち並び、前後左右幾哩も續いておる、此處彼處に方形の廣い明地に樹木が鬱蒼として生ひ茂り、彫像や噴泉が斜日に照されて其間に出沒し、遠近に聳ゆる許多の公けの建物の大きくて立派な事は、逆も前日の比では無い、どうも是迄箇様な都市は夢さに見なんだのである、段々と目を舉て遠く西の方を見渡せば、藍色の紐の如く見ゆる者が日没の方に縈紆しておる、是なんチャールス河では有まいか、東を見れば波士頓港は目の前に在て、港内の岬は歴々として見え、處々に散在する小島さへ、一つとして不足して居らなんだ、

是に於て始めて前刻よりの話が誠であつて、吾身の上に大變な事が生じて居たのであることを知つた、

第四回

余は疲れはしなかつたが、余身の今の境涯を確かに合點しようと云ふ事に勞して、非常に眩暈して來た、そこで此家の主人は余を扶けて二階の廣い室へ連れ下ろし呉れて、良い葡萄酒を一二盃と、軽い食物を勧めた、

儲其後彼は喜ばしげに言ふよう、大分氣分が善くなつて參りましたらう、實は屋根から市中を御覽に入ると云ふ様な唐突な仕方を爲しましたのも、貴下の御境涯を御知せ申したいと思ふた斗りで、第九世紀の波士頓人は關拳に名高ふございますから、彼此手間取ておると、貴下に打んなぐられでもないかと恐れたのです、如何でしょうか、今こそ戲れな虚言を吐たのでないと御心附でございませぬか、

余は深く恐縮して言た、「イヤもう何とも申しませぬ、假令百年は愚か千年の間眠たと仰せられましても仰せを信じまする」、

「いや百年経たばかりの事、併し其百年の間には、大昔から未だ無つた程の大變化が起たのでございます」、

と言ひ終て主人は溢るゝ如き熱誠で、握手せんとて手を出し、「ヤ此は〱善うこそ第二十世紀の波士頓、殊に拙宅へ御越下さいました、實以て忝けない事、私は折戸と申す者で、人は折戸先生と申しまする」、

余は折戸と握手して「某は西、重連と申す者でございます」、

「でございまするか、御初に御目に掛りまして満足に存じまする、當家は本と御宅の在在所、どうか自分の宅と思召て御心置なく」、

兎角する内に食事が済で、折戸先生は風呂を勧め、着換の衣服を呉たので、嬉しく之れを着用した、

主人が段々の話では、色々大變化が有たのだそうなが、服裝に至ては、二三の細かい所を除いた外、別段變化してれるとは見えなんだ、

身体は再び前の通りに回復したが、心持はどうで有かた、言はゞ新世界に俄然落て來たのであるから、余が心に如何なる感想が起たか、讀者は定めて知りたいであらう、けれ共讀者でも若し今瞬く隙に突然浮世から極樂淨土へ連れ去られたとすれば、どんな氣持な者であらう、心は直ちに故里に馳せて娑婆の事を思ふであらうか、將又周囲の有様に心を奪はれて、暫しが間なりとも、跡に見棄てた浮

世の事を忘れるであらうか、恐くは暫し浮世を忘れる方だろうと考へられよう、余が此新波士頓へ来たときにも、驚くべき者珍らしき者に心を奪はれて、過つる方や行く末の考へは、丸きり忘れて中絶しておつた。

主人の段々の心盡して体力が回復するや否や、も一度屋根の上へ上つて見たく成たので、程なく物見臺へ連れられ、安樂椅子に凭り掛つて、周りの市街を瞰下した、余は何處此處に本と斯様々々の物が有たと言へば、折戸先生は、それは今斯くくの物に成ておると答へ、二人が互に問ひつ答へつした、次に「新市と舊市の間に、何の點を尤も御驚きになりました」と同氏は尋ねた、

「左ればです、大きな事を後にして小さな事を先きに申しますが、先づ不思議と思ひましたは、煙突も立て居なければ、煙も揚つて居ない事です」、

主人は大層感に打たれた風で、俄かに「おう私は煙突の事を忘れておりました、それはもう遠に要らない様になりましたので、貴下方が以前温熱を得るために使ておるでになつた火を焚くといふ法が廢れてから、彼此百年になりまする」、

「當市の立派なところから見ますと、人民は誠に繁昌しておる様ですが、此が當市について尤も感ずる所でございます」、

折戸先生言ふ「どうか貴下の時代の波士頓を一望したいものです、御説の模様によれば、其時分の諸市は寧ろ見苦しい方で有たに相違ございませぬ、假令之を結構な者にしようと思ても、其頃の職業法が不都合であつた爲に、世上は押なべて貧乏でございましたから、逆も出来ませなんだし、其頃は個人主義と申して、自分の所有しておる物は大方私の贅澤に浪費するといふ流儀が盛に行はれてたりまして、全く公共心とは背馳してわりましたから、所詮出来ない事で有たのです、今日ではそれと反對で、自分の衣食住に費やして餘りがあれば、皆之を市の裝飾に費やして、萬人が均しく樂める様にするのでございます」、

再び屋根に登つたときには、日が沈みかけて居たが、二人寄て語ておると、段々と夜に入ってきた、「もう暗くなつて來ますから、降りようではありませぬか、妻と娘とを御引合せ申したいのですから」と折戸先生は言た、

此語を聞くにつけて、余は前日うつゝに聞ておつた女の囁き聲を思ひだしたが、紀元二千年の婦人はどんな者か見たいと思て、早速賛成して物見より下りた、這入た室には主人の細君と娘とが居て、室内隈なく一種心地よき和かな光で輝てあつた、何でも人工の光には相違ないが、どうして發光させてあるか解らなかつた、細君は其夫と同じ歳恰好で非常に奇麗に見へる行儀のよい婦人、又娘はばつ

ちりと青みがゝりたる眼元に、ほんのり紅梅色を帯びて、馨らん斗りの顔形、溢るゝが如き愛嬌は女性性の優しさを現はして、得も言はれぬ風情、第十九世紀の婦人社会にでも在れば、月の雫か天女の再來かと疑はれたであろう、且や昔の婦人には兎角強健と活潑さが乏しかつたけれども、此娘には此缺點なく、何も彼もチャント揃て不足した所がない、所が豈圖らんや娘の名を悦子と云たが、余の境界の不思議さに較べると取るに足らぬ事ではあるが、實に奇妙な暗合も有たものである、

其夕は實に社交の歴史に珍無類の時であつた、けれ共雙方の話が濫たの行難んだのと云ふ事は無つた、何様當夕は年代の違つた他世界のひと初めて交際したのである、然るに多年親しく交て居た様に、誠實と質朴とで待はれた、是は無論親子三人の上手な技倆に由たには相違ないので、當り前なれば余が不思議の縁で爰へ來た物語より外に談話の種となるべき者が無い筈であるのに、夫婦の者の話振では、別段不思議さうにも奇怪らしくもない様に有たから、前世紀からの流浪者を平生から待らい慣れてゐるのであると思はれた程であつた、

余に取ては當夜ほど心組が快活で慧敏であつたことも知らず、當夜ほど感想が鋭くあつたことも覺えぬ、勿論自身の驚くべき境界を忘れてしまつて胸に浮ばなんだといふではないが、唯だ其境界に居るために、心は酔た様な氣がしたのである、

折戸悦子嬢は餘りたんと話をせなんだ、けれども其美しい姿の魔力に引付られて、屢々娘の顔に目が散たが、其度毎に娘は心恍惚たる様子で余を見詰てゐた、無論是は想像に耽る婦人で有たのであらうから、余が不思議の境界のために痛く興味を勵まし、珍しさが先に立て斯はするのであらうと思ふたけれども、若し娘が斯ほどの美人で無くば、さして余の心に感じが起らなかつたに相違ない、余は地下の室に寝た譯柄を話した所が、折戸親子は大層興味を起した様子で、何れも皆余が其室に入たきりで世に忘れられてしまつた理由を説明しようといふ事に成て、色々説が出た揚句、先づ是が一番最もらしいと一同が同意した説は、無論其眞偽は解らないけれども、取敢へず甘い説明である、即ち地下の室の上に灰が堆高まつて居たからには、何でも家が焼落た證據で、余が寝た夜大火が有つて庄兵衛は其火事のためか、或は火事に關係した何かの怪我で命を落したとする、左すれば余が其儘長の夢を地下に見ながら百年以上を経たといふ事が起るだらう、又地下に寢部屋のある事も、余が其中に寢ておる事も、庄兵衛と山井丸齋の外、誰も知ておらなかつたのであるが、丸齋は其夜ニユー、オルレアンズへ行てしまつたので、大方其火事のこと少しも聞なかつたのであらう、そこで余の朋友や世の中の人、必定余が焼死でしまつたものと論結したに相違ない、其後焼痕を掘たのであるが、何様十分に鐵を深く入なんだので、寢部屋の屋根に接しておる地盤を見露はさなんだのである

う、諸若し家の焼跡へ再び建築でもしたのなれば、深く堀る必要も有たやうけれども、時節柄は騒々しく、場所柄も好ましふない爲に、再築せなんだのかも知れぬ、今花園のある所は丁度其場所であるが、中にある樹木の大ききから考へると、少くも五十年以上は空地で有たのに相違ないと斯云ふ説であつた、

第五回

夜は深々と更けて来る、母と娘とは折戸先生と余とを一室に置いて退ひてしまつた、先生は「御眠ふございますか、御寝み成さる度ば床が取てございますから」と言たが、若し睡くないとして見れば、先生は共に話で夜を更したいのであつて「私は多更しをする男で、上手を申上るのではありませぬが、貴下ほど面白い方は存じませぬ、別して第十九世紀の人と談話を交へられるといふ事は、滅多に無い事でございますから」と言た、

床に這入たら一人になつて物寂しふなるのが心配で、宵の間兎角それが氣に懸て居たが、何様情ある他人に身を取巻かれ、親子三人が寄てくれる同情に勵されて、心に張が付て居たものゝ、折々話の途切る度毎に、獨り寐の慰めやらぬ時には如何しようぞといふ懸念が、バツ／＼と胸先に閃めいた、勿論其夜の寝入られないのは知れ切た事で、獨り目を覺して物思に心を煩はすのは苦しい事である、是は臆病でも何でも無い、當に斯く有べき筈である、そこで今主人が睡いかと問たに付けて、實は斯々に思ひ煩ておると明らさまに話した所が、折戸の言ふには「それは誠に尤も千万で、斯く有べき筈であります、併し睡られないに付ては御心配は御無用で、床に就きたい時は一服薬を差上ませう、請

合て睡れますから、そうして明朝は大方快く目が覺めて、舊く居住せる市民の心持が致しませう、
「否や其藥を頂戴致さぬ内に、此新波士頓に付て今少し知なければ成ませぬ、先刻物見臺での仰せ
には、僅か百年間眠ておる間に、幾劫の昔からまだ無つた程の大變化が人間の境遇に起たとの御意で
ございました、成程先刻眼の前に見ました市内の模様では、如何にもそう有ふかとは信じますが、
それは如何様な變化で有た者か、責て其二三を伺ひ度存じます、此はどうして中々の大事件で、何れ
から始めたら宜しうございませうか、左様、先づあの勞働問題でございませう、あれに付ては如何い
ふ解釋が有るのでございませうか、第十九世紀では誰も解釋することが出来なんだ難問でございまし
て、其解釋が甘く付かない爲に、社會がたゞに解けてしまひそうな累卵の有様に陥ておりまし
た、若し満足な解釋がございませうれば、それが承りたいもので、それさへ聞けば百年間眠た丈の直打
がありまして、惜いとは更々思ひませぬ、」

折戸先生答て言ふ「勞働問題などいふ事は方今知られても居らず、又起り様が無いのですから、我
々はまづ其問題を解釋し得た様な者です、それはいと單純な問題で、決して難問ではございませぬ、
それしきの問題が解釋できない様な社會なれば、瓦解しても不足は云へませぬ、熟知して居る上から
申せば、社會は其問題を必ずしも解釋する必要は無つたので、自づと解てくる問題だと言て宜しい、

職業法が進化して來れば、其結果厭でも應でも解釋が出来まするので、社會の趨勢さへ誤て居なけれ
ば、社會は唯職業法の進化を承認し、其進化に力を協すだけで宜しいのでございませう、」

「私が眠り始めました頃には御説の様な進化は承認せられて居ませなんだ、」

「こつと、御眠りに成ましたのは千八百八十七年だと仰しやいましたねえ、」

「左様、其年の五月三十日で、」

先生は稍暫らく思ひに沈みつゝ、余を視て居たが、頓て口を開て言ふよう「して社會に逼ておつた危
機とは元來どんな性質な者か、世人が認めて居らなンドのですか、如何にも御話は十分信じます、
其時分の人が時運の趨勢を見ることが出来なかつたのは、今日多くの歴史家が論評する處でございま
すけれども、凡そ歴史には確知し難いといふ様な事實は少ない者で、此なんぞは將に起らんとする社
會の變化の徴候であることは、我々の目には炳然火を見るが如く明らかで、間違へる氣遣ひはありま
せぬから、貴下の目にも充分明瞭に見へねばならぬ筈であつたと思ひます、子エ西様、貴下なり或は
貴下と智慧の程度を同ふする人々は、千八百八十七年頃の社會の有様を何と考て入つしやつたか、今
少し詳かに承て見たい者でございませう、當時廣く世に行はれた職業上や社會上の紛紜といひ、社
會に於ける不公平に對して庶民の懷ける不満足といひ、人間一般の不幸難澁といひ、何れも皆一種の

大變化が起る前兆であるとは御承知でありませなんだか、

余は答へた、「イヤ我々は充分承知しておりました、我々共は社會が碇を引ずり、渺茫たる大海に漂ひ流される様な氣が致しまして、何れの方へ漂ひ去るのかは誰も知る者なく、唯だ岩に觸れて碎けることを氣遣つた者ばかりです、」

折戸先生曰く「けれども潮流といふ者は、篤と眼を付て居れば其行く方向が認められる者で、岩の方へは行かずに、益深い瀬戸に向ふ者でございます、」

「當時世俗の諺に、向ふを見るより後を見よといふ事がございましたが、今日始めて道理であるといふことを知りました、私が長の眠りを始めました頃には、社會は追付どんな慘狀になるか知れぬと思ひました位い紛亂な有様で、今日屋根から縦令立派な市街を見ずして、古苔蒼然たる焼け跡を見たに致しまして、私は如何にも斯く成べき筈であつたと思つて、驚かんだでございませう、」

折戸先生は細心注意して余の話に耳を傾け、余が語り終つた時考へ深く點頭いて言ふよう「花鹿といふ人は其時代の人心が曇り亂れた有様を説きましたが、世人は皆餘り針小棒大の説だと思ひましたけれども、貴下の御話は全く花鹿の言た事の證明になります、成程そういう世の移り變り目には、威激紛亂の甚しいのは實に左もあるべき事でございしますが、當時行はれておつた勢力の傾向は充分明

かであつのでたすから、其頃の人心は恐怖よりも寧ろ希望を持つて居らねばならぬ筈だと、今日の人に思はれますのは、無理ならぬことではありませぬか、

余は言た「未だ例の勞働問題の解釋を御話とゞいませなんだ、大体貴下方は今平温繁榮に御暮しの様に見受ますが、それが又如何して第十九世紀の様な混亂な時代から湧て出た者か、知り度て叶ひませぬ、實に其様な筈はございませぬのに、」

主人は「失禮ながら煙草を御喫りなさいますか」と言た、そこで主客共に巻煙草を薫らしつゝ、先生はぼつ／＼話した、今夜は私も眠くはありませんし、貴下も亦た眠るより話の方が宜しい様でございしますから、今夜は御話することゝ致しませう、付ては方今の職業法の進化する道行について不思議がある様に御考へであるらしいございしますから、取敢へず其迷信を破るために、方今の職業法とは一体如何な者を申上るに若くはないでしょう、昔の波士頓人は、問題を問掛るので名高ふございました、私も皮切りに一間を御尋ね致して、今日になつた仔細を御示めし申す積りです、先づ其頃の勞働騒ぎで尤も目に立たた事は、何でございしたろう、

「はい、それは勿論同盟罷工なので、」

「如何にも其通り、所が其同盟罷工を甚だしからしめたのは何事でしたか、」

「大きな労働組織といふもので、

「其大きな労働組織を拵へたのは、全体如何な積りであつたでしようか」。

「労働者は大会社に奪ひ取られて居る権利を取り戻す爲に、組織をしなければならなんだのです」、折戸先生曰く、「正しく其通り、前代未聞の大きな資本を一團りに固めた結果、労働組織とか同盟罷工とかいふ起りましたので、ズット昔し資本を一纏めに集めるなんぞ云ふことが無つた時分には、小資本を持ておる無数の人が、商業と職業とを営んでおりまして、一箇一箇の労働者が、雇主に對して割合に重い地位を占め、不羈獨立で束縛せられておりませんでした、且つ小資本を蓄はへ、又は新工夫を思付た者は、人に雇はれずに自ら事業を起すことが出来る様になりますと、職人である者が常に雇主になるといふ風で、雇主と労働者との間に、確きりとした分界線がなく、從て又労働同盟の必要もなく、同盟罷工の起る筈も無つたのでございしました、然るに此小資本小職業の時代に續で、資本を一團に集合する時代が参りましたから、模様は全く一變致しまして、今迄小雇主に對して重要な地位に居た個人の労働者は、大会社に對して無力取るに足らぬ者と貶賤されて、雇主となる出世の通路は閉られてしまひました、是では堪らぬから自から防禦する策を講じなければならぬと言ふので、個人の労働者は同類を嚆矢して、同盟連合したのでございます、

「其頃の記録を調べて見ますと、資本を集中するのを責める聲が中々劇しかった様子で、左様な制度は未曾有の惡むべき壓虐で以て社會を脅迫する者で、大会社は天下の万民を縛つて、開闢以來まだ知られない程の賤役に服せしめる準備をしておる者と人々は信じました、それとも労働者が人らしい人に服して賤役するのなればまだしもの事、貪つて飽くことを知らない無神經の機械とも稱すべき詰らぬ族に服役するのであるから堪りませぬ、嗚呼首を回らして昔日を願ふと、人々が絶望致しましたのは實に尤で不思議は有ませぬ、人々の恐れておりました會社の壓虐時代よりも賤むべく惡むべき運命は、決して人間世界にございませぬから、

「斯の通り之を非難する聲が喧しいにも拘はらず、獨占の事業は日に月に大きくなつて、ドシ／＼商賣や職業を併呑して止ませなんだ、千八百八十年の頃合衆國では、個人で工業の大舞臺に打て出ようと思ふても、大資本が無れば出来ない事でありまして、同世紀の最後の十年間には、チラホラ残つた小仕掛の商賣がありまして、過去の時代からの残り者で、衰滅を急ぐばかりだとか、左なくば大会社に阿諛しておる厄介者であるとか、但しは大資本家を吸引する力もない小地方に在る者で、穴や隅に隠れて人に見付らぬ様に生を貪る鼠同様の境界に落てしまつた者でした、又鐵道會社は幾つも連合する一方で、遂には少數の大シンデケートが鐵道運送業を統轄することになり、製造場もシンデ

ケートが有て主産物の販賣を統轄しますので、シンデケートだの合同だのトラストだの、イヤ何だの彼だのと、其名は如何であらうにもせよ、歸する所此等が横暴な權威を振舞しまして、自分等に匹敵する程な連合同盟が他處に起るに非ざれば、物價を極てしまつて競争を全く打壊します、けれども若し屈強な勁敵が起りますと、忽ち大競争が起りまして、其極益大きな連合が出来て、同盟の基礎が一層鞏固になります、市中に在る大市場は所々に支店を設けまして、田舎者の競争がでぬ様に仕掛け、又市中に在る本店は細かい競争者を段々併呑して、遂に一地方の商賣を一つ屋根の下に集めてしまひ、曩に獨立の店を持ておつた數多の商人は、此大市場の書記や手代になつて使はれます、又其市場に仲間入する程の自己の商賣を持たない小資本家に至りましては、其大會社に使はれて居るのであつて、自分の金を他へ金利に廻はすことが出来ないから、其會社の株券や社債券を買ふ外工夫は無いのです、それであるから會社に對しては二重に取すがらねばならぬのです、

「一般の人民は必死になつて商賣職業を少數の強い手に集め收めることに反對しましたけれども、何の甲斐も有まぜんんだ、是は抑も斯くあるべき經濟的の強い理由が有たに相違ない證據でございませう、大体小さな商賣をしておつた小資本家共は、元來小さな事物ばかりを扱て居た時代の人物で、蒸氣や電信等で大仕掛にする時代の必要に逆も應ずる事が出来ない處から、勢ひ自づと其資本を一纏め

に固める様に逼られたのでございませう、去らば今更昔の有様に立返ることが假令出来るにしても、驛馬車位でコッ／＼往來しておつた間ごろい時分に逆戻りする斗りのことに成て來ると云ふのでございまして、資本を大纏めにする遣り方は壓制的で耐へられない制度であるとは知り乍ら、其渦に卷込まれておる人々さへ、此制度を憎み嫌ひつゝも、それが國民の職業に著しい効果を及ぼした事を承知し、管理の統一と組織の一致とに由て大節約が出来る事をも認め、且又新制を以て舊制に換てから、世界の富が夥しく勃興したと自白せざるを得まぜんんだ、所が實は此増へた富は、主に富者の懐に這入りまして、富者をして益富ならしめ、貧者をして益貧ならしめて、貧富の懸隔が益甚しう成たのでございませう、併し唯だ富を産出するといふ上から見ます日には、如何にも合同が強固で有れば有るほど、資本は益其効果を著はす者には相違ございませなんだ、そうして見ると一旦集めた大資本を細分して舊制に復へることが出来るぞ致しますと、人々の境界は前よりも平等になつてきて、益々個人の威嚴と自由とが得られるかも知れませぬけれ共、其代りに一般の世界を貧しくして、物質的の進歩を妨げるといふ損がございませう、

「左すれば古へ北亞弗利加のカルテージに在た様な富人政治に屈從することをせずして、集合資本の致富力を働かせる方法は無つたでしようか、世人の心に此疑問が起るや否や忽ち其解釋が出来ま

したので、是迄は資本集積だの専賣權だのといふ事を、蛇蝎の様に思て極力抵抗しましたけれど、愈々益々資本を集積して極めて大仕掛に職業を行ない、益々獨專的方向に押寄せて行くのは、結局は將來人間の爲に黄金世界を開くべき進化を完からしむるに必要な手段であるといふことが見認められました、

「前世紀の初頃、國民の資本を悉く一團に固めて、此進化を完ふ致しましたので、是迄此國の工業商業共に、無責任極まる私設の會社やシンヂケートが定見もなく唯だ自家の利益の爲に爲て居つたのでございましたが、それは止めに成て、國民を代表する唯だ一つのシンヂケートの手に委託されて、國民共同の利益を謀る様に商賣や工業をする事になりました、語を換て申しますれば、是迄澤山有た會社を國民全体が併呑して、唯一つの大商工會社となり、是迄有た許多の資本家の代りに、唯一つの大々的資本家となり、是迄有た多くの雇主の代りに、唯一つの雇主となり、是迄幾つも有た獨專權を吸収して、唯一つの大獨專權となり、而かも萬民皆此獨專の利益と經濟とに與かることゝ成たのでございまして、又それまではトラストが流行して澤山ございしましたが、それが皆合して一つの大トラストとなつてしまひまして、今より百餘年前に我合衆國民が自分の管轄を我手で爲始めた様に、自分の商業工業を我手で爲ることになり、而かも今迄政治的の目的で政府を組立たと丁度同じ道理に由て、

職業的の目的で大トラストを組立たのでございまして、こういふ風に致しまして、遂には國民生計の由て繋る所の工業商業は、如何あつても公共事業とすべき緊要な者であるといふ事が見認められ、商業を私人の手に扱はせて私利を營むに任かせるのは、丁度政治向の職掌を王や貴族の手に扱はせて、自分ばかりの榮耀榮華を貪るに任かせるのと、唯だ大小の別こそあれ、結局類を同ふする愚策であるといふことが見認められました、斯る見易い明かな事は、もつと早ふ知れそうなものであつたのに、萬國歴史の中で漸く軌近に及で知れたといふのは、奇態でございまして、

余は言た「御説の様な高大もない變化が出来るに付ては、無論血の川を流し骨の山を積で、きつい動亂が有たでしよう、」

折戸先生は答へた「どう致しまして、そんな亂暴なことは全くございませぬでした、そういふ變化が有るのは疾から先見せられておりました、輿論こそ已に十分に變化をするに熟して居たのに、天下の民衆が後れて居りましたので、議論で以て反對することも出来ねば、腕力に訴へても矢張反對することが出来ませんでした、中々どうして大會社なんかに對する苦々しい一般の感情も止みまして、却て此等大會社は眞成の職業法に到着する迄の必要な鍵鎖であるといふことを見認める様に成ました、そこで個人の獨專權に反對する尤も亂暴な強敵さへも、今は商工業を自から統轄する程度まで國民

を教育するには、彼の大獨專權は實に價ある役を勤むる者だと承認せざるを得ないでした、所が五十年前には我國の商工業を一團に纏めて國民全体が之を統轄するなんぞは、最も熱心な論者に取ても、大膽極つた實驗の様に思はれたでしやう、けれども世人は世の中の實情を目に見、心に學び、舊來の大會社の弊害横暴を熟知しておりましたから、心には十分の新思想が湧き溢へ、舊來のシンデケートなる者は、皆國家の歳入よりも大なる利益を握り、幾百万人の勞力を自在に指揮して、小仕掛商工業の企て及ばない經濟と効果とを收めたのを多年見て來ました、そこで商賣が大きければ大きい程、單純な原理が應用せられる者で、丁度機械が人手より確實精細であるのと同じ様に、小商賣で主人の見張の下にする仕事を大仕掛でするといふ建方は、大層好結果を顯はす者だといふことが、格言と見認められて參りました、かういふ鹽梅に、是非國民全体が自分の職掌を取なければならぬといふ議が出ました、小膽な人でさへ何のそれが實行出來ない筈はないと言ひ出すことになりましたが、此迎も本を尋ねると、大會社其者の御蔭でございまして、新法は詰り以前行はれてあつた會社組織に背馳した者でなく、却て一層其制度を擴げて、未曾有の大きな會社組織に致した者でございまして、けれども一國が商工業界に唯一の大會社となることの出來るのは、從來箇々に別れてあつた獨專事業に纏はつておつた多くの困難を取除くのであるといふことが解てきました、

第六回

折戸先生が語り終てから、余は此人が聞して呉れた大改革によつて出來た社會の建方の變化は一鉢ごんな者であらうかと考へながら、默然としておつた、

良久ふして余は言た「政府の職掌をそんなに押し擴げるのは、少くとも人民を壓制することになりはしませんか、」

「職掌を押し擴げる！イヤ何處が押し擴げになつております、」

「去ればです、私の時代では箇様に考へられておりました、元來政府の職掌と申す者は、平和を維持する事と、公衆の敵を防で人民を守る事、即ち兵馬の權と警察の權とに限るべき者だといふのでございます、」

折戸先生は之を聞て叫んで言た「これはしたり、公衆の敵とは誰の事でありませうか、佛蘭西や英倫や日耳曼を指しますのか、將しは又腹減じいこと、寒いこと、裸でゐることを指しますのか、貴下の時代では、國際上聊かでも不和が起るときは、政府は直ぐに人民の身体を攫んで幾千幾万の人を殺すやら、手足を斷つやら、人民の財産を湯水の如くに消ひ荒して、暫くの内に竭してしまひ、而かもこ

んなに槍玉に上られた人民に取て何の利益にも成らないのは、十の内九まででございます、今日我々は戦争なんかは決して致しませんし、政府も戦争をする権がありませぬ、けれども各人の餓へや寒さや裸かの惨状に陥るのを保護したり、各人の身体と心の必要物を準備するために、若干の年数を限て各人に職業をさせるといふ職掌があります、チエ西様、ほんに思ひ返して見ると、政府の職掌を押し擴げるのが非常であるといふのは貴下の時分の事で、今日には無いことでございます、方今では縦令善い目的の爲にもせよ、昔政府が最も悪い目的の爲に持ておつた様な權力を政府に持しめないのです」

余は言た「比較することは捨て、しまつた所で、我々時代の政事に與つた人々は、權謀と腐敗とで固めてありましたから、國家商工業の責を政府に負はせることは、如何有ても出来ないこと、思はれましたし、國の致富機關を政治家に任せて管理せしめる程悪い建方は無いと考へざるを得ませなんだ、國の物質的の利益は全く當時の黨派に弄ばれておりましたから」

折戸先生は答へた「御説は至極御尤ですが、唯今ではそれがすつかり變てしまひまして、黨派も無ければ政治家もございませぬ、權謀といひ腐敗といひ、何れも唯だ歴史的の意味を有する語で、今の時節には人の知らない所でございます」

「すると人間の天性其者が大層變たに違ひございますまい」

「どうして決して左様じや有ませぬ、唯だ人間生活の有様が變たり、それと相伴ふて人間行爲の心持が變たのです、貴下の時分の社會の建方に由れば、官吏どもが自分や或る他の人の私利を謀るために、公權を濫用する方へ絶へず心を誘惑せられる様な仕組に成てございましたので、如何様そふいふ事情にては、自分の事務を官吏等に任せることは不都合だと思はれる筈です、今は其反對で、幾ら惡意のある官吏でも、其權柄を濫用して自分や他人の私利を營む道が全く無いやうに社會が仕組まれておりまして、何の様に悪い役人も腐敗した舉動は出来ず、腐敗漢にならうといふ心も無く、破廉耻を行はせる報酬として賄賂を使ふ馬鹿者も出来ぬ様な社會の立て方です、併し唯今申上ておる事どもは、我々社會の有様を日々御覽なさるに従て、始て御了解になることが出来ます」

余は言た「併し勞働問題をどういふ風に落着なさいましたか、未だ伺ひ得ませぬ、先刻より唯だ資本問題ばかりを研究したのでございます、今工場機械、鐵道、田圃、鑛山、其他國內にある一般の資本を國家が處置するに致しまして、矢張勞働問題が依然と殘ておりまして、資本を處する責任を負はふとしますと、國家は資本主の地位に於ける困難を負ふことになります」

折戸先生答へて曰ふ「國家が資本を處する責任を負ふや否や其困難が消へたのでございます、國民

の勞働力を一括に組み立て之を統轄することに成りましたので、舊制の時分に解釋が出来ないとしておつた勞働問題が全く解釋せられて参りました。國家が即ち之を統轄する雇主となります時は、市民といふ市民は皆被雇人でありまして、商工業の必要に應じ、此處彼處に配置せられるのでございます」。

余は「御説で見ると私等の時代に在りました國民皆兵といふ筆法を勞働問題に適用した迄でございませぬね」と言た、

折戸先生答て曰く「左様です、國民が唯一の資本主となるや否や自然そう成て來ねばならぬ事で、昔は吾人の身体健全である以上は、均く皆國民を防守するために兵役に服せねばならぬ義務があると考て居たのですが、今では各人が均しく皆國民の生活を維持するために、工業上なり智力上なりの務めを助け合ふべき義務があると成ております、併し各人が一般に平等にかういふ務に服することが出来る様に成たのは、國家が勞働の雇主と成てからの事でございました、若し人を雇ふ權力が幾千幾萬の個人と會社とに分け與へられて有て、其個人と會社の間に合議も談合もなくして、勝手氣儘に貧者を壓抑する様な事が有りました時分には、勞力の大組織は出來ませんので、勞働したいと思ふ數多の人も勞働する機會を得ず、又負債の一部或は全部を逃れたいと思ふ者も、容易に其目的を達することが

絶へず起たのでございます」。

「そうすれば服務といふ者は總別強迫的の者かと思ひます」と余が言たれば、

折戸先生は答て言た「強迫で有ませぬ、寧ろ自然の然らしめる所で、實に當然の事、合理の事でありますから、遂には強迫的の者だといふ考が止たのでございまして、務をしなければならぬ場合に強迫を受ねばならぬと云ふ人物は、極々賤むべき人物であるといふ様に考ることとなりまして、けれども服務が強迫的だといふのは、必竟厭でも應でも服務せねばならぬといふ事の言ひ誤りであります、唯今の社會の秩序は、全く服務を土臺として築き、服務を本として考て來ました者であるから、若し一人が服務を避けようと思へば、我が生存の仕様が無い有様にせられて、浮世の外へ自己を逐出してしまひ、人類から自己を絶ち切ることにありますので、一言で言へば、自殺するの外は無いのです」。

「して其商工業に従事する服役年限は、生涯でございませうか」。

「否や貴下の時代の勞働の平均年限よりは、遅く始つて早く終ります、昔の工場は小供や老人が澤山居ましたけれども、唯今は幼少の時代をば教育を受くべき神聖の時代と致し、又成熟期に達した時代は、体力が鈍り始めるのですから、安佚愉快に暮すべき神聖の時代としております、即ち商工業

に服役するのは、教育期の終りなる二十一歳に始まりまして、四十五歳で勞働を免せられ、其後は遊で暮すのでございますが、俄かに勤勞が澤山入用であるといふ止むを得ない節は、特別に仕事に従事せねばならぬことがありますけれども、五十五歳になれば全く免役せられます、併し斯の如き非常な服務は極稀なことで、殆ど無いといつて宜しい、毎年十月十五日は招集日と申しまして、二十一歳に達した者は、商工業の服役に招集せられ、已に二十四年間服役して四十五歳に達した者は、禮を厚くして免役せられるといふ日でございます、此日は我々に取て實に大縁日でございまして、昔希臘人がオリムピア祭で以て年代を數へた如く、一切の出来事は皆此日より數へることに成て居ます、唯だ希臘と異なる點は、彼に在ては四年毎に一度の祭がありました、我國のは矢張毎年此日があるのでございます、

第七回

余は言た「愈商工兵を服役させる爲に招集した上は、そこに大變困難な事が起ろうと思ひます、通常の軍務に従事する兵に在ては、そんな事は有ませぬが、商工兵は之と比較する譯には参りませぬ、といふ譯は、兵士は皆同じ事をやるので、其務も亦單純で、武器を振舞はしたり進んだりすれば宜しいけれども、商工軍に在ては、二三百も色々變た仕事を學で、之を爲て行かねば成ませぬが、幾千萬人もある各の人が、如何なる商賣や工業をするに適當するかを一々甘く定めるといふに付ては、管理者は未曾有の大技倆を持たねばなりません、全体そんな技倆を持ておる者が有るでしょうか、」

「管理者はそんな事を定めることには携はらぬでも宜しい、」

「そんなら誰が極めますか」と余は問た、

「各人は我が天性能くする所に從て自から定めるので、己は天性何をするに適しておるか、銘々勝手に見出しめるには、十分の苦心がしてあるのでございます、本來人皆天賦の智力と体力とを持ておる以上は、何をするのが國民に對して尤も利益にもなり、自分に取ても尤も満足であるかを、自から定めることが出来まするから、之を土臺として當今の商工兵が組織せられております、何なりと

も服役せねばならないのでは有りますが、各人の爲すべき服役の種類を仔細に定めるのは、各自隨意に撰ぶので、唯だ餘儀ない規則には従はねばなりませぬが、其外は決して束縛を致さないので、又服役年限中に心の満足を得られると否とは、我が爲ておる業務の好き嫌いに由るのでありますから、父母や教師は、小供のまだ幼ない時分から、此は何に適した人物であるかといふことを注意しております、而して教科の大切な部分としては、國民商工組織を十分に教へ、又諸の大商工業の初歩及其歴史を授けます、方今の學校は智育を専らとしておりまして、手工の鍛錬の爲め生憎智育の邪魔をすることは致させませぬ代りに、少年に器械及農業に關する工業の理論を知らしめ、又諸の職業の道具と方法を十分能く知らしめます、又絶えず此處彼處の工場へ生徒を見物に連れしたり、或は屢々遠路の旅を致しまして、起業を見にまゐります、貴下の時分には我自身以外の業務を知らなくても恥辱で無つたのでありますが、それを知らないでは、自分の尤も嗜む仕事を利巧に撰ぶことが出来ませぬ、今では若い者は服役致すよりズット以前から、已に我が將來爲て行こうと思ふ仕事を自ら擇り定めておくのが通例で、其仕事に付て預め澤山の智識を貯へておき、服役するのを一日千秋の思ひして待っております、

余は言たうでも一定の商業とか工業に就こうと思ておる義勇兵の数が、丁度入用だけの數に成ると

いふことは、出来難ひことで、常に入用の數より多いとか少いとかになるに相違を致しますまい、折戸先生答て言ふ「勿論義勇兵の數が入用の數に十分均しくなる様に望んでおりますし、又そのなる様に趣向するのが行政官の職掌で、各業務を申込む者の割合を細かに氣を付けております、若し何れかの職業へ向け、入用以上の人數が澤山申込で参りますれば、其職業は他の職業よりも引力が強いのだといふことが解り、又申込人の數が入用以下に減する模様があれば、其職業は他の職業よりも辛苦が多いのだといふことが解ります、そこで常に何れの職業も均しい引力を持つて同様に申込人が有る様にするのが、行政官の職責でございますが、是は諸の業務の辛苦艱難の大小に従つて、其労働時間伸縮するといふ筆法なので、手輕く爲し易くして極愉快に出来る仕事は時間を一番に長くします、金堀の様な苦しい仕事は極短い時間に縮めます、諸の業務に夫々人を引付ける力を定めるには、別段此を申す原則も規則もございませぬが、行政官が甲の労働者の負擔を軽くして之を乙や丙や丁の労働者に移しますのには、唯だ労働者其者の間に行はれる意見の變遷に従ふまでのことで、其意見の變遷は、申込人の割合で自然に知れることでございませぬ、先づ原則と云は、己の仕事が他人の仕事より重かる可らずといふ事で、職人自らが仕事の輕重を判斷するのであります、此規則を適用しますに付ても、別段限りは無いので、若し仕事時間を十分間位に縮めねばならない程苦しい辛い仕事で

あれば、申込人を誘ふ爲に之を十分にしても宜しいし、又假令十分に縮めても誰も之を爲るのが厭といふことなれば、其仕事は止にしても宜しい、けれ共實際は労働時間を善い加減に縮めるとか、或は其他の特典を増やすとか致せば、人間に無くて叶はぬ必要な業務に入用だけの申込人を得ることが出来たので、若し果して其必要な業務がどうしても困難で危険であるために、其苦勞に酬ふに足る恩典を與へても、人が厭がつて申込ない節は、管理者は「非常に危険な者」として之を普通の職業以外に別けて置くだけでありまして、自から奮て其職業を爲る者は、國民一般が感謝す可き直打を持ておる人でございます、今日の若い者は大に榮譽を欲しがるのでありますから、唯今申し様様に特典を與へられる好機會を逃がしはしません、こうして見ますと、職業を全く各人隨意に撰ばしめますのは、詰り生命や身体の健全を害したり危くする様な者をば、全く廢止することに成るのだといふことが解りませう、健全と安全との二つは、萬の職業に通じて必要な條件なので、今日の我國民は、昔の資本家や會社の様に労働者を幾千人といふ程づゝ切たり殺したりは致しません、

「では某職業に這入りたい人が入用以上に超過して、之を使ふ餘地が有ませぬ節は、申込人の取捨採否を如何致して定めまするか」と余は問ふた、

「それは其職業に關して一番澤山に智識を持ておる者に撰ばしめるのです、けれども多年の間何々

の職業で一番腕前を示したい者だといふに思ふておる者は、到底は之を許されぬ筈は無いのです、又最初我が好む職業に入ることが出来ない時には、通例別に一つなり二つなり乃至三つ四つの掛け換への好きの道がござへて有て、十分甘く出来ないにもせよ、可なり爲てゆける様に有りますので、それに喰付くのでございす、そうですから誰でも仕事に付ては唯一つの撰びに止めずして、二つも三つも掛け換への技倆を學んでおく筈なので、左すれば新發明が有たとか、勞力需要の模様が變つたが爲めに、服役の始めや服役後に、我が第一番に好でおつた仕事を執ることが出来ないことに成ても、相當に面白い他の職業に就くことが出来ますから、掛け換への好みを拵へておくといふことは、今日の建方では甚だ必要なのでございす、然るに若し某職業に義勇兵が得られないといふ時、即ち俄かに勞力を増す必要が起る場合には、行政官は隨意申込法に由て不足を補ふのが常法でございす、けれども特別の義勇兵を募る權、即ち入用だけの勞力を何處からでも呼び集める權を常に用意に持ております、併し通常は未熟な並々の労働者の内より特撰法で此必要の間に合せるのでございす、余は問ふた「其並労働者といふ仲間はどうして編制しまするか、屹度自から好で此組へ入る者ではございすまいか、」

「それは新募兵が初め三年間の服役は此並労働者組に入るのでありまして、服役後最初の三年間は、

皆上官の命令で仕事を定められます、其三年経た後で無ければ、若い者は特別の職業を選ぶことは許しませぬ、其三年間は厳しい規律に訓練せられまして、誰も之を免れることは出来ないのです、若者共は此厳しい學校から職業の自由に移るのを喜んでおります、それで職業に付て何の好みをも持たない様な馬鹿者は、何時迄でも並々の労働者でおるのですが、そんな場合は餘り多く無いとは、定めて御推量でしょう、

「そうすれば一度某商業とか工業を選んで頭を突込でしまへば、服役年限が終るまで、それに喰付て離れられぬのでしよう」と余は言た、

折戸先生の答に「否や是非そう無ければならぬのではありませぬ、浮氣半分にフワ／＼と幾度も職を變へることは、奨励せられなければ、許されも致しませぬけれども、一定の規律に従ひ務の困難に應じて、各労働者は最初撰んだのよりもモット善く自分に叶ふだろうと思ふ他の職業に移ることを隨意に申込むことが出来ますので、此場合には其請願を始めての申込人同様に而かも同じ條件で聞届けてやります、是斗りでなく、労働者は又他の地方に在る同職業場へ移り變はりたければ、相當の規則に従ひさへすれば移れます、尤もそういう事は餘り切々あるではありませぬ、貴下の時分の建方に致しますと、不満を懷ておる人は隨意に仕事を棄てることは出来ましたが、忽ち食ふ道を離れまし

て、明日からの暮し向きは、運のまに／＼任さなければなりません、今日では慣れた職を棄て、新しい職に就き、親しい朋友同僚を棄て、見識らない人と交はらんと欲する人は、餘計も有ませぬ、規則の許す限り幾度も職業や場所を換へたがるのは、唯だ職人の中劣等な者でございます、併し無論健康の有様によつては、いつも商買換も免役も致させて遣ります、

余は言た「成程職業法としては、此建方は至て効果のある者かも知りませぬ、けれどもそれでは手の力に由らずして腦力に由て國益を謀る人間を拵へる支度が出来ておりませぬ、當今でも腦を働かせ人物が無くて叶はぬのは無論の事であります、左すれば農夫や機械師になる様に育て、ある人物の中から、如何して之を選びますか、其淘汰法は餘程手際を要するに違ひございませぬ、

折戸先生言ふ「尤もそうです、此場合には一番細密な試験が要りますので、手の仕事をやるか腦力の仕事をやるかを定めるのは、全く之を各人の望む所に任せまして、三年間さへ並々の労働に従事した曉には、技術師になるか學者になるか農夫又は機械師になるかは、己の天性嗜む所に従て各人が隨意に撰びます、若し自から手仕事をやるよりも智慧を使ふ方が己に能く適しておると思へば、其成否を試して腦力を錬磨するのは容易でございまして、果してそれが自分に叶ふておるといふことなれば、之を我が職業として行くことが出来ます、そこで藝術學校、醫學校、美術學校、音樂學校、演劇學校

其他高尚な學理を研究する學校が有まして、何時でも希望者の隨意に這入れることに成ております」。

「併し若い者は兎角勞働を嫌ひますから、學校には若年の者が充ちて、之を收容する餘地が無い様になりはしませぬか」。

折戸先生少し苦笑して曰く、「勞働を免れるが爲に能々學藝の學校へ入る者は全くございませぬ、本來學校は諸の藝術や學科に對して特別の嗜好を持つておる者のために設けてありまして、學藝に嗜好を持たない人物は、乾燥無味な理論に腦を悩まして、他の生徒と競争するよりは、假令倍の時間働くにもせよ、氣樂な職業を致したがります、尤も中には好み撰ぶ所を誤て、我が天性に適はない學校に入る者も澤山ございますけれども、頓て其學校の規則通りに行ふことが出来ないことを覺れば、之を退校して又候職業に逆戻りを致しますが、決してそれが其人の耻辱になりませぬ、といふのは、果して何々を爲る技師が有るか無いかは、實地に試験して見なければ知れる者でないで、愈々其技師が見へた日には、之を益々發達せしめる方針であるからです、貴下の時分の諸學校は、生徒の助成金を頼りにして維持されておりましたので、學力のない無能者に學位の證書を與へる習慣であつた様子で、其様な詰らない無能者が、將來其學問で世を渡ておりました、今日の學校はそふでありませぬ、全く國民が建ておる講究所で、之を卒業するといふのが、疑ふまでもなく技師を持ておる證據でございます、」

折戸先生は尙も語を續けて言ふやう、學問藝術の研究は、三十歳になるまで誰でも許される事で、三十歳を越えますると、義務年限まで年月が澤山有ませぬから許されませぬ、貴下の時代には極若い時分から學藝を撰ばねばならぬために、丸きり方針を誤つて、生涯天賦の技能を顯はすことが出来ないのが屢ございました、けれども今では天賦の技師の發達には早い晚いが有ることを見認めておりますから、二十四歳から三十歳までの六年間に、學藝を撰ぶことに成ております、」

前刻から幾回か口まで出かけて居た問題が、今漸く口に出た、此は余の時代に職業問題を落着するに當て、尤も困難な障害物と考へておつた事柄で有た、そこで余は言ひ出した「どうも妙と思ひまするは、貴下はまだ賃金を割當る方法を御話なさいますなりました、抑も國民が唯一の雇主になりますると、政府が賃金の割合を定めて、醫師から土堀に至るまで、銘々幾ら幾らと定めなければなりませぬ、左様な事は私の時分には出来なかつた事で、人間の天性が變てしまへばいざ知らず、左なければ出来る筈はございませぬ、以前は誰も自分の賃金や俸給を満足と思ふ者が有ませんでした、假令自から十分の給料を受けておると思ひ乍らも、矢張り根性が出まして、誰某のは澤山すぎるがソリヤ宜しうないなどと思ふたのです、所が此不満の聲は天下一般でありましたけれども、無數の雇主に對して別々に同盟罷工や謀叛をしたので、まだしも治め易い様なもの、今では一個の雇主即ち政府に向

つて天下中から群がり集て来るのですから、どんな強い政府でも、二度と賃金を拂ひ渡す迄には、潰されてしまつて居るでしよう」

折戸先生は心の底から笑ひ出したが、偕て言ふやう、「御尤！御尤！始めて賃金を拂ふや否や、天下一般の罷工が起りそうに思はれまして、而かも政府に反對する罷工だとして見れば、とてもなく革命なのでございます」

余は問た、「そんなら賃錢拂渡毎にどうして革命を避けますか、誰か非常に發明な人でも有て、力を使ふ者、頭を使ふ者、手を使ふ者、聲を使ふ者、或は耳や目を使ふ者と、種々雑多の仕事にびつしり當はまつた直打を定めて、總ての人の満足になる様な賃錢の計算法を工夫致しましたか、但しは人間の天性が變てしまつて、人々は自己の上を一切顧みないで、他人の事のみを慮るといふ事になつたのですか、此二つの中何らかでなければ、譯が解りませぬ」

折戸先生は笑て答へた、「否や何らでも無いのです、時に西様、貴下は私の御客でもございまするが、又私が預つておる患者といつても宜しい、それで更に談話をするに先て、一度御察みになるが善ふございます、もう三時過ぎですから」

「御配劑は定めて結構でしようから、何分宜しう」

折戸先生は「宜しい、一つ趣向致しませう」と、何物やら酒盃に一杯呉れたが、それを飲たら、頭が枕に觸れるか觸れぬ内に、眠入てしまつた、

第八回

目が覺たらどうも大層氣持が善くて、快い氣味だと思ひつゝ、久しく幻想になつて居た、紀元二千年目に目が覺た事や、新波士頓市を見た事や、主人と其家内の人に逢た事や、或は昨夜聞た非常な事や、凡て前日に逢た事は、全く胸に忘れてしまひ、矢張我家の寢部屋におる心地がして、醒ることも無く夢ることも無く、うつら／＼と心に現はれるのは、百餘年の昔に見たり逢たりした事はかり、招魂祭日に在りにし事、悦子親子と臘山に詣て歸宅後共に食事をした事などを夢幻の中に思ひ返へし、其夜悦子の美しう見へたのから結婚の事に思ひ及ぼした、所が此楽しい事に思ひ至るや、忽ち大工の手紙に認めてあつた同盟罷工の爲に建築が無限に延引する由を想ひ起して、愉快な夢想は立どころに破れ、鬱憤の情が忽ち湧き出でた、思ひ出せば篇々相談する爲にさて十一時を期して大工に面會する約束であつた、そこで床の中から目を擧げて何時であるかと思ひたけれども時計は見當らない、のみで無い、此は如何に余が室では無いのであつた、サア床の上に飛立ち上て、狂氣の如くに四方を見詰めた、

自分が誰であることも余ながら解らず、四邊を見廻はしつゝ、數分間も床に坐して居たろう、此時の余は人間の形になるまでの魂魄であるような心地がして、此茫然たる感じでありながら、然も心の中

に苦悶するも亦た奇妙ではあるが、人間は皆をういふ風に出来ておるので、雲の中に盲ら滅方に自己を掻き探りつゝある間の心の苦みは、逆も言語に表はすことが出来ない、心を支へる柱が挫けてしまつて、全く智力の働きが止み、己れと云ふ者が皆目解らぬ様になつた時の矩合は、逆も何者にも比べられた者では無いので、又と再び斯様なことを知て見ることは有まいと信するのである、此有様で何程居たか知らないが、涯しも無い長い間と思はれた、所が忽ちにして昨日在た様々の事が一時にぴかりと胸に現はれ来て、余は抑も何人で如何して此處へ来たものかといふ事から、つい昨日の事と思はれた雑多の出来事は遠く昔と消へ去た世の事であつたといふことまで、すつかり思ひ起して来た、サア何うも溜らぬ、直ぐに床から飛び下り、破裂する斗りに思ふ兩顚顚を力を入れて兩手で抑へ乍ら、室の真中に突立ち、或は床の上に打伏し、動きもやらで枕に面を埋めた、サア今迄は心の大活動で有たが、忽ち其裏が来て、余が途方も無い經驗をした第一の結果として、智慧の熱病が起て居たのであつた、自分の眞實の境涯を確かに知りた望でおつた情感は其極度に登り詰め、齒を喰縛り、胸の上下に動揺すること船の波に漂ふ如く、狂亂の様な力を以て寢臺に握かまり、そこに倒れて正氣になろうともがいておつた、心の中には一切の物がばら／＼に壊れて、感情の癖も聯想も、人や物の考へも、悉く破壊して何が何であるか解らぬ様に渾沌の有様になつてしまつたから、何の點より心の緒を

求めることも出来ず、一つとして頼るべき定まつた者が無くなつた、唯こゝに意どいふ者のみ残ておつたけれども、斯様な怒濤で混亂せる海に向て、人間の意が「静まれ」と命する丈の力がある者が、とても無益である、色々道理を附けて吾身の上に起つた事を台詞し、且は其實際の境涯を會得しようと思ひたけれども、唯だ腦が堪えられぬまでふらつくのみで、余は一人では無く二人であるといふ考が起つたが、余は二人であるさへ思へば、今の余の成行は別に不思議は無いといふ様に考へ始めた、苦痛が段々こうじて、どうやら心の釣合が狂ひそうに成て來た、若し考へ續けて其處に居れば、心の苦を助かる時節が無い、何か氣を散す事をやらなければならぬ、責ては身体の運動をしなければならぬ、そこで早速身を起こして衣服を着、室の戸を開いて二階から下へ降つたが、まだ一向早いと思えて四方は十分明るもなく、人も誰も起きておらない、廊下に帽子が一つ有た、前の戸を押して見る、昔の波士頓と違て泥坊が徘徊せぬと見え、戸は些どしめてある斗りで直きに開いた、そこで大道へ出て此處彼處の街を歩んだり走つたり、又半島の方にある市街も大抵徘徊して見た、成程昔の波士頓とは丸で變てあつて、新舊の差異を實際に知ておる程の老人でなければ、此境に處したる余の驚きは解らぬだろう、前日屋根から見たのでは、市中が全く目新しい珍しい者に思はれたが、それは唯だ大体を一覽した斗りだが、今町々を歩いて見ると、變化は實に大した者であつて、少々は目印となる古蹟

が残てあるために益々以て變化のきつい事がわかる、若し丸きり見覚えの所が無いならば、大方全く他の市中に居る様に思ふたかも知れぬのである、今人が幼い時分に我が生れた都會を出て、五十年も経た後に再び歸て來よう者なれば、澤山變ておる處があるのを見て、驚くに相違はあるまい、其何處に居るやも解らずして途方に暮れるといふ事は無い、長い歳月が過去て其身にも亦た同じくきつい變化が起つた事に心付き、子供の時分に覺えておつた都會を離るに心に想ひ起して昔を忍ぶに違ひ無い、然るに余の場合は之と違つて、實際は五十年どころか百年餘りも経ておるのであり乍ら、少しも日月が経過した氣持がせず、古の波士頓から今の波士頓へ只一夜間只數時間の内に遷された心持がする、九分九厘通りまで變てしまつて、殆んど以前の痕跡も無い程の市中へ瞬く間に遷された心持がする、昔の波士頓の模様が少しも忘れられずに歷々として心に映じておつて、今眼前に見る波士頓の模様の爲に薄らがきれない、古い波士頓と新しい波士頓と胸の内に戦て相排斥し合ておる、一方の波士頓が實在で無いのか知らぬと思ふと、又忽ちに他方の波士頓が實在で無いのか知らぬと思はれる、實に見る者見る者が皆こんなに曖昧に成てしまつて、丁度妾が二重に寫ておる寫眞の顔を見る様で、何方が本眞物やら解らぬ様に成た、

到頭終いに余は元と出た家の前に復た立た、何にも其方へ戻らうといふ明かな了簡が有たのではな

いが、大方足が天性に誘はれて古里へ連れて戻たのに違ひない、市中の模様も變はり、時代さへ新しく變てれるのであるから、此家の方は他の處よりも余が家らしう思はれるといふ譯でも無ければ、當時世界中の他の男女よりも此家の住人の方が心安いといふ譯でも無いのである、若し此家の戸が錠でも卸りて居たのなら、開けんとする時手答へがあるから、ほんに是は這入る當もない他人の家だと心付て、餘所へ向て行たう、所が一寸押すと直ぐに開いた、そこで覺束ない足元で廊下へ進んで行て一室へ入り、椅子に凭り掛つて、見覚えの無い目新しい有様を見ぬ様に、燃ゆる心地する兩眼を兩の手で掩ふた、けれども心は麻の如く亂れて眩暈を生ずる程で、其間の苦しさ、腦髓も爲に融けるかと思はれ、新しい世界に唯だ一人來て何としようとの卑屈な考へ、絶望極つて思はず高く呻く聲、誰か助けに來なければ頓て亂心するがといふ思ひ、折も折とてスラ／＼と鳴る着物の音がする、目を舉て見ると、悦子嬢が前に立て、其美しい面には憐みの情が溢れておる様子、

「貴下如何なさいました西様、御道入になりました時見ておりましたが、何とも申せぬ悲哀の御様子でございました、今し方御呻きなさいましたのを聞て、もう黙て控えて居れぬ様になりましたが、何事が出来ましたのでございませうか、何處へ行つしやつたのでございませうか、何とか致して進ませようか」と問はれた、

悦子は語り乍ら憐みを寄せる身振で、手を前に差し延べた、察する所思はず知らずにした振舞であらうが、余もつい何氣なく余の手に悦子の兩手を握て確と縛み付いたが、水に溺れて死にかゝつておる者が、投げてもらつた繩を掴んで縛み付くのと同じ様な心持であつた、偕其面を見上げると憐みの情が充ち満ちて、眼も哀憐の涙で濕つて有たので、余の腦は落付て來た、柔かに押付ける優しい指までも同情を寄せる動悸が打て、余の心に張をつけ、騒ぐ胸を静め慰めた功能は、神藥のそれにも勝つて有た、

稍あつて余は「千万 忝ふ存じまする、嬢様は私に取て誠に神様の御遣はせ、嬢様が入つしやらずば、私は亂心する所でございました」と言た、之を聞てぼろ／＼と涙を垂れながら、

悦子は言た「西様、吾々共を誠に無情な奴と御考へ成さいましたらう、マア何と致して貴下を何時までも棄てれきましようぞ、併しもう御心は安まりました子エ、屹度御心儘かになりましたらう、」「はい誠にどうも有難ふございませう、まだもつと彼方へ御越下さいませぬなら、追付正氣に立返りませう」

悦子は少しく顔を慄はせたが、實に千言萬語にも勝つた無量の憐情を含言た「いえ、どうして彼方へ参りませう、前刻は貴下を長々御棄置申しまして、嗚や御恨みでもございませうが、更々無情の

余々と思召ますな、實は今朝御目が覺たら變に思召だろうと考へまして、昨夜は碌々眠りませなんだが、父の話に、貴下が今朝は朝寝をなさいますだろうと申すことで、且又始めから餘り親切ごかしにして最負の引倒れをするよりは、些と御鬱散をさせまして、親友と共にござる様に思召させる方が善いと申しました、

余は答へて「否や實はそう思はせて頂きました、併し百年も寝たといふ事は誠に滅法な事で、昨夜はそんなにも覺えませなんだけれども、今朝は變な氣が致しました」と言ひ乍ら、其手を取て顔を見て居た所が、早や心に勇がついてきて、少々談話も言へる程になつた、

悦子は言た「誰も斯く早朝から一人で市中を御歩るきなさると思ひませなんだが、ねえ西様、貴下は一体何處へ行つしやつたのでございます、

そこで余は目が覺てから悦子に逢ふ迄の事を委しふ話したが、之を聞き乍ら娘は痛く憐みを催ふした、余は娘の片手を放したけれども、之を持ておると余の心が柔らぐことを知て、娘は尙も他の片手を放さなかつた、娘の言には「嗚呼其感情はどんな者でございませうか、定めて怖い御心持で有たでせう、さて、貴下がそんな怖い感情と争ていらつしやつたさは、まあ、實に御痛ましいこと、どうか吾々粗漏の罪を許して下さいまして、

「否やもう今は何ともありません、貴下の御蔭で只今の處では怖ろしいことも無くなりました」と余は言た、

娘は愚念そうに「貴下はどうかもうそんな感情を再び心に御持なさいませぬやうに、

「いや何分にも萬事見慣れぬ事ばかりで、未だどうも此の如き感情が再び起らないとは申せませぬ、

娘は固く執て言ふ「縦令起りまして、責ては其感情のために獨でくよく思召ませぬ様に下さいまして、若し左様な事が有れば、どうか直に吾々の居ります處へ御越下さいましたら、十分の同情を寄まして、成るべく御心を慰さめませう、固より大した事は出来ませんが、獨でくよくいいますよりは乾度増でございませう、

「御許し下さるゝあらば参りませう、

「どうか御越下さいませ、及ばず乍ら心の及ぶ限り御盡くし申しませう、

「唯もう只今の様に可哀想にござへ思召して下されば満足でござります」と余は答へた、

娘は涙含む目元に笑を湛えて「ではどうぞ以來は吾々の側へ御越下されて御話し遊ばしますように、波士頓の町中、他人斗りの間を御馳なさいますのは御止なさいませ、

余と折戸一家の人々が心安くない赤の他人と違ふといふ氣になりだして來たが、唯だ數分経つか經たぬ内に、彼我兩方を斯くまで近しう成しめたものは、全く余の心の煩らひと、悦子が憐みの涙とであつた、

悦子は愛嬌溢れて伶俐しくも亦た熱き情を含みつゝ、私の側へ御越遊ばしたら、屹度御氣に召す様に御氣の毒そうに致しませう、けれども私が眞に貴下を哀しむとは決して思召すな、又貴下が御自身で何時迄も哀しく入せらるゝ様に私が思ておると御取り下さいますな、と申す譯は、只今の世界は貴下の時分の世界に較べて見ますと、實に極樂の様でございまして、程無く貴下は此泰平の代に來たのが身の仕合せで有がたき神の恩澤と思召ませう、

第九回

頓て折戸夫婦が現はれて來られたが、早朝一人で市中をすつかり見て來たと聞て少なからず驚かれ且又余が少しも心を亂されてねらないのを見て、愉快らしくも亦た驚かれた氣色であつた、程なく食卓に就くと折戸夫人は「御散歩は面白い事でせう、定めて新奇な物を澤山御覽でしたに違ひない」と言た、

余は答ふらく「新奇で無い物は餘り見ませず、一々驚く物ばかりですが、其中にも驚きましたのは、華盛頓町に店が一つも無く、國街に銀行が一つも有ませぬ、商人や銀行家は如何成てしまいました、大方昔し無政府黨が目論でゐました様に、之を絞殺してしまつたのですか、

「否やそれ程な事は有ませぬ、唯だ商店や銀行を廢したまで、、そいふ者の職掌は、今の世には不用でございます、

「では物を買ひたい時には誰が賣ります、

「今日では賣買なんかは有ませぬ、それとは違つた方法で物品を人々に分配しまするし、又金銭が無いから以て銀行家といふ様な門閥も要りませぬ、

余は悦子嬢を顧みて「ねえ嬢様、御親父は私を弄つて入つしやるのでは有ませぬか、定めて物議らすの頑はない私で有るために弄て見る御積でしようから御無理は有ませぬが、幾ら社會の建方が變たと聞て之を信するにも、大概程のある者でございます」と言た、

悦子嬢は笑ひながら「父は決して冗談を言ふ腹ではありませぬ」と固く請合た、

此時折戸夫人は第十九世紀時分の女の流行風に就て話し出したから、到頭そんな話で朝飯を済ませたが、例の物見臺は折戸先生の好んで始終登る處と見えて、それへ余を案内してから漸く元の話に立戻つて、

先生は言ふ「前刻金も商賣も無しで行くと申しました時に、御不審でございましたけれども、一寸考て見ますと直に解ることですが、抑も貴下の時分には、生産事業は私人の手に任されておつた爲に、商賣もあり金も要たのです、けれども今では其様な物は餘計なことで、入用は無いのです」、

余は答へた「さあ、どういふ理屈でそうなるのかい解りませぬ」、

「それは實解り易い事です、各々相異つて各々獨立しておる無數の人が、生活と快樂とに入用な諸品を生産致しますと、銘々の人は我が欲しい物を得るために、個人同志が絶えず相互に交易を致さけなければなりません、交易をすれば商賣が起ります、商賣が起れば交易の媒介物として金が要ります、

所が國家其者が何な物品でも生産する様になりますと、所要品を得るために互に交易するなんぞいふ事は、忽ち不必要になります、ごいふのは何でも彼でも皆一つの處から得られますので、其源を除ては、外から何物をも得ようが有ませぬ、そこで商賣は要なくなる代りに、國家倉庫と云ふ者から直接に物品を天下に分配する、金銭は不必要になるといふ仕組でございます」、

「ごういふ風に其分配を致しますか」、

「それは極々單純な法で致します、國民の年々の生産に對し各人が取べき割前を與へます、其多寡は毎年の初めに一々之を帳簿へ載せまして、割前切符と云ふ者を其人に與へます、又何の市町村へ行ても、公共倉庫が設けてありまして、銘々皆自分の割前切符を其處へ持參して我が欲しい物を得ます、ごういふ建方でございますから、個々別々の供給者と消費者との間に、何の取引も要ないので、貴下は定めて割前切符がどんな物か見たいでしよう」、

と言ひつゝ一枚の厚紙を余に示した、余は珍らしそうに其厚紙を見ておると、彼は「此切符は幾圓といふ代りに發行してあります、所が貨幣と云ふ者は無いので、圓だの錢だのと云ても、必竟昔の言葉が残てあるのみの事、唯だ生産物の價値を互に比較する爲に用ふる、謂はゞ代數學の記號の様な者です、それがため此切符は皆圓錢の値が書てあります、其點丈は古と同様です、之を公共倉庫へ

持て行きますと、書記が切符面にある四角な格子が幾個もある中より、注文の代價穴を切りあけて其代りに當方に入用の物品を渡してくれます」

余は問た、「若し近隣の人から何かを買ひたい節には、其報ひとして自分の割前の一部分を其人に移すことが出来ますか」

「先づ第一着に申しませう、誰でも他人に賣といふ様な物を持たせぬので、吾々の割前と申す者は本から身に付て有まして、何な事が有ても之を他人に譲られないのです、先づ御説の様な割前の譲與といふ事を考へるに先づ、國家は取引に於ける所有事情を吟味穿鑿して、至極公平に行はれる様な趣向をつけねばなりません、大体金銭を廢してしまふのは何の爲かと申せば、金銭を所有するといふ正當な筋道が有るまじきからの事でございます、昔は盗んだ金や人を殺して奪ひ取た金でも、辛苦して儲けた金と同じ効能を持ておりましたが、そんな馬鹿げ切た不法な事が有る筈はございませぬ、今日では人々皆友誼の情愛からこそ贈物を互に交換すればする者の、賣買するなどいふのは、人々相互の間に行はれなければならない仁愛と廉潔と申す事と全く背馳する斗りでなく、今日の社會の組立を維持しておる共同利益心と申す事と水火相容れない者でございませぬ、今日の予等の考へによれば、賣買は根本からして非社會的の傾向を持ておつて、他人を斃して私慾を教へる者で、そういう學校で育

て上られた人物の寄合ておる社會は、極低い文明に止つてしまつて、それより上に昇ることは出来ないのです」

「一年間に己の割前切符より以上が入用なれば如何致しますか」

「中々使ひ切れぬ程裕たり與られます、併し自然非常な入費が出来て不足が起ります節は、翌年分の割前を幾分か前借する事が出来ます、尤もそれは獎勵せられない方で、之を防ぐ爲に痛ふ割引されるのでございませぬ、又向ふ見すの道樂者であります、一年に固めて與へず、月に一度宛とか週に一度宛下渡し、止むを得なければ少しも之を其手に渡さない事もあります」

「自分の給金を使ひ盡さない時は、段々と積で参りますねえ」

「臨時の費途が要ると預期せられますれば、幾らか蓄へて置のを許しますが、別段そういう届出が無ければ、使ひ盡さない人は、之を使ひ盡すとが無つた者と見て、之を國庫剩餘の中へ繰込ます」

「そういう仕組では人民に貯蓄の風習を獎勵しませんねえ」

「そんな風習を獎勵する積は固より有ませぬ、國家其者が富であるのに、人民にあたら寶の持腐りをさせるのは望ましくございませぬ、昔は不時の災難の用意だとか、子供の教育とか言て、矢鱈に金品を貯蓄するのを能事と思ひ、客裔を人の美德と心得ましたが、今日では左様な事は褒めるべき者で

無いことになつて、何の役にも立たないが爲に、美德でも何でも無い様になりました、人が呱呱と生れるより死するに至るまで、養育も教育も愉快な生活も、皆國家が引受てくれるのですから、自分の爲にも我子の爲にも、明日煮く米は如何しようなど心配せんでも宜しい、

余は言た「それは實に大雑配な引受と申す者です、人々の勤勞の値が一々其費途相應に國家全體より酬ひられる様な事が屹度出來ますか、成程社會は大體から申せば總ての人を養ふことが出来るかも知れませぬ、併し自分の暮し向より少く儲ける者もあれば、それより多く儲ける者も有るに違ひありませんから、矢張結局賃錢問題に逆戻りしまするが、是迄賃錢問題の事は何にも御話がございませぬ、昨日の間答が切りに成りましたのは即ち此處なので、其時にも申上た通り、御説の様な國民的職業法に在る大難題と申すのは此點であります、尙一度御尋申しますが、社會に無くて叶はぬ千差万別種々無量の職業に對し、賃金の割合、報酬の割合が如何して十分甘く切り盛りされますか、昔は仕事の賃金は丁度品物の代價の様に市場の相場で定めまして、雇主は成るべく少く拂ひ、勞役者は成るべく多く得ました、如何にもそれは道義の上から見れば善い建方では有ませぬ、けれども一日に千回も萬回も定めなければ成らぬ面倒な問題を手輕く定める便法で、それより外に之を定めるべき良法が有るべしと思へませぬ、

折戸先生は答へた「私の益は彼の損、彼の利は私の害と云ふ風に、各人の利益を相反せしめる様な社會では、御説の法が便利でございませぬ、けれどももつと良法が工夫されなければ實に可哀想で「貴様の困苦は余の付込み所だ」といふ惡魔の毒言を人間相互の關係に應用すると申す者、世界到處皆危險極まる苛い厭な勤勞をする者が一番少ない賃金を貰ふ様では、職務の困難や危險や辛苦に由て報酬を定めるのではなく、仕事に就かねば食て行けない貧民の窮迫に付込で、賃金を絞り膏血を絞るのでございませぬ、

「如何にも御説の通りです、所が市場の相場で勞力の價を極める法は色々の缺點が有にも拘はらず、實際上便利な工夫で、其外に何か其代になるべき満足な法が有りとも思ひませぬ、政府のみが雇主であれば、勞働市場も市價も勿論有る筈は無く、何仕事の賃金も政府の專斷で定めなければ成ますまい、それでは實に複雑至極緻密至極な職務で、縦令行はれるに致しても、天下一般の不満を醸すのは極まつていませう、

折戸先生曰く「失禮乍ら貴下は困難の點を餘り針小棒大に仰せでございませぬ、今爰に假りに極利巧な人で組上である事務局を拵へて、總ての職業の賃金を極める責任を負はせ、所有人に必ず職を得せしめると同時に職を撰ぶ自由をも與へるといふ事として見れば、最初は如何程不満足な割當に成てお

つても、暫くにして誤謬が自づと直はる様になるでは有ませぬか。人々の好む業体には多くの人が集まり、好ましかる業には、働き手が不足するものがある。遂に其過不及が平均して來ませう、去り乍ら是は吾等の目的とする處とは違ふております、此法とても行はれぬとは思ませぬけれども、今日我國に行ておるのは此法ではありませぬ」

余は又候問ふた「では賃金は如何して整へますか」

折戸先生は良久しく沈思して答へなうた「私は昔の物事の有様を十分存じておりますで、唯今の御尋で御意が解りました、然るに此事に付ては今日は昔と事情が全く變ておりますから、御答をするに稍や困むのです、御尋では賃金を如何して整理するかといふのですが、方今の社會的經濟には、昔の賃金なる者に當る事が無いのです」

余は言た「賃金として拂渡す貨幣が無いといふ意味でせう、併し官設の倉庫で労働者に與へます割前こそ、即ち昔の所謂賃金に當るのでは有ませぬか、さあ、そこで種々の職業に従事してゐる労働者に夫々與へる割前の多寡は如何して定めますか、各個人は何の資格で自分一個の配當を要求する權利が有りますか、配當を定める基本は何でございませうか」

折戸先生は答へた「人であるといふ事が權利です、即ち人間といふ資格が配當を要求する權利の

基となりませう」

余は訝かしう思ふて言た「人間であるといふ事！總ての人が同一の配當を受けると仰せられますか」

「尤もそうですとも」

此本を読む人々は今日行はれておるより以外の建方を御承知あるまいし、又今日のと違つた組立が行はれて有た昔の歴史話も、心を留めて御考へ無つたやうから、折戸先生の手輕い話方を聞て余の驚きの痛かつた事はどれほどであるか解かるまい、

折戸先生笑ひつゝ「賃金として拂ふべき金銭が無い斗りでなく、先刻も申した通り、所謂賃金なる者に當る物が有りませぬ」

余は十九世紀の人間であるから、斯くも怪訝極まつた社會組織を聞て默する能はず、心中には充分批評の煙が燃へ立て、此時大に論難しようと思つて固めた、

余は聲を揚げて言た「人に由ては外の者より倍の仕事をする者が有りますが、猫も杓子も同値に見積つてしまふ様な方法では、どうして敏腕な者が満足しませう」

折戸先生答ふ「吾人は總ての人から丁度同じ丈の勞役を要めるのですから、不公平だの何かと言て

不平鳴す理が無いのです、

「甲乙二人の力が同じう無いのに、如何してそんな事が出来ますか、

折戸先生の答へに「それ程手輕い事は有ませぬ、吾々は各人に唯だ同じ盡力さへして貰つたら宜しい、詰り云へば力一杯出来るだけの勞役をして貰ひたいのです、

余は答へた「皆が全力を出して働くさしました所で、甲は乙の二倍に當る生産額を作ることになります、

折戸先生言ふ「御尤も、併し生産額は功勞の多少を如何するかと云ふ様な問題に一寸とも關係する事は有ませぬ、功勞といふのは徳義上の問題、産額といふのは物質上の分量なので、物質を尺度として徳義問題を測ろうと云ふのは、奇妙千萬な杓子定規と申す者、全力を用ふる多少こそ功勞の大小を測るに相當した者であります、誰でも皆其全力を盡さへすれば、詰り同じ丈の事を致しておる筈なので、天賦の才力が幾ら勝れてたりまして、唯其人の盡すべき義務を測る尺度にしかありません、五十度の才力有る者は、五十度の才力を盡く働らせるのが其人の義務、百度の才力有る者は、百度の才力を盡く働らせるのが其人の義務でございます、それで假令非凡の天才が有り至大の働きが出来るべき者でも、其有りぎりの才力を働かせない者は、縦令無才にして全力を盡して多く働かせる者

よりも、其功勞は劣るべき道理で、死んだ上でも天下の同胞兄弟に負債があるのです、造物者は人々に才能を與へて其爲すべき勞役を定めますので、吾々が唯だ其人が天職を盡すことを要求します、

余は言た「それは至極結構な究理でございます、併し乍ら同じ全力を盡し乍ら、甲の二倍も産出する乙が、甲と同じ配分しか得られないとは、何と酷いではありませんか、

折戸先生は「眞に貴下はそう思はれますか、それはどうも奇怪千万！當今の人々が心得ております所では、同じ盡力で他の者の二倍を産出する人は、二倍を産するのが當り前で、何にも報酬を受くべき筈は無い、否二倍を産しなければ罰せらるべき筈だと云ふのです、第十九世紀の頃には、馬が山羊より重い荷物を引たら、定めて馬を褒めて御酬ひ成つたやうが、今では左様で無い、馬めが己は山羊よりもすつと強いから酬はれねばならぬといふ理窟で、山羊より重い荷物を引かなければ、したゝかに鞭でぶんなぐられるのです、どうでせう、徳義の尺度が何と大層變つた者でせう」と言ひながら、變に目を向きましたので、余は笑はずにおられなかつた、

余は言た「馬や山羊の天賦の能力は、唯だ馬、山羊の爲るべき職務を極るに止まりますけれども、獸は本と理性のある動物で無いのですから、其全力を盡して働くのが正當でありませう、けれども人

に至ては其仕上た産額の大小に應じて報酬を與へるので、始めて全力を盡さすことが出来ます、是が即ち人の能力に應じて報酬を與へるといふ理由と思ひます、左れば人性が過去百年間に大變りしたのなれば兎も角も、左なければ今日の人が能力に應じて報酬を與へるに及ばぬといふ譯が解りませぬ、

折戸先生言ふ「其點に於て人の性が百年間に少しも變化したとは思ひませぬ、唯今でも人をして全力を奮ひ出さしめるには、矢張一種の褒美や利益を與へて之を獎勵するのが肝要で何事に付けても通例の人物は都て其通りで、何にも昔に變た事は有ませぬ、

余は問ふた「併し乍ら澤山の仕事をしても少しをししても同じ報酬しか得られぬのに、如何して人に全力を絞り出させることが出来ますか、誠に高尚な品性を備へておる人なれば、公共の幸福を謀るに熱心の餘り、報酬に拘はらず全力を振出すかも知れませぬ、けれども通例の人では骨折つても収入が増るでもなく、骨折らぬでも収入が減るでもないから、精々盡力するなどは無益だと言て、怠けた働き方をするでは有ますまいか、

「そうすると貴下は將來の不足を憂ふる心や費澤を貪りたい氣が無ければ、人は力を盡す方に心を誘はれぬ者と御考へですか、貴下の時代の人も表ではそうも思つたかも知れませぬが、内實はそう考

へておらなんだのです、詰らない事柄ではいざ知らず、若し大義を唱へて國に殉ずるだのといふ様な壯大高尚な問題になりますと、全く富貴榮華の沙汰でなくして、それ以外の者に獎勵せられたのでありまして、現に昔兵隊が戰場に出ます時に、國の爲めに死ねだの、粉骨碎身して戦へだのといふ願ひになりますと、愛國だの忠義だの義務だのといふ様な者を以て其心を鼓舞しましたので、報酬も絲瓜も有たものではございませぬ、總別昔から斯いふ名譽な事で人を鼓舞して善美な貴い働きを盡さしめなんだといふ事は決して有ませなんだ、且や又貴下の時分に人を鼓舞して一生懸命に働かせた者は貨幣を愛するの情で有たとしても、抑も其貨を愛する情といふ者を細かく分析して調べて見ますと、將來の不足を憂へるとか榮華を貪りたい位な事は、人に貨を欲しがらせた諸の原因の小部分でありまして、權勢を得たいとか、高い地位を占めたいとか、技倆と成功の名譽を博したいとかいふ心の方が遙かに強い原因で有たのです、そこで今は貧困と云ふ者を無いことに致し、貧困に陥る心配も要ない様に致し、又無暗な費澤三昧を無く致しましたけれども、昔の人に貨を愛せしめた所の諸原因の過半と、高尚な盡力を獎勵した所の諸原因の全部とを保存して、少しも干渉せずにおきます、又自分の費澤ばかりを貪りたいといふ様な卑劣な原因は、今日既に其痕跡をも止めませぬ代りに、昔唯だ賃錢ばかりに因て暮しておつた人達に丸で知られておらなんだ高尚な動機が出來ております、申上た通り

萬の職業は個人が私に營むので無く、國家が營むのでございますから、愛國心といふ者が労働者を獎勵して働かせますので、丁度昔兵隊を獎勵したのと同じ事です、今の職業軍は徒らに完全な規律がある斗りでなく、大義人を利するといふ熱情のために、一つの軍勢に組織されております、

「昔兵隊の勇氣を勵ますために、愛國心の上へ名譽心を加へましたが、今日も矢張そう致しております、大体今日の職業法は各人に全力を盡さしめるといふ事を基としておりますから、全力を盡す様に労働者を勵ます方便を作るのが、現行法中で誠に大切な部分です、そこで服役中に勉勵致しますのは、世の名譽を博ふし、社會の光榮を荷ひ、官の威勢を得るに必要な唯一確實の方法で有まして、社會に於ける等級は、社會に對する勞役の價値で定まります、かう云ふ風に職業に熱心になる様に獎勵する方法は、實に好結果になりますので、之と較べて見ますと、昔の人が大切がつておつた貧富懸隔法などは、薄弱不確實で加之野蠻的法だと思はれます、卑劣猛惡の昔に在てさへ、名譽心は非常に人の心を鼓舞しまして、拜金主義の力にも及ばない程必死の力を出させたではありませんか、余は言た「その社會的組織の大略は、是非知りたい者でございます」、折戸先生言ふ「何分にも今日の職業軍を組上る基と成てれます者で、委しく申せば中々込入た者でございすが、難とした處は極極つまんで申せます」、

丁度此時に悦子嬢が物見臺へ現はれた爲に、二人の問答は止でしまつた、嬢は今町へ出て行く扮装で、父から頼まれておつた用向で來たのであつた、

用事も済で嬢が將に下りかけたとき、折戸先生は言た「西様は汝が行きたくは無いか知らん、乃公は今日の物品分配を先刻から御話申しておつたのだが、實際の遣り方を御覽になりたかろう」、と言ひつゝ、余に向ふて「嬢は根氣の強い買物好ですから、店の事に付ては私よりも委しう御話申せませう」、

先生の此勸めは余に取ては固より至極の賛成で、悦子嬢も余と道連になるのを喜ておる由を親切に言てくれたから、二人連立ちて家を出た、

第十回

二人連れで段々進んで行く道すがら娘が言ふには「今日の物の買ひ方を御話し申上ます代りに、昔の買ひ方を御説明願ひます、書物には色々書き載せてありますが、どうも篤とは解りませぬ、例へば店が幾百も有て店毎に賣る品物品柄が違つておりましたそうだが、婦人方が買物をなさる時分には、其幾百といふ店をすつかり尋ね廻らねば、何を買はうといふ事が極まらぬ筈で、すつと廻てしまふ迄には、何の店から何を撰ぶかといふ事が知れぬ筈でございませぬか」

「御考への通りで有ましたが、それが又知れる法は他に無つたのです」と余は答へた、

悦子は笑て言た「父は私を根氣の強い買ひもの好きだと申しましたけれども、貴下の時代に私が居たら、幾ら私でも直きに草臥れてしまひますが」

余は言た「所程多忙な人になりますと、店を尋ね廻つて時間を空しう費すのを、痛ふ迄しておりました、併し暇が澤山で遊でおる婦人に致しますと、矢張溢して居乍らも、退屈な時間を潰す良い仕掛で有たのです」

「併し一つの市中に幾千といふ店があり、又定めて同じ物品を賣る店が幾百も有たでせうが、幾ら

怠け者も如何して之を一々問ひ廻はる時間が有ましたか」

「否や勿論盡く問ひ廻はる事は出来ませぬが、澤山買物をする人になりますと、何々は何處其處に賣てあるといふ事が何時しか解つて参りますので、斯う云ふ人達は店に賣る品物の細かい事を知るのを、一つの學問としておりまして、成るべく廉くて善い品を澤山買ふ事が出来ます、けれども此學問の智識を得ますのは中々年數が掛つて、容易な事には行きませぬから、用向が忙がし過るとか、買物を多くしなかつた爲めに其智識を得られなんだ人は、當すつばうに買物を致しまして、悪い僅かな物品を非常に高ふ買ふといふ詰らない目に屢々逢ひます、早い話しが、買物に慣れない人が金を生かせて使ふか死なせて使ふかは、必竟時の偶然でございします」

悦子は問ふた「そんな減法不便な仕組の缺點が明かに知れておるのに、何故堪忍して行ふておりましたのですか」

「はい、昔の社會の仕組が万事それなので、缺點は本より善く知れておりました、けれども其缺點を直はす方法が無つたのです」

悦子は「これが我が區内の店でございします」と言ひ乍ら、大門を這入て行たが、此は今朝余が獨り歩きた時に見てきた立派な公會所の一つであつた、外側の模様を見ると、第十九世紀の代表者なる

余の目には店と思はるべき建物とは少しも見えず、大窓の内に品物も見えねば、物品の廣告や客の目を引く様な仕掛もなく、左らばと言て何々の商賣をしておると云ふ事を示す看板や扇額の類も家の前に掲げて無い、併し家の前から門の上へ人間大の立派な像が現はれておつて、福の神が寶船を持ておる所が現はしてある、出入する人数は甚だ繁きことで、昔の買物店と同じ様に男女共に人山を築いておつた、吾々二人が這入て行くと悦子の話に「當市の各區内に此様な大きな分配場が一つ宛有まして、誰でも皆そこへ行くのに五六分位しか費りませぬ」と、余は此時始めて第二十世紀の公會場の内部を見たので、無論余を深く感ぜしめた、廣い館内は四方の窓からも上の圓天井からも光線が引てあつて、天井の頂は百尺位も高く、館の真中には結構な噴水泉が飛躍して、水煙は空気を新しく涼しくする様にしてある、又壁と天井とは心持の善い色で水繪が畫てあつて、館内に満た光線を和らげる様、吸収しない様に仕組である、噴水泉の周囲には椅子や長椅子が並べてあつて、大勢の人が之に憑て話をしておる、館の四周の壁一面に額が掲げてあつて、下の貨物棧は何品を扱ふ者かを示してあつた、悦子は一つの貨物棧の方へ足を向けて行て調べておつたが、成程貨物棧には幾種とも數が知れぬ程金巾の見本が有た、

見れば貨物棧の後ろに誰も居ないし、客を待つる者も來ないので、余は「手代は何處に居ますか」

と問ふた、

悦子が言た「はい、手代の入用がございませぬ、私はまだ品物を撰り極めておりませぬから、

余は言た「私の時分には品撰びをするのに手傳をするのが、手代の第一の職掌でした、

「何ですと！人の欲しい物を手代が言てやりますと、

「左様です、して又客が欲しくない物まで勧めて買はせる事が屢々ございまして、

悦子は驚て問ふた「それは要ざる御世話ではございませぬか、人が買はふと買ふまいと、手代に何

關つた事がございませう、

余は答へた「さあ、それが手代の専務なので、本々品物を捌かせる爲めに雇はれまして、客に勧めて物を買はせる事に力を盡させました、

「おう、成程ほんにそうです、忘れてしまふとは私とした事が、昔は番頭手代が品物を賣て活計を立て、居たのですねえ、所が今では丸で違ひますので、品物と申せば皆國民の者で、手代は客の需要のために此處に置いてありますが、手代の役目は客に接して注文を受けるだけで、一碼の物でも一斤の品でも、之を欲しくもない人に賣付けるのが手代や國家の能でございませぬ」と言ひながら、悦子は更に語を續いで笑ながら言た「人が欲くも無い物や、要るやら要らぬやら知れない物を勧めて買は

せる様な手代が居るのは、餘程變な者で御座りましたでせうねえ、

余は言た「併し幾ら第二十世紀の手代でも、強賣は致さないにもせよ、此品物は斯々の品柄、彼の品物は斯々と客に教へ知らせば役に立つてございませうに、」

悦子は言た「否やそれも手代の職柄で有ませぬ、政府から附けておきます版の押した此札は、吾々に入用な事がチャンと書てございます、」

そこで余は調べて見ると、如何様品物の見本に一々札が附けてあつて、製造法から材料から品質や代價まで、悉皆漏れなく手短に書載せてあつた、

余は言た「はんに此では手代が品物に付て彼此喋べるには及びませんねえ、」

「はい更にそれに及びませぬ、品物の事を知ておらねばならぬ必要もなければ、知た顔するにも及びませぬので、唯だ注文を丁寧に見て受けたら宜しい、」

余は感心して聲を揚げて言た「かういふ簡単な仕組にしますと、虚言八百を言ひ並べる手間が、幾ら省けるか知れませぬわい!」

「では昔は手代が皆本統の事を申さなんだといふ御説ですか、」

「否や、決してそうでは有ませぬ、虚言を言はない者も随分ございまして、格別に信用もござい

ました、けれども一家妻子眷屬の活計が賣品の多少に由るので有ますから、花客を欺むき自から欺む氣にされる事も随分甚しう有いました、併し嬢さん、餘り御話申して御買物の御妨げを致します、」

「何のまあ決して、私はもう撰んでしまいました」と言て一つの釦子の様な物を押すと、直ぐに手代が出て来て、鉛筆で一枚の板に注文を書留める、すると忽ち二枚の寫しが出来て、一枚を娘に渡し、一枚を封箱に入れて、それを輸送管に落した、

悦子が手代に割前切符を渡すと、手代は買物代價だけ鑿で切り明けた、そこで娘は貨物櫃より余の方へ振り向ひて「注文書の寫本は買主に渡しますから、若し間違が有ても直ぐに知れて直はせるのでございます、」

余は言た貴下は「品を御撰りなさるのが大層お早ふでございます、何處か他の店へ御越なさつたら、もつと御氣に召した物が無いにも限らぬでは有ませぬか、大方銘々は自分の居る區内の店で買はねばならぬのでせう、」

「否や、何處でも自分の好いた店で買へますが、大概の人は我家の近くで買ひます、所が何の店へ参りましても、物品の柄と類とは丁度同じ様に備へて有まして、合衆國で産した物も、輸入した物も、何でも彼でも此通り見本がチャンと夫々の箱に入れて示してございます、」

「して此處は唯だ見本だけを見せる處ですか、一向物品を切る者も、包の表装を書ておる者も見えませぬ」。

「左様、店は皆見本を示す處で、少しばかりの種類の品だけは備へてありますが、其他の品物は皆當市の中央本店にございまして、生産者は産物を直ぐに其本店へ積送ります、人が買物をしますのは、見本と見本に附けてある明細書とを標準にして注文しますので、注文を直ぐに本店へ送りますと、本店から代物を買主へ送るのです」。

「ハ、ア、そう致せば非常に手数が省けませう、昔でありますと、製造人が問屋に賣る、問屋は小賣人に卸ろす、小賣人は買主に賣りまして、其度毎に品物を一々此から彼へと賣渡さねばなりませぬ、今日ではそんな面倒な手数も省け、且は小賣人も無いので、生産者と買主との間に立つ者が、暴利を貪たり手代を澤山拘へて、其爲に物價が高くなる事も有ませぬ、此店なんかは謂はゞ問屋の注文部で、手代の數も一軒の問屋に居る者より多くは有ませぬ、昔の物品受渡の法にしますと、十人の手代が掛ても、今日の一人がする仕事も出来ませぬ、何でも大した節約になるに相違ありませんね」。

悦子言ふ「そう思ひますが、尤も今日の人は外に良い方法を知らなんだのです、併し西様、何時か中央本店へ連れて行てくれと、父に御頼みなさいませ、其處へ参りますと、市中一面の見本店から色

々の注文が雲集致しまして、或は之を包むもあれば、或は又届け先きへ送るもあります、近頃の事、父が其處へ連れてくれましたが、どうも驚き入た者で、其仕組は完全で申分がございませぬ、例へて申せば、ソレ向ふの方に見へる欄で仕切た處に辨理掛が居りませう、色々の部から注文が有ますと、先づ之を其辨理掛に送ります、送るや否や助手が幾人も注文を分類しまして、同じ類同志の注文を一纏めにして之を輸送箱に詰めます、掛長の前には十程の空氣輸送管が有まして、其管は何れも大体の品別に應じ部類別けに成てございまして、本店の夫々の物品部に通じてあります、今あの掛長が注文狀箱を管に置ますと、暫くの内に本店の然るべき机の上に落ますが、外の支部から來た同種の注文狀の箱も亦皆一處に落ちるので、そうすると其掛り員が注文狀を讀で之を帳簿に控へ、品物を包裝する様に包裝掛に送るといふ仕掛で、實に電光石火はご速かでございます、品物を包裝するのが一番面白い所なので、布を軸に巻て之を機械で轉じます、そうすると布切掛が亦一種の機械を控へておりまして、五尺なり八尺なり一丈なり注文通りに布を切りまして、一卷の布が盡きてしましますと、交代が來て代はりますが、他の産物の注文に於ても矢張り同じ様に致します、偕て愈包裝も済みますと、大きな輸送管で以て之を各區の取次所へ送り、其處から家々へ配るのでございます、まあ見て御覽じ、其速かな事と申したら、私が歸るより先きに、チャンと宅へ着ておりますえう」。

余は問ふた、「人家の散らな田舎になりますと、如何いふ風に致しますか」

悦子は答へた、「矢張り仕組なので、村の見本店と中央郡部本店と縦令二十哩離れて有ても、輸送管で連絡が有まして、其間を走る時間は瞬く間に有ますから、品物は速かに送達されます、併し入費を省くために、敷村落と本店とを唯一組の輸送管で連絡してある郡が多くございまして、時によりまして、注文してから二三時も経てから品物が着く事がございまして、去ぬる夏私が逗留しておりました處などはそふで有て、どうも不便利でございました」

(註 上文の印刷に成た以來、或る田舎の輸送方が此通り不完全なのは直はさねばいけないと云ふ事になつて、追付の村々も一つ宛管を備へることに成るそうなり)

「此外にまだ郡部の店が市部の店に劣ておる點が幾らか有るに違ひございますまい」と余は問ふた、

「否や此外は丁度市中の通り都合好く成てありまして、極小さな見本店さへ、此市中の少しも變つた處が無うて、何な品でも思ひ通りに得られます、郡部の本店も市中の本店も、物品は同じ根本から來るのですから」

意見本店を出て歸宅となつた處が、家の大きさや價に非常に不同が有たので、「國人が皆同じ收入が

有ますのに、家に大小や價の高低が有るとは不釣合では有ませぬか」と問ふた、

悦子は説明した、「それは斯です、収入は同じ事でございますけれども、之を如何云ふ風に遣ふかは、自分の好みに依りますので、美しい家を好く者も有れば、私の様に美しい着物を好く者もあり、又細工の込んだ机が善いといふ人もございまして、此等の家賃として國家へ拂ひます多寡は、大ひさごと美しくさど場所柄とに従て不同がございまして、何れなりとも好みに任かせますが、家族の大きな者は通例大きな家に住みまして、多人數の家族中には家賃の手傳をする者が何人もございまして、私の内様の様に眷族が少ふございまして、小さな家の方が便利でもあり、經濟も宜しうございまして、詮する所是は全く好みと便利とに由るのです、書物を讀で見ますと、昔の人は他人に財産家と思はせる爲に、柄にも力にも無い立派な家を持ちたり、其外色々の事をして外見を飾たといふ事ですが、實際そうでございましたか」

「いやもう頗ど其通りでございました」

「そうでございますか、今では其様な事は出来ませぬ、銘々の収入は極つて知れてありまして、片方で餘計費やせば片方で減ねばならぬのですから」

第十一回

歸宅した處が折戸先生は不在で夫人は見えなんだ、悦子嬢は余に向て「西様、音楽は御好きですか」。

「いやもう飯よりも好きで」。

悦子言ふ「御尋ね申すに付ては言譯をせねばなりません、と申すは今日では互に問ふ答する事は望まぬことですが、併し昔は教育を受けた人々の中にでも、音楽には無頓着な人が有ましたと本で讀ました」。

「それは詰らない音楽が大小有ましたので」。

「サア、そいふ話です、そふ云ふ音楽は私などには好む事が出来なかつたでせう、貴下は吾々の間に行はれる音楽を聞きたくは御座いませぬか」。

「貴嬢のを拜聴する程嬉しい事はございませぬ」。

娘は笑ひ乍ら「私のをね！いや私が奏曲や歌を貴下に御聴かせ申すのだと御考へなさいましたか」。

「無論左様に存じました」。

余が少しく赤面したのを見て、娘は浮かれ笑ふ氣色を抑へて言ふよう「今日の人が歌ひまするのは音聲を練るのに入用だといふ事で、自分の慰みに樂器を奏する稽古をする人もございします、併し職業音楽になりますと、吾々共の技どころでない高尚な完全な者でございまして、之を聞ふと思へば容易く奏せられるので、吾々共の歌や奏曲は音楽と云ふ名が附けられませぬ、上手な歌謠や音曲家が歌曲を奏しておりますと、吾々は皆息を凝らして靜かに聴きます、併し如何です、音楽を聴きたう思召ますか」。

余は音楽の好きなことを請合た、

娘は「サア、それでは樂室へ御越遊ばせ」と言たので、尾いて行くひとつの室へ這入た、誠に綺麗ではあるが、掛物も無れば木造の儘で、床は磨いた板で張て有た、定めて新發明の樂器が有るだらうと思つておつたのに、幾ら考へても樂器らしい思はれる者は室内に一物も無い、余が當惑した氣色は痛ふ悦子嬢を面白ふ思はせておつたに違ひない、

娘は一枚の札を余に渡して「本日の音楽を御覽じませ、何が宜しうございしますか、御承知でも有ませう唯今五時でございます」。

札に紀元二千年九月十二日と日附がしてあつて、音楽の番曲の長くて澤山なことは驚いた者で、唱

歌用と奏曲用との單音歌、二重音歌、四重音歌、諸種の合奏歌が滅法澤山に書並べてあつた、余は此非常な目録を見て、途方に暮れておつたところが、悦子嬢は美しい優しい指の尖で或部分を指いた、其處には澤山括弧がしてある句が有て、其向ひに午後五時と書てあつた、そこで善く見ると此滅法界な目録は一日分の者で、二十四時間に當る様に二十四節に別けてあつた、午後五時に當る節には音楽が少し斗りしか無つたが、余は「此が宜しい」と言て、一つの風琴歌を指示した、

娘は言た「貴下は風琴が御好き、それはマア嬉しい事、私も風琴が一番氣に合ひます」、

娘は愉快に坐らせてくれた、さて見た所では娘が室の此方から彼方へ過ぎ行きて、一つ二つ螺旋に觸れただけの様であつたが、忽ち風琴の音が洋々として湧き出で、莊嚴高尚な讃歌が室内に満ちた、滿ち乍らも聲は外へ溢れず、全く其室の大き斗りに限られておつたのは、何か仕掛が有たのである、余は餘りの愉快さ、息もし敢えずして終りまで耳を傾けたが、此様な立派な音楽は是迄聞き得べしと思はなんだ所である、

餘音嫺々として遂に消へ失せたとき、余は歎じて言た「偕もく莊大な事です、眞に立派でございませす、其風琴の音鑰を押へて奏した人は、獨逸有名のバハ氏に相違ありませぬけれども、全体風琴は何處にございますか」、

悦子は「ごうか一寸御待遊ばせ、二人踏舞の曲を御聴かせ申上たうございませす、中々面白いと思ひますから」と言ておると、バイオリンの聲が忽ち室内に満ちて、夏の夜の樂しさが有た、頓て此も亦た仕舞になると、娘は「唯今の音楽を不思議と思召ました様でございませす、少しも不思議はございませぬ、あれは非常に上手の人が奏しましたので、天魔などの業とは違ひます、努力協同の法に由るご勢力が省けると申す事を音楽にも應用しましたので、當市には音楽館が幾つも設けられて、千種万様の音楽が學理上から十分に適用せられております、音楽館は市中の家々に電話で連絡が通じてあります、市民は僅かな代價を拂つたら宜しいので、之に加入せぬ者は一人もございませぬ、各音楽館に屬しておる伶人は大變な數でございませすから、銘々皆暫ぐづゝしか働かないのですけれども、二十四時間ズット續ひて奏曲が聴けます、篤ど御氣を附けて御覽になれば解りませうが、今日の其札の上には今の様な奏樂の四種の番曲が書てありまして、各々異なつておりますが、只今は其四を同時に奏しておるのです、其中何にても一つ丈聞き度ば、釦子を押せば此家と奏樂館との電線の聯絡がつきますから、一つ丈聞くことが自由に出來ます、して番曲の配り合せによりまして、それ／＼の奏樂館で同時に奏しておる音楽も、機械樂なり音曲なり好む方丈を聞くことも出來、又機械も色々種類が有まして、どれなりとも己が好む者を聞く事が出來ます、のみならず、音調の莊重なるか快濶

なるかも知自由に撰べまして、人々時々の好みと心持に應じて楽しむことの出来る様になつております。」

余は言た、「私はかう思ひます嬢様、品性は高尚で分量は無限で、誰の氣質にも適して、思ふ様に始める事も止める事も出来る様な音楽を、總ての人が我家に居り乍ら聞けると申す程な仕掛が工夫できましたら、それで人間の幸福は已に頂點に達した者と考へられまして、それより更に進まうといふ骨折は止んでしまひませう」。

悦子は答へた、「昔貴下方の時代に音楽で生計を立て、おつた人が、どうして音楽を聞かせる古法を甘じて忍耐しておつたか想像が出来ませぬ、大方聴く直打のある結構な音楽は、逆も多數の人民の耳に聞くことが出来ずして、唯だ尤も幸運な人の耳にはばかり折々聞ける位なことで、それとても大變厄介な面倒と非常な入費とを費やした上、ほんの暫くの間耳を樂しめるのみで、もつと早くと思ても始まらず、もつと長くと思ても續づかず、加之種々雑多の厭な事情にも逢はなければならなかつたでしよう、例を挙げますと、昔の合奏や劇曲が丁度それでございませう、幾切りもある内自分の氣に入るのは唯だ一つか二つで、それを聞くために何時間も坐つて好かない藝を黙つて聞て居なければならぬとは、どうも溜つた者でございせんねえ、譬へば食事の時には好かない品は食すにおく事が出来

ます、所が幾ら空腹でございまして、膳の上へ載せた品々を皆食てしまはねばならぬとすれば、それが食られた者でせうか、耳で聲を聞くのが丁度味と同じことで、甚だ感じ易い者でございまして、昔時下手な藝者がごんちやん奏して歌ふのを忍んで聞ておつたのは、全く善美な音楽を聞く事が出来なかつたからでせう」。

「はい、どうも昔は大方は御説の通りで、そうでなければ音楽などは聞くことが出来なかつたのです」。

悦子は溜息しながら「そう考へて見ますと、昔の人に音楽を好まない者が多かつたと申すのも、そふで有りそうな事でございまして、私なら逆も情なくて耐へられなんだでせう」。

余は問ふた、「此音曲目録は二十四時間通じてあると思ひましたが、そうでせうか、此れではどうも左様しか思はれませぬが、夜半と夜明の間に誰が音楽を聞くのでせう」。

悦子は答へた、「そらもう澤山ございまして、二十四時間有り詰です、假令夜半から夜明まで、外に聞く者が無いとしましても、夜眠むられない方とか、病とか、又は死にかけておる方の慰にもなりま

「私に當がつて下さつた室にも、そいふ仕掛がございますか、」

「ございませう、して又私とした事が間の抜けた！昨夜其事を御話を申さすにありました、何れ今夜御寝みなさいます前に、父は其仕掛の事を御示し申しませうが、耳へ筒口を御當てになりますれば、詰らない事を思出して心を苦しめる事がございまして、音楽の愉快さで皆忘れておしまひなさいませう、」

其日の夕折戸先生は店へ行たことに就て尋ねられたが、十九世紀と二十世紀との万事を彼此と較べておると、不圖遺産の問題が出て、余は「財産の相續は今では大方許されないのでせう」と問ふた、

折戸先生は答へた「否や、それには少しも干渉致さないのです、今日では各人の自由に立入り干渉する事は、貴下の時代よりもまだ少くないので、此は追付段々と解つて來ませう、昔時の様に各人は勞働しようと思ひ、餓死しようと思ひ、勝手に出來ず、必ず國家の爲に一定の歳月服役しなければならぬのは、今日の法律でチャンと極めてございするが、此根本的法律は自然の理法から成文にした者で、極樂園の法令と云ても差支なく、所有人間は均しく従ふべき者であります、此法律より外には立法も何も要らない、全く放任主義なので、正しい境遇に在る以上、人間の天性から道理上湧てきた結果でございませう、唯今御尋の遺産問題は丁度其一例で、國民が獨り資本主なり土地所有者で

あると云ふので、各個人の所有物は、唯だ其年々の割前切符と及び其切符で求め得た私有物とでございませう、各人の割前切符は昔の年金と同じ事で、死ねば即ち息でしまひますが、一定額の葬儀料だけは貰へます、其外に若し所有物が有ましたら、各人は自分の好む通り誰になりとも譲てよろしい、」

「そんなら若し年月が経つ間に一個人の手に結構な品物や動産がどん／＼積で來て、各人の事情の平等と申す事の釣合が取れない程の資財家に成りませうが、如何して之を妨げまするか、」

「それは自から譯なく善くなりませう、只今の社會の立て方に於ましては、眞の愉快を満足せしめるに足るよりも所有物が積重なつて來ますと、却てそれが煩累になつて參ります、昔は金銀珠玉珍寶珍具が家に満ちますと富人だと思ひましたが、此様な物は貨幣の代表物であつて、何時でも金銭にすることが出來たからでございませう、今日は倒まで、百人も親類が一時に死にまして、其遺産が一人に流れ込で珍器珍寶が澤山手に入りましたら、誠に不仕合せな人だと思はれます、と云ふのは物品を賣る事が出來ないのですから、實際入用の場合や見物にして樂しむ爲で無ければ、何の直打も無いのです、且や又収入が定つてあるのですから、こんな物品を入れておく爲に家も借らずばならず、家を番する人の賃錢をも仕拂はなければならぬので、却て自分の割前切符を減らすことになります、そこで此の如き人は徒らに自分を貧しからしめる者だと思ふて、一時も早く之を朋友等に分ち與へるでせう

し、又朋友等も之を置く場所も無ければ番する時間も無い限りは、幾らでも貰てあげませうと云ふ者が有ますまい、して見ますと富の積重ならない様に個人の財産の相續を禁するなどは、餘計な心配でございませう、そんなにせぬでも各個人は財産が餘り過ぎない様に必ず自から工夫致しまして、若し身内に死人が出来ますと、唯少し斗りを某一定の目的の爲に保存するの外は、其財産を大概貰はない様に致すのが通例であります、其謝絶した動産は國家が預かりまして、直打の有る者は今一度之を公共の用に供します、

余は言た「家の番をする爲に賃料を拂ふどの仰せでございましたが、そう承はりますと、私が幾度も問ひかけておりました問題が湧てまゐります、家内向の用事は如何になりますのです、總ての人が平等無差別であるといふ社會に住みまする以上は、誰が甘じて他人の家庭に使はれる僕婢になりますか、私の時分には社會上の平等が有たとは申せませぬ、それですから僕婢になる者が少ないので、之を求め兼て妻君達が困つたのであります、

「其次第は簡様です、余々は何處へまでも社會上平等な者で、何事が有ても平等と申す事を邪魔が出来ませぬし、又總ての人が御互に他の人のために勤をしなければならぬと云ふ事を根本の土臺としておる社會ですから、何でも彼でも勤めをするといふのは尊ぶべき者でございます、それで入用さへ

有ますれば夢更御承知ない程澤山な僕婢をどし／＼容易に得られます、所が又そんな者の必要は無いのです、

「それでは家内向きの用事は誰が致します」と問ふた、

此は傍へに控へておつた折戸夫人に問ふたのであつたが、夫人は答へた「誰もおりませぬ、洗濯は極々廉ふに公共洗濯所で致しまするし、料理は公共割烹所で仕つらひまするし、身に着ける物の製造や仕立は公共諸店で辨じてくれまする、又万事電氣を應用致しまして、火を焚く世話も光を點ける面倒も要ませぬ、それで入用だけの大きな家を撰んだら宜しいので、道具万端の備附も成るべく整頓に手間の掛らぬ様に致しまするから、僕婢を要しませぬのです、

こゝで折戸先生は言た「貴下方の時代には貧民の間に幾らとも知れぬ程奴隷が得られました、痛ましい厭な仕事は皆此奴隷に致させましたから、其時分の人には奴隷の必要を廢する工夫に冷淡で有たのですが、今では誰しも皆社會の爲になる仕事を何なり彼なり相互に交る／＼致さなければならぬのですから、國內の人は均しく皆勞役を輕くする工夫に注意しまするが、是と申すも歸する所自己の勞役を輕くする所以になるので、自己の爲に注意するのでございます、そういふ譯でありますから、何の職業に於ましても勞力を節約する發明をするといふ氣が非常に喚起されましたが、家事向の用事を

最も愉快に最も手の省ける様にする工夫が、真先に出来た發明の一つでございました、

折戸先生は猶も續けて曰く「家内の大掃除とか、家事向大改良とか、又は家内の者が病に罹るこいふ様な臨時の急務が湧て参ります場合には、何時も職業軍の内の人に手傳つてもらいます、」

「けれども金も無いのに手傳人にどうして報酬を致しますか、」

「余々が直に拂ふのではなく、國家が拂てくれます、其筋へ願へば手傳人を越してくれますので、其報酬に當る高を出願人の割前切符から切抜きます、」

余は歎じて言た「只今の世界は婦人方に取ては實に極樂の様にございます、昔は富でおつて許多の奴婢がございましてさへ、主人は矢張家内の事に色々心を配らねばなりません、之に引換へ如何にか暮しておる者や貧乏人の女は、生涯金持の人身御供に上げられておりました、」

折戸夫人は「はい私もそういふ事を本で讀だことがございまして、男は貧乏暮らし乍らも、母や妻より仕合であつた事が解ります」と言た、

折戸先生は言た「國民全体が肩を並べて仕事を遣ります日には、昔女の脊骨を挫かぬ斗りであつた重荷も、羽根の様に軽く舉ります、昔は社會が個人主義で建てられてありました爲に、共同勤務が出来ませなんだのと、他の人間と競争するよりも相連合する方が十倍も利益になる事を悟れなんだのと

で、それが爲に昔の女が艱難辛苦を致しましたので、其他諸の辛苦も亦同じ原因から出来たのでございます、それが爲に昔の女が艱難辛苦を致しましたので、其他諸の辛苦も亦同じ原因から出来たのでございます、

います、から古人が餘り愉快に暮せなかつた云ふのは當り前で、何にも不思議ではございません、他人を自分の奴婢にし、他人の物品を自分の所有物にしようなど、思ふておつた古人が、苟くも相共に此世に生きておられたこそ不思議と申す者でございします、

と言たときに悦子嬢は笑ひ乍ら横合から「貴下父上様、そう痛う仰せられますと、西様は自分を罵られておる様に思召ませう」と言た、

余は問ふた「醫者が要るときは唯だ其筋へ願つて誰を指向けられても、其治療を受けるのでございしますか、」

折戸先生は答へた「醫者の場合には其筆法ではありませぬ、醫者が果して患者を助けるか否やは、大に患者の体格の矩合を知ると知らざるに由りますから、患者は此と思ふ見込の醫者を招くことが出来なければなりません、矢張昔の様に我が好いた醫者を招きますが、唯だ違ふ所は、昔は醫者が自分に診察料を患者から取ておりましたけれども、今では診察治療の多少に應じた高を患者の割前切符から切取て、詰りは國家から代價を集めます、」

「治療代が何時も同じことで醫者が患者の病氣を治はし得ないことが有ますれば、良醫は絶えず流

行する、裁醫者は閑暇で遊でおるといふことになりませう、

折戸先生は微笑を漏らし乍ら答へた「隠居醫者が自慢話を致すではございませぬが、裁醫者は一人もございませぬ、と云ふのは昔と違つて今日では醫學を少しく聞きかちつた位の者は、勝手に人の身体に手を掛けることは許されないのです、學校の厳しい試験を通じて愈其業務の間に合ふ事を明かに證せられた者で無いと、醫業をすることが出来ませぬのですから、今は醫者が開業して他の開業醫を倒してしまふと云ふ様な事をする者は無いのです、又醫者は自分の仕事をチャン／＼と醫局へ報告しなければなりませぬので、若し相當に業務が無い節は、然るべく仕事を當がつてもらいます、」

第十二回

第二十世紀の建方の大抵だけでも知るに先て問はなければならぬ問題は限りもなく澤山有た、折戸先生は温厚な人にも見え、實際又温厚な人で有たから、母と娘が退ひてしまつた後、尙ほ數時間も話しておつた、此日の朝の話が途切れた時の問題を主人に思ひ出させて、偕て職業軍の組立にした上で勞役者自身に生活の掛念が無い時は、如何いふ風に之を獎勵して勉強させるのであるか、聞きたい由を述べた、

折戸先生は言た「勞働者に盡力させる獎勵法は、職業軍の組立に必要な諸の目的の一つである事を承知して頂きたい、それから一つの目的も同じく必要でありまして、それは軍勢の小隊長と大隊長になる人と、大役人になる人を求める事です、此役人は己の統率する者共に十分盡力せしめて少しの弛みも許さない程の腕利であることが今迄の履歷で知れておる敏腕家で無ければならぬのです、此二つの目的を眼の前に据へて職業軍を組立てるのでございしますが、先づ第一が並々勞働者と云ふ等外生で、之は總ての仕事を致します、新募者は初め三年の間此等外生になります、謂はゞ極端しい學校でございまして、生徒は皆從順に勉め上官に服し義務に心を専らにする習慣を教へられます、此軍

勢が致しまする仕事は實に千差萬別でございまして、後日の様に労働者を正しう等別する事は出来ませぬけれども、一人一人の記録がチャンと拵へてありまして、優等生は名譽を受け怠惰生は罰を受けまする、併乍ら輕忽不注意は青年に有勝ちの者で、深く咎むべき程でも無い時は、之が爲に青年將來の活動を妨げない様にするのが吾々の方針で有まして、甚しい失態なく等外生の期限を通じて行た者は、皆均しく我が尤も好む仕事を撰んで生涯の職業とする事が出来るのです、倦怠之を撰びますると其職業の弟子になるので、弟子になつておる年月の長短は、業務に由て色々不同のあるのは固よりです、遂に其年限が済みますると、一人前の立派な労働者になつて、其職業なり其組合の會員になれまする、各弟子の技倆と勉強と一々記録に載せておいて、優等者には相當の榮譽を與へますが、愈一人前の労働者となつてから之に與へまする等級も、亦た弟子となつておつた年期中の成績の平均點に由るのでございます、

「器械的と農業的との種々の職業の各内部の組織は、それ／＼特別の事情に従て變てはおりますけれども、技倆に應じて第一等、第二等、第三等の三段に大別してあるのは何れも皆同じことでございまして、又大抵の場合にては此階段を更に第一級と第二級とに分けます、若い者は弟子であつた時の地位に應じて、取敢へず第一等労働者、第二等労働者、第三等労働者と定められますが、弟子の格

から一足飛びに直ぐに第一等労働者に出世致しまする者は、勿論非常な敏腕の少年に限るので、大概の者は段々経験を積んで働いておりまして、定期の昇落沙汰の時に等級を落されまする、等級を落されるのは何れの職業に於ても有る事で、丁度其職業に弟子となつておつた年數と同じだけの年月間に一度宛起るのでありますから、功勞のある者は出世の暇取ることにも有ませんし、又誰でも下級に落ちる氣でなければ、是迄と同様の腕前で是迄に變らない功勞を立てる斗りで満足することにも出来ませぬ、高級の者は色々利益となる事を持ておりまして、我が好でおる職業の内何の部分か如何いふ方法で専門に遣りたいかと云ふことも随意に撰べるなどは、即ち其利益の一でございまして、勿論何の方法も法外に苦しい様には致してございませぬが、諸の方法は相互に大に異なることが屢ありまするで、随意に撰べる權は中々重寶な者で人の羨む所なのです、最下級の労働者でも、如何いふ種類の労働をするかは、是亦た成るべきだけ自から撰ばしめる方針を取っておりますが、斯しますると其労働者自からの幸福を増す斗りでなく、其働きの益々立派な役に立つ事となつて参りまする、所が場合止むを得ない時は下等労働者の好みに従はせまされども、先づ上級の者が随意に撰んでから後にさせる事であります、第二や第三の好で堪忍しておくとか、上官から定められた仕事でさへも甘じてしなければならぬ事もあります、随意に撰ぶ權を與へまするのは、一度昇落が有ります毎に一度宛ござい

まして、此時に落されますと、今迄我が好んでおつた仕事を離れて、氣に食はぬ他の仕事に就かねばなりませぬ、此昇落で各人が職業に於ける位地がチャンと一先極まりまするので、其結果は一々公報の上に載りますが、昇級した人々は國民の感謝する所となりまして、今度新に得た等級の徽章を受けまする」。

「此徽章は何様な者でございますか」。

「何の職業にも其徴となる者が工夫してありまして、何處につけてあるかを未だ知らぬ者には目に止まらない程小さな金屬の徽章でございますが、公務上の便利のため一定の制服を着ければならぬ時の外は皆之を着けております、此徽章は何の等級でも皆同一の形でございますけれども、第一等は銀、第二等は銀、第三等は減金でございます」。

「國民中で高い位地は、尤も高い級に居る人ばかりが得られる者でありまして、藝術文學等を希望せない多數の人々に取ては、此位階は實に社會の勝れた人物を表する記號であります、かういふ風にしまするのは人を勉勵させる大獎勵法でございます、此外に澤山小獎勵法が有りますが、是亦均しく著しい効能がある者でせう、それは何かと申しますと、一種特別の特權と嚴しい軍律に縛られぬ事とでございまして、優等の人々が之を受けまする、勿論此等の特權などは、不出來な者が精々妬まない

様に仕組ではございまするが、現今の等級より一段上へ進みたいといふ慾望を絶えず人の念頭におかせる効能がございます、

「善良な労働者に限らず、無頓着物や鈍物でも、出世しようといふ慾望を心に抱く様にしなければならぬのは明白でありまするが、無頓着物や鈍物は、善良な者よりズツと澤山ありまするからして、善良な者を勵ますのも結構とは云ひ乍ら、無頓着物なり鈍物なりを落膽させない様に趣向を付ける方が更に必要でございます、各等級を更に細別してあるのも全く此積りなので、一度昇落沙汰が有る毎に、等級も小別けも數の上では均一にしてありまするから、役人共と新募者と弟子株とを除けて勘定致しまする日には、最下級に居る者の數は、何時でも職業軍全体の九分の一に超過することは有ませぬ、其九分の一でも大概は弟子株から出てきた者で、何れも皆昇進しようと思つておる者ばかりです、長い歳月の服役期限中ズツ最下級ばかりにもがついておる者は、全軍の眞の小部分に過ぎませぬので、自分の地位に付ても無頓着なれば、地位を進める技術も缺ておる者でせう、

「少しにても名譽を顯揚する爲には、一々労働者を高い等級に昇進せしめる必要は有ませぬ、昇級させるには、記録に載せてある労働の成績が常に優等で無ければなりませぬが、昇級させるに足らない程の一才した好成绩が有たとか、色々の職業に就ておる労働者が特種の藝等をしたとか、或は一才

の手柄を願はしたごかいふ場合には、名譽になる褒美を與へて之を表彰するので、些細な優れは等級の昇進をさせずに、等級内の小別けの昇進に止ておきまして、それ丈でも一小團兵の勉力の獎勵になります、歸する所何な功勞でも全く認められずに埋れ木にならない趣向にしてございます、

「仕事を全く打やつておいたとか、仕事が著しう悪いとか、目に見えて生氣ておるとかの場合には如何するかと申しますと、何様軍律が嚴肅でございますから、逆も其様な不届な事を致す者が有ませぬので、務をする事が出来るビン／＼した人物であり乍ら、頑として働くことを拒みました節は、唯一人寂しう禁錮しまして、愈往生して降参しましたと申す迄は、麵包と水とを食はせておきます、

「職業軍の役人の最下等は即ち副長でございますが、第一等の第一級に二年間居た人物の内から取ります、所がそれでは撰ばれる人間の範圍が餘り廣すぎると云ふ事になりますと、第一級中の第一團ばかりで撰びます、かう致しますと誰でも三十歳ばかりになります迄は、人の上に立て指圖する地位にはなれませぬ、倦怠役人になりました後は、又其役の高低がございしますが、是は自分の勞働の效果に由るのであります、長は又副長の中から取りますが、矢張被撰權を持ておる小部類より細心注意して撰拔致しまする、又長より高い官位を定めるには別に規則がございしますが、今之を説明しますると餘り隙が要りますから、止しておきませう、

「御話致しました様な等級法は、尤も昔の小さな職業の上に用ひたところで、實地に行なへななでしよう、それは一級に一人宛を置くにも足らない位小さい職業も有たからです、今の様に國民全體が服役すると云ふ立て方になりますと、何の様な職業でも大變澤山な人で致しますので、昔の田畑や工場等を澤山一團りに固めた者でございします、現今位置の交換と移し換へてをしまして、誰でも大抵自分に相當した仕事をする事が出来ると思すのも、矢張國內各處の諸工場や諸職業が一致協同して大仕掛にする御蔭でございます、

「そこで西様、現今の社會の立て方を極端方御話致しましたが、特別の獎勵無んば全力を盡さない人物も、現今の建て方に従へば別段獎勵するにも及ばないだらうか、如何だらうか、君の御判斷に任せます、好ても好かなくても止むを得ず働く人でも、今日の世に在ては全力を盡さざるを得ないではありますまいか、

余は今日人を鼓舞する獎勵は強て反對して言へば強よ過ぎて、少年を推し進める歩調が劇し過ぎる様に思はれる由を答へた、其後段々と當世の模様を見て何も彼も大分解つて來たが、今日の余の意見は矢張其通りで變てはおらない、

然るに折戸先生は篤と考へて見るが宜しいと勧めたが、余は今日簡様に言はうと思ふ、勞働者の生

活は少しも優劣に關係すること無く、生活の懸念の爲に絶望の心を痛ましめること無く、労働時間は短ふて休息がきしきと正しく、四十五歳に競争が全く息んで中等生活が得られるといふのが、其組織の善美である確かな證據で、余の反對論に對する満足な答である。

折戸先生は尙も言葉を續けて言た「間違た考を爲さないませぬ様に、今二三件御示し申さねばならぬ事が有ます、先第一着には、敏腕で成績の善い労働者には、鈍物より以上に其好む所を撰ばせるといふ立て方ではございますが、それが爲に吾々社會制度の根本義は決して破れはしませぬ、即ち語を換へて言へば、全力を盡す者は其産額の大小を論せず皆均しい功勞を持ておるといふ大切な主義を少しも破りませぬ、已に申上りました通り、今の立て方は昇進の希望を以て強者も弱者も同様に獎勵する様に仕組でございしまするが、又同時に、強者を抜て首領に致したからと云て、決して弱者を答むると云ふことではない、却て公共の幸福を進める事になるのです、

「又方今の建て方で勉強させる獎勵法として、思ふ存分に競争させてありますけれども、吾人は之を心の崇高なる賢人に訴ふべき事とは思はないのです、崇高な心の人には我が心の中に奮勉する良心がございまして、外部の獎勵を要せず自分天賦の能力で自分の義務如何を知り、他人に示して貰ふのを待ちませぬ、そこで其勉強して出来た成績が我才幹に相應してさへおれば、其成績の大小が如何にあ

らうとも、之を褒貶するのは無理だと心得ております、かういふ高尚な人から見すれば、競争などは道理上間違た事で、他人の成績が善ければ之を感歎するどころでなく、却て嫉妬の心を起さしめ、又他人が失策をすれば之を憐れむどころでなく、却て喜んで面白がらせる者であるから、道德上卑劣な手段だといふ論になります、

「併乍ら今から百年向ふ、第二十一世紀の終りになりましたも、天下の万民が悉くかういふ立派な賢明な先生になる氣遣はありませぬが、賢明でない者に取ては、競争といふ獎勵物は丁度其劣等天性に相應いので、至極鋭い競争は常に其獎勵になります、又そんな事に獎勵されなくても道理の上から見て奮發勉勵する人には要ない事です、歸する處此獎勵法を準備しておきますと、愚者には必要で賢者には妨げが無いのです、

「又心の力や身体力の力が乏しい爲に逆も多數の労働者と同階級に編入することが出来ない者の爲に別に等が拵へてございします、此は癡兵の様な者で、他の者と相關係しませぬが、其力量相當な輕い仕事に當がつてあります、精神病や身体病に罹つておる者、即ち聾者、啞人、跛者、盲者、不具者、其他發狂に至るまでも、此癡兵に屬しておりました、別に其徽章が附けてあります、其内でも尤も強い者は殆ど一人前の仕事をする事が度々ございしまするが、極弱い者は勿論何事も出来ませぬ、けれ

ども苟にも何なりと出来る者に至りましては、全く仕事を打遣てしまふことを好んではおりませぬ、
發狂者でさへ精神の静まつて晴ております時は、自分の力に合ふ事を熱心に致しまする、

余は言た「それはどうも至極立派な癡兵でございます、幾ら第十九世紀から落て來た不解者でも感
服致します、實に甘く慈善の仕方を換へた者で、恩恵を受ける者も有難く思ふに相違ございますま
い、」

折戸先生は言た「慈善とは！唯今申しております不具な者共は慈善を施してやるべき者だど誰も
思ふてはおりませぬ、」

「いや固より慈善ではございませぬか、自から我身を維持する事が出来ない者ですから、」

そこで折戸先生は忽ち余を取捕まへて捏ねだした「誰ぞ自から我身を維持することが出来る者がご
ざいますか、文明の社會に於ましては自から我身を維持するといふ事はございませぬ、一家族相共に
力を協せ合ふ事さへ知らない野蠻な社會の有様では、自から維持する事が無いとも言へませぬ、それ
とても眞の一時切りの事でせう、併し人間數多同處に住んで甚だ粗末乍らにも社會と云い者に成りま
するや否や、自から維持するなんぞは出来ない様になるのであります、人が段々文明に進んで、職業
なり勞役なり段々小別けになるに従ひまして、人々は雙方から世話になり合ひ依頼を仕合ふて、相互

の關係が益々複雑になるといふのは、天下一般の規則でございます、其仕事が幾ら孤立して他人に關
係が無い様に見えましても、各人は皆一國民大や人間世界大の大職業協會の一社員なので、眞に浮世
離れた孤立といふ事は出来ませぬ、此通り雙方相互に依頼し合はなければなりませぬから、相互に維
持し合ふといふ義務と保證とが湧て参ります、貴下の時代には、そう行てなかつた爲に、根本的猛惡
不條理な社會組織になつておつたのです、

余は言た「或は全くそうかも知れませぬ、けれどもそれが何も生産業に何の助をする事も出来ない
人物の場合に差し間りはありませぬ、」

折戸先生は言た「今朝儘かに御話致したと存じますが、國民全般の食卓に就て飯が食へる權利を
人が持ちまするのは何故かと申せば、生きて我全力を盡しておる以上は一人前の人間であるといふ事
實が有るからなので、健全な身體や力を持ておると云ふ譯では無いのです、」

余は言た「成程今朝其御説でありましたが、私は其規則は唯だ技倆の異なる勞働者にばかり用ゐら
るべき者だと思ひました、尤きり何もせない人物にも矢張そうなるのですか、」

「何もせなくとも矢張人ではありませぬか、」

「人に相違ございませぬ、そうして見ますと、跛者も盲者も病人も無能力者も、能敏腕な人と同

様に富有に暮らし、又同じ収入を貰ふのですか、

「無論の事」、

「そういう結構な仕掛の慈善を昔の極熱心な慈善家に見せましたら、感服仕つて開いた口も塞ぎませぬだろう」、

折戸先生の言ふには、「若し貴下の家に仕事の出来ない病人の兄弟が有ましたら、貴下よりも無味い物を食はせ、貴下よりも悪い住居をさせ、貴下よりも悪い着物を着せませうか、恐らく貴下は自分よりも自由をさせて、好いた通りに致させませうし、又貴下は之を名けて慈善だとは仰しやるまい、之を慈善と云へば却て貴下は腹が立ちはしませぬか」、

余は答へた、「そら無論腹も立たせう、けれどもそれと此とは場合が違ひます、固より誰しも皆兄弟であるといふ心はございまするけれども、廣義の意味で申す兄弟は、四海兄弟など云ひまして、必竟文章を飾て申すまでの事、所謂血を分けた兄弟と云ふのは較べ者になりませぬ、感情の上から申しまして、義務の上から申しまして」、

折戸先生は歎ひて言ふ、「そら第十九世紀は來てそんな事を申しますわい、ねえ西様、成程貴下は長い間御眠りになつたには相違ありません、貴下の時代の文明と較べて見ますと、今日の文明は不

思議に思はれるかも知れませぬが、今日の文明の眞想は如何な者かと申す事を早解りがする様に一句で申ませうなれば、必竟づる箇様なのです、人間は相聯合して一体な者であるとか、人は皆同胞兄弟だとかいふ事は、貴下の時代には唯だ言葉を美しく飾るに過ぎなかつたのですけれども、今日の人間の考ふる所、感ずる所では、中々表面の言葉だけの事ではなく、血を分けた同胞兄弟の義理合ひと同時に眞實活潑で離すことの出来ない羈絆でございます、此が即ち今日の文明の眞想で、貴下に不思議と思はれる所でございます、

「偕又兄弟といふ考を離れて考へて見ましても、勞働の出来ない者が勞働の出来る者の拵へた産物で衣食する權利を與へられておるといふ譯が、貴下に解らぬ筈がありませぬ、貴下の時代に國民を保護する爲め軍務に服役せねばならぬ義務が有たのは、今日で申すと丁度職業に服役せねばならぬ義務に當つておりますが、兵役の義務が果せる人物こそ其義務が有ましたけれども、己が其義務をしておるからといつて、其義務を果すことが出来ない人間の國民たる權利は、依然として奪はれなかつたのであります、一方は戦場に出て必死と戦ておるのに、一方は安閑と家に坐食して保護を受けておる、と云て誰も其權利の有無を彼此言ふ者もなければ、他の人よりも權利が少くないと思ふ者も無つたのでは有ませぬか、今日の丁度それと同じことで、職業に服役することが出来る人物は服役しなければ成

ませぬけれども、夫れが爲めに服役の出来ない者が國民たる權利を褫れると云ふことは無いのです。國民たる資格とは今日で申しますと、衣食住をしてゆく事といふ意味でございます、抑も勞働者は勞働するが故に國民であるのではなく、國民であるが故に勞働を致します、昔は強者が弱者を保護する義務を承認しておつたのと同じ様で、戦が無くなつてしまつた今日は、強者が弱者を衣食させる義務を承認しております、

「凡そ問題を解釋しまする時には、微塵程でも理由の解らない處が残つてあれば、九で解釋になつておらぬのでございますが、人間社會の問題を解釋するに當りまして、若し跛者や病人や盲人を獸同然に棄てしまつて、自から衣食するに任せる事がございましたら、九きり解釋には成てゐないので、否、此の如き苦痛を負ておる者よりも寧ろ其の事、強いる者を棄てしまつて衣食住を與へない方が、ズット増なので、件の苦痛に在る者は、各人が須らく憐れを加へて身心の安樂を謀つてやらねばならぬ筈のものです、斯いふ譯でありますから、今朝も申上りました通り、各男女や子供までが生存の方便たる衣食住を受くべき權利を持つといふ理由は、必竟此等が皆人間世界に住でゐる同僚であるといふ事實に外ならぬので、實に尤も明白な尤も廣大な尤も簡單な原理でございます、吾等人間社會に流通してゐる貨幣といは、此同じ目鼻のある顔であつて、此顔さへあれば何處にも通用は出来ま

す、

「貴下の時分の人は掛り人を粗畧に扱つて極水臭く致しましたが、そんな風の文明は今日尤も厭ふ所でございます、假に昔の人が四海同胞相憐むの情を持て居なかつた致しまして、無能力な者を打遣てしまつて天與の特權を奪ており乍ら、自から悟らなかつたのは、全体何故でございしたるう、」

余は言た「どうしてそいふ推測が出来る者が今一つ合點が行きませぬ、無能力者は如何にも我々が憐まねばならぬ者だといふのは解ておりますが、何物をも生産せぬ人間が、他人の生産の分配を當り前に要求する權が有るといふのが解りませぬ、」

折戸先生は答へた「貴下の時分の勞働者は同數の野蠻人が産するよりもまだ、澤山な物を産する事が出来ましたが、あれは如何いふ譯でせうか、天下の人間が數百千年の光陰を發明に費やし、智識と成績とを積み重ね、何時用ゐても差支ない様にして手に渡してくれる、渡してくれた遺産を好きすつばうに用ゆるといふ結構な御蔭で有ませなんだか、貴下方の手になつた産物の總額中九分までは、此重寶な智識と機械の恩澤でございますが、貴下方は如何して此重寶な者を所有する様になりました、皆是れ前賢先哲から譲受たので有ませなんだか、又貴下方が打遣て顧みなかつた薄命不具の同胞

兄弟は、共に是れ貴下方と同じく遺産相続人では有ませなんだか、果してそうで有たならば、此同胞兄弟に分け與へるべき部分は如何なさいましたか、貴下方は同じ相続人の資格ある此等の人に麵包皮を與へて遣打ておいたのは、是即ち彼等に與へるべき遺産の分配を盗み奪たので有ませなんだか、況んや此取に足らない麵包皮を指て慈善だのと稱したのは、實に盜賊を行つた斗りではなく、剩さへ侮辱の罪を犯したのでは有ませなんだか、

余は答へなんだ所が、折戸先生は更に語を續けて、「西様、私にどうも合點の行かないのは、不具者や、足りない者に對する公道だの、友愛だのといふ様な理由を棄て考て見ましても、勞働者は我子や孫が不幸な境界に陥つて快樂どころか、生活の必需品まで奪取られやうと思つて勞働する精神も挫けてしまひそうな者で有たのに、如何なり斯なり勞働が出来たといふのは妙な事、又體力や心力の優れておる者は、劣ておる者より多くの報酬が得られるといふ社會の組織を、子を持つ親が何故善いと思つたのか、不思議で堪りませぬ、何故なれば親は體力とか心力とかい勝れておるために利益を得たといふのでございますから、同じ筆法で其息子が若し他の者等より弱いといふ事になりますと、麵包皮や乞食の境界に落されぬにも限りませぬ、そんな危ない時節に世の人が善ふ子供を跡に残して死ねた者か、さつぱり合點が行きませぬ、」

(註 前晩に折戸先生の話に、各人職業を撰ぶときに當り、其天性の好む所を定めて之を従はせるに付て苦心してある由を強く言はれたけれども、各人が果して完全に其好みを撰ぶことが出来、又自分に尤も軽く覺える仕事を撰べば、それが果して尤も甘く出来る仕事であること云ふ事を余が明らかに合點したのは、何の職業でも勞働者の賃金が同額だといふ事實を知てからの事で有た、余の時代に体力及び智力的の職業を甘くする様に人の天賦の技術を開發させ利用せん爲めに、秩序ある有力な方法を用ひたけれども其甲斐が無つたのは實に甚しい空骨折であつて、加之當時の不幸の大原因の一つであつた、余が同時代の人間は大概己の好む職業を自由に撰ぶことが出来るといふので有たけれども、必竟有名無實で有て、其實は決して好む所を撰だ者は無い、諸の事情に逼られて皆己の天性に相應敷ない、己の腕前を現はされない仕事へ無理に強ひつけられたのである、そんな此點において金満家は如何かといふのに、矢張貧乏人と似たか寄たかな話であつた、貧乏な者は概ね教育せられてゐないから、自分の天性は何をするに適した技術を持ておるかを知る機會も無く、又己の技術の存る所を知たところで、何様貧乏である爲に鍊磨の功を積で其技術を開發させる事も出来なかつた、又學問藝術等も餘程好都合でもない貧乏人は寄せ付けないので、其人に取ても國民に取ても大變な損で有た、之に反して富有な者は教育も機會も自由に得る事は出来ながら、

社會の頑固な弊習に妨げられて、あたかも天性に相應しておつても、手仕事などは見苦しいとて邪魔をするから、技倆の有無が知れぬきりになつてしまひ、之が爲めに非凡の良匠を澤山に失つてしまつた、そこで人々は金銭を儲けるといふ考が先きに立て、皆我技倆に適ふた賃金の少ない仕事をするより、錢儲の爲なれば技倆に適はない賃金の多い仕事を爲さうといふ氣になるから、亦大ひに才能を不具にしてしまふ原因であつた、然るに今は斯いふ事がすつかり變つてしまつて、天下の人皆同様の教育と同様の機會があるから、我天有の技倆が厭でも應でも現はれてくる、又社會の頑迷な弊風も、金銭に對する慾心も無いから、己の生涯やるべき仕事を撰ぶことを妨げる者が無い。

第十三回

悦子嬢が約しておいた通り、折戸先生は果して余の寢室屋へ案内して、音樂電話の仕掛を教へ、一寸螺旋を轉せば洋々たる音樂を室内に満たしめようと、或は微かに響ひて遠く弱く段々に消へ去らしめようと自在になる方法を示してくれた、若し二人相共に室に居て、一人は音樂を聞ふと思ふ一人は眠ろふと思へば、一人には聞え、一人には聞えぬ様に出来るのである、

折戸先生は此事を説明してから後に言た「所で西様、是等は實に稀有の立派な音樂ではございまするが、相成べくは今夜は之を聞くより御眠りなさる方が御爲めに宜しい、貴下は唯今實に辛い目に逢てござる最中ですから、斯いふ時には神經を靜める第一の妙藥は、睡眠より外にはございませぬ、

此日の朝痛い目に逢た事を思出して、余は其忠告通りにするべき由を約した、

折戸先生は言た「宜しい、それでは電話が正八時に掛るようにして置ませう、

「それは何いふ事でございますか、

「時計仕掛が備へてあつて、何時でも好た時分に音樂を聞て目が覺める様にしてある由を折戸先生が説明した、

今夕は催眠劑を飲んだけれども、頭が枕に觸れるなり直ぐに眠てしまつた、そうして見ると第九世紀の頃にあつた生存上の不愉快に連れて余の不眠症も一掃し去られて痕を留めなんだのかと思はれたが、果して其通りで有た事が後日證せられてきた、

夢に余は第十三世紀時分に西班牙の「グラナダ」附近に「ムアー」人が建てた「アルハンブラ」宮城の饗應室に在て「ムアー」人の「アベンシレーゼス」朝の王位に坐し、明日は土耳其の新月旗の下に軍を進めて、西班牙より差向けたる基督軍と戦はんとする貴族や將校を饗應した、空氣は噴泉の水煙に冷されて馥郁たる花の香を飄はし、婀娜たる肉陣は絲竹を奏して快活な舞踊を献じた、目を舉げて瞻れば後宮の佳麗は粉黛を凝らして羅列し、目を下して瞰れば「ムアー」の精銳は劍戟を手にして群集し、銅鼓の聲は鑿々として旋た高く響き、管絃の音は切々として益々急に鳴渡り、勇士の心鬱勃として踊躍し武勳の熱に浮されて万千の匕首を打鳴す様は、敵の血を見ても哀れを催すべしと思はれなんだ、斯る折しも噫我神よと満堂に響き渡る大聲諸共に、夢は忽ち散じて目が覺たが、見れば既に眞明な白晝で「どるこのあけのつゝみ」の曲は室内に響ひておつた、

朝飯の時余は今朝夢見た顛末を主人に話した所が、余を覺せた音聲は全く一種の曉の鼓であつて、唯だ偶然の夢のみでは無い、朝人の起きる時分に音樂館で奏する曲は、常に人の心を感激せしめる性質の者であることを知た、

余は言た「序に御尋申します、今迄は歐羅巴の有様に付て何もお尋申すことに考へ及びませなんだが、舊世界の諸の社會も立換になりましたか、

折戸先生は答へて言た「左様、歐羅巴の諸大國及び濠太利亞、墨西哥、南亞米利加の諸部分も、今は職業の立方を合衆國の通りにしておりますが、合衆國は之を開いた先導者でございまして、此諸國民の間には廣く行渡た連合同盟が有まして、平和な關係になつておりますが、萬國聯合會議と云ふ者で連合諸國の交際商業を整へ、又時世に後れておる國々に對する連合策を講じますから、後進の國々も追々と開けた國法を取る方へ傾いて参ります、斯いふ風に連合同盟は有ますけれども、一國一國は皆十分に自治の恩澤に浴しておるのでございます、

余は言た「金錢も無いのに如何して商業を致しますか、國內丈の話なら金なしに濟まして、他國と交易するには何なりと金を用ゐなければなりませんまい、

「否や」、内國の關係と同様に、外國に對する關係には金は不必要なので、箇人が勝手に外國貿易を行つた時分には、種々様々の入込だ取引が有ますから、其始末を付る爲めに金が要ましたけれども、唯今では國と國とがする職務に成ておりますから、世界には僅か十餘より商人が無いのと同じ事

です、又之を萬國聯合會議が監督致しまするから、手輕い簿記法で帳面に付ておいたら、十分に取引が整へられます、關稅などは勿論一切要ないので、政府が一般の利益の爲めに入用と思はない物を輸入しないといふ丈で宜しい、何れの國にも外國貿易局と云ふ者が有まして、外國貿易を振ふ處でございしますが、今例へば亞米利加局で佛蘭西產の何々が何年に幾ら入用だといふ見積を致しますると、之を佛蘭西局へ注文してやる、佛蘭西局は又我亞米利加局へ注文を越すと、かういふ事に成てありまして、何の國も皆互に斯して居るのでございます、

「併し乍ら競争が無いとして見れば、外國品の代價の極め方は？」

折戸先生は答へた「一國が他國へ物品を賣るとききの代價は、自分の國人に分けるときの代價と同じ事にして有ますから以て、相互の間に葛藤が起る心配がございませぬ、純理から申せば、甲の國は自國民の勢力より成た產物を乙の國に供給せねばならぬといふ義務は無いのです、けれども某物品を交換すると云ふのは、必竟總ての國民の利益を謀つた者です、若し甲の國が某一定の物品を年々極つて乙の國に供給し詰にする場合には、大に關係の模様を變へんせせば、其由の通知を何らからか致さねばなりませぬ、

「併し甲の國は某天產物の專賣權を持ておりますと、乙の國又は數國へ之を供給する事を拒むで

せうか、

「そんな場合は今迄決して有ませなんだし、之を拒んだ方は拒まれた方よりも却て遙かに大きな害を受けます、先第一着には法律上申せば偏頗だの偏愛だのは示す可からざる者で、各國は何彼につけて十分同等に總ての國々を取扱ふべき事となつておりますから、唯今仰せの様な方針を執る國があれば如何なる目的に就ても地球上一切の國から縁を絶たれますから、此點に關しましては別段心配すべき事は起りませぬ、

余は言た「今假に一國が某天產物の專賣權を持ておつて、自國で消費するよりも澤山輸出すると致せば、其代價はズン／＼高くして供給を絶たない様にし、斯様にして隣國の必需品より利益を得るでしょう、其國人は無論其物品を是迄より高直にて買はなければなりませんまいが、一國全体の上から見ますと、國人は損をしておるどころで無い、却て外國人の懐から得をするでは有ませぬか、折戸先生は答へた「方今諸色の代價を如何して定めるかといふ事を御承知になれば、生産する時に要た勞働の多少や苦しさによらずして諸物價を換へる事は出来ぬと云ふ理合が解りませう、此原則は唯一國民の上に止まらず萬國聯合の上に定めるべき保証で御座いますが、假令此原則が無いと致しまして、今日では一國民のみならず萬國民に通ずる共同利益と云ふ意志と利己心の宜しくないこと

を信する心が中々強ふ御座いますから、御考への様な狡猾な事は出来得べくも有りませぬ、我々は皆唯世界万国を一國と同様に觀て居りまして、所謂一視同仁ある事を知ておる斗りで御座います、四海同民一視同仁と申す事は、必定社會が進み切つた所の姿で御座いまして、自治諸國の聯合の上に確に經濟上の利益を與へて呉れる者でせう、然るに唯今の組立では、九分通り迄は完全に成つて居ますけれども、遺憾がない迄に完全に致します事は未來の子孫に待ちまするが、又聯合國盟策は人間社會の問題を一時假に解釋した斗で無く、十分能く解釋し終た者であるから、是より完成の仕様が無い、是で十分完全に居ると云ふ論を持つて居る人も御座います、

余は問ふた「若し此國と彼國の帳簿が平均しなければ如何致します、例へば我國が佛蘭西へ輸出するより澤山に佛蘭西から輸入する日には、

折戸先生は答へた「毎年末に各國の帳簿を調べますので、若し佛蘭西が我國へ負債に成つておるならば、我國も亦何の國かに負債に成つて居る、又其國が佛蘭西に負債に成て居ると云ふ風に、万国互にグル／＼と負債をし廻つて居るので、そこで諸國の勘定を連合會議で一處へ取纏めて決算をして見ますと、差引殘額が決して大きい者には成りませぬ、其差引額が幾何あるにもせよ、聯合會議は二三年とか四五年に一度づゝは之を清算させますし、又餘り其高が過ぎる様になつて來ると、何

時に限らず一旦其清算を求めます、何故清算をさせるかと申しますと、若し某國が他の國に大きな負債をしますと、和親を損する様な感情が湧て來て宜御座いませんからの事で、そう云ふ事の無い様に、萬國聯合會議は國民間の交易する物品の監督を致しまして、彼此十分等しい様にさせます、

「併し金がないのに決算も精算も如何して出來ますか、

「國の主産物で致します、何々の品で承知するか、何品と何品を幾ら幾らの割合にするかを、双方同意の上極めて置くのが、交易の關係の基となるのです、

余は言つた「も一つ御尋ね申たい事は移住の事です、各國皆職業的の結社を固く結んで、自國の生産物を皆専有して居りまするなれば、假令移住民の上陸が許されましても餓へ死を致しませう、して見れば唯今は移住と云ふ事が御座いますまい、

折戸先生は答へた「中々どうして、無い所では御座いませぬ、絶へずドン／＼御座います、貴下の移住と仰せられるのは、定めて永住の爲に外國へ引移ると云ふ事でせう、之を致しまするには、國際上に價金を送ると云ふ鹽梅に、簡單に極めて御座いまして、例へば今二十一歳の男が英國から亞米利加へ移住致しますと、英國は二十一歳まで之を育て上げ教へ上げた入費が損に成る、亞米利加は無料で勞働者を儲けます勘定でございますから、米國は幾らかの定額を英國へ拂ひます、此原則は場

合に依て異て参りまして、拂戻す額等も消長は御座いまするが、一般に用ひられて居ります者で、若し移住した時に服役期限の末季に逼つて居りますれば、移住民を受ける國の方が賠償を受けます、虚弱無能の者が移住する時には、其本國が責任を負て之を養ふべき保證に立たなければなりません、斯う云ふ規則に従つて居る以上は、誰でも何時移住しても之を止めないので御座います、

「併し唯だ遊覽の爲に旅行するとか、觀察の爲に旅行するのは如何になります、金銭を受けずして我力で我生計を拵へて居る様な國へ、他國の者が如何して旅行を致せませうか、其人の割前切符は自國には通用しても、他國では通用しませんだらうが、道すがら如何して旅費を拂ひますか、

折戸先生は答へた、「亞米利加の割前切符は丁度昔の亞米利加の黄金の様に、英國にでも通用致しまして、自分が旅行して居る國の通貨に引き換へます、例へば米國人が伯林へ参りますには、萬國聯合同盟會地方支部へ自己の割前切符を持て行つて、其一部なり全部なりを獨逸國の割前切符と兩替を致す、獨逸は之を聯合同盟會の聯合決算へ出しまして、其高を合衆國の負擔と致します、

一同食卓に就くと悦子嬢は言た、「西様は今晚大象館へ喰べに御越しなすつたら屹度御氣に入るでせうねえ、

父なる折戸先生は之を説明して言た、「大象館と申しますのは、當區内の共同飲食館の名で御座います、日々の料理は昨夕申上げました様に、公共割庖所で致す斗りではありませぬ、共同飲食館へ行けば、調理から品柄万端實に行届いて居ります、晝間の二食は態々食いに出て行く迄の事でも有りませぬから、大抵家で食しますが、晚餐の馳走は大概喰べに行きます、貴下が當時の有様を御知りになる迄見合せる方が然るべきかと存じまして、今迄は食事に出て行きませなんだが、如何でせう今日は一つ飲食館へ喰べに出掛けませうか、

「それは至極結構で御座います」と余は答へた、

稍少時して悦子嬢は余が傍へ來て、笑ひながら言た、「貴下が吾々共や當今の有様に御慣れなさいますまでは、我家の様に御心置きなう思召す様に色々案じて居りましたが、昨夜一つ趣向が私の心に湧いて出ました、若し貴下の時代の柄の良い御人達で加之屹度貴下の御昵近に相違無い方に御引合せ申しましたら何と御意遊ばす、

「夫れは實に愉快な事です」と漠然答へはしたものの、悦子嬢が如何する積りであるか解からなんだが、

娘は微笑を含みつ、「此方へ入らつしやいまして、申上げた通りに成るか成らないか御覽なさいま

せ」

今迄に驚くべき事に幾度も出會したので、大抵な事には餘り驚かない様に成つて居つたけれども、今度は頗る變な事だと思ふて稍驚きながらも悦子嬢の後に從いて行くと、今迄知らなかつた一室へ這入つた、小さな楽しい部屋で、周囲の壁の本箱には本が一杯詰めてあつた、

悦子嬢は一つ箱を指しながら、御朋友達は爰に居らつしやいます」と言つた、そこで余は書巻の名を見れば、シエクスピア、ミルトン、ウラーグツワース、セリー、テニソン、デフォー、デッケンス、サッカレー、ユーゴー、ホーソーン、アーヴング、其外古今時代の文豪の名で有つたので、始めて娘の言た意味が解つた、娘は眞に甘く約束を履行したので、若し眞實言葉通りに余の朋友等に引合はせたのならば、却つて余をして絶望させたであらうに、左はなくては實に結構な良友社會に余を紹介して呉れた、

嗚呼昔此等の良友と意氣相通じて交つて居つたが、忽然袂を分つて以來、光陰矢の如くで忽ち百年を経過したけれども、余は少しも老いず、依然紅顔の少年であるが、此等の良友も亦百年の星霜を経た今日、少しも老衰せず、依然健在であつて、高尚なる精神と、鋭敏なる機智と、感動し易き笑と涙とは、少しも昔日と變はつて居ない、願れば嗚呼今日忽ち幾度の春秋を経て、親族故舊は皆故人となつて

なり果てたれども、今此等の樂しき良友と相伴ひ相語る愉快さ、獨り生き残る身の寂しくも覺えな

んだ、

悦子嬢は余を試に此良友等に紹介した所が、余の心の満足を顔の上に讀んで大いに喜びながら、「爰へ御連れ申上げたのを御喜びで御座いますか、西様、何んと良い思ひ付きでせう、私とした事か間の抜けた！、もつと早う思付けば宜かつたのですに！唯今差當つて御伴と成る人も御座いませんから、暫く爰に御友達と御話遊ばせ、けれども舊友に御逢ひ遊ばしたからと云つて、夫れが爲め新しい朋友なる吾々共を御忘れ遊ばしては可いませぬ、返すくも宜しう御座いますか」と笑ひながら戒めて立ち去つた、

余が前に並んである澤山の名の内で、一番契素のある名に引かれ、デッケンスの著書一巻を抜出して之を讀まんとて坐に就いた、デッケンスは第十九世紀の著述家中で余が一番好んで居た者で、昔余の時代の閑暇の時に余が此著者の書を一度も讀まなかつた週は殆ど無かつた、今余は非常の境遇に居るのであるから、昔契素の本なれば、何を讀んでも痛ふ感動が起つたであらうが、デッケンスは余が殊の外親しい大家なり、従つて又余が昔の生活を聯想せしめる魔力を持て居るので、現今余を取巻いて居る社會の有様は、實に新奇だと云ふ心を益々強からしめたが、他の諸文豪の文章ならば、此

の如き結果を生ずる事は、迎も出来なうであらう、凡そ人は其身体の周囲の物事が幾何新奇で驚くべきものであつても、暫時の内には直ぐに慣て来て、其事物を客觀的に見て飽く迄も新奇不思議と思ふ心が無くなつてしまふ者で有る、余も此不思議に思ふ心が既に鈍つて居たが、ヂッケンスを讀むに連れて諸々の聯想が胸の内に湧き起つて、十九世紀時代の前身に立ち歸へり、今昔を相比べて黑白餘り相反することを明瞭に悟つた、

ヂッケンスは第十九世紀の立派な小説家で、此人の天才は恰も希臘の詩聖ホーマーと同じく終古朽ちない者であらう、然るに今や乾坤一轉して、其感動すべき譚に述べてある貧人の艱難や、權力の妄用や、無慈悲残忍な社會組織や、皆消え去つてしまつて、全く痕を絶つた、

余はヂッケンスの著書を前に開きながら、一二時間をも見て居たけれども、實際二ページ位しか讀まなかつた、一節讀めば一節、一句見れば一句、讀む毎見る毎、新に現はれた世界の有様が髣髴として紙面に躍り出で、爲に余は益々遠く益々遙かに思を浮べた、斯く書齋中に沈思默想しておると、不思議の縁で逢ふことの出来た此驚くべき浮世の有様が漸次明かに漸次尤もと解せられる様に成つて來た、昔は富貴に暮すべき直打もない者が、如何なる幸運か榮耀榮華に暮して居たのが、益々不思議で堪らなくなつて、余の身は恰も此滄桑の變を見るが爲に、同時代の人に後れて唯一人今日此泰平の世

に残されて居るのかと思はれた、當時余の周囲には愚人に嘲罵せらるゝをも善人に誤解せらるゝをも頓着せず、理想の新世界を心の目に見もし、其新世界の爲に心思を苦勞した人も有つたが、余は未だ之を見ず、又之が爲に苦勞もしなかつた、嗚呼此等の先見ある勇敢の人々の中一人たりとも其心思を苦しめて自ら満足する者が有つたならば、實に事物自然の道理に叶つたであらう、其人は果して誰ぞと云へば、余が今現在見ておる昇平世界を夢みて之を謳歌し、千呼万喚社會を警醒せんとしたヂッケンス其人であつた、其歌に

見渡すかぎり後の世を
夢にはあらで幻に
あらゆる不思議備はれり
はたさしもの影もなき
さながら一家の如くなり
厭はぬ者のあらざれば
妙なる法に懷かれて
げにかくあるは理や

遠き彼方に眺むれば
うつる世界は極樂の
いくさの鼓鳴やみて
四海の中は睦まじく
心もだゆる辛き世を
天地至らぬ限もなき
現に華胥の夢や見む
萬世かけて末ながく

一つのめあては走るなり

隙行く駒に打つれて

人の思ひはひらくべし

デッケンスは老年に及んで自己の此預言に一時疑を懷いた、それは恰も憂愁危疑の境に陥つた時に預言者が常に自己の信せぬ事があると同じ事で有つた、けれども其言は果して効驗があつて、詩人の心に先見の明がある千古不朽の證據となつた、

幾時間か書齋中に留まつて居た所へ、折戸先生は余が其處に居るのを見付けて、「悦子が其思ひ付を私に申しまして、私も實に善い考へだと思ふたのです、先づ第一何の著作家に御目を留めなさいましたか知りたう御座いましたが一あ、デッケンスですか、爾するご、貴下はデッケンスが御氣に召して居たのですね、それは丁度今日の吾々が同意致す所なので、今日吾々の流義で判斷して見ますと、デッケンスは總ての同時代の文士よりも卓然勝れて居ります、それは其文學の才が至高であるから申すのでは御坐いませぬ、其立派な心は貧人の酸苦を見て憐れみの情を催ふしましたからです、社會の爲に殘虐な犠牲に擧げられておる者に同情を寄せて、必死に之が辯護をして遣り、社會の殘忍詐誦を暴露して、直言直説之を筆誅したからです、當時慨世の志士も御坐いましたけれども、世態の不正と不幸とを唱へて天下の人心を茲に注がしむる爲、又將に來たらんとしておつた大變化は是非爲さねば

ならぬと云ふ事を悟らしめる爲に、心思の力を盡したのは、誰もデッケンスに及ぶ者はなかつたのです、

第十四回

晝の間は激しい風雨で有つたから、大方街はひどいものに成つて居て、幾ら飲食館が近くても、主人親子は逆も今夕飲食に出掛る丁簡を棄てなければならぬだらうと考へた、處が飯時になると、母や娘が雨靴も穿かず雨傘も持たずにボツ／＼出て行く支度をしておるらしく見えたので一方ならず驚いた、

街へ出て見たら雨は猶霽れないが不審は忽ち霽れた、一枚の長く續いた雨合羽が一面に街の側の人道を蔽ひ包んで廻廊の様になつて居る、光は隈なく照して路は十分乾いてある、紳士淑女は盛粧して人を築き錦を織つた、四つ辻の處は全体を蔽ふてある、悦子嬢は余と共に歩いて行つたが、昔の波士頓の街は、風雨の時には雨傘と靴と重い合羽で身を掩はねば通れなかつたと云ふ事は、彼女の全く承知のない事だから之を話す、大層感に打たれた様子で「人道には全く蔽ひを使ひませなんだか」と問ふた、余は「使はなかつたでも有りませんが、一個人が勝手にして居るばかりで、所々にしかなかつたのです、人の爲を謀かつた親切な者もなかつたのです」と答へた、所が娘は「今日では何の街も御覧になつた様に厳しい日柄を防ぐ用意がありまして、要らない時は巻入れて道を明ける仕掛けに成つ

て居ります、何うも人が社會の爲に運動致しますのに、雨霽雪の荒る、儘に降らせて置くとは、何と詰らない事では御坐いませぬか、

先に立つて歩いて居た折戸先生は、吾々兩人の話を洩れ聞いて、後を振り向ひて言ふには「十九世紀頃には雨降りになると波士頓市三十万人の頭の上に三十万の雨傘を被ましたが、二十世紀では幾十万人の頭上に一本の雨傘を被ます、此事實を見ますと、個人主義の時代と協同主義の時代との相違が明かに解かります、

ズン／＼進んで行く道すがら、悦子嬢の言ふには「昔各人が自分と自分の家族の利益ばかりを考へて生活した事を、父は毎度一人傘だと申されます、美術館に第十九世紀の繪が御坐いまして、雨降に澤山な人が歩いておるのが御坐います、一人づつ皆傘を持ちまして、自分と妻とに被せ掛けますが、側に居る人には滴瀝と滴が掛つて居ります、あの繪は其時分の画工が時世を諷する爲に画いたのに違ひないのです、

一同は大きな建物の中へ入つたが、外の人々も流るゝ如くに此中へ入つた、雨避が有つて家の前面を見る事が出来なかつたが、内外相通じて見たら高大な莊嚴な者で有つたらう、其内部は前日見た店より一層美しう有つたが、悦子嬢に聞くと、入口の上に彫刻が簇つて在つて、格別に能く出来た結構

なもので有るそう、立派な階段を昇ると、幅の広い廻廊が有つて幾つも入口がある、廊下を少し向へ進んで行くと、一の入口に余の主人の名が書いて有つて折戸としてある、其中へ入つて見ると、四人前の食卓が据へてある、結構な食堂で有つて中庭に臨んでおる、庭には噴水泉が雲突く斗り高く噴き上り、音楽の音は空中に響いた、

一同食卓に就くと折戸先生は呼鈴の鉦子を押した、

余は問ふた「ごなたも我家の様に御氣樂に見えますね」、

先生は答へた「此は詰り我々共の家の一部份なので、唯少し離れて居る斗りです、區内の家々は皆此大きな家に一つ宛室が置いてありまして、年々少し宛借料を出して絶えず勝手に使へるのです、ほん暫く足を留める客だとか一個人だとか云ふ日には、此上に室が仕つらへて御坐います、爰で食事を仕様と思ひますと、前夜から注文しますので、日々新聞紙に出る廣告に由りまして市場にあるものは何でも好きに料理さす事が出来ますし、料理は存分奢らうと奢るまいと勝手なのですが、其でも家で調理するよりズツと廉くもあれば宜しうも御坐います、我國人は善い食物を上手に調理して貰ふのを無上に興味があります、料理の法が上手に成つて居るのを吾々は少し誇る事が出来ます、西様の貴下の時分の文明は何處を見ましても悲惨で有つたですけれども、其時代は全体が富有でなかつたので、誰も無味物を食はなければならぬと云ふのは、何よりも憐れな事で有たと存じまする」、

余は言つた「昔の人に御説を聞かせましたら、其邊に否など申すものは御坐いませなんだでせう」、給侍人は美しい容貌の若者で、一寸變つた制服を着て出来た、余は職業軍に入籍しておるものが如何な態度であるかを始めて委しく學べる時で有つたから、篤と此給侍人に目を留めて居たが、此男は十分教育ある者で、社交上から見ても何れから見ても、給侍せらるゝ人々と同等であるから、給侍人の位置に居りながら少しも卑劣に屈從もせねば此方も更に之を視下げない、折戸先生が之に向つて話すにも、昔の所謂紳士が爲す様に傲慢な調子はなく、と云つて又少しも哀を請ふ様な賤しい調子もない、若者も若者で唯だ我從事せる用務を間違ひなく仕遂げるに熱心な人らしく有つて、狎れ親しみ又は追従する風は更に無い、詰り服役中の兵隊の態度で、而も軍人の様にコツつく所は少しも無かつた、此若者が室を出て行く時余は言つた「あんな若い者が下賤な地位で満足して務めておるのが合點行きませぬ」、

悦子嬢は言ふ「下賤と申す事は何の事で御座いますか、私は聞き初めですが」、
父なる先生は言つた「其語はもう廢れて今では用ひないので、他人の爲に特に不愉快な仕事をする人に用ひた語で、輕蔑の意を含んで居る者だと余は思ふて居るが、ねえ西様、そうでは有りませなん

だか、

余は言つた、先づそんな事です、昔は食事の給侍をする様な事は、賤しいと思はれて輕蔑され、上品な人がそんな境遇に落ちるには、よくせき困難な目に逢はねばならぬので御座いました、

折戸夫人は驚歎して、「はて、どうも變にこじつた了簡ですねえ、」

悦子は言つた、「して其下賤とか申す務は、爲無ければ成らなかつたのですか、」

「無論そうです、がそれは其を仕なければ餓へ死ぬと云ふ貧乏人にさせました、」

先生言ふ、「其れを輕蔑するから憐れな者に益々重荷を負はせたのです、」

悦子嬢が言ふには、「私はどうも能く解り兼ねます、自分の厭な事を人にさせた上、之をしたからと云つて其人を輕蔑すると云ふ事で御座いますか、或は又人に用事をして貰つて人に之をし返へす事を

好まないと云ふ事で御座いますか、よもやそんな事では御座いますまいねえ、西様、」

余はそう云ふ事で有つたと言なければ成らない場合で有つた、所が丁度折戸先生が助太刀の辯論をして、余の氣を休めて呉れた、

先生の云はるゝに、「悦子の解らない譯と申しますのは斯うです、今日の徳義の原理で行ますと、何か他の人に用務をして貰ひながら、假令已むを得ないにもせよ、同じ用務を返す事を好まないのは、

返さない積りで人に物を借りる様なもの、又人が困窮貧乏に陥るに附込むで、無理遣りに用務をさせるのは、強盜を働いておるのであります、元來人間を貴賤貧富等と別けると云ふのが、至極間違つた話なので、人間が相互に和親睦睦一致連合すると云ふ丁簡を殺すものです、貴下の時分には富の度に高低があり、教育を受ける機会にも高低がありまして、社會を幾種類にも分けたもので、其幾種のものは丸で別々の人種だと自ら考へて居りました、今日此服務問題を人々が見ますのに、そう異つた見解はありません、貴下の時代に教育を受けて居る男女は、之を受けておる他の人に用事をさせながら、之をし返へすのは馬鹿だとする者が無かつたでせうが、今では夫れが廣くなつて、そう云ふ事は誰にでもさせないのです、然るに古人は貧乏人や教育のない人を自分と違つた人類と見做して居りました、今日は天下の万民皆同じ富を受け同じ教育を受けまして、平等無差別の人であつて、其榮華は丁度昔の豪富にも釣合ふ位です、此平等な境界が出来ない内は、四海同民一視同仁と云ふ事が現今の様に眞の信仰となり實地動機の原因となる事は出来ない筈です、貴下の時分でも四海同民一視同仁と云ふ語は御坐いましたが、併し畢竟語ばかりに止まつて、實行されなかつたのです、

「給仕も義勇者の好むで申込む用事ですか、」

「否、職業軍の新米株の若者が致しますので、新米株の者は等外で御坐いまして、別段熟練も要な

い色々の雑務を命ぜられて致すので御坐います、食事の給侍は即ち此雑務の一つで、新募兵には皆之をさせて其趣味を知らせまする、私も彼是四十年前程前に此飲食館で幾月か給仕人を致しましたか、返すくも申上べき事は、國民に入用な様々の働きに高いの低いのと云ふ差別は認められて居ないので、他の人の用事をしたからと云つて、其人物は僕婢と思はれもせねば、自らも左様に思ひもせず、亦た他の厄介人でもないの、詰る所國の用事を致して居るのです、そうすから給仕人の職務も他の労働者の職務も、一寸も違ひはないので、彼は身を以て人の爲に働くからとて、吾等の目に賤しいとは見えませぬ、されば醫者も矢張其通りで御坐います、若しあの男が私の給仕をしたからと云つて、私が之を見下げ様ものならば、私があの男を治療したからと云つて、私を見下る様な事になりませう、

食事が済んでから折戸親子は館内を案内して呉れたが、其高大なる事と云ひ、其華麗な建築と云ひ、其奢侈な飾りと云ひ、一々皆驚きの種であつて、飲食館どころの騒ぎではない、此區内の大遊樂館である様に思はれ、響應や遊戯の装置は、一として欠くる所はなかつた、

余は感服して一唱三歎の聲を發した、所が折戸先生はすかさず言つた「私共の家庭の質朴に較べますと、公共の生活は立派なものだ」と云ふ事は、始め物見臺から當市を御眺望の節申上げた事で御坐

いまして、二十世紀は十九世紀と何れ程違ふかと云ふ事も御話し申しましたが、今日只今始めて御解りで御坐いませう、吾々共は家には成るべく少しの物を置いて、可なり便利であるまでの限りに致しまするが、此は要らぬ煩ひを省く爲で御坐います、けれども社會的生活になりますと、其華美で贅澤な事は、古今獨歩で御坐います、總て職業や藝術に従事する人にも亦斯云ふ廣い俱樂部を與へられまして、休暇中の遊戯や休息の爲には、田舎や山や海岸に亭臺も作つて御坐います、

(註、第十九世紀の後半頃、米國の諸専門學校では、貧生徒が長の夏期休業中旅館の給侍人に雇はれ、學資の幾分を儲けると云ふのが習慣であつて、其頃此様な用務を自ら進んでするものは紳士になれないと云ふ馬鹿論をした批評家が有つた、所が之に對して此等の生徒は何に限らず正直な必用な勤勞は賤しくない高尚なものであると云ふ事を身自ら模範となつて証明したので、實に譽むべき資格が有る人であると云ふ答辯が出たが、此議論は即ち余の同時代の人を通じて抱いておつた謬見のを證してゐる、食事の給侍に限らず、凡て此時分の他の生計法も、大概辯護せらるべき必要が有つたのであるが、當時流行の流儀で言へば、何でも勞働すると云ふのは卑劣な事で、之を高尚だと云ふのは無茶であると云ふので有つた、全体勞力を精々高い値に賣ると云ふのは物品を精々高値に賣るよりも高尚な事だと云ふ筈はない、昔では何れも商業の取引であつて賣買の掛引同然であつた、

そこで一時間の労働を幾何と云ふ事にして有つた爲に、労働者は労働の代價を金銭で算用しては受取るが、他の點から判断して義務だの正理だの名譽だのと云はれても結構に思はなかつた、かう云ふ卑劣な風が段々と文學や其他高尚な勤勞にも傳染したので、賢者は痛く之を憤慨したけれども、其惡風を防ぐ事は出来ず、人の勤勞がどんなに高尚尊貴で有つても、賣買兩者の間に其價を掛引すると云ふ風になつて、醫者は治療術を賣る、坊主は説教を賣る、賢者は天意を錢で漏らす、詩人は印刷の行數で妙想を伸縮すると云ふ奇異な現象と成つた、若し余が産れ落ちた時分と較べて、何が現今の最も幸福だと余に問ふ人が有つたら、余は労働を價で測るのを止め、之を高尚なる者として貴風であると答へるで有らう、嗚呼當今の人は各人に全力を盡させて神を服役の監督者となし、功勞の報酬としては金銭を與へずして名譽のみを與へ、昔兵役ばかりに與えた榮譽を凡ての服務に與える事にしたのは、實に何よりの幸福である。

第十五回

段々と飲食館内を見廻つておると文庫へ來たが、立派な皮製の椅子が並べて有る、それに引き付けられ少時其處に休んで咄そうと云ふので、その一の書室に這入つた、

(註、第十九世紀の圖書館に比すると、二十世紀の方は幾ら自由で結構だか知れない、昔の圖書館は癪に障る様な仕掛けで、人が觸れない様に書棚の前に欄干が拵へて有つて、長々時間と手數とを費さなければ見せて呉れないから、文學を嗜む心を奨勵する所か、却つて之を挫いてしまつた、)

折戸夫人は言つた「娘に聞けば今朝中はズット書齋に居らつしやつたそうです貴下は誠にどうも御羨ましい方であると思ひますが、其譯は御承知で御坐いますか」

余は「いや存知ませんが、どうか承りたいものです」と答へた、

夫人言ふ「去ぬる百年間に出來ました本は、皆貴下に新奇で珍しう思召しませうからなのです、どうも面白くて堪らない文學が中々澤山御坐いますして、之を御覽になるには、今から五年の間御食事の暇も無い位で御坐います、先づ一番面白いのは米蘭と云ふ人の小説で御坐いますが、其を除けば、さあ何んで御坐いませうねえ」

「そうでなければ母様、寧ろのでせう」と娘は言た、

母なる夫人は熱心に「そうよ、但しは又鴨亭の詩か、過去と將來と云ふ本か、原始と云ふ本か、それから未だ數へたら十程も有らうが、何も此も一年の月日を費やさないで讀め切れないよ、」

「へえーそうして見ますと現世紀には著名な文學書が出来ましたね、」

先生は言つた「左様、今世紀は實に前代に例が無かつた程な智慧の花盛りの時代で御坐いました、今世紀の始めの頃に徳義も物質も古い所から新しい所へ開發しましたのですが、是程區域の廣い完備の速かな開發は、人類有つてより以降未だ無かつた事で御坐いませう、そこで此廣大もない幸福な境界に成つて居り、唯だ境遇が全く改良された計りに止まらず、廣大深遠な進歩の新局面に進み上つた事が人々の心に愈々合點が出来た時には、天下の人心は大いに鼓舞せられて、万種の才能は一時に長夜の夢を覺ました、之と比べて見ますと、第十六世紀の頃文學藝術が再び振興した事が有りますが、其は眞の眞似みた様な事です、そこで器械的の發明も、科學上の發見も、諸々の藝術も、音樂文學の著作も、陸々續々出来ました有様は、千古以來比類のない所で御坐いました、」

余は言つた「序でに文學に就いて御尋ね申しますが、唯今はどんなにして本を出版しまするか、矢張國がするので、」

「無論左様でございます、」

「併し何云ふ風にしてするのですか、政府は何でも擔ぎ込んで來たものを、ごし／＼公費で出版するのですか、又は原稿檢閲をして、善いと思ふたものだけを印刷しますか、」

「なに、何らでも無いので、出版局は檢閲の權が御坐いませぬ、唯出版して呉れと云つて持つて來るのを皆出版する責任が有るのですが、但し著者は最初の出版代を自分の割前切符の中で拂はねばなりません、又之を世の人に聞いて貰ふ權が有りまして、之に對しても幾許か拂はなければなりません、若し人あつて公衆の耳に入るゝに足る事が有らば、之を聞いて貰ふ爲に喜んで料を拂ふ事と存じます、若し昔の様に各自富の程度が均しう御坐いませぬ日には、富んだ者ばかりしか著者になれぬと云ふ不都合が起るですけれども、國人の財が均皆しう御坐いますから、之を出版して公にするにせぬとは、唯だ著者の心意氣に由るので御坐います、一通りの本の出版料位は、少し經濟に慣れましたら、一年の割前の中から出來て參ります、そうして本が愈出來上りますと、國が之を賣り出します、」

余は言つた「吾々の時分には、著者は販賣の印税を取りましたが、唯今もそうかと思ひます、」

「丁度其通りでも有りませんが、まあ似ております、本の價は其出版の價と著者に遺る印税とを加へましたもので、印税の高は著者の好いた通りに定めますが、若し不相當な高い印税を食ると、本が

高くて賣れないから、却つて自分の損になります、此印税は著者の割前に加へまするが、印税斗りで暮せて行けます間は、國に對する他の服役は免るして貰へます、そこで著書が可なり評判がよくて相應に掃けて行きますと、其著者は數月なり一年なり乃至二年三年の間賜暇を貰ひまするが、若し其休暇中に出來の良い書籍を著しますと、其賣高に相當の期限間又免役されます、評判の高い著者になりますると、服役年限間通して筆の尖で食ふて居る人が御坐います、かう云ふ風に著者の文才の高低は輿論で極まります、且は文學に心を潜むべき機會が與へられてある証據で御坐います、此邊から見ますると今の流儀は昔の流儀と甚しい違ひはありませんが、併し二所著しい異つた點が御坐います、第一には今日の教育は至る處高尙に達しておるから、文學著作に對する世人の評判は、皆能く其眞價を認めたものであつて、十九世紀頃にはそんな事は出來なかつたのです、第二には今日では眞實の價値を見損ふ様な依怙偏頗の沙汰が丸で無いので御坐います、それで何の著者も皆自家の著書を輿論に訴へるのが均しく容易で御坐いまするが、昔の作者が苦情を並べて居たのから考へて見ますると、今日の様な十分平等な機會を彼等に與へたら、非常に稱讃しただらうと思ひます、

余は言つた「音樂とか美術とか發明とか意匠の様な創意に關した事柄に於きまして、其價値の有無を承認するのも同筆法に因ると存じますが、

先生の答へに「細かに申せば違ひますが、大体は同じ事です、例へば美術では文學の場合の様に世人が唯一の審判者であつて、公共の建物に用ふる彫像や繪畫は誰のを採用して宜しいか之を衆論に訴へて見て、衆論が愈誰某のが良いと判断を下しますと、其創意者を他の勞役より免じまして、専心其事に従はせます、其作を賣りましても、賣れた數の多少に應じて利益を與へますのは、丁度著者が書籍から利益を受けるのと同じ事です、總て新機軸を出して物を創制します場合は皆同じ筆法にしまするので、即ち先づ自由の特典を以て希望者を募集しまして、愈非凡の才が見えますると、服役の煩累を全く免じて遣つて、自由に研究させます、此等の場合に服役を免除すると云ふのは、決して褒美や報酬を與へる爲ではありません、歸する所其爲に更に大いに更に高尙な仕事をするものが顯はれると云ふ道理が有るからの事です、又文學や技藝や科學等色々の會が御座います、有名な人は其會員に成れまして、大いに人の羨望する所で御坐います、國中で最も名譽を申しますのは赤線で御坐います、國一般の投票で當世の著者、技術家、醫師、發明家に與へるのですが、此は大統領の位よりも更に高い名譽であります、大統領の位は唯善意と義務の熱心とが有つたら得られるものです、此赤線をつけて貰ふと思つて、國中の少年は皆夜を睡ずに過ぐす事が幾度有るか知れませぬ、けれども之を得たものは實に稀で曉の星程で御坐います、私も柄に似合はず洒落て見た事も御坐いましたが、

逆も天の星を落ち様な藝で御座います」

悦子嬢は聲を揚げて「あのまあ、仰しやいます事、母様と私が父様に赤線を御取らせ申したいと思ひましたか、何その様に、そろそろ貰ふのは名譽でないでも御座いませぬけれども」

先生は言ふ「お前は唯親に産んで貰つた丈で何にも知らないが、阿母様にして見ると大層慾が有つたので、余は赤線か、せめては青線なりとも是非得るのだと請合はなかつたら、阿母は余を夫に持たなかつたのである」

父と娘が彼是云つて居ると、折戸夫人は只にこゝと笑つておる斗りであつた、

余は問ふた「定刊雑誌や新聞は如何で御座いますか、書籍出版の方に至りましては、眞の文學の業を奨励する邊から見ましても、冗雑な著者を抑へると云ふ邊から見ましても、如何様昔の法よりは著しく改良が出来て結構で御座いますか、雑誌と新聞には如何して當世の方法が應用出来ませうか、書籍を出版するのは、其人をして只だ入費を出させるのですから宜しう御座いますが、年が年中毎日新聞を發刊するのは、逆も費用が掛つて一人の力に合ひますまい、昔は雑誌や新聞を私の資本家が費用を辨じまして、それでさへ未だ利益の見えぬ内に懷中が空に成つて倒れてしまひました、そうすれば今日若し果して新聞が有ると云ふ事ならば、政府の編輯人が公費で出しまして政府の意見を發表する

事になりませう、若し方今の立て方が完全で少しも批難する所が無いと申す事なれば、唯今申した様にしても宜しう御座いませう、そうでなければ輿論を發表する機關が政府以外になければ不幸極まつた結果が出来ませう、往昔は資本が政府では無く私人の手に有つたが爲に、不幸では御座いましたが、其代り自由獨立の新聞紙が有つたから、悪い所を是で償つて居りました、今日は他の方面に利益がある代りに此方面に損失をせずばならんではありませぬか」

先生は笑いながら言つた「未だ十分御得心が参りませんか、抑社會の事柄を嚴重に評論するに付ては、新聞紙ばかりでは其機關にはなりませぬ、亦た之が最良の機關でも無いのです、昔の新聞紙が社會の事については是非曲直の判決を致しましたのを吾々から見ますと、大抵淺薄な粗漏な上に徒に多辯を費し、加之僻論と苛酷な所が大變あつた様に思はれます、是等新聞紙が輿論を表はしたものと見れば、其頃の人智は甚だ低くかつたと云ふ感じがします、そうして又其新聞の言ふ處により輿論が定まるとして見れば、其頃の國民は目度い者では無かつたのです、現今では若し人が何か天下の事柄に就いて大いに天下の人心を感動させたいと思ひますと、例の書籍出版の流儀で之を本や小冊子として其論説を出します、併し新聞や雑誌が無いから以て左様にするのは有りませぬ、又新聞や雑誌が十分完全なる自由を欠いて居ると云ふ譯でもありません、今日の新聞が輿論を表はしますのは、却

つて昔よりも充分で御坐います、何故と申せば昔は一人が資本を出して第一には金儲けの爲め、兼ねては又他人の説の口次ぎする爲に出した新聞雑誌で御坐いましたから、勢い束縛されて、名論卓説や輿論を自在に發表する事が出来ませんでした、

余は言つた「併し若し政府が公費で新聞を出版します日には、必ず新聞の記事を檢束する弊が出来ませう、政府にあらすして誰が編輯人を指定しますか」、

折戸先生の答に「政府は新聞の費用を出すのでもなければ、其記者を指定するのでもなく、又其記事に聊かも干渉しませぬ、新聞紙を讀む人が其出版料を出し、記者を撰び、又不満など思へば之を免じます、かう云ふ風な新聞でも輿論を表はす自由機關でないと御考へですか」、

余は答へた「決して自由機關でないとは思ひませんが、夫れが如何して實行されますか」、

「夫れ程手軽い事は有りませぬ、今私の朋友なり私が自分等の意見を表はす新聞であつて格別にも自分の地方や職業の事を専ら書き載せたいと思ひますれば、此と思ふ人々の所を説き廻つて賛成を求めます、そして愈々充分に新聞が出せる程の申込者が出来まると、早速發刊に取掛りますが、紙面の大小は申込人の多少によつて違ひます、申込人の拂ふ新聞紙代は其割前切符からびち／＼切り取つて上納至しまして、出版するに當つて損が出来ぬ様に致します、又發刊しますに就いては、發刊を

職業にしておる人が仕なければ成りませんので、出版して呉れど注文されますと、自分の義務だから斷る譯には参りませぬ、借愈取掛らうと云ふ事になりますと、申込人一同が記者を撰舉します、そして若し其人が記者になる事を承諾致しますれば、其在職中は他の服役を免ぜられます、所が昔の様に記者に給料を與へるのではありません、申込人は國民一般の服役から其人を引き抜くのでありますから、其人物の補助料と同じだけの賠償を國へ拂ふので御坐います、借記者は丁度昔の記者と同様に、新聞紙を管理しまするけれども、賄賂を取つて記事を曲げたり、私利を營む爲に公衆の幸福を妨げたりする事は決して有りませぬ、初年の末には次年度の申込人一同が前任記者を再選するとか、代りの人を選ぶか何れかに致しますが、力のある記者は勿論何時迄も限りもなく地位を失ひませぬ、申込名簿が段々と増して來るに従ひまして、新聞紙の資本が増して來ますから、益々善い原稿寄贈者が澤山に成つて紙面の改良が出来ますのは丁度昔と同じ事です」、

「原稿寄贈者に金でなければ何で禮を致します」、

「記者は寄贈者と談合して原稿の價を極めますが、愈原稿料の相談が纏まると、其新聞紙の資本とも云ふべき保証割前を切つて、之を寄贈者の割前に移します、かうやつて寄贈者の手に澤山割前が積みまると、其高に對する月日の間は服役を免する事は普通の著者と同様で、雜誌に至りまし

ても同じ事なのです、一つ新たに定刊雑誌を発行すると云ふ趣意書が廻はつて来ますと、此は面白いと賛成する人々が寄つて、一年間之を發行せられる丈の申込額を請合ひまして、其記者をも撰びますが、雑誌記者も丁度新聞の場合と同様に原稿の寄贈者に報酬を致します、そうして發刊に必要な職工や材料は無論出版局が供給するのでございます、俗某記者に筆を取つて貰ひたくない云ふ事になりまして、其人が外に文筆で服役を免せられる權を持つて居なければ、職業軍の元の古巣へ逆戻りするまでの事です、通例記者は年末に改撰する筈で、總別何年間も續いて其職を執りますけれども、若し其記者が俄に新聞や雑誌の本色を失ふ様な乱調子を書出しますと、申込人は何時でも之を免職する事が出来る云ふ約款が拵へて御坐います、

余は言つた御説から考へて見ますと、人が研究や默考がしたい爲に幾らか閑暇が欲しくても、承りました二つの仕方の何らかによらねば、勞役を免れる事が出来ない様に思ひます、即ち文學や美術の發明をして免役の代りに其賠償を國に對してするか、或は相當な人数に薦められて新聞雑誌の筆を取つて賠償を國へ拂つて貰ふとかしなければなりませんと思ひます、

折戸先生は答へた「今日ではどんな腕利な人でも自身一分の勞役をせずに他人に苦勞させて生活する事が出来ませんので、學者だと云ふ様な美名をつけて自稱しようが、情けな生れつきだと言ひ譯し

ようが、到底駄目なのです、其代りには又人の天性を自由自在に活動發達させる様に成つて居りまして、人を威したり人の骨折の結果を食つて生活しないのです、と申すのは國に賠償を出して免役に成る斗りでありませぬ、又十分の扶助料を取る事を辞退して免役に成る様にもして御坐いますから、誰でも服役年限を半分越へて三十三歳に成りますと、名譽なる免役を許されます、但し生涯他の人々が貰つて居る扶持の半分だけしか受けられませぬ、最も半分でも生活には十分ですけれども、贅澤や華美な事は出来ませぬ、然し多少の愉快位は得られます、

其夜婦人共が退く時に、悦子嬢は本を一冊持つて来て「西様、自然今夜御睡みが出来ませんでしたら、米蘭の此譚を御覽遊ばしましたら、中々興味が御坐います、此は中で上出来の傑作で、御覽になつたら當時の譚類は如何な者かと云ふ事なりとも御解りに成りませう、」

此は女人國帝と云ふ物語であつたが、余は室内に坐つて東の白む頃迄も讀み續け、トウ／＼終てしまふまで巻を下に置かなんだ、併し二十世紀の小説の大家米蘭を嘆稱する人を怒らせるかは知らぬが、始めて之を讀んだ時に最も余を感ぜしめた事は、其本に書いてあつた事ではなくて、其本には載つてない事であつた、何故ならば、昔の小説は貧乏と金持との不同だとか、教育と無教育との差別だとか、人に驕るべき境界に成りたいとか、金持に成つて貧乏は厭やだとか、權力を奪はれたらどんな

であらうの、盗人に竊まれたら如何だの、人を殺したら如何だの、借金で裁判になれば如何だの云ふ様な卑劣な事柄で頭から終ひまで固めて有つたので、其の時分の小説家にこんな事を離れて小説を作れと云つたら、そんな六つかしい注文を受けるよりも臍を噬んで脊伸びする方が増したと斷つたやろう、米蘭の小説は垢抜けた奇麗なもので、そんな穢い事は少くも書いて無い、戀の事もウント云ふ程あるけれども、人間の心理に適つた戀で有つて、昔の小説の戀の様に貴賤貧富の度が違つて戀が叶はなかつたの、身分や境遇の爲め思ひが達げられなんだと云ふ矩合に、人爲的の障害物の爲に戀が邪魔せられたと云ふ様な所は少しも無い、此女人國帝を讀んで見ると、二十世紀の社會の有様が大体解つて來て、人に段々説明して貰ふよりも直打が有つた、折戸先生が前日より聞かせて呉れたのは成程事柄は廣かつたけれども、彼方此方を取止めもなく言つたもので有るから、余の心にそれを取纏めて明かな概念を拵へる事が出来なかつたが、米蘭は余の爲に手に取る如く繪に畫く如く纏めて示して呉れた、

第十六回

翌朝余は朝飯時分より一寸前に起きて、二階から下へ降りると、悦子は部屋から廊下へ歩いて來た、其部屋は前日余と娘とが手を取合て活劇を演じた場所であつた、

娘は可愛らしい利發な顔付で「アラ貴下は又面白い目をしようと思つて、朝の間から唯一人そつと御出歩きなさいます思召でしょう、今度は私の方が早起しましたので、貴下を甘く見付けました」、

余は言た「朝歩きが悪いと御考へなれば、それが面白い目にもならぬでは有りませぬか」、

娘は言た「夫れを承つて誠に嬉しう御坐います、私が朝御膳を喰ふ時の戀みにど存じまして、爰で花を生けて居りますと、二階から御降り遊ばす音が致しましたが、何だか差足拔足で段梯を御踏み遊ばす様に考へました」、

余は言た「夫れは御目鏡遠で御坐います、私に於きましては出て行く積は毛頭御坐いませなんだ」、娘は偶然爰で出逢た様に体裁を繕ふとしたけれども、余は何となく若しやと臆ろに疑ふたが、其後聞いて見ると、果して余の推量が眞實で有た、と云ふ其譯は、此柔らしい乙女は誰に吩咐られたのでも無い、自分が勝手に余を護りして呉れて、自然余が又候變な氣になつて、一人徘徊まはりはせぬ

かど案する心より、爰二三日前から、人も知らない朝未起より起きて居たそうである、偕今爰で娘が朝飯に飾る花珠を拵へるのを手傳はうと云ふことに成て、曩に娘が現はれた室へ尾て這入つた、

娘は問ふらく、「先朝の様な恐ろしい御心地はモウすつぱり御坐りませぬか」

余は答へた、「ハイ妙な心持に成る様な事は無いとも申させぬ、自分は誰で有るか云ふ不審が、どうも霧れ遣らいで、折々胸に突掛て参ります、本来私の履歴が珍無類で御坐いますから、其人間が邂逅にも妙な心持に成るまいと思ふても、夫は無理で御坐います、併し先朝殆ど成り掛けました様に、足が地から離れて宙宇に浮ぶ思をする氣遣はもう更に御坐いませぬ」

「あの朝の御氣色は、どうも忘れられませぬ」

余は「唯だ命を御助け下さいましたのなれば未だしも御禮の言葉も御坐いまいようが、心の迷が霽れる様に御助け下さいましたので御坐いますから、何とも御恩を謝する言葉も御坐いませぬ」と餘程感動を現はして言た處が、娘は俄かに眼が濕み出した、

「これはまあ、痛み入りました、御丁寧な御禮で誠に思はれませぬけれども、ソウ承れば、實に嬉しう御坐います、私は御助をするに申す様な大したことも致しませなんだが、貴下の爲に心はしたゝか、痛めまして御坐います、貴下が長の間御寝み遊ばしました様なのは、道理の上から説明が

出来ることで有るから驚く迄も無い事だと父は申しますけれども、私が若し貴下と代つて居りましたら、逆も堪へては居られませんが、屹度眼でも眩しうまいやう」

余は「ナニ、夫は又た天人が貴嬢の御境界を御氣の毒に思て、助けに参りましたら、そんな事も御坐いますまい、私に取りましては、貴嬢の御越し下さいましたのが、天人に逢ふたと申しまいようか、地獄で佛と申しまいようか、丁度夫と同じ事で御坐いました」と答へた、誠に或る乙女は余に取ては天人かと思はれる程の重任を盡して呉れたので、若し此少女が余を底ふ愛情に答ふる程の感情を余の顔に表顯して居たとすれば、定めてそれは有難そうな顔付で有つたで有ろう、余の氣色や言葉は少女をして頬を赤らめつゝ涙を滴らさせた、

余は更に言ふた、「勿論貴嬢に於きましては、未だ私の様な怪しからん目に御逢なさいませんから、百年を隔てた昔の人で、百年の間死で居た者が、甦がへつたのを御覽じましたら、嗚々御驚きで御坐いまいよう」

娘「最初は言ふに言はれぬ程妙な事と思はれましたけれ共、熟考へまして、貴下と吾々共と位地が換つたら、如何で有ろうぞ、貴下には尙更以て妙に思はれやうぞと思ひますと、妙と云ふ氣も、變なと云ふ心も、忘れてしまひまして、斯な興味のある感動すべき事は未だ知らぬと思ひこそすれ、

決して驚く可き事とは思ひませなんだ、

余「併し乍ら私共御膳を御喰ひなさいます時に、彼は全体誰で有ろうと御不審が胸に起りますと、驚く可き事とは思召ませぬか、」

娘は答へた「イ、エ、吾々こそ貴下に妙に見へませうが、貴下は吾々に妙に見へませぬ、何故かと申しますと、私共は貴下に取ては、未だ御覽にも御聞にも成りませなんだ未來の人間で御坐いますから、斯う言ふ者と云ふ觀念が御胸に出来無い筈、愈々御覽じた上で無れば何事も御存知の筈が無いので御坐いますから、私共をば妙など御思召しても、如何にも御道理で御坐いまする、所が貴下は私共に取りましては前の世の方で入つしやいまして、私共の先祖が其時分に生きて居りましたので御坐いまするから、口碑に聞き歴史に學んで其時分の事は盡く承知して居りまするし、常々の話の間にも其頃の人の名をば澤山申して居りまするし、又其頃には如何云ふ生活をした者か、如何云ふ考へ振をした者かも學んで來ましたから、何を御意遊ばしても、何を爲さいまして、些ども驚く事は御坐いませぬ、けれども私共の申す事、爲す事は、一々皆貴下に妙など見へない者は御坐いますまい、左すれば、西様、早晩私共と狎々しく成れるのだと云ふ御心なれば、私共は最初から少しも貴下を妙など思ひませなんだのは、決して御不審に及ばない事で御坐います、」

余は言ふた「ハ、ア、私は其様な都合に考へたことは御坐いませなんだが、仰せの程は至極御尤も存じまする、成る程五十年向ふの事より千年前の事を見返へす方が易く御坐いますねえ、成程！百年と申せば、ほんに顧みると、つい近い事で貴婦の御高祖父などを存じて居たかも知れませんが、御先代は波斯頓に御住居で御坐いましたのですか、」

「と思ひまする、」

「では、確かりと御承知が無いのですか、」

「オー、左様今と思ひ出しました、全く當市なので、」

「私は當市では交際が中々廣く御坐いましたから、御先代を存じて居りまするか、存じて居ないでも、御姓名を承つたことが有たとか云ふ様な事が無いにも限りませぬ、殊に別懇で有たかも知れませぬ、若しそんな事で御高祖父などの事を委しく御話出來ると云ふ事でも有れば、何と面白では御坐いませぬか、」

娘「面白いことで御坐いますとも、」

余「私の時分の波斯頓に御住居なさいました御先代は、誰様で有たか御系圖は善く御承知で御坐いますか、」

娘「ハイ、存じて居ります」。

余「それでは何時か御先代の御名を承りませう」。

娘は混雑な青い小枝を整へることに有頂天に成て、直ぐには返答しなかつたが、段梯にどん／＼と音がしたので、誰か降りて来ると云ふことが知れた。

娘は茲に余の前の話に答へて「ハイ何時か申上ましよう」と云ふた。

朝飯の後で折戸先生は中央倉庫を見に連れて行つて悦子が先頃言て居た物品送付機關の働き具合を見せて呉れると云ふ事に成た、偕相携へて段々行く道すがら、余は言た「私が御世話に預りましてから、もう幾日も立ちましたが、客分でも無れば家族でも無く、實に奇怪千万の地位に居ります、今迄は夫れ處より未だ／＼奇怪至極な事が澤山御坐いましたから、此事は一向御話致しませなんだが、大分足が地に落付様に覺へましたし、又た如何にして爰へ来たにしろ、兎にも角にも爰に居るには相違御坐いませんし、就ては郷に入ては郷に従がうて精々都合能く行なはなければ成りませんから、今申ました私の地位の儀に就きまして御話致さなければなりません」。

折戸國手は答へた「弊宅に客分が入らつしやいます儀に付きましては、決して御配慮には及びませぬ、末長く御世話仕る存念で御坐いますから——種々御謙遜で御坐いますけれども、貴下の方

實に手許を離したく無い有益な御客で御坐います」。

余は言た「誠に多謝う、此世からなる墓に葬られながら、墓なき最後を遂げませなんだのは、全く先生の御蔭で御坐いまするが、夫程の恩人が折角御厚遇を下さいます御恩を、兎や角と氣づ／＼ながらのは誠に詰らないでは御坐いまするが、現世紀の住人と成るに就きましては、何なりとも然るべき地位を極めなくてはなりません、昔は人が浮世へ出ますと如何にして来たにもせよ、周り八方に居る喧々しい徒は誰も目を留て呉れませんが、身体さへ丈夫で有れば何處なりとも好きな所へ身の始末を付けることが出来ぬでも有りませなんだ、所が只今では國中の人が、ちやんど、一纏に組織が出来て御坐いまして、誰々は何處何役と極つて御坐いまして一人も其組織外に漏れて居りませぬ、私に致しましては、そうでは御坐いませぬ、全く組織外の繼子で、組織の中へ新たに生れて来るとか、外方の國の組織から来た移住民と云ふ資格で這入て来るとか、何れかに致しませぬば、組織の中へ加入の仕様が無い様で御坐います」。

折戸先生は、さも可笑想に笑ひながら言ふた「如何様、我國の立て方は貴下の方の様な方が降て湧て来る準備は爲ては御坐いませぬ、併し誰衆も當り前の道を外れて人が浮世に現れて来ようとは、實に思ひ掛ない事で御坐いますから、夫れも其等で御坐いまする、けれども然るべき時節が参りましたら位

地と職業とを御當がひ申ましようから、決して御心配に及びませぬ、是迄は唯だ私の妻子とばかり御交際に成りましたので御坐いまするが、貴下の事を秘め置て世間に發表せなんだ譯では御坐いませぬ、抑も御懸生の其以前から之を公にして置きまして、世人も此上無く興味を起しましたし、殊に御懸生以降は猶更の事で御坐いました、其時は何分御神經の模様も如何と思ひましたから、先づ私が當分貴下を御預り致し置きまして、廣く世間のひと御交際なさいませぬ前に、私や妻子から今の浮世の有様を荒増御話申すのが尤も上策だと云ふ相談が極まりました、夫れで社會で何を爲さると云ふ儀に付きましては躊躇も猶豫も無い、忽ち一決致しましたので、愈々私の宅を御出ましなされる曉には、貴下程國の爲めに成る立派な職務が出来る者は多と無いのです、併し夫れは未だく先きの事で今直ぐに仕様と御考へなさいますな」

余は問た「私は何な事が出来ますか、大方貴下は何か職とか、藝とか、但しは又特別の手際がある」と御考へでせうけれども、實、私は皆目無藝で、生れてから一圓の錢も儲けたことが無れば、一時間の仕事も仕たことは御坐いませぬ、御蔭で身体は丈夫ですから、並等勞働者位には成れるかも知りませんが、夫より増しな事は何にも出来ませぬ」

折戸先生の答へに「並等の勞働をするのが國に對して貴下の力に合た一番の仕事と云ふ事なれば、

そう云ふ職も有りまするし、又他の仕事同様尊敬せられますけれ共、貴下は、もつと善く御出来なさることが御坐いまする、今日の人間に取りましては、歴史の中で尤も面白ひ時代のひと申するは、第十九世紀の末つ方の社會の狀態ですが、之に關した色々の問題に至ては、貴下は直ちに今日の歴史家を凌いで其先生に成れます、そこで善い加減に月日も經て今日の社會の仕組が十分御解りにもなり、昔の仕組の事を世人に教へ度と云ふ事に成りましたら、何時でも何處かの大學の講義を御受持に成れまする、手を受けて待て居りませうから」

余の職務に付て余は先達てから心を煩はし掛けて居たので有るが、今先生が實地行なへそうな趣向を話して呉れたので、先づやれ〜と思ひながら「夫れは至極結構と存じます、果して當世の人が第十九世紀の事に興味を起して居るかとあれば、私に取りましては仕入れの仕事でして、夫れより外に私が麵包を儲けられそうな藝が御坐いませぬ、自惚では御坐りませぬ、御説の様な位地には誠に恰好な資格が有ると自ら信じます」

第十七回

中央倉庫で仕て居た所を見ると、成程悦子が先達て話した様に面白ひ完全な組立て、國中の人を組上ると勢力の効果が幾十倍になるか知れないと云ふ事が判然解る、此本部は廣大も無い機械場で、此方で列車や船舶に積んだ物品をどん／＼と大きな漏斗へ注ぎめにして居ると、彼方では何斤何匁何尺何寸何分何合と、きちんと包みに成て出て来る、出て来た者は皆な波斯頓市五十萬人の夫々の注文に一一合て居るのである、余は昔物品を賣た模様の要領を摘まんで折戸先生に話すと、先生は之を比較して、今日の立て方から大變經濟な事が生ずると云ふ事を説明した、

愈よ歸宅しようとなつて茲を出ると、余は言ふた「今日見ました事や御話下さいました見本店で御嬢様に教へて戴いたので、方今の物品送山の仕組が十分解かりましたし、交通の媒介物たる通貨も要ない様に成た譯も解りました、然る所で茲に一つ伺度きは生産の仕組の委しい所です、今日の所謂職業軍を募つたり、組分ける模様を一應御示し下さいましたが、職業軍を指圖して夫々の職業に従事盡力させるのは誰が致しまするか、何部と何部は何々をするかと云ふことを極め、精々産物を多く造らせて精々勢力を浪費させない様にするのは何な高い役人が致しますか、どうも夫れは至極紛糾錯

雜ました職務で、絶世非凡る技倆が無ければ成りますまい、」

折戸先生は答へた「否や、貴下は、そう御考ですか、夫れは決して非凡の技倆が要る職務では無い、極單純な事で、之を行なふ規則も明瞭で應用し易ふ御坐いまして、之を委任せられて居る華盛頓府の官員衆は、通例の手腕さへ有れば國民が十分満足する様な事務が取て行かれるのです、其指揮して居る機關は大きいに相違は有りませんが、其原則は理窟詰でもあり、其働きも直接で單純でも有りますから、獨りでに働きますし、馬鹿者で無れば其運轉を乱すことが出来ませぬ、是を少し許り説明致せば直ぐ御得心が參ることです、送り配りの仕組の働き矩合は略御承知に成て居る事ですから、先づ夫より始めませう、昔貴下の時分でも、統計家は國民が年々に布帛類を幾何費すか、米穀野菜を何程食ふか、靴、帽、傘を何程用ふるかを示すことが出来ました、當時も何分個人の手に生産を爲たと云ふことも有り、且つは實際上の分配額の統計を得る方法も無かつた者ですから、其數字は精密には知れませなんだけれども、中らすとも遠からざる程の數迄は知れて居るのです、今日も國立倉庫から出します一本の針も、一々帳面に載りますから、何の年でも何の月でも何の週でも、消費額は幾ら／＼、分配局の殘額は幾ら／＼と云ふことが、分厘毛の細かい所まで委しく解ります、そこで例へば一年向ふの豫算をするには、此數字を基として増たり減つたりする趨勢をも考へ、需用に影響する様な巨細

の原因をも考へて、然るべき次の手加減をして今後の供給額を極めます、唯今向ふ一ヶ年の豫算と申しましたが、是は必ず一年に限た次第では有りませぬ、需要が定まつて變らない様な主産物の場合には、一年宛に切て見積りますけれども、人民の嗜好が始終變つて新奇なものを屢欲しがると云ふ様な物品に至りましては、大概消費す次から生産して参りまして、不要物が出来ない趣向に致します、此場合には分配局は毎週の需要額で豫算を致しまして、製造部へ報告を致します、

「倍生産的及建設的に涉つた職業全体を十省に別けまして其各省には相似寄た職業を幾つも含み、其一一の職工を差配する一々の事務局が有りまして、其取締の下に属する建物、機械及職工労働者より現在の産物に至る迄巨細を記録した書類を備へ、又生産を増す方法手段も具つて居ります、そこで分配局の豫算案が行政廳へ廻りますと、行政廳は之を訓令と致して十省へ割送る、各省は又之を管下の各事務局に割送る、各事務局は愈々労働者を仕事に取掛らせると云ふ仕組ですが、何の局とても其司とつて居る事務の責任を負はねばならぬので、十省と行政廳との兩監督の下に十分の職責を盡くします、又分配局は我手で十分檢閲しなければ、事務局からの産物を受取ませんし、品物が役に立たない日には、已に買主の手に渡りましてからでも、原と何局の誰かが拵へた者だと云ふことが直ぐに知れる工夫に成て有りまして、其人の過失となるのです、國人が實際消費します物品を生産するに付き

ましては決して國民全体の労働力を擧げて用ねばならぬ事は有りませぬ、右に申す種々の職業に入用な次の労働者を割賦しました後に、殘て居る労働者は、建築とか機械製造とか土木業等の様な固定資本を拵へるのに用ひます、

余曰「も一つ充分で無いかと思はれる事が一つ胸に浮びました、と申すのは何分私人で企業する事が出来ないとする、若し世人が廣く需用しない物品を唯だ少數の人が拵へて欲しいと思ふても、其要求を聞届けてやると云ふ事は果して儘かに出来まするか、斯な事に成る度毎に、政府は多數の好まない者で有ると云ふ次の理由で、一も二も無く撥ね退けて、少數の人をして満足せしめない不都合が起りませう、

折戸先生言ふ「そんな事をするなら實に壓制です、我々に取りましては自主自由と申す事は、平等だの博愛だのと申す事と同様に貴重なる者ですから、そんな人の自由を妨げる様な事は決して御座いませぬ、もつと善く今日の立て方を御承知に成りますと御解りでしょうが、役人は人民の代理人で奴僕である云ふ事は、有名無實では有りませぬ、事實其通に成て居ますから、何品に拘はらず多少を論せず苟くも需要が續て居る限りは、行政廳は其生産を止める權利を持ちませぬ、今假りに某物品の需要が減て來て、之を生産する爲めに減法入費が掛るとします、そうすると價が無論昇らなければ成り

ませんが、消費者が高い價も顧着せずに之を買ひまする以上は、ごし／＼生産を續けます、又今假りに是迄生産したことの無い物品を需要する人が起るとしませうに、若し行政廳が果して需要の有るか無いか疑はしむ時には、斯々の理由で其品が要まると云ふことを保證した請願を人民が出しまして、政府に之を製産せしめます、昔し米國政府で致した事と思ひますが、飲食物や衣服を何々にすれば善いと云ふ事を、政府即ち人民の多數黨が一方の小數人民へ教へようとするのは、抑も以て奇怪千萬な大間違です、貴下方に言はせば、こんな自由侵害は耐へるが善いと云ふ理屈が有たでも御坐いませうが、今日の人は、そんな事を耐へる可き理由が無いと思ふて居るのです、貴下が此點に御着眼なさつたのは誠に結構で、丁度一つ御示を致すべき機會が出来ました、何にかと申しますと、今日の一個人が生産を左右する力は、十九世紀の代よりも遙に強いのです、貴下の時代には、國會に向て國政上に付き人民の私提議とか稱することが行なはれて有つたが、併し是は個人の提議でも私人の提議でも無い、實に資本主の提議で有たので、概して人民に誰れでも此提議に與かつて居た者は仲々無かつたのです、

余は「入費の掛つた品の價が昇ると云ふ事を仰でしたが、買手と賣手と競争も爲ない國で物價は如何して定めますか」と問ふた、

折戸先生は「丁度昔と同じ事で」と言たので、余は信が置けないと云ふ顔付をする、先生は尙も語を續けて言た「定めて説明の要る事と御考でも有りませうが、別段長い説明は要りませぬ、昔では物品を産する時に用ひた勞力の價が即ち物價を定める根本でしたが、今も矢張其通り、所で昔は勞力の價に高下が出来ましたのは、賃金に差異が有たからの事です、今では何の勞働者も其扶持が同じ事です、賃金で以て勞力の價を立てるのでは有りませぬ、種々の職業に由り日々の勞働時間に長短が有りますから、其時間の多少が價の大小に響て來るのです、例へば某職業が困難なるが爲に人氣を引ける方便に、一日の勞働時間を四時と致します、そうなるに其職業の勞働の價は、一日に八時間働く職業の勞働の價の二倍に成りませう、左すれば昔の様に四時間働く人間が八時間働く人間の二倍に當る賃金を得るのと比べて見ますに、勞力の價と云ふ上からは丁度同じ結果に成りませう、一つの製造品を作り揚げる諸の手續に用ふる勞力に唯今の計算法を應用しますと、此物品の價と他品の價との割合が定まります、又生産と運搬費の外に、物品の價に影響する者が御座います、即ち品物の寡いと云ふことで、寡い物程價が高いのです、生活に必要な品物は常に澤山拵へて置くことが出来ますから、そう云ふ物には品拂底と云ふことは算用の内に入りませぬ、何時も澤山剩餘が備へて有りました、假令收穫の悪い時でも、假令需要と供給の上に狂ひが有ても、之を直はすことが出来る様に爲て

有ります、斯云ふ風にして有りますから、生活に無くてならぬ品物の價は年々減りこそすれ、昇ることは稀で御坐います、併し品に由りましては常に需要額に及ばない者も有り、又た一時不足の者も有て、鮮魚とか乳、牛酪などは、唯一時足りないことが有り、又高尚な手際の要る珍奇な原料で拵へた品物などは、年中足りない者で有ります、斯う成たら如何するかと申せば、稀など云ふ不便を平均させるので、品の欠乏が唯當座のことなれば、當座だけ物價を上げ、年中のことなれば何時も高いなりに据置きます、昔高價と云ふたのは、品物に對し富人が受けた制限で有たですけれども、今は總ての人の生活費が同様ですから、金持より外に高い物品を買はぬと云ふので無く、高い物品を買ふ者は、之を最も欲しがる人に限るのです、勿論國其者は世の好尚が變るとか、順氣が悪るとか、其外種々な原因の爲めに、賣れない代物が少々持に成ることが往々御坐います、其節には丁度昔の商人が時々致しました様に、少々損をして賣らねば成りませんけれ共、何分大數の人に賣ることですから、少々位の損をすれば、之を捌いてしまふには困難が有りませぬ、如何です、今日の生産法と分配法は大略御了解に成りましたか、御案の如く込入た者で御坐いますか、

余は「是は譯り易いことは有りませぬ」と答へた、

折戸先生言ふ「昔個人が私に營んで居る職業が千も万も御座いました、其各業の頭と成て居る人

は、市價の昇降やら、競争者の隠謀やら、借主の破産やら、色々危ない事に逢はない様、夜の眼も寝ずに見張ねば成りませなんだが、之を今日華盛頓に居て、全國の職業を指揮して居る行政役人等に比べて見ると、幾ら苦しい勞苦をしたか知れませぬ、して見れば邪道を用ふるより正道を以て事を處する方が、幾ら容易いか知れぬでせう、譬へて申せば大將が輕氣球に乗りて高い處から戦場の全局を見渡し乍ら、百万の兵を運用して敵に勝つは、一軍曹が一小隊を率ひて茂林中を進むよりも仕易いのこと同じ事です、」

余は言た「其職業軍は國民の壯丁の花とも云ふ可き精銳な者ばかりですから、大將たる者は必ず昔の合衆國大統領よりも優れた國中第一流の人物に違ひ有りますまい、」

折戸先生は答へた「大將は取りも直はさず合衆國の大統領ですが、其尤も重要な職掌は、例の職業軍を統御することです、」

余は「如何して大統領を撰びますか」と問ふた、

折戸先生は答へた「前に職業軍に三級有て互に進取の氣象を持て居る事の御話を申しました節、説明しました通り、功勞ある者が段々昇進しますに、三級を越へた後が士官で有つて、少、中尉（即副長）から隊長となり、又昇て監督即大佐に成るのです、其上に組合長と云ふのが有て、一職業百般の事

務を直接に統轄しますが、大きい職業で有ると監督と組合長の間に次長と云ふ者が御坐います、組合長は一業の政府事務局長で有て、行政廳に對し其職業を満足にするべき責任を帶て居ますが、中々立派な位地なので、昔の軍務の例を引て言へば、一聯隊の長なる將官相當の者ですが、其上の位に在て尤も衆人の望を満足せしむる役は、十大省の各の頭、即ち相似寄た諸の職業全体の長です、此等の長は昔の副元帥の様な者で有りまして、其下に所屬の組合長が十乃至二十も御坐いますが、皆な部長へ一一の報告を致します、此十人の長官等が内閣會議の様な者を組織して居て、其總長たる者が即ち合衆國の大統領で御坐います、

「職業軍の總長たる大統領は、其下に在る總ての等級を盡く踏んで來ねばなりませんので、即ち並等勞動者から、漸々と經上て行くのです、其昇進の仕様は如何と云ふに、已に申た通り三級を越へて副長の候補者に成りますのは、全く勞動者たるべき成績優等ばかりを據り所と致しますが、副長から長になり、長から監督になるのは、上官が成績優秀の候補者斗りの中から精撰して定めます、組長は自分以下の者の等級を指定しますけれども、組長其者の位地は指定では有りませぬ、投票で決選します、」

「投票でとは、そう云ふ事を爲たならば、候補者共は自分より以下の勞動者を自分に加擔させる爲

めに計略を廻らす氣になつて、組合の規律が亂れはしませんか、」

折戸先生は答へた、「勞動者等が選舉權を持て居るとか、發言權が有ると云ふことなれば、屹度其弊が有りませう、所が今日の立て方に一種特別の性質が御坐います、即ち組合の名譽會員と云ふ者が有りまして、其組で服務年限を果した後、名譽の免役を受けた人々ですが、此名譽會員が監督の中から投票して組長を選びます、御承知の通り人が四十五に成りますれば、職業軍から除籍されまして、自分の勉學や休養をして優々と餘年を送ります、けれども服役中の關係は相變らず堅固に結ばれて御坐いまして、以前服役中に結で有た友情は、生涯の間依然として變ること無く、假令身は組合を退きまして、何時迄も其組の名譽會員なので、新陳代謝今は後進の者が働いて居りまして、組合の幸福と名譽に付ては、親密な關係を持て居ります、諸の組合の名譽會員が建て、居る俱樂部で會員共が親しむ會合致しますが、其處へ參ると、常々より斯云う事柄に關係した話が一番澤山でして、組合の大將に成りたい少年等は老人連に批評されますから、選舉の時分には中々人物も上がります、斯云ふ事が有りますから國家は各組長の選舉を名譽會員に委任して有るのですが、私の信する所では、昔から未だ此程善く職責を盡くす選舉者を出したことは有りませぬ、其公平無私の邊から見ても、候補者の恰好な資格を知ると云ふ邊から見ても、或は最良の結果を得たいと云ふ掛念に付ても、又私利心が

全く無いことに付きまして、

「十大將即各省長官は、其一省に属する諸組合長の内から撰挙するので、其組合總ての名譽會員が投票して撰挙します、勿論各組合には自分の組長に投票する傾は御坐いますが、何れの組合も他の大概の組合が賛成しない様な人物を撰び擧げる可き程の投票が無いのです、此撰挙は、どうも非常に活氣の有る者です、」

余は「大統領も十大省の長から撰ぶのでしよう」と言たが、

折戸先生の答へに「無い無いです、然し何年間か役儀を離れて居てからで無くば大統領には撰ばないのです、總別人が四十歳より、すつと前に省長までせり上るのは珍しい事で、省長の在職年限五年が済めば、大抵四十五歳に成て居ます、若し五年経て四十五歳以上になれば、五年の年限が済まで勤めますし、五年経ても四十五歳に成らねば直ぐに免役されます、一旦免役の人を軍隊に戻さず如きは固より出来ない事です、そう致すのです、僭免役せられましてから大統領の候補者と成る迄の年月は、一旦一般の國民に戻しまして、已に職業軍の分子では無い、寧ろ國民に成て居るのであると云ふ心を生ぜしめる餘地を拵へる爲です、且又其年月の間には、今迄支配して居た諸組合の事よりも、國內全般の事情を學んでもらい度のです、僭愈大統領の撰挙となると、以前省長を勤めて居た人物

の中から、職業軍に關係して居ない總ての人が投票して撰挙するのです、」

「職業軍は大統領撰挙の投票を許されませんか、」

「勿論許されません、元來大統領は廣く國の代表者と成て軍の紀律を維持するのが職分ですのに、軍に在る者に投票權を與へる様なことは、抑も以て紀律を紊亂する本でしよう、此の目的を達する爲に大統領が正しう棍を取て行くのは、國家の總監たる本分の職掌で、現今の立て方中の非常に重要な部分なので、品物に瑕瑾が有ることに付ても、官吏の怠慢や無能に付ても、其他公務上一般の違背や懈怠に付ても、其不平と報道が皆大統領の身邊に集るのです、併し總監は一々不平の訴を待ては居らず、一つでも職務瑕瑾の風説が有れば、透さず之を取て眞偽を糺し、又各軍を絶へず秩序的に監察しまして、不正な事があれば人に先て之を見出すと云ふ役儀を持て居ます、大統領が撰ばれる時は大抵五十歳近い齡で、在職年限は五年ですが、四十五歳で退隱すると云ふ規則に對しては、實に名譽な除外例です、僭其年限が済むと、國會を召集して大統領の報告が有ります、國會は其報告を嘉するとか、答めるとかするので、若し嘉みす可き日には、國會は此人を撰んで、もう五年間萬國聯合會議へ出て國民を代表させることにするのが普通です、國會は又十省の長が辭して行くときにも其報告を聞きますが、非難の聲が出ますと、其人物は將來大統領に撰べないのですけれ共、國民が高位の役人

に對して感謝の情を表しこそすれ、惡感を抱くと云ふことは少いのです、何様本來色々厳しい試験で以て普通の勞働者から高い地位に昇進したと云ふのは、抑も其技術が絶群で在た證據であるし、又其人の國家に忠實で有つたか如何かと云ふに付きましては、何分社會の仕組が仕組で御座います、同胞兄弟の崇敬を得たいと云ふ外に、利慾心が出さうな筈がないのですから、其忠實なる可きも道理です、又賄賂を受けねばならぬ様な貧乏人が無ければ、賄賂として遣くる様な富も無い社會ですから、賄賂を取遣りする腐敗な行は有ろう筈も無く、又た官職を得る爲めに權略や密謀を廻らすことに至りましては、昇進の條件が定まつて有ますから、此も憂ふるに及びませぬ、

余は言ふ「一つ解らない處が御座います、文學藝術等を研究する者は大統領に撰べますか、果して撰べるなれば、此等の人々は實際の職業を執つて居る者の内、何の部類へ入るので御座いますか、」

折戸先生は答へた「文學家や藝術家は職業の勞働者の類へ這入らないのです、土木家や建築家の様な工藝に關する職業者は建築組合に屬しますが、醫者に教師、美術家に文學家に職業の服役を免ぜられて居る者で、職業軍には屬ませぬ、此理由ですから大統領の撰舉に與かりますけれども、大統領には撰ばれないです、大統領の主な職務には職業軍の指揮統轄と云ふ事が有りますで、大統領たる者は自分の職掌を十分了解せねばならず、就ては總ての等級をすつと通つて來ねばなりません、」

余は問ふた「それは御尤の事と存じます、併し醫者や教師は職業を十分知らないから、大統領に成れないと云ふことなれば、大統領も亦た醫學や教育を十分に知らないから、其部類に屬する者を指揮することが出來ぬ筈では有りませぬか、」

折戸先生言ふ「違ひ有りませぬ、大統領は總ての部類に對して法律を實施する責任を持つて居りますのみで、其外に醫學や教育の能は入用では有りませぬ、此等の事は夫々管理局が有て指揮を致しますが、大統領は其管理局の役員の長と云ふ資格で有て、決選投票權を持つて居ります、其役員は勿論國會に責任を負て居まして、教育組合及醫學組合の名譽會員と退隱して居る教師及醫師とが撰びます、」

余は言た「組合を退隱して居る會員が投票して役員を撰ぶ方法は、昔し我國の高等教育に關する協會や、學校で往々少し行ふて居た同窓會員の撰舉法が有りましたが、夫れを大仕掛にして國中全体に用ひた丈の事で有ります、」

折戸先生は活氣を加へて「それで御坐いましたか、夫れは耳新しひことで、私ばかりで無い、大概の者が知らぬ事で、大層興味の有ることです、一体此撰舉法は何時頃から始まつたやうと段々研究したのですが、全く天下に斯様な法が一朝新に起つた者で有ると思ふて居ましたが、成程如何にも！昔の高等教育の學會などで！左様ですか、夫れは、どうも興の有ることです、夫れに付て、もつと承

はらねば成りませぬ、」

余は言た「否、申上た位な事で、其外別段御話申す程の事も御坐いませぬ、假令吾々時代に始まつたにしろ、必竟芽位な事で御坐いました、」

第十八回

其夜婦人共が退て了つてから、尙ほ暫時折戸先生と椅子に凭りながら、誰でも四十五歳を超へたら何にも用事爲すに自由にさせてやる趣向で、如何な結果が起る者かを話して居た、此は先生が、退隠した人は政府で職務を持つと話し出したから起つた論點で有つた、

余は言た「人は四十五歳に成つても未だ十年位は十分勞働する事が出来するし、智力に係つた用事なら二十年位大丈夫出来ます、然るに四十五で老老にして之を高閣に束ね置くと云ふのは、屈強な人間に取つては、有難い處では無い、却つて辛い事で御坐います、」

折戸先生は目を光らして余を見ながら「これ、西様、第十九世紀頃の了簡は、今日の人に取て苛剥千萬な者で、奇妙無類の結果が出来る者ですよ、貴下は世を異にした人種の中へ来て未だ小供同然の人だが、まあ能く御聞なさい、成程今日の人は何がな國の爲に成れかしと力を盡くして、愉快に生計が出来る資料を働き出しては居りますが、此は決して我々の力に叶ふ尤も重要な尤も興味ある尤も高尚な勤勞では有りませぬ、此外に智力上や、精神上の娛樂とか、研究とか云ふ様な結構な事が有りまして、所謂生活とは即ち此娛樂と研究とを意味した者で有ります、斯う云ふ風に吾人の才能を高尚

な方に用ふるのが終生の目的ですけれども、専心之に従事するに就きましては、先づ衣食住が先だちますから、身体を勞して國に盡くすと申すのは、必竟此目的を達する迄に豫め致して置かねばならぬ義務で御坐います、そこで何を致すに付きまして、辛苦勞力を公平に分配して平等に致しまするし、精々退屈な勞力を軽減する爲に色々な誘導法や獎勵法を用ひますし、彼と此と相較すれば、いざ知らず、左無れば退屈で無い様反て、眞精神を慰むる様に何の職業も致させます、けれども人間生存の主眼たる要務は吾々の勞力では有りませぬ、更に高尚な更に廣大な働が御坐いまして、各人は各人の勞力を果しさへすれば、自由に此働きを、することが出来るのです、

「科學的や、美術的や、文學的や、博物學的の興味を持て居る人に取りましては、閑暇の時間ほど結構な者は有りませんが、斯云ふ興味は勿論人民皆が皆迄持ては居ませぬ、否な半分丈も無いので、多くの人は貴重な生命の後半は旅をして遊ぶとか、竹馬の友と交て心を慰めるとか、自分が天有の特性や嗜好を縦にして所有遊樂をするとか云ふ様な娛樂に用ふる時代だと考へて居ます、詰まり申せば、世界に存する諸の結構な物を造るに當て、我も其一分を手傳ふたのであるから、今よりは優游自適して其間に遊び其美を賞して殘年を送らうと思ふ香氣な人が澤山有ります、併し我々が閑暇の時間を何事に用ふるかと云ふに至りましては、各人の間に好む所が同じふは有りませんが、如何程達て有るに

しても、何れも皆どうか早く免役の日が来る様に、指を折り頸を延ばして待て居りますので、生れながら天より與へられた十分の娛樂を盡くすべき時が早く來れかし、成熟期に達して生計の扶助料を受け、紀律と命令を免れて自由閑散の地に遊ぶ可き時が早く來たれかしと、四十五春秋の經つのを待ちこがれますは、丁度昔の童兒が廿一才丁年の時を待たのと同じ事です、今日の人は廿一才で、一人前に成りまして、四十五才に成ると再び少年に立戻ります、そこで中年と昔老年と云ふた年とは、今では少年時代よりも生涯の中で人の甚だ羨む時代です、そこで生活の境涯が昔よりも善く成て居る故でも有り、殊には又人々が心配を爲ない故で、昔よりも老境が遅く成りまして、容貌もすつと若く見へます、通例の體格の人ならば八十五才か、九十才まで生きるのが一通りで、四十五歳の人でも昔の三十五歳の人より身体も心も兩方ながら若ふ御坐います、今の人は四十五で生涯の中で尤も羨む可き時代に成りかけて居るのに、貴下は早や老耄て來る様に考へて、若い昔を顧みる思をなさるとは、偕ても妙な事です、譬へば昔の人は正午が血氣盛りで有た様な者、今日の人は午後が血氣盛りで御坐います、」

爰に話が枝葉へ行て、兩人は現今の人民の遊戯娛樂に付て話し、第十九世紀の時分のご比較をしたが、

折戸先生は言ふた、「一處非常に遠い處に御坐います。昔は遊戯をば職業にする者が有りましたが、今日は、そんな、妙な者は有りませんし、角力取は褒美を競ひますけれども、昔の様に金錢を褒美に致すのでは無く、何時も名譽を得る爲めに競ひます。又諸組合同志も金錢物品を貪る様なので無く、名譽を得ようと云ふ心より競争が有り、又た勞働者は皆自分の組合に忠實で、我會社の名譽に成る様に骨を折りますから、海陸兩方で難多の遊戯や競争が常々獎勵せられて、現在勞働する青年輩から已に退隱した名譽會員に至る迄、等しく興味を以て之を致します。來週には丸振岬の沖合で組合の遊艇競争が有りますが、其節之を御覽じましたら、斯様な時に一般人民が熱心になるのは、昔に比ぶれば、どれ程と云ふ事が解りませう。昔時羅馬の平民が飯と競馬遊を得んことを欲しましたが、今日より見れば誠に尤も至極な事で有ります。若し飯が生命の第一欠く可からざる物であるとするなら、遊びは第二とは下だらぬ必要なことで有て、國民には此二つの者が備はらねばなりません。第九世紀の米國人は此必要な者を兩つとも欠て居ましたから、誠に不仕合な者で、假りに今日よりも閑暇が澤山有たとしても、其閑暇を愉快に過ごす方法を知らなんだのです。今日の人は決して斯かる不幸な有様に陥ては居りませぬ。」

第十九回

或る日、朝まだきより散歩をして居る時に、チャールズタウンと云ふ處に行た、實に筆紙に盡せない程大變化して、如何にも百年経た事が知れるが、殊更目に留つたのは、昔の監獄がすっぱり無くなつて居た事である。

朝飯の時に余は監獄の無く成て居る事を一寸話で見ると、折戸先生曰く、「監獄は私が生れない先に無く成りましたので、小供の時分に其事を聞た事がございます。今では牢は入用でありませぬ、遺傳病が有れば病院で之を扱ひます。」

「遺傳病とは？」と見つめつゝ、余は聲を揚げた、

折戸先生は答へた「左様です、そう云ふ不仕合せな者を刑罰に逢はせると云ふ了簡を棄てましてから、少くも五十年——いや、もつとも成りませう。」

余は言た「どうも能く解りませぬ、昔遺傳病と申すのは、遠き先祖の性狀が著しく子孫に舞戻て來るのを指た者ですが、今では罪過をば先祖の性狀が回歸した者と見て居るので御座いますか。」

折戸先生は滑稽半分謝り半分と云ふ笑顔で言た「此は恐れ入りましたが、向付けに御問ひなさいま

した者ですから、事實其通りですと申さなければなりませんね、」

余は既に十九世紀と二十世紀との道義上比較を教へられたのであるのに、今更の様に此點に付感動を起すは、抑も不道理千万であつた、そうして若し折戸先生が言譯けの様な口調で話したり、又其夫人と娘も稍や氣を揉んだのであつたが、そう云ふ事が無かつたならば、余も自分の不都合に氣も付かずして、赤面する事は無かつたであらう、

余は「私は十九世紀を誇る氣遣は、たいして無いのですが、併し實に」と云ひ掛けると、悦子嬢が横合から「西様、唯今が貴下の世でございます、貴下が生きてござる時ではございませぬか、私共でも全じ事で、私共が生きております時でございますから、之を私共の世と申すのでございます、」

余は「御教示の程有難う存じます、以來左様に心得るでございましょう」と云たが、不圖目と目を見合すと、嬢の目付は忽ち余の心の混亂を押静めた、余は笑を含みながら再び言た「私はカルビン教と申しまして、先祖なるアダムとイブが罪を犯したが爲め、未來永劫子々孫々に至るまで、皆生れながら先祖の罪を譲り受ける者であると云ふ事を教へます宗教の家柄に育て上げられたのでございするから、罪過は先祖の性狀だと云ふ説を聞いて驚くべき筈ではないのでございます、」

折戸先生は言た「實は今日の人が遺傳病と云ふ言葉を使ひまするのは、決して貴下の時代——又悦

子に叱られるか知りませぬが、免しなされや——貴下の時代を罵詈するのでは有りませぬ、何でも彼でも惡ひ行なれば皆之を罪過と申しましたが、段々考へて見ますと、所謂罪過なる者の内で大丈夫二十分の十九までは各個人の所有物が平等で無い所から湧て來ましたので、貧乏人は物の不足なるが爲めに盜む心が起りまするし、有福者は未だく利益を得たいとか、以前手に入れた利益を護し、いとかで道ならぬ道に迷い入たのでございます、當時金ほど結構な者はないと成て居りましたから、金が欲しいと云ふ慾が、直接なり間接なり罪過を犯す原因となりまして、其害毒の蔓るのは實に恐しい者でございました、此慾は昔時の文明を妨げて進歩せしめない様にした者なので、法廷や警察の力で段々其害毒を防がうと致しましたけれども、迎も甲斐が無かつたのです、其後國家に人民の富を委託して天下の万民に必ず豊富な扶助を與へると云ふ立方に致しまして、一方には貧富に苦む民の無い様に受合ひ、又一方には財物を積上る者の無い様にしましたから、古へ會て社會を荒した害毒の根は全く切り去られて痕跡を絶てしまいました、昔でも利慾心から起るのでなくして人を害する亂行が有りました、割合に少なうございまして、大概皆無智蒙昧の不人情者に限て居りました、然るに今日は教育と禮讓とは少數の富者の専有物でない、天下万民が盡く之を持て居るので御坐いますから、そう云ふ殘忍兇惡な行は、風の便りにも噂を聞きませぬ、罪過の代りに遺傳病と云ふ言葉を用ふる譯

は即ち此處なので、殆んど總ての罪過は本心から出た者ではない、皆先祖の潜性狀が回歸して外に現はれたのでございます、昔は何しろ正しい理由もなくして物を盗むのを指て竊盜病と云て居りまして、愈々其病の患者に相違ないと思ふようになります、普通の竊盜と同様に之を罰するのは無理だと思ふのでしよう、そこで今日の人が遺傳病の患者に對する態度は、恰度昔の人が本物の竊盜病患者に對する態度と同じ事でありまして、可哀想な憐れみを加へ呪と束縛はしまするが、温和に取扱ふのでございませう。」

余は言た「今日の法廷は用事の無い氣樂な者でございませう、私有財産の葛藤も無ければ、商取引で互に争ふ事もなく、配分するべき産業も無ければ、取り立てるべき負債もなし、法曹は全く職務が無いでしよう、又所有權の侵害も無ければ、僅かの大頭株が威力を以て罪狀を構成して私を營むと云ふ事も無く、裁判官も辯護士も殆んど無くても宜ふございませう、」

折戸先生は答へた「如何にも辯護士は置きませぬ、大体國家は果して罪狀ありや否や原被何れか直なりや曲れりやを發見せんとする場合に、他人が其調べに携つて事實を曲げたり潤色するなんかは、甚だ以て然るべき事では有りますまい、」

「では誰が被告の罪狀を辯護しまする、」

折戸先生曰く「被告が果して罪人であれば、辯護も杓子も要ませぬ、大概自から罪惡を犯した事を白狀しまする、被告の辯論は昔の様に形式のみに止まつた者では有りませぬ、夫れが訴訟の結末なのです、」

「夫では無罪だと辯解すれば直に放免すると云ふ事でございませうか、」

「否やそう云ふ事ではございませぬ、元來些細な理由で告訴する事が有りませぬが、被告が若し我罪ある事を承知しませぬ日には、もつと之を審問致すのですけれども、審問と云ふ事は餘り多く無い事で、大抵有罪者は我罪を自白致し、若し虚偽の申立を致した揚句に、其有罪な事が明かに成りますと、其罪は倍になります、所が其虚偽と申す事は、人の甚だ賤む所なので、罰を免れる爲に虚言を吐く様な犯罪者は少なふございます、」

余は感服して言ふた「夫れはごうも今迄承ました御説の内で感服至極の事でございませう、若し果して虚言を吐く風が無く成た致しますと、豫言者の豫言中に謂てある『正義の行はる、新乾坤』と申すは全く今の世界でございませう、」

折戸先生は言た「實はそう云ふ風に信する人もございまして、最早大御神の直きく治世す福千年の御世に成たのだと申して居りますが、其理論は随分感服すべき所がございませう、併し貴下のように

虚言が無くなつた浮世を見て御驚きに成ると云ふ筋は無い筈なので、昔でも紳士淑女の間には虚偽が行はれなだのではありませんか、抑も恐るゝが故に虚言を吐くは卑怯者の隠れ道で、瞞着の爲に虚言を吐くのは詐欺の計畧でございます、貴賤貧富の不公平が有たり、財物も得たり慾心が有たりしますから以て虚言を吐くのが常も利益に成たのでございますが、其時分でも他人に對して恐るゝ所なく、他人を瞞着する心もない人は、虚偽をば賤し疎んじたのです、然るに今は各人皆社會に均一な位置境界に居りまして、人に對して恐るゝ所を知らず、人を欺て財物を奪ふこと能はざる世の中でございますから、虚偽を侮り賤む風は天下一般に成りまして、他の點では罪人である者さへも、虚言を吐く事を好まないのです、併し夫れども無罪でござると反覆辨解致しまする節には、裁判官が自分の同僚二名を指定しまして、証案の兩面を陳述させまするが、若し斷案が正しいと云ふ事を兩人共に同意しなければ、更に繰返して審問しまするから、昔し人に雇はれて居た辯護人や檢察官の様に無罪有罪を決する様な者とは大に違つた者でございます、自然何れか一人の調子が變で依怙的の氣味が有りましたら、其時こそ大耻辱でございまして、天下の人に爪弾きをされます、

余は問た「では何ですか、訴訟を聴く者も裁判官、訴訟の兩面を陳述する者も裁判官だと云ふ事ですか」、

「如何にも御説の通りで、裁判官は法官の席に就て判決する役も致せば、狀師の席に就て辯論する役も致します、そうして假令辯論する時でも又判決する時でも、均しく裁判官らしき性情を失はぬ様に望むのです、此は詰り訴訟に付て色々違つた見解を持つて居る裁判官を三人寄せて審問すると云ふ方法なので、三人共に同じ斷案を下しますと、先づ此で事實の正鵠を得た者とせねばなりません、

「それでは陪審官は無いのですか、」

「そう、昔は辯護士は金で雇はれて來ます、法官は往々賄賂や金で靡かせると云ふ様な敗徳が行はれて居りましたから、其腐敗を矯正する爲に陪審官を置たのも宜ふございしますが、今では公道と云ふ事はばかりで裁判官が働いて居りますから、陪審官の必要は有りませぬ、」

「法官を撰ぶのは如何して致します、」

「總ての人は四十五才で免役されると云ふのが規則ですけれども、法官と云ふ者は名譽な除外例でありまして、四十五歳に成た人の中から必要の人数だけ年々大統領が指定致しまするが、指定される人数は非常に少ふございます、其名譽は中々高ふございますから、服役年限が延びまするけれども、名譽で差引が出来まするし、指定せられたのを辞つても宜しいけれども、そんな事をする者は珍ふございます、其年限は五年でございまして、再撰はせられませぬ、高等法院は國の憲法の保護者で有

りまして、其法曹は下位の裁判官の中から拔擢するのですが、若し欠員が出来ますれば、下位の法官の中で其年に満期に成る者等が寄りまして、跡に残て居る同僚中で一番適任らしい者を推薦致します。」

余曰く、「法官の學校ともなる様な法律業がありませぬから、法律學校から直に法官に成るのでしよう。」

先生は笑ひながら曰ふ、「なに、法律學校と云ふ様な者は有りませぬ、法律を以て一の専門學科とする事は今は無いのです、昔の社會は自然の理法に従て組上た者でなく、人間が勝手に作爲して精微複雑な秩序にしてありましたから、性理を以て是非曲直を決する事が全く妨げられてをりました爲に、法律と云ふ専門の學科を拵へて善惡臧否の疑を決する趣向で有たのですけれども、今では極明かな極簡単な法訓が少しばかりございますのみで、今の浮世の有様にすつかり應用が出来ます、今日は實に夢に見る華胥の有様で、人間相互の關係の簡單な事は、中々昔の較物には成ませぬから、昔の裁判所の判事や辯護士の様に毫髮の差も分割釐析するほどの専門家の入用はございませぬ、併し乍ら其入用が無からと申して、此等の古賢を侮り賤むのではありませぬ、昔の所有權の紛錯した問題や、商業上人事上の亂麻の如き關係を、詳に了解して其説明が出来た先生方を、今日の吾々は實に畏敬致す次第です。」

第です、と申すのは、原被兩造をして其判決の理由を荒増なりとも會得せしめる法學家を拵へる爲に、天下の學者の智囊を絞つて、其腦漿で一専門科を立てなければ成らなんだと申すのは、是即ち當時の社會が人爲的に紛糾錯雜な者で有たと云ふ尤も屈強な證據でございましょう、今日博物館へ参りますと、貴下の時代に居た法律の大家の手に成た法學書が棚を壓して並んでございまして、英國の「ブラックストーン」全「チツヂー」又米國の「ストーリー」及び「バーソン」の著書が厭が上にも澤山ありますのみならず、其横には蘇格蘭の神學者「ダuns、スコタス」氏や其學派に屬する哲學家の墓が並べてございまして、何れも當世の人がもはや興味を起さない學問に向て精微な智力を注いだことを示す珍しい紀念物でございまして、今日の法官はそんな者が要ない、年齢を取て廣く物事を知り分別ある謹慎な人物で有たら足るのでございまして、

「下級の裁判官が持て居ります重要な役目に就て一言致しましょう、此は職業軍に屬する者が役人の不正や不公平に對し不服を鳴らす事が有りますと、其訴訟を判決するのでございまして、斯云ふ問題は唯一人の判事が裁決しまして、上告も控訴も致しませぬ、三次の判事が要る事は、もつと重大な訴訟に限ります、職業の効果を著しからしめるに付きましては、勞働軍の規則を振肅せねばならぬのは無論でございまして、勞働者が公平謹慎に待遇される爲には、國民が全力を盡して尻押を

致しまする、尤も役人は指圖をする、勞働者は之に服せねばなりませぬが、最下等の勞働者でも威力で押へ付ける様な權は如何なる役人にも無いので、苟も役人たる者が公衆に對して無情な事や粗暴な事を致しませうなれば、夫れこそ早速處罰を受けなければ成りませぬ、そこで社交万般の事に於いても、公正を守り禮節を重なる様にするのは、裁判官の役義でございまして、勤務上如何程立派な功績を現はしましても、粗暴や乱暴な事を致せば、直に其者を裁判に廻はしまして、微塵も假借致しませぬ。」

先生の話中に不圖思ひ起した事が有る、今迄國民全体の事は段々聞たけれども、本々米國には幾十州有て、一州毎に獨立の政府が有たのであるが、此州政府の事は未だ一寸も聞た事がなかつた、そこで余は問た、「一國を一經めにして職業軍を組織しましてから、各州は無くしてしまひましたか、」

先生言ふ、「勿論そうしなければ成らぬのです、職業軍は本來國の神髓で、全國皆一様に成らなければならぬので有るのに、州廳を置きましては、軍の統轄と紀律とに嘴を容れて滅茶々々に成りませう、且や又今は昔と違て、政府の仕事が非常に簡略に成たのですから、假令州廳を置いて外に都合が悪いと云ふ理由が無いと致しましても、之を置くのは餘計な事でございまして、政府の仕事が簡略に成つたと申しまするのは、今日の行政廳は全國の職業を指圖するのが殆んど唯一の職務でございまして、古來

政府が掌てをりました目的は、最早存しては居りませぬ、陸軍も無ければ海軍も無い、從て又軍の組織も無い、國務省も要らねば財務を支配する世話も要らず、國稅だの租稅だのと云ふ事務も無ければ、收稅官を置く必要も無い、唯だ裁判向の事はかり残て居りまして、政府の本分の職務と成てあります、又已に御話申上りました通り、裁判所の構成も昔の尤大繁雜な者と比べますれば、實に單純でございまして、罪を犯す者も稀なれば、犯罪の方へ誘はれる者も稀でありますから、裁判官の務も輕くなれば、警察官の數も務も極めて少ふございまして、

「併乍ら各州の議政院は無く、國會は五年に一度集る位な事で、法律の制定が如何して出來ますか、」

折戸先生言ふ、「法律は制定致しませぬ、致しませぬでは有りませぬが、殆んど致さないのと同じ事で、國會が召集されまして、何か重大な法律を新規に議するは珍しい事で、急に爲ねば成らぬと云ふ事で無い時は、次の國會に向て斯々の新法を議しては如何と推舉する丈の權があります、一寸御考へに成れば解る事です、何か法律を拵へねばならぬと云ふ事が無く、社會を築き上げてある根本の道理が道理で有りますから、昔の様に又しても法律の制定を促がした争や不和がございませぬ、

「昔の法律を見ますと、百の中九十九は私有權と云ふ者の定義と、之を保護する事と、賣主買主

の關係と云ふ事に關係でございましたが、今では一個人の身に屬してをる所有物を除けますと、私有財産と申す者は有りませんし、賣買と云ふ事も有りませぬから、昔の人になくてならなんだ法律制定の場合が、今は九分九厘まで無く成てしまいました、昔の社會を譬て申せば、一つの金字塔即ち大きな四角錐体が倒まになつて、其頂の一點で直立して居る様な者で、其危ない事は累卵どころの騒ぎでは無かつた所へ、しかも人間は生れながら希望を満足しよう云ふ熱情が有りますから、此熱情が重力となりまして、動もすると倒に成た金字塔を顛覆そうとしてをりました、元來金字塔は堅になればチャンスと立つ事が出来するが、何分倒まに成てをるから堪らない、其儘にして置けば必ず顛倒を免れませぬ、そこで法律と云ふ支柱や楔を澤山持て來て顛覆を防ぎましたので、中央國會と十個の州會とが、年々凡そ二萬條の法律を作り出しました、けれども倒に成て居る金字塔は何様怪しからぬ重い量で引張りますから、古い法律否な支柱は絶へず壞れて役に立たぬ様になりました、新規に拵へた二萬の支柱を古い者にかへても、逆も追付きませなんだ、今日は幸に其金字塔否な社會が眞直に堅に立て、泰山の安きに居りますから、人間の手で拵へた支柱否な法律は必要でございませぬ、」

「併し中央政府の外に市役所位は御座いましやう、」

「それはございます、此は公衆の愉快や遊樂を謀つたり、村落都市の改良や裝飾を謀る爲め、心を配ると云ふ肝腎な廣い役目があります、」

「所が人民の勢力を左右し之を雇ふ金銭も無いのに、如何して物事が出来すか、」

「市町村は皆自分の處の公共工事をする爲に、其人民が國家に貢獻する勞力の幾分を使ふ權を與へられて居りまして、何なりとも爲たい事に用ひられます、」

第二十回

其日の午後の事、悦子は偶然余に向て余が見出された地下の部屋を見に行た事があるか無いかを尋ねた、

余は答へた「否や、未だです、實申せば今日迄あの部屋を見に行き兼ねて居たのです、昔の事を種々思ひ浮べて、折角落付て居ります心が又もや亂れはすまいかと存じまして、」

娘は言た「ア、成程、ようこそ見に御越しなさいませなんだ、そう無ければ成らない筈でございましてねえ、浮かりと詰らない事を申し上げまして、」

余は言ふ「否え、善くも言て下さいました、そう云ふ心配は必竟初め一兩日だけの事であります、御蔭様で今では此新しい世界に足も落付ました、貴娘さへ一緒に下さいましたら、今日の午後でも一度行て見たいと存じまする、」

娘は暫く掛念の様子で躊躇て居たが、余が真氣に成て居たからして、到頭一緒に行てくれることと成た、花園を眺めると、堀上た土で樹木の周りに土堤が築き上てあるのが見へて、一走りすると直に現場に來た、余が土中から見現はされた爲に、仕事が中止せられて居て、何も彼も其儘に成て居る様

子、唯だ入口の戸が開けて有て、屋根にしてあつた石の板は除けて有た、掘回めた處の斜に傾てある側を下て戸から室内へ這入て見ると薄暗ふあつた、

と見れば百十三年の昔の夕まぐれに見た通り、何も彼もチャンと備つてあつた、余は物をも云はず稍暫く身邊を見廻してをる、娘は怖そに氣の毒そうな顔付で忍び目に余を窺てをる、余は手を娘の前に差出したが、娘は其手を余の掌に載せた、余は其手を握て見ると、柔かな優しい指も亦た之に答へて余の手を壓す様子で有た、良あつて娘は囁き聲で「もう出る方が善くは有りませぬか、餘り長居なさいましては宜しうございませぬ、何と妙な様に思召ませう、」

余の答「否や、妙には思ひませぬ、そこが余程妙です、」

「妙に思召ませぬか」と娘は應じた、

余は答へた「左様ですとも、茲に參りましたら私は定めて妙な感動に打たれるだろうと貴娘も御信じ成さいましたし、私始め左も有るべしと存じて居りましたが、一向そんな感動も起りませぬ、如何様身廻りの物を見ますと、昔の事共が瞭然と胸に浮びまするけれども、案じて居りました様に心は亂れませぬ、實に妙な事で、貴娘どころか第一私が驚く事なのです、先達而の朝私が狂氣半分に成りました時に、助けに御起し下さいましてからは、又候落付た心が動亂してはと存じまして、成る

可く昔の事を思はない様に致しましたが、丁度此處へ來ない様に致したのも同じ譯でございますのに、別段昔を偲ぶ心も起らぬとは實に妙です、譬へば手に傷した者が大層痛かろうと心配して、其手を動かさない様にして居た所が、試しに一寸動かして見ると、痲痺れて居て痛く無かつたと云ふ事がございますが、丁度其れと好く似てをりまする。」

娘曰く「昔の記憶が御無くなり成たと申す事ですか、」

余は答へた「決して左様でございませぬ、昔の事に關係してをる事は一々覺へて居ますが、鋭い感動が少しも起りませぬ、昔の事は中々忘れて居ります段か、たつた一晚しか経ない様に思はれて、瞭然と記憶して居りながら、之を思ひだします心持は一向平氣でございまして、百年の歳月が経たのだと思ふて見るばかりで無く、事實其通りで有る様な心地が致しまする、と云ふ譯は箇様でしよう、何分唯今の世界の模様が變て居ります爲めに、年代が大分経て居ると云ふ事が解かり、從て過去の事がズット遙かな處に在る氣が致すからで御座います、始め私が失神の有様から氣が付きました頃は、昔の事がつい昨日の事の様に見へましたけれども、今日身邊周圍の万象が新しく成つて居る事を知り、恐しい變化で世界が變たと云ふ事を覺りましてからは、成程百年の間眠つたのだと思ひ易ふ成りました、貴嬢は四日の中に百年を生きたと云ふ様な事が考へられますか、私に致しましては、自分が實際

百年の間生きましたので、曾ての事をズット遙かな事の様に虚言の様に思はれまするのも、自分が親しく経験して來ました故でございます、」

娘は暫し思に沈んだ後「ハイそう考へられまする、そう考へられまするのには誠に有難い事で、貴下の御心の苦を御救ひ申す事が出來まする、若しそう考へられませぬ日には、貴下の御心に同情を寄せて思ひやると申す事が十分出來ませぬから」と言た、

余が心の奇態な有様を一つは娘へ説明する爲なり、一つは自分の心へ説明する爲に、余は斯く言た、「今假りに人が故郷から他國へ行て居る間に、妻子とか父母とかを失ふた事も知らず、幾十年の星霜が経て後に其事を聞いたとせませう、其時其人の心は如何で有りましよう、定めて私と同じ様な感じが起りますまいか、私連も昔の朋友を思出したり、朋友が私の爲に悲しみ歎いてくれた事を考へて見ますると、唯何となく憐れな心持を催しまする斗りで、長い以前に過去た悲の事ですから、痛恨悲哀に堪へぬと云ふ事はございませぬ、」

娘は言た「貴下は未だ御朋友の事を仰やりませなんだ、定めて貴下を御悔み申した方が澤山ございませう、」

余は答へた「否や、御蔭で親族は極僅かで、從兄弟しか近い身内はございませなんだ、所が茲に親

類では有りませぬが、血の係つた者よりも私に大事の大事の者が一人ございました、それは女で貴嬢と同名でした、追付私の妻となる筈でございましたのに、嗚呼可哀想な事を致しました、」

娘は余の側で溜らいながら「ア、く御氣の毒な事、定めて貴下を懇慕して御愁傷でございましたらうに」と言た、

此優しい少女が余の爲に深い歎きを懷て呉れた爲に、今迄癒れておつた胸が再び鳴り出した、前刻から涙一滴落さなんだ程強かつた余は、潜然と涙の迷しるのを止め得なんだ、稍あつて心が漸く平和に復したが、今度は悦子も當りを憚らず我を忘れて泣いた、

余は言た「ようこそ優しく思ふて下さいます、其悦子の書像を御見せ申しませうか、」

余は平生から可愛い服部悦子の書像を小さい飾り釦子の中に嵌めて、金鎖で頸の周りに掛けて居たが、百年餘の睡眠中も依然と頸に纏て胸の上に在た、余は之を外すして悦子嬢に開けて見せたが、娘は熱心に之を取て、長い間其可愛らしい面を眺めて居て、遂に其唇を畫に觸れて接吻した、

娘は言た「ほんに善い可愛らしい方で、此なら如何にも御泣遊ばすも御尤ですけれども、此奥様の御愁傷は遠の昔に済でしましまして、今頃は天國に御居でなさいませう、」

如何にも其通りで、一時は前の悦子の愁傷が如何斗で有たにもせよ、今は早や泣き止でから殆んど

百年を過ぎ、余の感情も薄げば涙も枯れ、前世は此上なく可愛くあつたが、願みれば已に遠き百年の夢であつた、斯く言へば薄情な男だと思ふ人も有ろうが、誰も全じ境界に成た事が無いから、實際如何な情操に成る者か、本に判斷出来る人は無からう、偕て愈々地下の室を出掛くと、一隅に据て在る大きな鉄の金庫に目が止つた、余は悦子嬢の注意を催しながら「此は私の寢部屋なり且は安全室でございました、あの金庫の中には幾千弗の金貨や多額の證文が入れてございます、あの晩目を閉ちます時分に、百年も眠る事を存じて居りましたにしても、黄金と云ふ者は結構な者で、假令何時の代に成ることも、何處の端へ行ても、身を保護する必要物だと思ひ、其購買力を失ふて三文の直打も無い様に成る時節が来ることは、滅想思ひ初めなんだ事です、所で物は變れば變る者、今度目を覺して見ますと、全くの新世界でございまして、其間へ車力一杯の黄金を擔ぎ込でも、麵包一切も買へませぬどは」と言つたが、斯くあらうと思ふて居た通り果せる哉此事の中々意味深長な事を悦子に思はせる事が出来ずして、娘は唯「全体何故黄金で物が買へますものか」と手軽く答へた斗りであつた、

第二十一回

前日折戸先生は翌朝當市の諸學校を見に連れて行て、第二十世紀の教育の立て方に付て説明する由を言つて居た、

借翌朝飯を食てから二人で出掛たが、先生は言た「今日御覽に成りましたら分る事ですが、今の教育法は昔のに比べると大層違ふ處が澤山ございます、其重なる相違は何處であるかと申しますと、昔は高等教育を受ける機會を持て居た人は極めて僅か斗りしか無かつたのですが、方今では天下の人が均しく之を受けて居ります、此の如く教育上にも平等と云ふ事が有りません時には、幾ら肉體の愉快を平等に致しましても、益を得ると云ふ程の事は無かつたと吾等は存じます、」

「大層入費が掛るに違ひないでしょう、」

折戸先生は言た「假令教育の爲に國家の歳入半分を費すに致せ、乃至殆んど歳入の全部を費して配分額が爲に乏しう成るに致せ、誰も教育を捨てる事を好まないです、況してや一万人の青年を教育するには、一千人を教育するよりも其入費は十倍も五倍も掛りませぬ、何事でも大仕掛ですれば、小仕掛でするより割廉に付くと云ふ規則は、教育に於ても然うで御座います、」

「昔専門の學校で教育を受けるには、減法界に高く付きました、」

折戸先生は言た「私が歴史で讀ました處で見ますと、専門學校の教育費が高く掛たのでは有りませぬ、専門學校でバア／＼金を遣て法外な事をするから高く掛たのだそうで、其時分の學校の實費は極廉で有た様に思はれまするし、別して學校の受けて居りました保護がもつと厚ふございましたら、未だ／＼廉で有たでしょう、今日では何んな教師でも皆他の勞役者と同額の扶助を貰て居りますから、高等教育を受けますのも、下等教育を受ける程に廉でございます、今から百年以前磨佐中攝州で義務教育と云て、厭でも應でも十四五歳までは小學校教育を受けさせる事が流行で有りました、今其上に六學年を加へて、二十一歳迄教へまするが、其間には昔の人の所謂紳士の教育と云ふ者を與へまする、昔は子弟が十四五歳に成て漸く讀み書や乗算九々位しか支度が出来ておらないのに、世の中へ放り出した者です、」

余は言た「六年間教育年限を増すが爲に要する實費は扱て置き、學問を授くるが爲に職業の時間を損す事は昔の人に出来ませなんだ、昔は手許の貧しい身柄の子供等は、十六歳か未だそれよりも以下の年から勞働に従事するのが通例で、二十歳にも成れば一人前の仕事も覺へたのでございます、」

折戸先生は言ふ「そんなに教育を踐み付けた仕方では、物質上の產物から申しても、利益があると

は言へませぬ、況てや物質以外の點から考ふるに於てをやです、極賤劣な類の勞働はいざ知らず、其外の總ての勞働に對して、教育と云ふ者は非常に効果が有る者でございますから、教育を受ける爲に費した年月位な事は暫の内に償ひます、」

余言ふ、「高等の教育は心を使ふ職業に間に合ふ人物を拵へますけれども、總ての手藝をするに間に合はない様になりはせぬかと云ふ掛念を昔の人は懷いて居ました、」

先生言ふ、「昔の高等教育はそう云ふ結果を現はしたと書物上で讀んで居ました、夫れは如何にもそう無ければ成らぬ等で、手藝と申せば直に野郎無智の人間を聯想するといふ間違た世の中でございましてが、今ではそういう人間の一階級はありませぬ、當時高等教育を受けるのは皆心藝を渡世にする爲とか、金持の暇潰しにする事で、金持でもなし渡世にもしない人物が、高等教育と云ふ様な洒落た者を受けるのは、貧乏したとか損したとか、何か見込外れの事が有た爲にする事で、浮世で失敗して來た證據、生地のない微だなどと思ふて居りましたから以てそんな感情が流行致したので、亦た止を得ない事でございます、今では自分の勞働が何であらうとも、最高等の教育は生活に必要な者だと成て居りますから、教育を受けて居るのが恥でも何でも有りませぬ、」

余は言た、「それはそうと致しましても幾ら澤山教育を仕込みました所で、結局夫れで以て生れなが

らの鈍物を直し、生れながらの心の不足を補ふ事は出来ないでしょう、今日の人間の智慧が一般に昔よりも高ければ兎も角、若し然らざれば天下の萬民に高等教育を施しまして、徒らに大風に灰を播く様に無益でございましょう、昔の人は斯思つて居りました、教育を受け付ける天性が無ければ、到底教育しても無益で、丁度耕作に報ふる丈の收穫を得るに付ては、天然肥沃た土地で無ければ成らぬ様な者だ、」

折戸先生言ふ、「是は結構な譬を承りました、此譬を用ひましたら恰も方今の教育上の見解を御示しする事が出來ます、御説に由りますと、地味が瘠せて耕作の勞に報ゆる丈の產物が出來ぬ様な所は、耕作しないと云ふ御意見ですが、其產物が耕作の勞に報はない地面でも、之を耕作するのは今日でも昔でも同じ事では有りませぬか、私の申すのは花園とか公園とか林間の草地とか、其他雜草や荆棘の生へるに任せば目障りにも成り、周りの物をも害すると云ふ様な場所を指すのでございます、そこで之を耕作して見ると、其產物は僅しか無いのですけれども、廣く考へて見ますと、道ばせてある地面を耕すと云ふのですから、是程耕作の仕甲斐が有る土地は無い筈なのです、余々は日々相交て其聲を聞き、其行を見、其境界を同ふし、同じ空氣を吸ひ、相依り相助くる所の男女でも、矢張り同じ道理で有りまして、万一天下の人間を盡く教育する事が出來ない節は、聰明睿智な物を取るより

は、寧ろ天性劣等魯鈍の者を撰で教育する方が宜しうございます、天性利發な者は教育の助けを假らぬでも済みますが、天稟の性質愚昧なる者こそ、却て教育の必要を感じます、

「昔人が時々用ひた言葉を借て譬へて見ませう、昔は教育を受けて居る人は少許で有まして、其位置は恰も無智文盲野鄙賤劣の老弱男女に周り八方を取巻れて居る如くでございましたが、そんな境界に居たら實に浮世に生きて居る直打が無いでは有りませぬか、今人が我身に香水を振懸けてブン／＼させて居ましても、臭い臭い臭い群集の中へ雜て居て、それで満足で御座いませうか、或は又身は金殿玉堂に座しながら、四方の窓が皆馬飼ふ庭に臨んで居りましたら、十分満足して樂しめませうか、昔教育を受けたり禮法文雅に育つた人は、他目からこそ仕合に見へましても、周りを取巻く人物が無教育な野鄙な者斗りが有りますから、丁度今引きました譬の様では有りませぬか、成程貧人は富人を羨み、文盲な者は教育ある者を妬で居りましたけれども、篇と考へて見れば、其富人なり其教育ある者は、汚穢と殘忍とで身邊周囲を取圍まれて居りましたから、言はゞ頸まで臭い穢い沼泥に沈んで、一瓶の香水が鼻を慰めて居る人と全し事でございました、去れば高等教育を普及せしめる必要が大方御了解に成ましてございましょう、人と申す者は利發な交際のよい隣人のある程結構な事は無い筈でございまして、一般の人を教育致せば、誰しも善い隣人を得ると申す者、誰も幸福を増すと申す者

で、國家が各個人に對して爲すべき最大急務でございまして、若し教育をしませぬと、個人の持つ居る教育は自分に取て一向直打のない者となりまして、折角優美な好尚心を養ひましても、却て苦痛の原因と成ります、

「昔の様に一部分の人だけに十分高い教育を與へて、大方の人を丸きり教へずに置きますと、人々の間には大變な差別が出来まして、丁度犬や猫や鹿や猿が相互に違ふ様な事になり、彼此相互に意志を通ずる方法が無くなります、依怙偏頗な教育の爲めに此様な結果が出来ますとは、何ぞ不人情極まるでは有ませぬか、勿論天下一般に平等な教育を與へますと、馬鹿も些と利巧に成る代りに利巧な者は益々利巧に成りまして、其才能の上から見ますと、丁度生れながらに賢愚肖不肖の差別が有ると同じ割合に、其差別は依然と殘て居りますけれども、尤も劣等な者の水準は取敢へず非常に高くなりまして、殘忍な舉動は無くなつてしまします、勿論總ての人は文藝の中何なりとも好みがあり、心の藝を幾分か尊重する處がありまして、自分が未だ達して居ない高尚な事は、皆之を嘆美致します、其故優美な社會生活の快樂と鼓舞とを自ら受くることも出来、又人に傳へる事も出来る様になりました、尤も人に由ては其受くる割合に多少はあります、第十九世紀の教育を受けた社會の如きは、譬へば渺茫漠々たる滄海に數粒の粟が爰其處と浮んで居た様ではありませぬか、當時智性

を持て居た人もございました、優雅な交情を持て居た人もございました、けれども之を天下億兆の黎民に比べて見ますと、幾千万億分の一とも知れない數で、有れども無きが如くでございました、之をば今日に比べたら如何でございましょう、其數管に億のみならざる天下の蒼生は、一人も漏らさず相當の教育を受けて居りまして、僅か一世の智能を總括致しましても、已に古來五百年間の智力の總計よりも大さふございます、

「最良教育の普及が無くては叶はないと云ふ理由に付きまして、も一つ申上なければ成らぬ事がございます、即ち父母を教育して置けば、子孫の利益だと云ふ事です、詰り解り易く申しますと、方今の教育の立て方は三箇の肝要な理由から來て居ります、第一に國家は個人自身に福祉を享けしむるに必要な完全無缺の教育を與へなければ成りませんので、各個人は皆之を受ける權利があると云ふ事、第二は社會に福祉を享けしむる爲には、各個人に是非教育を與へなければ成らんから、天下同胞庶民は各人に教育を受けさせる權利があると云ふ事、第三は子孫は發明な優雅な父母をもつ事を保證してもらふ權利があると云ふ事でございます、」

余は其日學校で見た事を細かく話すまい、昔し余は教育上の事に一向興味を寄せなかつたから、古今の興味を比べて茲に示す事が澤山無いのである、それは兎に角に、下等教育よりして高等教育に

至るまで、殆く万民に授けると云ふ事で已に一驚を吃したが、之に次で又驚たのは、体育を非常に重んじて居る事と、學藝のみならず競力の藝と勝負との進歩して居る事も、少年の品位を定める一方法となつて居る事で有た、

折戸先生は言た「教師は自分の預て居る子弟の心性のみならず、其身体に對しても均しく責任を帯て居りまして、六歳から二十一歳までの間は、心性のみならず身体の發達をも十分させる様に致しますから、詰り課程の目的が二重になつて居ります、」

痛く心に感じて忘れないのは、諸學校の青年が皆頗る壯健な事で有た、此中厄介に成て居る家の親子三人ながら、何れも身体が非常に強壯で有り、散歩等に出ても、見る人達ふ人皆強壯で有る事を見て、人種の体格は一般に發達進歩したと云ふ考へが兼々胸に湧て居たが、今諸學校で見る青年も少女も皆強健剛邁快活で、之を第十九世紀の學校で見た生徒に比べると、實に甚しい違ひで有たから、餘りの感心さに折戸先生に話したが、先生は非常に興ありげに、余が言葉に耳を傾けた、

折戸先生言ふ「此事に關して貴下の御話は實に價値のある證明になります、實は唯今御話の様に、定めて身体の發達が著しう有たに違ないとは信じて居りましたけれども、誰も必竟理論の推測に止て果して發達したのやら、何やら解りませなんだのですが、貴下の様な妙な方が天から否地から湧て見へ

ましたればこそ、此點が證明されましたので、此は愈事實間違ない確かな事だと保證する人は、今日此廣い世界に貴下の外に有りませぬ、御説をば世間へ發表なさいましたら、屹度深い感動を起しませう、其他の事に於ても進歩して居るのであつて、若しそう無ければ奇妙千万と云はねばなりませぬ、昔は富者が心も身体も遊ばせて淫行を縱にする地方には、數千萬の貧者が過度な労働と粗惡な食物と病毒の満ちたる家屋に一生を暮らして活氣を滅ぼし、小供にまで労働をさせ、女には重任を負はせ、生命の源泉は爲に涸渇致しました、所が今は此様に害毒を社會に流す事情は息で、天下の生民は盡く強壯健康の賜に浴し、少年は注意して養育せられます、縱令總ての人が皆勤勞しなければ成りませんにもせよ、身体が尤も屈強な年頃に限りまするし、過度に苦役する事も決してございませぬ、自分や自分の家屬ばかりに氣を付けて、他を顧みないとか、衣食住を得る爲に心を煩はすとか、心力体力に挫を掛けて晝夜努力する等、皆是れ昔の男女の心と身体を破滅させた原因でございしますが、今は全く其痕を絶ちました、此變化に連れまして、人類の体格や心の有様も從て共に改良せねばならん筈で有りまして、現在改良が出来て有る邊が儘に見認められます、例へば第十九世紀頃の曲つた生活の狀態では、發狂と申しまして狂い廻るとか自殺をするとかいふ恐ろしい者がありましたが、左様な事は今は殆ど無くなりました、

第二十二回

吾々は飯食館で婦人達と會食することを約束をして置いた、會食が済んでから、用事が有ると云ふので母と娘は去てしまつた、余と折戸先生とは食卓に残て酒や煙草の評をしたり、其他色々の事柄を論じて居た、

話半ばに余は言た、「時に先生、徳義の上から申せば、今の社會組織は生民あつてより此方未だ比類の無い立派な者、殊に第十九世紀の様な不幸至極の者とは比較にはなりませぬ、今夜催眠術に掛て又候百年も眠り、今度は未來でなく本の過去の方へ廻て第十九世紀へ逆戻り、此頃此處で見ました事を朋友故舊に話す事が有るとしましたら、此新世界は秩序が正ふて平等で幸福な極樂だと言はない者はございますまい、所で十九世紀の人は實行を重んずる者で有りましたから、一旦は其文物の美を嘆賞し、まして、直きに十露盤で計算致しまして、總ての人を幸福にさせる様な金が如何して得られるだろうと問ひましよう、成程現在見ます通り、全國の民を安佚も安佚、而も贅澤に暮させまするには、莫大の富力が無くては成りませぬから、是は無理もない問題でございます、そこで方今の立て方の要點は可なり漏らさず説明が出来ませうけれども、此金錢の問題を出されまると、誠に往生致します

次第で、もし此問題の返答に詰ります日には、何分細かく勘定する人達であるから、夢を見たのだと言つてしまつて、何を申しても信じますまい、昔國民が年々に産出しました全額を十分平等に頭割に分配した處で、一人前三四百圓に當ります位で、生活の必需品を得るの外、安佚と申す事は極聊かしか得られなんでしょう、夫れに未だ、澤山の配當があると申すのは、一体如何致した事でございますか。」

折戸先生は答へた、「これは至極御尤な問題で、満足な御返答が出来なければ、御友人共が空中に樓閣を構へる虚誕な説だと申すのも尤です、所で此は一朝一夕の座談で十分に答へられぬ問題でございまして、私の申上げた事を證明する詳細な統計に至りましては、宅の書齋にある書物を御覧に入れなければなりませぬけれども、万一前刻御話しの方に、百年の昔に選て御目醒に成る様な事が有ましては御舊友に逢て御迷惑なさいまするのも残念でございしますから、兎に角少々御話を致して置ましよう、

「先づ始めに昔よりも今日の方が豊に富の儉約を致して居る瑣細な箇條を摘んで申しましよう、即ち今日は國債とか州債とか或は郡債或は市債と云ふ者はなく、陸軍海軍の徴兵が無ければ從て亦た人や物質の爲に軍費を要する事もなく、歳入を主とする事務も要らねば収税吏も要りませぬ、然らば裁判官、警察官、執達吏、獄吏は如何と申しまするに、昔磨佐中攝州に有た數だけを用ふれば、全國に

十分行届きまする、又昔の様に犯罪者の爲に社會の富を浪費する世話は要りませぬ、跛者病人老耄などは身体が間に合はなくて勞働するに堪へない爲に、會て強壯者の重荷に成てをりましたで、今は人々が大概皆強健安佚に暮して居りますから、病人は殆んどなく、尙ほ一代一代無くなつて行きます、

「節儉に成て居ります今一つの箇條は、金錢を用ひませんのと、財政に關係した百千の事務が要ないのとでございします、昔はかう云う事に幾萬とも知す人を使ひまして、必要な勞働力を浪費致しました、且や又豪富が馬鹿な贅澤をして富を烏有にするのも止んでしまいました、併し此などは割合に些細な事で、未だ、恐ろしい不經濟な事が外にございしました、又貧富に拘はらず怠け者が有りましたが、今は全く止でしまいました、

「昔し洗濯も料理も其外無數の雜事を個人の家で致しました爲に、勞方と物質を非常に浪費すると云ふ不經濟が有りましたが、是は人が貧困に陥た主要な一原因でございします、今は之を集合一括して、共同力で致して居ります、

「以上數へ上げました内の一よりも一否、其全体の合計よりも更に大なる節儉が方今の分配組織から出来まする、そこで會て仲買、問屋、小賣商、代理店、族商人、才取など申す諸種の商人が、要ない事に物品を取遣したり運搬して、徒に過大の精力を浪費致しました勞働も此組織の爲に昔の十分一

の人手で仕遂げられまして、唯の一度も無益に車を轉はす事は致しませぬ、今日の分配方に就ては、貴下は既に幾分御承知の通りで、統計學者の計算に由りますと、昔は富の分配に掛て居る者が全國民の八分一有たのです、然るに今は勞働者の八十分一を使へば十分であるので、夫れだけでも昔生産力を無益の方向に空費した事が解ります、

余は言た「成程、是で莫大な富が湧て来る源が大分目に止り出しました、」

折戸先生言ふ「否や、失敬ながら未だ逆もございます、是迄申上りました諸の經濟の點をべ上げて見ますと、物質を節約する爲に直接なり間接なり勤勞も節約せられますから、大方昔の年産額の半分に當る富力が増して來るのです、併し未だ此外に驚く可き程大きな浪費が有りまして、今言たのは極瑣細な論するに足らない事です、そう云ふ甚しい浪費は國民の職を個人の營業に任せた爲に餘義なく起る者でございますが、そんな方法を墨守して居ります以上は、生産物を消費しない様に幾ら立派な經濟法を編み出しても、又幾ら機械の發明が屢々ござ進歩しましても、到底貧困を免れないので、何時迄経ましても蟬の脱殻です、

「人間の精力を利用致しまするのに、此より杜撰極た工夫は出来ませぬ、否是は人が工夫したのではない、社會組織が悪い爲に何等の協同も出来なかつた未開時代の遺風に過ぎないのだと覺へて置く

が宜しい、人が工夫したなんぞ、申せば、實に人智の信用に拘はる事で、人間の耻ですから、」

余は言た「如何にも古の職業法は德義上から申せば實に惡ふございました、併し德義上の見解を離れて、單に致富機關と云ふ邊から見ますと、昔の法は結構な者と思はれました、」

先生は言た「先刻申した通り、此は中々大事件で、今爰で委しう研究が出来ませぬけれども、今の世人が昔の職業法を今日のと比べて如何な評判をして居るか知りたといふ云ふ御考へなれば、其要點を摘で簡単に申す事が出来ます、

「意氣相投じたのでもなく、合意からでもないのに、無責任な個人へ職業を營ませた爲に、四の著しい浪費がありました、第一は誤た計畫や作業をするが爲に生ずる浪費、第二は職業に従事する人々が相競争して互に仇敵視するが爲に生ずる浪費、第三は時々榮枯盛衰が有て其爲に職業を妨げられるより生ずる浪費、第四は常に資本と勢力を遊ばせるが爲に生ずる浪費でございます、此四は恰も漏孔の様な者で、何れか三が止まつてしまつても、一つだけで國民中に貧富の懸隔を生ぜしめる力を持て居ります、

「誤まつた計畫作業の爲に生ずる浪費の事から申しませう、昔時物品の生産と分配とを致しまするのに、協同も組織も無かつた爲に、何々の物品は幾ら／＼の需要が有るか、供給の割合は幾ら／＼

にすると云い事を、正しう知る方法が有りませなんだ、そこで以て個人の資本家が何の事業を致しましても、果して成功するかどうだか甚だ覺束ない、言はゞ假りに試めして居る様な者でございまして、事業を企畫する人も、方今の政府の如く職業と消費の全舞臺を岡目に見渡す事が出来ませぬから、人民には如何な物が入用であるやら、他の資本家が如何云ふ仕掛で其物品を供給して居るやら、皆目眞暗やみでございまして、かうして見ますと、企業をやつて失敗する機會は、成功する機會の幾層倍と云ふ程で、偶々僥倖で爲果せた者も、幾度となく滑つて倒れたのが普通でございまして、亦多く怪むに足らない事です、今靴工が一足の靴を拵へ上げる度に、四五足分宛の皮を潰すと同時に、無駄手間に費した時間も損すると致しましたら如何でしょう、丁度貴下の同時代頭の人が私に營業して一成功毎に平均四五回の失敗を爲るのと同じ事で、逆もの事では有りませんが金持には成れませぬ、否、持兼ねる様になります、

「倍次は競争から生ずる浪費でございしますが、職業の全舞臺を眺めますれば、丸で世界一面の戦場でございまして、勞働者は相互に攻撃する爲に徒らに全身の精力を費しました、若し其浪費した精力を總括協同しましたら、丁度今日の様に滿天下の生民が富有になりましたらう、此戦争には慈悲も情も無ければ、敵囚に宥免をも與へず、そんな事は全く心に思ひ掛も無い事でございまして、ですから

職業場裡にどん／＼と切込んで、先入者の企業を打倒し、其跡へ自分の事業を樹立しまするのは、實に天下の耳目を驚かして喝采を博するは受合でございまして、今此職業上の競争を實際の戦に比較しまするのは、雷に一場の想像ばかりではございませぬ、其戦の爲に心を悲痛し身体を苦しめるもあれば、失敗者及其妻子眷屬が饑寒に泣くもございまして、何の事はない切たりはつたりする戦争と變りませぬ、殊に同業者と云はれる者が、共同の福祉を謀る爲に、同僚や同労働仲間と兄弟同様に親しくしなければ成りませぬのに、却て之を仇敵視しまして、其咽喉を扼し、其息を塞ぎ、其命を奪はすんば止まずと云ふに至りましては、今人が昔を顧る毎に尤も魂を驚かし心を傷ましめる事實でございまして、斯して見ますと全く氣違ひで、丸で顛狂院を見て居る様ですが、篤と考へますと左様ではございませぬ、昔の人は御互に向ふの喉笛を切る事計りして居りましたが、當時に生れて見たら、そう無ければ成りませぬので、生産家は今日の様に公共相養ふが爲に協力して働居たのではない、各人が公共を犠牲にして自分を維持する事に勉めましたので、此目的を勉めると同時に、我富が増しましたら、夫れこそ眞に怪我の拍子で有るのです、當時は公共の福祉を害する様な事をして自家の富を積むのは、實地に行へた事で有り、且は一般の習はせてございまして、殊に同業者と云ふ者は我身に取ては尤も怨敵とする所でございしましたが、何故かと申しますと、元來生産事業に従事す

ると云ふからして抑も私利を營む爲で有りますから、生産家は皆他の同業者の生産物が少なからん事を希望しました、斯く他人の産出額が自分の産出額より少ないのが即ち自分の利益で有りましたから、同業に従事する者を殺し、其生産力を挫ひて以て、可成り自分の産額を多くしようと云ふ事に断へず力を注ぎました、借殺せる大殺してしまひますと、次には其逆も殺せない屈強な者と手を組みまして、今度は同業者仲間の戦争では無く、廣く社會と戦争を爲始め、市場を窮境に陥れまして物價を無上に騰貴させました、箇様な酷い世界でございましたから、生産家は何でも生活の必需品の供給を自由自在に統轄して社會を饑渴の極に陥れ、以て我産物を暴騰させたい者だと夢幻に思ひ居りました、ねえ西様、是即ち第十九世紀の所謂生産法と云ふ者でした、けれども果して此が生産法であるか、將又禁産法と名けるが至當であるか、貴下の御判断に任せます、何時か緩りと致しました時に伺いたいと思ふ事がございまして、と云ふのは貴下の時分の人は、皆伶俐慧敏でございまして、そう云ふ利巧な人で有りながら、社會を飢饉に陥れて我懷を温めようと云ふ様な射利漢に何の因縁が有て物品供給の職務を任せましたのか、是迄段々研究しましたけれども、如何も合點が参りませんから、何卒御説明を願ひたいのです、そんな方法の行はれて居る世界が富有に成らなんだのは當然の事で、何も怪むに足りませんが、唯不審なのは、世界の人が欠乏の爲に直に死絶へそうなる者で有りまするのに、

死ななんだと云ふ事です、此外にも多大の浪費が有つたと云ふ事まで考へ及ぼしますと、疑團が益々固く凝りまして氷解致しませぬ、

「職業の方針を誤るより勤勞と資本との浪費を生ずる事、及び職業的競争に絶へず血を流して浪費を生じた事は別と致しまして、昔の方法は時々激震動を免れませんが、之が爲に賢者も愚者も共に倒れ、下手人も被害者も均しく倒れました、と言ふのは即ち五年乃至十年に一度宛職業の危機が参りまして、一國の職業は爲に皆破壊せられ、瘡痍の徒は斃れる、屈強な徒は不具になる、此危急存亡の秋が漸く過去りますと、幾年もく不景氣な時節が引續きまして、其間に資本家は徐ろに其散亂した力を回復収集しますと、勞働社會は飢饉に逼て溝壑に轉びます、其後には復た繁榮の時期が参ります、此は眞の暫しが間の事で、久からず又危機が舞戻て來まして、枯渴耗盡が幾年にも渉ります、此危期は段々と商業が發達して各國益々互に相依頼するに従ひ、益々廣く世界に蔓延します、引續て來る衰微の有様も、動亂の面積が擴がるのと凝聚點が散亂するのとに連れて益々粘り強くなつて來ます、兎角する中世界全般の職業は多々益々多大複雑に赴く、資本の總額が益々膨大するに従て、職業上の混亂は愈々屢となり、到頭第十九世紀の後半の頃に至りましては、樂歲一年に對して凶年が二年の割まで進み、未曾有の廣大強盛な職業法は、自ら其弊に堪ずして萎縮崩潰せん斗

りに見へました、時の經濟家が首を擡めて段々と研究しましたけれども、結局思はしい工夫も附きませんので、此危期を未然に防ぐとか之を抑へるのは早魃や暴風を止るよりも六ヶ敷と云ふ取ても付かぬ論結をしたらうございます、そこで如何も致し方が無いから、止むを得ない天災だと明らめ、丁度地震國の人が家の崩れ跡へ幾度も建て換へるが様に、危機の去た後で一旦崩れた職業組織を建て換へて居りました、

「當時の人は其職業組織に生れ付いたる災害が由て起る原因は何で有るか云ふ事に付て、正しい意見を持て居りました、其原因は其職業法の根本に伏在して有りました、職業が段々手廣くなり段々複雑になるに連れて愈々倍す害毒の勢力が猖獗に成りましたが、諸の職業を纏めて之を統轄しなかつたのと、其職業を協同させて秩序的に發達させる事が出来なかつたのが、害毒の原因の一で有りました、それが爲に彼此の歩調は乱れて来る、需要供給の割合が狂て參りました、

「需要と供給とを相伴せると云ふ事に付ましては、逆も今日の様な一定の規矩標準となる者が無くて、供給が些とも需要と共に消長しませなんだ、そこで何々の職業で供給が需要より澤山になつたと云ふ報知が有りますと、瞬く間に物價は滅茶々々になる、生産家は破産する、産出は止まる、賃錢は下落する、勞働者は解雇されると云ふ騒ぎに成りました、斯云ふ事は時節が宜しい時でも、多く

の職業に於いて絶へず見る所で有りましたが、所謂危機と云ふのは其職業の範圍が廣い時ばかり起つたのです、危機が來たと云ふ大騒ぎになりますと、物品が市場に充溢しまして、假令幾ら直段を下げましても、誰も入用だけしか買ひませぬ、爾うなると其多大の物品の製造人は、利益や賃錢を減せられるとか、或は全く無くなつて、次第に手許は苦しくなる、我製造に屬しない必要品は折悪しく品切れで直が高いから之を購ふ力がない、彼此する内に目の早い者が好機逸すべからず一攫萬金を博すべしで、市場に乏しい品を製造するから、忽にして其品物が充溢し過ぎて、直は下る、製造者は仕事も利益も奪はれる、もう其後から危機が追つて來ると云ふ事に成り、結局一國衰弱して、兄弟妻子の離散する迄は、滔々たる濁流を止める事が出来ませなんだ、

「昔の職業法に固着して屢々危期を起し、又之を多々益猖獗ならしめました一原因は、金錢と信用貨とを用いた事です、多くの個人が生産をして居ります時分には金錢は必要な者で、我欲する物を求めるには賣買と云ふ事を致さなくては成りませなんだ、けれども金錢は本と申合せの上から飲食衣服其外諸の物品の代表物として有いましたのに、此代表物を以て其本尊たる諸物品に代へたのは宜ふございませぬ、之が爲に物品と代表物を混同すると云ふ誤解が出来まして、信用貨と云ふ事が出来、又信用貨に付て諸の大謬見が起りました、元來人は物品の代りに其代表物たる金錢を受取て來

た癖が有た者ですから、金銭を受取る代りに之を渡すと云ふ約束を受取る事となり、到頭金銭が受取るべき唯一の目的に變じまして、肝腎の物品は忘れてしまつて目を止めない事になりました、金銭は由來實物の符徴で有つて、信用は金銭に對する信用ですから、信用は即ち符徴の符徴に當ります、そんな詰らない者を大切がつて何とする積りですか、貨幣は本來金銀で作る者ですが、其金銀と云ふ者は産額に限り有りますけれども、信用には限りがございませぬ、そこでソレ信用じやソレ信用じやと、信用が段々と積りまして、實際金銭も無いのに金銭を渡す約束を致しましたから、信用の總額は遙かに金銭の現在額に超過して釣合が取れない、増して物品の現在額に對しては益々以て不釣合にたりました、斯云ふ仕組でございましては、危機が度々時を極めて繰返して来るのは固より免れ難い事で、高い處に重心を持つて居る構造物は必ず倒れると云ふ物理學上の理法と全じ事でございまして、當時の人は政府及び政府から權を與へられて居る銀行とが貨幣を發兌するので、其他の者は發兌が出来ないと思つて居りました、けれども、一圓の金子を何時幾日に渡すと云ふ約束をした者は、詰まり一圓だけ貨幣を發兌したので有まして、次の危期が来るまで立派に通貨の効を持つて居たのです、取もなほさず、社會に流通する通貨の高を膨脹させて居たのです、そこで信用法が滅法界に廣くなりましてのは、第十九世紀の後半に於ける一の特徴でございまして、其頃の名物とも言ふべき陸續生じたる危機

の原因は、主として此に有りました、斯く信用と云ふ者が劍呑であるに拘はらず世人が此法を用ひざるを得なんだのは何故かと申しますと、當時我國の資本を統一組織して居らなかつた者ですから、資本を集めて企業に用ふるには、此より外に方法が無かつたのでございまして、所が夫れは結局宜しくありませんので、不釣合に過大な資本を吸収して、之を一定の職業に注入しましたが爲に、却て大に個人の企業を危からしめる有力な手段になりました、此頃の企業は常に必ず甲乙相互に滅法大きな信用借をしたり、銀行や資本家より信用で借りて來ましたので、いざ危期が來ると言ふより早く、直に借財を取立てられますから、忽ち倒れまするのは比々皆然りでございまして、

「當時の人の不幸と申すのは、一寸の怪我が有れば忽ち爆烈する様な劍呑な材料を以て職業組織を建てるセメントとして用ひなければ成らなんだ事で、信用と云ふ爆烈彈を漆灰の代りに用ひて家を建てる様な者でございまして、

「以上述べた職業の動亂は、誠に要ざる者であつて、必竟組織のない個人の管理に職業を委かせたから起つた者だと云ふ譯を知り度くば、當今の方法が如何に運轉して居るかを御考下されば解ります、一定の物品を無暗に澤山生産したのは十九世紀の大怪物でございしますが、今日では分配と生産との連絡が有る爲に、供給が需要に伴つて消長します、恰も調動機によりて、機關運轉の遲速が調へ

らるゝ様な者でございますから、決して生産過剰の憂はございませぬ、今假りに誤て某物品を製造し過た致しまして、夫れが爲に生産が止むとか、又は弛ぶことは有りませんが、職を失つて手を空ふする者は一人も出来ませぬ、要な様に成た労働者は、大工場の何處か外の部分へ行けば、直に仕事がございまして、唯此より彼に移る間の時間だけの損で済みます、又過剰品に致しまして、一國の職業が何分にも大きい者ですから、餘分に製造し續ける事が出来まして、遠からざる中に需用も増して来て、供給と平均するに至ります、且又右申す通り生産過剰が有りまして、昔の様に複雑な組織が狂つて、益、誤を大きくすると云ふ憂は有りませぬ、又金銭が有りませんから、信用と云ふ事が尙更ございませぬ、總ての計算は麵粉なり鐵なり木なり毛なり勞力なり、凡て實物を直接に用ゐまして、媒介物を使ひませぬ、之に反して昔の人は金銭と信用とを用ひましたが、此等は必竟人を誤らしめる代表物に過ぎませぬ、今日は即ち實物を取扱ふ世の中で、實物で計算しますから、分釐毫の誤も出来ませぬ、年々の産物中から人民を扶持するに必要な丈を取まして、翌年に消費する分を今年の中に補ひ産するに必要な労働者を養ひます、若し物質や勞力に剩餘が出来すれば、是は即ち社會の改良進歩に用ひて決して後の患とはならぬ者でございます、又若し收納が少ない時は、其年度の剩餘が平年より少なくなる迄の者で、斯云ふ自然的原因が折々有る外は、職業の變動は更に無

く、一國の物質的の繁盛は年々進みまして、恰も益廣くなる川の様でござます、」

先生語を續て曰く、「前に申上げた諸の大浪費と同様に、古の職業の危期も亦常に社會の人民を壓虐する程の勢を持って居りました、けれども昔の貧窮の大原因が此外にも一つあつた事を御話しなければ成りませぬ、即ち澤山な資本と勤勞とを遊ばせて置いた事です、今日政府は苟も一國內に有て利用するに足る資本と勤勞とは、毫厘と雖も必ず働かせる方針を取て居ります、けれども昔は資本も勤勞も之を統轄する者が有りませんでした、其大部分は常に遊んで置いて働かせませんでした、當時資本は元來臆病な者だと言て居りましたが、成程何か企業をしたら失敗に終るべしと思はれる時に、資本をどん／＼湯水の様に使へば、夫こそ向ふ見すの無茶であつたでせう、けれども失敗する氣遣のない安心な時に生産業に資本を卸して、夫れが大に増されないと云ふ事は昔から未だございませぬ、斯云ふ事に用ゐた資本の多寡は、職業界の模様が安固と思はれるか不安と思はれるかに従りまして常に非常な増減がございまして、從て亦た一國の職業より生ずる産額も、年々大に消長がございました、併し甚だ不安な時分には、割合に安全な時分よりも、卸す資本は遙に少ないのと同じ道理で、時節が善くても危険が頗る大きい時には大資本は決して卸しませぬ、

「又一つ着眼せねばならぬ事は、可なり安固な場所に大きな資本を卸しましても、善い見込が有り

まする時は、資本家同志相競争して、慘酷な現象を生じまする、抑も資本が臆病の爲にブラ／＼遊ぶと申すのは、歸する所夫れと同じ丈の勢力を遊ばせると申す事でございましたが、其上に又時節が宜しい時でも、年々起る無数の失敗は言はずもあれ、職業の仕組が變化する度毎、若くは商業や製造の事情が少しでも變更する度毎に、幾千幾萬の人が數週の間、數月の間、乃至數年の間も、業を失ふて何かな職を求めようと致しまするが、其多數は此處彼處を遍歴致しまして、頓て流浪無籍の輩となり、果は犯罪者に墮落致しまする、此頃には幾十萬の職を失つた者が、年が年中余等に仕事を授けて下さいと絶叫しましたが、殊更不景氣な時分には、其數は膨脹し其勢は狂猛で、政府の安固な地盤をも動搖せん斗りで御座いました、此通り天下一般に貧困に陥つて、衣食住に事欠く悲惨な時節に逢ながら、資本家は安全に資本を卸す爲に同胞相刺し、勞役者は仕事が無い爲に放火暴動するとは、是明かに個人の企業を以て富國策とするの愚を証する者でありまして、而も又此より確乎たる證據は有りませぬ、

「西様、善く覺へて置いて願いたい、私が申上て参りました段々の事は、個人企業法に危険な欠點が有て非常に無力な者である云ふ證據でありまして、全國民を組上げて職業を營む方法の利益な事を裏から指摘した者なので、昔より今の方が國富み民豊かなる所以が是に依て可なり解らうと存じます

る、けれども今日の昔に優る所を表から論じますれば、其利益の大なる事は二倍處ではございせんが、此は未だ一向申上げなんだ事です、今假に個人企業法には先刻から申上た様な大漏孔が一つも無しとし、又需要額の見積り違ひから生ずる浪費も無いとし、又競争の爲に折角の盡力の甲斐も無くなつて無益の骨折をする憂も無いとし、恐慌と危機との爲に破産したり、長く停業するより生ずる浪費も無いとしませんか、此諸害は皆個人の企業に免れ難い者であるが、不思議の縁で全く絶へてしまつて、而かも舊法が依然として働いて居ると假定しましても、矢張方今の國家企業法から生ずる利益の方が幾ら優れて居るか知れないのです、

「昔とても或る製造場に至りましては、今日のとは中々比べ者には成ませんけれども、随分大仕掛で、内部の組織が可なり整頓したのが有りまして、貴下は定めて昔の機械場を見物に御越なさいますしたでせうが、幾万坪の面積を占め、幾萬の職工を役使し、綿袋とか金巾包とか云ふ様な種々異つた仕事を取扱ふ部類が幾十も拵てありまして、之を悉く一大家屋の下に連合組織し、一人の首領が之を統轄して居りました、貴下は此盛況を見て、各車の働きや各職工の働きを完全に組上るときは、非常に機械力の節約が出来る事を感歎せられたでせう、又貴下は其製造場に使はれた幾萬の勞働力も之を個別に分解して一人宛別々に働かせたら、其の結果は小さな者となるだらうと思はれたでせう、假

令何程親睦にして居ても、此等勞働者が一人別に働くよりは統一組織した方が産額の増へる事は唯に何割處の小さい事でない實に幾層倍の上に昇る者だと信ぜられたでせう、左らば西様、今日は全國の職業を大同團結して一令の下に統轄し、各業相互に提携し合て居りますから、曩に申しました四大浪費の無くなつたのは無論の事、舊法で全力を盡して産出する總額に幾倍か超して居りますのは、丁度昔の機械場より産出する額が力の協同に由て増したのと同じ割合です、今幾千の個人資本家に全國の勞働軍を思ひ／＼に統率せしめる効果と、一人で之を統率する効果とを比較しますれば、一揆や蠻民軍を幾千の小頭が統率して戦ふのと、鍛鍊した日耳曼軍をモルトケ將軍の如き老練家が統率して戦ふのとを比較する様な者でございます、」

余は言た「段々の御講釋は有難く拜聴致しまして、國民が昔より富で居る事は餘り不思議にも思ひませんが、全國の人が一人も餘さず皆陶朱猗頓でもございますまい、」

折戸先生言た「余々共は皆有福に暮しまして、思ふ存分贅澤をして居ります、昔は外見の虚飾に競争しまして、愉快にも成らぬ事に奢侈を極めました、けれども、今日の社會では、各人の所得が十分平等でございますから、虚飾をする事が有りませんので、生命の娛樂を助ける身邊周囲の事物ばかりに望を屬して居ります、無論年々の産物の剩餘までも用ひようと思へば、之を夫々に分配しまして、

頭割に収入を増す事は出来すけれども、吾人は寧ろ之を公共事業と公共の娛樂に費す事を好みまして、公衆會堂、美術館、橋渠、彫像、交通機關、大音樂會、演劇、其他都市の便益になる事や人民の愉快になる事を大仕掛に致します、西様、貴下は未だ吾々共の生活の模様を御承知になりませんのですが、今日の人は安佚は家庭の内致しますけれども、華奢な事は社交上の方面へ出て同胞兄弟諸共にするので御座います、愈々夫れが解りましたら、其節には所謂金錢なる者の行き處も知れまして、成程善い事に貨を費して居ると御合點に成りませう、」

倍長談論も済んで飲食館からブラ／＼と歸る途、折戸先生は又言た「拜金主義時代の人に向て「君等は金を儲ける法を知らない」と申しましたら、彼等は嘔驚く事でございませう、併し彼等が實際金儲を知らぬ事は、歴史が過去の時代に對して下した斷案で、決して間違はございませぬ、大体の職業の組織も立たず、彼此相仇敵視すると云ふ事は、道義から見ても惡むべき事でもあり、經濟上から見ても間違た話でございまして、只管私慾と云ふ事を學問と心得て居りましたが、生産するに當て私慾を逞ふするのは、全く自殺をする事になります、私慾が有るからして競争が起るので、競争は詰り精力浪費と云ふ事の別名なのですが、之に反して連合協同と云ふ事は、生産の効果を顯はす秘訣でございまして、そこで自己の貨を積もうと云ふ考へが去て、共同の貨を積もうと云ふ考へが起りませんなれ

ば、職業の協同も實現せず、富を致す事も出来ませぬ、假令各人平等に分配すると云ふ原則が、社會を建てる慈悲正理な唯一の土臺では無いとしまして、尙且經濟上有益な者として之を行はなければなりませぬ、私利を營むと云ふ心を潰してしまはなければ、眞成の職業合同は出来ませぬから、

第二十三回

此日の音樂目錄中に余の注意を催した箇條が有つたから、夕暮に悦子と音樂室で之を聞て居たが、音樂が暫く歇んで居る機に乗じて、余は「一つ御尋申上たい事がございます、粗忽であるかも知れませんが」と言た、娘は余を勵ます調子で「何減相な、どうぞ御遠慮なく」と言た、余は「實は人の話を立聞致しました次第でございまして、自分の事でもないのに自分に關係した事かと疑つて、人の話を盗み聞したと云ふ譯です、」

娘は不審な面色で言た「盗聞なさいましたとは、」

「はい、盗聞しましたが、併し差して御答め成さらない盗聞だと思ひます、」

「夫れは又不思議な事、」

「はい、どうも不思議な事で、實際人の話を漏れ聞しましたのか、夢に見ましたのかと、今日まで度々疑て居りましたが、何卒御聞せ下さい、實は斯なのです、私が百年間の眠りから覺めかゝつてをりまする時に、第一に氣に付たのは周りに聲が聞へた事で、其後其聲は御親父様、母御様、及貴嬢と三人の御聲だと云ふことを認めました、先づ御親父の聲として「あれ目を開きかゝつて居る、先づ最初

唯だ一人に目が止まれば宜いが」と聞えますと、貴嬢の御聲として「どうぞ話をなさいますな」と聞えました、御親父は御聞入なされない様な風に思はれました所が、貴嬢が段々と仰せられましたし、母御前が御仲裁に成りまして、到頭貴嬢の御言通りに成りました、そこで目を開けて見ますと、御親父だけ目に止まりました、

其漏れ聞たと思ふた話は夢で有るか、何だか、請合へない由を、余は眞顔で言たが、余ながら余の事が、解らないのに、此家屬の者共が其父祖と時を同する余の事を知て居ると云ふ筈がない、所が今余の此言葉を聞た悦子の模様から、果して夢で無い事が知れたが、是亦實に不思議千萬の事で有た、余の問題の意味が通じてからと云ふ者は、娘は非常に當惑の氣色で、平生は淡泊した見へたまゝの目元であるに、其れが俄かに下に垂れて、首筋から額までバツと紅葉色を潮した、

可哀想に余が言の爲に娘の心を非常に煩はして、余も當惑に暮したが、良有て「それでは、全く夢を見て居りましたのでは無いと見へます、此には必定仔細が有る事で、御隠し成さいますからには、私に係つた事と覺えますが、私の境遇に立て居ります者が、我身に係つた事で物事を隠されると申すのは、聊か辛い事ではございますまいか、」

娘は僅に聞ゆる程の聲で言つた「それは直に貴下に係つた事では有りませぬ、」

余は執ねくも「併し如何にか私に係つた所は有るので、私の聞き度い事に違ひありません」と言つた、

娘は益顔を赤らめたものゝ、當惑する胸の中を包んで、微笑を唇に洩らしつゝ、暫と余の顔を見上げて「夫れは一向存じませんので、貴下が聞き度く思召す事か何かは御請合申しませぬ」と答へた、

余は辱しめる調子で尙は執ねくも言つた「御親父は言つて下さるに違ひ無かつたのです、それを御差止なさつたのは、貴嬢では有りませんか、私に知らせるべき事と御親父が思召しましたものを、」

娘は答へをせず唯當惑してもが付て居たが、夫れが此上なく可愛らしい有たので、始めの好奇心の爲ど、且は此面白い地位を維持しよう爲に、益々娘に懇請する氣になつて「では、私に知らせて貰へませんか、貴嬢は何しても御聞せ下さいませんか」と迫つた、

娘は「模様——依りまして——」と愚圖く答へた、

「如何云ふ模様に依りますか」と余は追求した、

娘は「貴下は中々御尋なさいますねえ」と答へ、言ふに言はれぬ目元に頬は櫻色、唇には愛嬌ある微笑を湛へて得も言はれぬ風情、余の顔に向ひながら「貴下次第で申しましたら、何を思召なさいませうか」と言つた、

余は之に應じて、「私次第だね？それは又如何してゐるのです」と反問した、

娘は「西様、折角面白い音楽を棄て、しまいますわ」とばかり言て電話に向ひ、指を觸れて、嚙喰たる音楽を満室に響かしめ、音楽最中に話のできない様に顔を彼方へ背けて、音曲に魂を奪はれて居る振をした、けれども満頬に紅色を浮べて居るのを見れば、音楽に托つて一場の窮を免れる積りだと知られた、

娘は「御好きな丈け御聞なさいまして、宜しうございます」と言たが、二人は起て其室を去るゝすると、娘はズット余が側へ来て、目をも擡げ敢へずに「西様、私が親切を盡しました様に仰せなさいました、別段親切と云ふ様でもございませなんだ、併し若し其様に思召ますなら、今夜の事を又聞せて呉れと仰しやつたり、父や母へも御尋なすつたり、必ずくして下さいますな、御願でございしますから、」

斯頼まれるとして見ると、外に答の仕様も無いから、「御心配をさせまして、相済みませぬ、屹度左様に致しませう、始めから御心配を掛るゝ存じて居りましたら、何にも御尋ね申さなだったのでしたに、何か失敬の罪を御咎め下さいませぬ様に、」

「何のまあ御咎め申しましょう、」

余は言た、「もう貴嬢を苦めることは致しません代りに、何時か御意に叶つたときに、貴嬢から御話下さいませ様に御願申せませんか、」

嬢は「申上ることもございませう」と口をもち、

「ございませう位な事です、」

娘は思ひ有り氣な瞥見で余が顔の様子を目早に讀み取て「はい、申上るかも知れませんが何時か」と言た、此處で二人の談話は絶へてしまつた、娘はもう何にも言はせない様にしてしまつたから、

サア、大變な事に成つて、非常な氣掛り、如何な催眠術の達人山井丸齋迎も、夜明近くまで眠らせることが出来なかつたろう、一体此節は毎日不思議斗りで、晝の間も夢幻で居たけれども、悦子嬢が余を妨げて其解答を求めざらした一件は不思議千萬な事には未だ逢はなんだ、第一、時代を異にした余の秘事を娘が知ろう筈はないし、第二には假んば娘が之を知つたにしろ、知つたからして心を煩はさねばならぬ筈もないのである、何考へても譯が解らず、邪推することも出来ない、余は平生實際を尊ぶ癖が有て、斯云ふ譯の解らんを兎や角と時を潰して考へる事はしない流儀である、けれども若い美人の形となつて顯はれた六つか敷い謎であるから、一際面白い所がある、總じて若い女が面を赤くするのは、何時の代でも、何國へ行つても、若年の男子に取ては極まり切つた解釋が出来る

のである、けれども余の地位から考へても、余が娘を知てからの時日を考へても、又余が娘を知る前から此不思議が有たと云ふことを考へて見れば尙更の事で、悦子が頬を赤めたのは詰り女の愚痴であらうけれども、娘は天人となつて余を助けて呉れたのだから、若し理窟や常識で以て其夜の夢に楽しい事を見ぬ様なことが出来たらば、それこそ、余は若い人では無いのである、

第二十四回

翌朝余は悦子斗りに逢はんとて早くから下へ降りた、ところが此はしたり、娘が居らない、花園へ探しに行て見る、花園にも居らない、彼此と吟行て居る中に、例の地下の室へ這入て腰を掛けたが、讀書臺の上に雑誌や新聞が澤山有つた、折戸先生に見せたらば、紀元千八百八十七年の新聞を見るのであるから、興味を起すだろうと思ふて、一枚の新聞を持て本家へ戻つた、

朝飯の席で悦子に逢たが、娘は顔を赤らめて挨拶した、けれども自若として落付て居た、一同食卓に即くと、折戸先生は例の新聞を読みながら、獨り面白がつて居た、此新聞には此頃の他の新聞と同様に、労働騒だの、同盟罷工だの、拒絶だの、絶交だの、労働者仲間の計畫だの、無政府黨の脅迫だのといふ事が澤山書て有た、

此等の箇條の二三を摘んで先生が聲高かに讀で聞けると、余は言つた、「序に一寸御尋しますが、其赤旗の下に集て居りました者共は、新社會の成立に對して如何云ふ事を致しました、何でも大騒ぎをして居りましたことは覺へて居りますが、其後の事は丸きり存じませぬ、」

折戸先生は答へた、「勿論新社會の建設を妨げた斗りで、其言ふ所、其語る所を世人に嫌はしめ、社

會改良の最良方案を聞けない様に致させる事に力を注ぎました、此様な喧譁連に保護金をやる杯と云ふ事が、改良反對論者の尤も機敏な工夫の一でありました。」

余は驚て言た「保護金をやりますか。」

折戸先生言ふ「如何にもそうです、今日歴史の儘かに證する處に據りますと、獨専事業を爲て居る大會社や豪富は、右の彌次馬連に金銭を使つて、表面社會改良の赤旗を閃めかせ、焼くとか掠めるとか爆殺するとか云ふ様な氣味の悪い事を言はせる、世の臆病者は其言ふ所を聞いて、其様な荒療治の改革をやられては困るからと云ふ氣に成て、眞の改革を思ひ止る様になると云ふ趣向で有つたのです、貴下も亦必定其虚偽の絲緒に掛られた事と思ひます。」

余は言た「赤旗黨が果して保護金を受けたか受けなんだか、何ぞ儘かに據所がございますか。」

「據所としてはございせんが、赤旗黨がどんく運動をしますと、其主義に賛成する者は極めて少く、之に反對する者が千を以て數ふる程澤山であることは、彼等は篤と承知して居ました、保護金で雇はれて居無いと思ひますのは、餘り之を買ひかぶると云ふ者で、其馬鹿さ加減が知れませぬ、合衆國では何處へ参りまして、何の黨派でも、彼の國民黨の様に、先づ國中過半数の人氣を得なければ、到底其目的を達する事が出来なन्दのです。」

(註、無政府黨の方針が奇怪で有つた譯は資本家に保護金を貰つたが故だと解するが一番解し易いので、これは後世より顧みて尤もらしく思はれる解説ではあるけれども、實は全く誤つた説で、當時何人も左様なことを思ふて居た者は確かに無かつた。)

余は言つた「國民黨と仰しやいましたねえ、夫れは私の時分より後に湧た者に違ひありませぬ、労働者黨の一で有たのでしよう。」

折戸先生は答へた「唯だ労働者黨といふ丈では大仕掛で長く腰を据て事を仕遂る事は出来ないの、國民全体を警醒する目的でありながら一部の勤勞者より組織した団体ばかりの小さな礎では逆も追付きませぬ、道徳で築上げた高尚な礎の上に、職業及社會の組織を建て直はし、富の生産をして益効果を著はさしめることは、嘗に一部人民の利益のみならず、貧乏も、金持も、教育ある者も、無教育者も、老若男女賢愚強弱の差別無く、満天下所有者の利益で有ると云ふことが、廣く世人の目に止まる様に成らなければ、其成效は望む可くも有りませぬ、そこで唯だ労働者黨位では足りない云ふので、愈國民黨が起りまして、政治上の方法で以て此目的を達しようと思ひました、之を國民黨と申したのも、大方生産及分配の職務を國家的にする云ふ目的で有たから起つた事でも有りませうが、如何にも至極な名で、外に名の付け方は無かつたでしよう、何故かと申しますと、其目

的は古來未聞の壯麗完全な國を作ろうと云ふのでございまして、人民の幸福に唯だ間接に淺く關係したる政治上一定の職掌を預る人間の集合体を國家とするのでは無く、國家を以て一つの家族とするのでございまして、一つの活動ある連合体とするのでございまして、一つの万人共通の生活とするのでございまして、蒼生を以て葉となし、葉脈を以て人を養ない、人に由て益々生長する聳雲の喬木とするのでございまして、凡そ諸の黨派の中で此黨が愛國心の尤も強い者でございまして、道理に稱へる正義の愛國心を以て自國を母國としようと思ふるのでございまして、人をして國の爲に死せしめるので無く、國あるが爲に人をして生かしめる様にしようと思ふるのでございまして、」

第二十五回

余は變な矩合で折戸先生の家の同居人と成つたが、其後は悦子嬢の人品が痛ふ余の心に感した、増して前夜の事が有てからと云ふ者は、益以て嬢の事が氣に成つて忘れられないのは、そう有りそうな筈である、一体嬢は始めから靜溫質朴で、加之利發で實直な風采であつて、余が昔常々見て居た乙女らしくはない、寧ろ高尚な無罪な男子の風で有つた、そこで斯斗り可愛らしい性質が幾か程嬢の天性にあるものか、又社會に於る婦人の位地が變化した爲に幾か程迄に其結果を受けたものかを知つて見たかつた、此日丁度好い機會で折戸先生と余と二人ざりて有つたから、談話を此方角へ向けた、

「當今は婦人共が家事向の責任を負ふのを助かつて居りますから、唯愛嬌や品を善くすることにばかり懸て居ると見えます」と余が云ふと、

折戸先生は「今日の吾々から見ますと、若し女が其様な事ばかりを仕事にして居りますならば、昔の言葉で所謂拂ひ過ぎたと申す者でございまして、然るに幾ら纖弱き女乍らも充分氣力が有るから、社會の飾りとなつた御禮に空手で養つて貰ふことを満足する者でないのは貴下も御考でございませう、なるほど女が家事の責任を免されることを歡迎受けはしました、其故は外では有りませぬ、家事

向の事は非常に退屈なのみならず、協同勤勞法と比べて見れば、精力の浪費極まつた事で有るからなので、其様な詰らない事に手間隙を費さずに、もつと功能の有る愉快な事をして、共同の福祉を増進する加勢を致したいと云ふのでございました、斯云ふ譯で方今の女は丁度男と同じ様に矢張り職業軍の會員で有つて、子を生み母たる義務を盡さねばならぬ時に始めて免役になります、結局婦人は大抵五年か乃至十五年も職業に使はれて、子がない者は満期に成るまで務めます、」

余は「夫れでは女は結婚すれば必ずしも職業を棄てるに限りませんか」と聞き糺した、先生は言ふ「棄る事が出来ないのは男と同じことです、一体又何たる仔細で女が職業を離れねばならいせんか、已に女に家事向の要事が無いとすれば、結婚した女も家事を治める責任が有りませんし、夫も夫で妻に氣を付けて貰はなければならん様な嬰兒でも有りますまい、」

「古人は大變澤山な用事を女に致せましたが、其時の人も之を文明に於る悲惨觀の一と思つて居たのです、然るに今日では、どうやら昔より一層澤山な事を女にさせて居るらしいでございますねえ、」折戸先生は笑ひながら言た「如何にも男にさせるのと同じ様に女にも澤山な事をさせます、處が當節の女は中々樂しう暮して居りますが、若し第十九世紀の参考書が大に誤つて居らぬとして見ますと、當時の女は誠に以て憐れ至極な者でございました、然らば女を男の共同勤勞者として働かせたな

らば、家事に虐使するよりも遙に効果もあり、女自も樂みであるのは何故かと尋ねて見ますと、男でも女でも、其力量に適ふた仕事を當がふと云ふ筆法を用ひて居るからでございます、所が女は男よりも体力が劣つた者で、職業にしても女に出来ない事も有りますから、爰の處を善く斟酌して、仕事を適当な境遇と撰んでいたします、其故に何處へ参りましたも、重い仕事は男にさせる、軽い仕事は女にさせまして、如何なる事情が有りまして、職業の種類と勢力の程度とが女性に相應しない事は決して女に致させませぬ、且や又其仕事の時間も男よりズツと短かくして、休暇も男より度々與へまするし、休憩が必要で有れば直ぐ休憩させる様に規則が設けてございます、今日の男子は人生の快味と勤勉の獎勵は主として婦人の美麗と優雅とに在るのだと見認めて居りますから、女の体が尤も逞ましき間に、其力に相當した一定の勤勞をさせるのは、身体の爲にも心性の爲にも善いといふので仕事を致させるのでございます、今日人の信する所に據りますと、昔の女が總別病身身しかつたに引代へて、今日の女が無病壯健であるのは、精神を活潑にし健康の爲になる仕事を與へられて居ると云ふ事實が大原因であると申します」

余は問ふた「女が矢張り職業軍に屬すると云ふ事は解りましたが、其勤勞の有様が男子と違ふとしますれば、如何して男子と同じ様夫々の等級に組入れ又た同じ規律で縛ることが出来ますか、」

先生「女は男と全く違つた紀律の下に居りまして、男軍中の部分と云ふよりも、寧ろ同盟隊となつて居ります、其大將は矢張女でございまして、女軍に適する紀律を以て支配致します、此女將も其下に属する女士官も、皆服役年限を果した女の團體が撰びまして、丁度男軍の高官や大統領を撰擧すること同様な仕方であつて参ります、女軍の大將は大統領の内閣に椅子を占めて居りまして、女の勞働に關する處置に對し、國會へ要求を提出する事が出来れば、不認可權を以て禁止する事も出来ず、先に裁判所の御話をした時、男と同じ様に女將が指定した女の判事があることを申し上げねばなりません、だ、原被兩造が女であれば、女の判事が裁決します、一方が男で一方が女なれば、男女一人宛の判事が斷案に同意しなければなりません、」

「爾うすれば今日の立て方に於きましては、女と云ふ者は一の政治以内に別に出来て居る政治の様な者に成つて居るらしいでございますねえ、」

折戸先生答ふ「幾分かさういふ風ですが、一大圓内に婦人と云ふ此一小圓を別に置たところで、左して國に害ある者ではございませぬ、本來男女は別個に獨立した者で、女が男に屬する者でない筈で有るのに、爰に道理を見認め落したと云ふのが、即ち昔の社會に有つた無數の欠點の一つでございまして、男女が餘り情慾の爲に吸引し合つた者ですから、男女の間にある大變な懸隔が目につかない様

になりました、此懸隔があるから多くの事柄に於て男と女との間に通せぬことがあつて、唯だ男は男同志、女は女同志で無ければ同感の情も生ぜぬことが數多御座います、そこで男は男、女は女で、銘々の娛樂を増進し、又男は女に、女は男に對して鋭敏な感動を持つ様に致させますには、昔の改革家が骨折つた様に、男女間の差異を消さうとしては成りませぬ、否、其差異の有るに任せて益々之を助長させるが宜しうございます、今日では女にも女專有の世界を興へまして、女同志の競争も有れば、女の功名心も女の生涯も有りまして、誠に樂しう面白う暮して居ります、昔は如何でございせう、女の生涯と云へば、哀れなる哉生れも付かない無理な競争を男とするのでございまして、貧乏人が可哀想だの勞働者が可哀想だの位な事ではない、夫れにも増した可憐な者で、實に間違た文明の石柱に供へられて居りました、そこで百有餘年を過去た今日、首を回らして當年を眺めますると、女が無聊な開けぬ生活を送たり、結婚の爲に憂慮して身体の發育を妨げられたり、狭い世界に蠢動したり、身は四壁に圍まれて陋生涯を渡たり、利慾社會に驅られて苦役に呻吟したりする有様が髮髻として認められます、此は大方は働き死をした貧乏人の事を指して申すのでは有りませぬ、有福な妻女や富豪の妻女に付て申上て居りますので、彼等は心に無量の悲哀を懷き、日々諸の面白からざる事が有たのですから、爽快な戸外に出で人らしい仕事のある世界に憂を消すことも出来ず、夫や子供を相手に

する外は一つも心を慰むる事が出来ませなんだ、若し男に斯様な生活をさせたら、失心するか狂亂するに相違ありませぬ、今日はスツバリ一新致しまして、男に生れたら善つたのにと歎く女も無ければ、女の子より男の兒が欲しいと望む親もございませぬ、女兒も男兒と同様に前途の功名心は勃如として胸に踊りまするし、結婚する時期が來まして、半の中へ投げ込まれる心地もせず、結婚したから云て、社會利益の關係や浮世の繁忙生活から離れると云ふでは有りませぬ、唯だ子を生んで其方へ心を引かされる時に成りますると、一時浮世より退て母たる務めを盡しまするが、其後は何時でも前の位地に戻つて、同僚と勤務に従事しても宜しければ、同僚と交ることも出來ますが、左すれば今日の婦人は古來歴史上に會て見ない程幸福な者でございまして、男子に幸福を與ふる力も從て増して來ました。」

余は問ふた、「當世の少女が職業軍の會員となつて、名譽を博することに氣を入れますると、結婚の妨害をする様な事が出來はしませぬか、」

折戸先生笑て言た、「夫れが爲の御懸念は要ませぬ、男女の性情が歳と共に如何程變化することが有りまして、双方からの吸引力は相變はらず強いと云ふのが、抑も造化の妙用でございまして、貴下の時代の様に生存競争をしなければならぬ爲に、衣食住以外の事を思ふて居る隙間もなく、翌日が如何

なるやらも知れないのに、父母たる責任を盡すと云ふ様な事をするのは、定めて罪を犯さん斗りに情ない事と思はれたでしようが、其様に間違た時分でも、嫁の取り遣りをして居たではありませぬか、方今の去る著作家が今日の愛情に付て斯云つて居ります、生計の事に氣を揉まなくてもよいから、男も心の中に閑暇な空處が出来る、其空處は男女相愛の優しい情が充滿するのだと、併し此説は些大層に言た者だと思ふて下さい、兎も角結婚が婦人の生涯に差障りになることはありませんので、女の職業軍の高い位置は、妻であり母であつた婦人ばかりに與へる者で、未婚者には授けませぬ、已に夫を持ちたり子を持つて居る者が眞に女性の女性たる處を示して居りまして、實に女性の代表者でございますから、」

「割前切符は男に與ふる様に女に向ても發行しますか、」

「無論の事です、」

「女は子を育てると云ふ責任が有りまして、度々其勤勞を中止しますから、割前の總額が男より少ないでしよう、」

先生言ふ、「少ないとは！滅相もない事、總ての人の扶持を同等均一にすると云ふ規則で、除外例はございませぬ、果して又御説の通り女には子を養育する爲に勤勞が出來ないから男と差別を立てると

致しましたら、女の割前は少なくなるのではない、却て多くしなければならんです、何故なれば異日國家を立て、行く要素とも云ふべき子孫を鞠育すると云ふのは、至重至大の勤で、國民の擧つて感謝すべき事ではありませぬか、今日の人の見解では、良父母はど人世に功勞ある者は無いので、今日の吾々が世を謝した後に、新に代て此世界を立て、行くべき子孫を何の報酬も無くして養育すると云ふのは、子を可愛く思ふて夫が心の慰になるとは言ひ乍ら、是はど國家に盡くす無慾な骨折は有ませぬ。」

「御説から考へますと、妻は決して夫に頼て衣食は致しませぬ様ですわねえ。」

「勿論夫に依頼しませぬ、小供とても同じことで愛情の爲にこそ父母に依頼しまするけれども、衣食は更に父母に依頼しませぬ、小供は生長すれば勤勞する、其勤勞するのは公共の資本を増す爲で、父母のを増す爲では有りませぬ、其時分には父母はもう死んで居るかも知れませぬ、だから之を養育するは公共の資本でするのが至當です、男であらうが、女であらうが、但しは又子供であらうが、誰でも彼でも常も直接に國家に關係のある者ですから、保護者として幾分か父母の手には係りますけれども、其外には一切國家以外の者に頼りませぬ、凡そ各人が扶持される可き資格がある譯は、國家に關係がある爲、即ち國民の一會員たるが爲でございまして、此資格は自分以外の同國人に對する關係

とは丸きり別物で、夫れが爲に影響される事は無いのです、大體甲の人が乙の人に衣食の依頼をしなればならぬと申す事は、徳義から言ても意外な事、又社會的の純理から言ても不道理な事で有りまして、其様な立て方の社會に居りましたら、人の自由の權は如何になりますか、人の威嚴は如何になりますか、第十九世紀の人が自由自由と自由呼はりをして、一角自由の權を持て居る様に思て居りましたけれども、今日の所謂自由と同じ意味である筈がございませぬ、左なければ貧乏は金持に頼り、雇人は雇主に頼り、女は男に、小供は親に頼つて衣食を求むる様な社會に此語を當て簞た筈が無いのです、國民全體の生産を直接に國人一般に分配するのは、天理に叶つた明白な方法で有るのに、却て個人同志が手から手へ互に産物を授受して、之を受ける人間を最も賤しき地位に貶し、散々之を虐使蹂躪する工夫に心を専らにしたと見へます、

「女が衣食の爲に男に依頼するのは、昔は一通りの事でございましたが、好き合つて結婚しました場合には、或は未だ辛抱の出来る事も有りましたでしょう、夫れでさへも活氣ある女に取ては卑屈極まると思ひつゝ暮したに違ひないでしょう、況んや天然の條理に背いて厭々ながら生活の爲に身を男に賣らなければ成らぬ場合が數限りもなくございましたが、其んなのは一体如何な有たでせうか、勿論貴下の時分でも、社會に於ける數多の惡むべき有様を歎つた人が有て、實に天理に背いた僻事だ

と思ふ人も有た様です、併し此とても唯女の爲氣の毒に思ふより起つた考へであつて、男が國の産物を悉皆己の懐にせしめ、其配分を得る爲に女をして哀求媚を呈せしめることは、殘忍も殘忍、泥坊同然の所作で有ると云ふ事に思ひ及びませなんだ、否、此は失禮、西様、此憐れな婦人が泥坊に逢たり悲い目や耻しひ事に逢たのが百年以前に未だ盛に行はれて居て、私同様悲みなされたに相違のない貴下迄も其責に當らねばならぬ様な言ひ方を致しまして、」

余は言た、「何に、當時の世界の不始末に對しましては、私も一部分の責を受けねばなりませぬ、唯申譯迄に御話申しますが、唯今の生産分配法を實行する時機が熟しまするまでは、根本的に女の地位を改良することが如何も出来難ふございまして、御説に有りました女の力量の足らないと申すのも、根は男に依頼して生活したからでございまして、成程當世御採用に成つて居ります社會組織より外には、女を男に依頼せしめず人々も相互に依頼しない様にする工夫は有りませぬ、時に序ながら御尋ね申しまするが、女の地位を斯斗り變へまするには、男女の社交上の關係に著しい影響を及ぼしたに違ひなからうと思ひますが、如何な者でしょう、此點は私に取りましては頗る興味のある研究でござい

ます、」
折戸先生言ふ「昔の男女の關係は、如何も体裁を飾つて、心にも無い詐りをして居たらしいのです

が、今日は極明ら様で、束縛した所が一寸も無いのが、先づ主な變化であります、そこで男女が會各しまするのにも、双方十分平等で、聊かも上下の隔なく、又婚姻を求むる男も唯管愛情ばかりに驅られて會見をいたすのでございまして、昔は如何でしたか、女は衣食を男に依頼する者ですから、實は結婚の爲に御蔭を被むる様な事に成りましたでは有りませぬか、昔の記録から判じて見ますと、之は下等社會の者には餘り無つた事らしいございまして、些ど洒落た社會になりますと、一から十まで虚言八百の世間通の体裁斗りで、心に黒いと思ひながら、口では白いと言たり、嫌いと思ひながら、好きと言たり、何でも倒まな事斗り並べ立てまして、相手を釣り込もう取り込もうと致しました、其結局男の方が甘い汁を吸ひまする、そこで之をする爲には、男から常も結婚申込人とならねばなりませんので、男から縁談を言ひ出さない内に、女の方から愛情を表はすのは、實に宜しきを失ふた怪しからぬ事と成て居りました、今日圖書館へ参りますと、貴下の時分の作者が作つた書物が有ります、何の事情が有ても、男から結婚を申込て居ないのに女が愛情を洩して苦しくないか如何かと云ふ問題を研究する爲に態々作つたらしい本が有ります、是は全体丸で詰らない事に見へますけれども、貴下の時分の状態では、實に重大な問題で有たうと思はれます、如何様女が男に向て愛を申し出すと言ふのは、詰り男へ對して身の振方を頼むことになるかと考へて居つた時代には、心が動ても之を

抑へ殺して置くのが女の憤みで優しい所で有るとして居たは理の當然でしょう、將來貴下が段々世の中へ御出なさいますと、若い者共が此事を燃じ反へして尋ねましようから、覺悟して御出でなさい、彼等は此舊弊な仕方に大層興味を起して居ります、」

(註 折戸先生の忠言は如何にも其通りで、若い者共、殊に若い女共は、第十九世紀の奇妙な縁組話を聞いて、斜ならず面白がるのである、)

余は言つた「そうしますると第二十世紀の少女は自分で愛を申出づるので有りますか、」

折戸先生言ふ「言ひたければ言ひますが、男の方にも女の方にも、心に挟む感情を匿さうとは決して致しませぬ、風情を弄し秋波を寄せるなどすることは、男に於ても女に於ても賤む所でございませぬ、昔の人は態と水臭ひ面をしたが、相手は之を知つて居ました、併し今日ならば相手は屹度だまされまます、何故なら今は其様な馬鹿な事をする者がありませんから、」

「成程、此は女の獨立自尊と云ふ邊から來なければ成らぬ結果でございまして、今日では心に適はない結婚は決して有ろう道理がございせんねえ、」

「それは勿論の事でございませぬ、」

余は問ふた「純粹な愛情に基いた結婚ばかりの世界があるとは！、先生、此様な世界は第十九世紀頃

人の目には如何なる不思議な事と思はれたか、先生には御解りはありませんか、」

折戸先生は言つた「否や、幾分か想像は出來ます、併し純粹な愛情からのみ起る結婚と云ふことを左斗り御感服なさいますけれども、其眞意は大方まだ本當に御承知はありますまい、元來男女の交りは自然に人性を淘汰して之を改良する者で、良い人種は之を保存し、之を後世に傳へまするし、劣つた人種は之を濾し去て朽ちさせる者でございませぬ、舊社會の下に在つては、兎角此原理が妨害されて十分に行はれませなんだ、所が新社會に成りましてから、始めて此原理が自在に行はれる様になりました、實に千歳の慶事でございませぬ、即ち衣食なく住居無く饑寒貧乏に驅られ好きもせず重んじもしない男と結婚して之を將來の愛兒の父と仰ぐ可憐の佳人も、富貴榮華に眩まされ人格の如何を調べずして結婚する婦人も、或は黄金の光りを以て心の凡庸を蔽ふ痴漢に欺かれて生涯を誤る佳人も有りませぬ、身体髪膚心意性情、共に之を天より受けた者でございませぬから、美麗、機智、雄辯、仁恕、寛宏、剛勇等の諸の徳は必然子々孫々に傳はる者で、一たび傳はる毎に一たび淘汰せられ、淘汰せらるゝ毎に、次第々々と精良に成まして、善い屬性は保存せられ、悪い屬性は除き去られます、尤も愛情ばかりで結婚するに限りませぬ、愛情の外に其男の美德を景慕するが爲に晴の結婚がしたいと云ふ女性も澤山ございませぬが、併し之とても矢張同じ理法に適て居りまして、今日の所謂晴の結婚と

は、富貴の人や爵祿の人に嫁すると言ふことで有りませぬ、人間に對して赫々たる偉勳を著はした爲に名聲藉甚となつた人物に嫁すると云ふことでございます、此等の人物が即ち當世の貴族とも申すべき者で、貴族と結婚するのが女の譽でございます、

「一兩日前の御話に、昔より今の方が人の体格が優れて居ると云ふことでございましたが、此は全く新社會が組織されてから、二三代も相繼いで人間の性質の上に陰陽淘汰が十分に出来ました結果で有まして、あの時申上しました人種改造の諸原因よりも、これが更に重大な事でございます、當今の人間をモット御調に成りますと解つて来ませうが、實に身体の改良ばかりでは有りませぬ、心性も徳義も改良されて居ります、此は又さう無ければ成らぬ譯で、造化の一大理法が人種を救ひつゝ、有りまする上に、深遠な徳義心までが人種を救て来たからでございます、昔は個人主義と云ふ事が社會人心を陵のかして居りましたが、此主義は四海兄弟となつて睦び合ふと云ふ感情を滅ぼし、各人共同の利益を謀ると云ふ心を失せしめますのみならず、將來代つて世界に出づる子孫の爲に責任を負ふと云ふ心をも消してしまひます、子孫の計を爲す責任を負ふと云ふのは、前代未聞の事でございするが、今では此心が人間倫理の一大觀念と爲りまして、此心と義務を盡す強い心が相結合しまして、最良最貴の人物に嫁さうと云ふ心を強からしめます、そこで如何云ふ結果が出来たかと云ふと、

婦人が人間の優劣賢愚を判斷する位地に立ちまして、愈々卓越した傑物を認めますまで、自愛して浮とは詰らない人間に身を許さない者ですから、少年輩は大に獎勵せられて、何でも不世出の功名手柄をして、天晴の佳人を手折ろうとします、此は實に功能の有る獎勵法で、技能智力を發達せしめる爲に拵へてある諸の獎勵法もございしますが、中々比較には成りませぬ、實に人間は飽までも有情の動物で、如何なる鞭撻や責苦に逢しましても、如何なる誘惑や褒美を受けましても、矢張小野の町や衣通姫の様な美人に思れる方が良いと見えて、怠けた結果は美人が振り向いて呉れぬから、怠ける者は一人も有りませず、皆腕に撚りを掛けて働きます、

「今日獨身で暮します者は、大概勤勞の義務を十分に果さんだ者に限り居りまして、其様な不仕合な人を氣の毒に思ふて、世間の論評をも憚からず、身を犠牲にして之を夫に持つ様な女は、間違つた乍らも先づ勇氣のある者に違ひありませんが、男子から受ける攻撃は何とも思はんでも、流石女性仲間から受ける論難には閉口する様です、元來女は未來社會を立派に維持することが出来る様に子を養育して、其保護者と成るのを重大の責任として居ります、此義務の感情は誠に神聖な者で、娘等の幼ない時分から、此心を薰陶致しまする、」

其夜余は室に退いてから、折戸先生から借り受けて有た米蘭の小説を夜深まで讀だが、先生の話し

て居た父母たる責任の今世觀に關することを仕組で物せる者であつた、之を第十九世紀の小説家に書かせたら、情郎の我儘千萬な感情を書き並べて、讀者の間違た同情を起させたり、情郎が天理に妨けられて、私慾を恣にするこゝが出来ないのを怒らせる様な話を書たに違ない、現に彼のルース、エルトンと云ふ小説を讀まない人は無からうが、米蘭の筆法とは丸きり違ふ、米蘭の主張して居る主義は簡様である、將來に生れて来る子孫に向ては、吾々は神程の權力を持ち、神程の責任を負て居る、吾々が子孫に對する義務を果す如く、神も亦た吾々に對する義務を果せ」と、

第二十六回

余は週の日を忘れて、今日は何曜日と云ふことが全く知れなんだのは、何分余の事情が事情だから無理も無い、當今は七日宛で數へるのでは無い、五日宛、十日宛、或は十五日宛で數へるのである、そうだが、何様今第二十世紀の事を見たり聞たりして、目を驚かし耳を驚かした事が山々有た者だから、時日の數へ方が丸で變つて居た位な事を聞たにしろ、左迄驚くべき事でもない、週の日を始めて調べる氣が起たのは、前回の談話が有た翌朝の事で、朝飯の時に折戸先生は説教が聞きたいかと問ひ掛けた、

「では今日は日曜日ですか」と余は問ふた、

折戸先生言ふ「左様、今日唯今爰で相交りまするのも、本はと申せば土中の寢部屋を發見しましたからで、あの日は丁度金曜日でありました、又始めて御目醒に成ましたのは、土曜日の午前の零時過ぎで、二度目に御目醒に成ましたのが、日曜日の午後で有ました、」

「夫れでは今日でも日曜日もあり、説教もございますか、昔預言者の申しました所に由りますと、今日にならぬ内には世界には日曜日も説教も無くなるだろうと云ふのでございました、時に宗教上の仕

組が今日の社會上の仕組と如何様に適合するか知りたい者ですが、大方國教と云ふ風の者が有つて、官から僧侶が置いてございますか、」

折戸先生は笑ふ、夫人と悦子嬢とは大變面白そうな氣色で有つた、

悦子嬢は言ふ、「西様、貴下は今日の人を可怪な人と思つて入つしやいます、第十九世紀頃には國教の寺院を丸きり廢めて居つたのに、今は又候昔に立戻て之を建て、居るのだと思召ますか、」

「でも建築物は皆な國有で、人は皆職業に従事せねばならぬとして見ますと、有志者が教會を建てたり、私に僧侶を職とする様な事は、如何して出來ますか、」

折戸先生は言つた、「宗教上の習慣が百年間に大に變化したのも固よりの事ですが、假令變化せずに居つたとしても、今日の社會の建て方は十分其習慣に適するのでもありません、今は家賃さへ拂へば誰へでも家賃を貸しまして、家賃の續く限りは何時迄も借りて居られます、そこで若し一國全般の義務で無くとも、若き人が何か自分等勝手手の目的があつて、一人の僧侶を頼みたいと云ふことになりますと、僧侶さへ承知すれば、其人が職業の勞働を中止して居る間の賠償を割前切符で以て國家へ拂ひますのは、丁度前に申した新聞記者の場合と同じ事です、一人の爲に拂ふ此賠償は、丁度昔一人の僧侶を頼んだ代りに其人に直接に拂つた給料に當ります、此主義を色々に應用しますので、新參の

宗教家も十分に手腕を伸ばす餘地が出來ます、説教を聞くのは如何するかと申しますと、聞きたい者は教會へ行くなりとも自宅で聞くなりとも、何方でも宜しふございます、」

「自宅に居つて如何して聞けますか、」

「時刻が來れば音楽室へ行て安樂に椅子に凭て居たら善いのです、教會へ聞きに行く方が善いと云ふ人もありますが、今日の説教は大概音楽を聞くのと同じ様に、公衆の真中に立つてするのはございませぬ、音響學を應用して拵へた室内で説教をしますと、其會の加入者の家々へ掛る電話線でズツト聞へます、若し教會へ行きたいとあらば御伴致しますが、宅で御聞なさいます方が良い説教が聞けましよう、新聞で見ますと、馬藤氏が今朝説教をする筈ですが、先生は何時も電話でするに限て居りまして、聴衆が屢々十五万人に達します、」

「説教の善し惡しは二段と致しまして、電話で説教を聞くとは始めての事です、何卒其馬藤氏とやらの聴衆の仲間入がして見たい者です、」

一二時間経てから書籍室で讀書して居ると、悦子嬢が呼びに來た、そこで音楽室へ從て行くと、其處に折戸夫婦が待て居た、其處の椅子に凭るか凭らぬかに、鈴の音がチリーンと鳴た、二三分間すると物言ふ人の形も見へないのに、男の聲として通例の話位な聲で演説を始めた、其演説は次に示す通

りで有た、

馬藤氏の説教

「前週の事でございました、第十九世紀からの批評家、吾々の祖先時代の代表者が吾々の社會へ見へました、斯くも珍しい事實が果して吾々の想像、吾々の興味を起さなければ、夫こそ誠に奇怪と言はなければなりません、吾々十中八九は恐くは今より百年以前の社會を心に書き、當時に生活すれば如何なる有様であつたかを想像したのでございませう、私は此事に付て色々考察した事がございませうが、之を諸君の静聴に入れんとするに當りましては、諸君自らの意向に背くより、寧ろ其意向に従ふに若かずと自信致しまする、」

爰まで説たとき、悦子は何やら父にさゝやき、父は點頭づいて余の方を向いて言ふには、

「ねえ西様、唯今悦子が申しまするには、馬藤氏が言て居る様な説を御聞なさいますのは、稍や異な御心持も御座いませうから、之を聞くのは止しても宜しい、若し御望も有らば、杉澤氏の演説室へ電話を掛直すと申しまするが、之の中々宜しふございませう、」

「否や、矢張馬藤氏の説教を聞きたふございませう、」

「それでは御好み通りになさい、」

先生が余に話した時に、悦子は螺旋に指を觸れたので、馬藤氏の聲は俄に止て居たが、今又再び指で押へると、熱心な音調は再び室に満ちて、演説は次の如くに續いた、

「顧みれば僅かに一百年の星霜でございませう、此間に人類の物質上徳義上の有様が如何斗り痛ふ變りましたか、當時を回顧し當年を研究する者の均しく驚く所であらうと考へまする、

「けれども第十九世紀に於ける國家及び世界の貧窮と、今日の國家及び世界の富有とは、如何斗り違ふかと申しまするに、決して雲泥の相違がある譯では有りませぬ、史傳に見なかつた程の相違がある譯では有りませぬ、言はば第十七世紀殖民時代に於ける米國の貧窮と、第十九世紀末に於ける富有との違ひでございませう、或は古へノルマンディーから英國へ攻入た維廉王時代の英國とビクトリア女王の時代に於ける英國との違ひでございませう、當時は固より貧富間に天淵も管ならざる懸隔が御坐いましたから、今日の様に一國の富の總量が強ち一般人民の富度を示してはいなかつたです、けれども今示しました一二例は畧第十九世紀と第二十世紀との間に在る物質的の差異を示して居ります、併し更に首を回らして熟々徳義の方面を見まするに、吾々が前代に其例のない現象の中に今日生存致しまするのは、實に有難い事で、誠に千歳は愚か万歳の一遇でございまして、爰に奇蹟ありと呼はる者が御坐いまして、亦た答めるに及ばないので御坐います、併し啞然口を開いて徒らに驚く事を止めま

して、批評的眼光を以て此驚くべき有様を調べて見まするに、決して驚くべき事でない云ふ事が解かる、況んや決して奇蹟で無いと云ふ事が解りまする、吾々の眼前に現はる、徳義の美は、徳義が新たに生れた譯では有ませぬ、又悪人を全滅し善人を生存せしめた譯でも有ませぬ、全く四面の境涯が一變して人間の性質に反射したからでございませう、私慾の私利を基として殘忍酷薄の人性にのみ訴へた社會の狀態が改まりまして、無慾の私利を基とし、情誼の性、寛仁の心に訴ふる制度を用ひたからでございませう、

「諸君が若し第十九世紀頃の様に人をして食肉獸同然の有様にさせたいとならば、舊社會法と舊職業法とを再び興せば宜しいので、舊法は同胞兄弟を餌と見て之を食ひ、他人の損失を己の利益として之を打倒す事を人に教へました、勿論諸君は思はれませう、幾ら貧苦艱難に逼つても、技術と腕力とが優る限り、同じ境界に苦む他人を虐げて己の口腹を満足せしめる氣に成れる者ではあるまいと、併し己一分のみなれば宜しいが、妻子羈屬が有つて其生命を維持してやるべき責任が有つたら如何なさいますか、昔とても百人が百人ながら豺狼の様な人物でも有りませぬ、中には随分人間らしい人も居まして、唯だ自分自身の生命の事なれば他人の食物を奪て生きるよりは死するに若かすと思つた人も澤山ございました、けれども如何にせん其人には幾人か足手纏ひがございまして我一人が思ふた通

りにも成りませんから、勢止むを得ず彼己氏に倣はなければならなかつたのです、男が女を愛するのは今も昔も同じ事で將來子が出来て己れは父と成ると云ふことは神ならぬ身の知る筈は無い、然るに愈よ子が出来て見れば可愛のは今日の吾々も同然で有りまして、食物や衣服を與へなければ成らず、教育もしなければ成りませぬ、假令幾ら温和な動物でも、我子に衣食を與へんが爲には、烈しい勢になる者ですから、彼の虎狼同然の社會に於きましては、天性温厚の人さへ子の可愛さに必死となつて食を得るに競争致しまして、手足に纏はる妻子の爲に、是非曲直を撰んで取捨するに暇なく、劇場裏に躍り入つて欺むくやら打倒すやら、廉く買ふては高く賣たり、隣人が由て以て其子女を養ふ商賣を打毀したり、人を誘ふて買ふことを欲せざるものを買はせ、或は賣ることを欲せざる者を賣らせたり、或は労働者を虐げ、或は負債者を苦使し、或は債權者を瞞着し、所有奸手段を盡して利益を貪りました、此通り人は涙を流し血を流しましてさへ弱い者に逼て其口から食物を奪ひ取らなければ妻子を養ふ事が出来なかつたのでございませう、宗教上の教義を説く傳道師始め、此慘烈な手段を用ひ無ければならませんでしたので、一方では信者に對して金錢を貪る心を捨てよと誡めて居りながら、一方では妻子の心掛りが有る爲に、説教の報酬を金錢で掠めやうと云ふ氣に成て居ります、哀れなる哉、傳道師の職は實に苦しい者で、其頃寛仁だの無慾だの云ふことを實行したならば、忽ち貧苦

に陥ると云ふことを知り乍らも、尙且人に向て寛仁なれや無慾なれやと説き勸めたのでございます、歸する所自護の理法と水火相容れない仁義五常の道を教へたのでございます、此等の賢い人等は、無情極まつた社會の有様を見て敗徳亂倫を痛く歎きました、可憐純潔な性質も、此の様な惡魔世界に在つては打壊される者だと云ふことを知りませなんだ、諸君、仁義の仁義たる所以は今日の如き幸福の世に現はれるものではございませぬ、彼我生存の爲に相争ふて憐むことを知らざる世にこそ現はれるものでございまして、斯かる骨肉相食む澆季の世に於きまして、仁義の心は未だ全く消えては居らなんだので御坐います、

「他の境遇に於ては温厚篤實を失はなんだ様な男女でさへ、當時黄金を取合ふことに至りますと、死を顧みずして相戦ひ相殺なりましたのは、抑も何故でございませうか、是れは金が無くば如何云ふことになるか、當時の所謂貧苦とは如何云ふ事であるかが十分解せますれば、其理由は解するに難からのでございませう、金の無いときは、身體から申せば、飢渴に迫る、寒暖に苦しむ、病では人に顧られず、癒へては假借なく苦役せられます、又徳義から申せば、壓制と輕蔑とを受けて凌辱せらるるも逆ふことは出来ず、幼い時分から禽獸同然に殘忍無情な交り結び、小供の頃はなさも、女性の優美さも、丈夫の威嚴も、盡く失つてしまします、又心性から申しますと、万物の靈長たる智能

は麻痺してしまつて、貴重な生命を賤役に貶し、無知文盲で死んでしまふのでございませう、

「嗚呼諸君及諸君の子孫が金錢を蓄積すること能はずんば、此苦を忍ぶより他の道が無いと云ふことになれば如何でございませう、幾何もなく相率ひて諸君の祖先が曾て屈辱したる境界に沈み溺れるであります、

「今を距ること凡そ二二百年以前の事、印度に於て殘忍刻薄な行を働いた者がございませう、之が爲に殺されました生命は僅々百人内外でございましてたけれども、其殘刻で戰慄すべき有様は、終古忘れられぬでございませう、即ち英國の囚人が百人餘りも一室に閉込められましたので、其の室は其十分の一の人数にさへ十分な空氣も通ひませなんだ、此不幸なる人々は皆義務を果すに熱心で、豪勇な者斗りでござりました、然るに空氣は段々と腐敗して来る、臭氣は段々と塞がつて苦しく成るに従つて、何れも皆我あることを知りて、他人の身あることを忘れ、獄舎の一小孔へ口を當て、一たび新鮮な空氣を吸ふが爲に、相押し合ひ相踐し合ひ、此世からなる情ない修羅場を演出しました、此相争ふ有様や、眞に人を畜生の如く無慈悲殘酷に致しましたので、少し斗り生き残つた者が牢を出て後語りました話は、吾々の祖先さへ聞て毛髪が竝立つた程でございまして、夫れより百年を経た後に至ても、之を記載する文字は人生の不幸が極度まで達するときは心も身軀も滅茶々々になる者だと云ふ証據にな

つて居ました、此は印度カルカッタ府の獄屋と申し、呼吸の穴に達する爲に心も狂ふて同僚相戮なひ相踐合ふた惨状で、歴史上有名な事で有りました、今日より百年前の人々さへ身の毛をよ立てた所でございしますが、今日より見ますと百年前の社會が丁度カルカッタの獄屋に酷似して居るとは、蓋し百年前の人が思ひ掛けなかつた事でございませう、併し唯一點違ふ所がございします、と申すは、カルカッタの獄屋には纖弱き女や小さな小供、或は老爺や老婆や不具者は居なかつたのです、百年前は如何でしせう、第一に苦んだ者は斯る憐れな人で有たではありませぬか、

「舊社會を知らない老人等でさへも唯今の新社會は古めかしい珍しくもない者の様に思ひまするけれども、私が前刻から申して參つた舊社會の有様は、第十九世紀の末まで續いて行はれて居たのでございします、考へて此に到りますと、未曾有の大變化が急に起り急に完ふたつたには驚かざるを得ませぬ、併し乍ら第十九世紀末の人心の狀態を觀察しますと、是は左まで驚くに足らない事でしよう、抑今日の様な人智が一般に廣がるのは、當時何れの社會にも無かつた事でございします、けれども夫れより以前の時代と比べますれば、當時は多少人智が増して居りましたので、苟くも多少の人智が出来ました爲に、是迄一般に廣がつた事のない社會の害惡を見認る様に成りました、其害惡は夫れより以前に在つては遙かに惡く御坐いましたが、人民一般の智慧が増して來まして、漸く之を見認め

る様に成りましたのは、丁度暗ひ所に居る間は身の周圍の汚穢いのが目に見へないから堪忍も出來たが段々と明るくなるに連れて段々目に止まり、之を掃除しなければ堪らなく成るのと同じです、當時貧窮で不幸な人に對して憐愍の情を寄せたり、社會機關が人間の不幸艱難を改善することが出來ないのを絶叫叱責するのが文學の骨髓でございました、此から考へますと、徳義が腐敗して何所も彼も悲惨な有様で有たのが、多小當時の善人に認められたには相違ありませぬ、のみならず取分け感情の強い寛仁な人に至りましては、餘り憐の心が劇しくて殆んど生きて居るのが堪へられないと云ふ人も有たのです、

「人間は皆兄弟と云ふ實を現はして人類を一家屬に合一すると云ふ事は、今日の人にこそ、徳義の原理と思はれますが、當時は中々此理を悟て居る者がございませなんだ、併し夫れだからと云つて、丁度今日の此に相當する感情が無かつたのだと思ふのは誤りです、少數の人は明かに此觀念を懷て居りましたし、又漠然之を心に持て居た人も澤山ございました、此は其時分の著者の文に見えて有りました、其中には中々立派な章句が随分ございします、且第十九世紀は基督主義を唱て居りまして、私から見ますと唯耶穌基督の教の有名無實の信者たるに過ぎませんから、其實餘り感服は出來ませぬ、けれども兎にも角にも商業上の仕組も職業上の仕組も非基督的精神で出來て居たと云ふ事實は、

名聞信者の慷慨心に訴へたには相違ございませんね、

「當時の社會組織に著大な惡習あることは人が過半同意して居りましたのに、彼等は尙も之を耐忍したり、或は些細な一部分の改良を唱ふる位で満足したのは何故でございましょうか、何故更に一步を進め、舊態を打破し、局面展開をしようとはしませんでしたか、其理由を調べますと實に非常な事實があるのでございます、社會の組織を安全に建築する基礎ともなるべき人性の原素は人性中にある最惡の性癖である云ふ様な間違た事を、當時尤も善良と稱する人さへ心の底から信じたことわざいしました、彼等が曾てより教へられ、曾てより信じた所に由りますと、能く人類を纏めて之を維持するものは、即ち我利貪慾より外には無い、然るに若し公益だの無慾だのと云ふことを言ひ出して利慾の念を鈍らせ利慾の利を制したなれば、人間を維持する連鎖は寸断に切れてバラ／＼に成てしまふと斯云ふのでございしました、詰り今日の人の目に炳然火を睹るよりも明かな道理に正反對な事を信じまして、之を信じない様にしたいと思ふた人さへ矢張り下心に之を信じて居りました、尙其主義を敷衍して申しますと、社會に凝聚力を與へる者は、人間の社交的性質ではなく、其非社交的の性質で有ると云ふのでございまして、人々が相共に群居するのは相互に欺き合ひ壓制し合ふ爲に外ならないので、此性癖を自由自在に活動させる社會は成立つが總ての人の利益の爲に同心協力すると云

ふ主義を基とする社會は成立つ事が覺束ないと思ふて居りました、古人が斯斗り間違つた考へを重大視して居たとは甚だ信じ難い事でございます、けれども吾々の祖先が皆此説を持つて居ましたのみならず、其惡習の弊に堪へられない事を知りながらも、尙は懸々として舊態を捨てずに躊躇したに付ては、吾々の祖先は實に其責に任せねばなりません、此は決して虚構や推量の沙汰では有りませぬ、歴史の証する立派な事實でございします、斯く論じて見ますれば、第十九世紀末の文學には非常に厭世の臭味が有つたり、其詩歌には鬱陶敷憂愁の調子が有つたり、其滑稽にも殘忍な所が有つた譯が解りませう、

「當時の人は人間の境界が苦難に堪へられないことは知りつゝも、之を改良しよう云ふ判然した希望も有りませず、人間進化の結果、人を奈落の底へ導き込んだので、進退維谷つて如何することも出来ないと思ひました、當時人心の有様を知りたい好事家は、圖書館へ行けば今でも解りませうが、人間の狀態が實に惡い拘はらず、生と死との何らを取るかと申せば、矢張り生きて居るが増で有つたことは、色々の議論から証據立られます、彼等は自らを輕侮すると同時に造化を輕侮しました、宗教の信仰が一般腐敗したりと云ふべしです、譬へば青ざめた薄い光が疑惑と恐怖とで濃く蔽はれた雲間から漏れて、下界の混沌たる有様を照した様でございします、嗚呼吾々の耳目鼻口の近き處にも満ち

「たる神を疑ひ、吾々の形態を作つた所の手を恐れるのは、實に憐むべき發狂沙汰ではありませぬか、併し諸君よ、晝間剛強な小供も夜中詰らないことに恐るゝことを記應せよ、已にして天明けて四方明かになりますと、其恐れは散じて希望と満足とが参りまする、嗚呼吾第二十世紀こそ神が万物の父たることを信じ易き時でございまする、」

「是迄は舊社會から新社會へ移れる様な人心の準備した諸の原因を掲げ、兼ては又時期が已に熟した後にも、暫く控へて進まなんだ保守主義の原因を幾らか示しました、何れも簡単に説きましたのみですが、此性質の話をするに當りましては、簡単に説かざるを得ないのでございます、儲愈改革が出来る見込が確かに定まるや否や、變化を仕遂げてしまひまして、餘りの急劇さを驚きまするけれども、長らく絶望の地位に慣れて居た者が遽かに希望を達しますると、恰も酒に酔た心地が致す様な者でございます、儲結局人は侏儒になる爲に拵らへられた者で無く、其長の短いのは、十分の度迄延ばらないからで、随分何程にも發育する者だと云ふことを世人が覺りましてからと云ふ者は、其反動はすばらしい者で、新思想の勢實に破竹の如くで有たに違ひ有りませぬ、」

「遂に人は此こそ人類社會に取て最も大切な古今無比の大原因だと考へたでしやう、由來歴史面に現はれた大原因は、皆幾百万人の生靈が身を犠牲にして後、漸くに得た者でございまするのに、此新思

潮を活動實現せしめる爲には、唯一人の殉死者も出すには及びませなんだ、古へ一小國の王朝を變へまするには、滿天下の人民を盤石の安きに置く革命に於けるよりも更に多數の生命を棄てたではありませぬか、」

「此光輝ある世代に幸福なる生活の恩澤に浴する者が、異なりたる生活をして見たいなぞと望むことは、奇怪千萬に相違ありませぬ、けれども私は此結構な黄金世界を捨て、争擾を極めたる變遷時代に生れて見たいと云ふことを屢々考へるので御座います、彼の時に當りましては英雄輩出して當時と將來との間に立てられたる障壁を排し、此時に至る迄一寸先きは暗夜の如くに思ふて失望の淵に沈める人類に將來進歩の微光を指示しましたが、其光は今や閃々として吾人の眼を眩ましむる斗です、嗚呼諸君、當時社會の最も微弱なる勢力であつたものが實は横杆であつたので、一たび之に觸るゝや、幾百年を揺り動かすことが出来ました、斯う言ふ社會に生れた人は、今日此福徳圓滿の世に在る吾々から見ても羨ましいではありませぬか、」

「新舊社會の交迭は實に世界の諸の革命中で最後なる者、最大なる者、而も血を流すことの尤も少ない者でございました、諸君は定めて此革命の物語を御承知になつて居りませう、天下の人は蠻民の間に行はれて居た社會的の風習と習慣とを棄てまして、万物の靈長たる人間に相當した社會を建設し

たのでございます、奪掠の蠻風を止めて協同の勢力者となり、四海兄弟の約を結んで一視同仁にするは即ち富且つ幸なる所以であることを悟たのでございます、余は何を食ひ、何を飲み、何を衣るべきやとは、古人が徹頭徹尾自己を中心として時々刻々に懸念した問題で、到底其解釋を得ない者でございませう、然るに之を個人から見ずして四海兄弟の立場から眺め、余々は何を食ひ何を飲むべきや、余々は何を衣るべきやと云ふ問題に移るや否や、從來の疑團は釋然として解けて其の解答を得ました、

「貧窮に陥つて、且つ賤役に呻吟しまするのは、個人を立場として衣食の問題を解釋しようとした爲に、多數の頭上へ落て來ました災害でございませう、然るに一旦國其ものが唯一の資本主唯一の雇主となるや否や、貧窮の代りに富饒が來ましたばかりでなく、人が人の奴隷となつて屈從する事が世界の外へ追ひ出されて、其根柢をも止めなく成ました、生計の費へも最早や男が女に給したり、雇主が雇人に與へたり、富人が貧人に施すのでは無く、恰も父の食卓に就く小供の如くに共同の倉庫から出して分配致しました、人は最早や己の利益を計る爲に同胞兄弟を道具に使ふことが出來ず、専ら己の力量で以て尊重せられる様にならなければ成らぬことになりました、人間相互の關係に於きましては、最早傲慢に人を願使したり、卑劣に人に屈從することが止まりました、實に世界開闢以來人として

云ふ人は皆始めて恐れなく神の前に直立致したと云ふ者でございませう、總ての人には豊富に與へますから、欠乏の心配も無くなれば、不相應な物を所有することが出來ませんから、利慾の念も無く、道の傍に食を乞ふ乞食も無ければ、乞食に施す人も無く、萬事盡く平等均一を主義として居りますから、慈善を施す所が有ませんでした、斯の通り人ごとに足り、家ごとに給して、盜むことを知らず、恐るゝ所無く、乞ふ所が無いから、欺くことを知らず、財産、位地、權利が皆平等で有るから妬むことを知らず、互に害する力を奪はれて殺すことを知らない世界、斯る世界でありますから、彼の十誠なる者は殆んど廢つて用ふる必要が無くなりました、嗚呼自由と平等と博愛は昔人の夢にのみ見る所で、幾世幾年の間愚弄嘲罵せられて居りましたが、有難や到頭今は之が現實と成つて鮮かに眼前に見ることに成りました、

「舊社會に於ましては、寛仁な人や正直な人や或は慈悲深い人の心は、生憎此美德を持て居ながら、却つて身の損でございましたが、之に反して新社會に於ましては無情な人や貪慾な人や或は私利に汲々たる徒は度外視されて世に交はれませなんだ、今は昔と違つて生活の模様が虎狼の殘忍飽くなき心を進ませる原動力となつて働かなひ事となり、是迄人の私慾心を鼓舞した利益は之を奪ひ去つて、無私無慾な人に與へることに成りましたから、純粹自然の人性が始めて見認められて來ました、曾て善良

な傾向を壓倒した惡逆な傾向は、今は恰も土窖の濕菌が空氣中へ出た如くに萎んでしまい、今迄壓倒されて居た尊貴高尚な性質は青々と榮へて來ました、是に於て會て人世を嫌ひ人間を惡んだ者も、翻へつて人生の美を賞め、人間其物さへをも戀々として離るゝ能はざることゝなりました、實に歴史有てより以來未だ會て見ない珍事でございます、偕愈斯成つて見ますと、昔の神學者や哲學者も信じ得なかつた事、即ち人性は本と善な者で惡ではないと云ふ事、人は寛仁に慈悲に憐深く拵へて有て慾深く殘忍に傲慢に造てはないと云ふ事、神に像つて神聖な希望と神聖な愛情とで献身的に出來て居る者で、決して神を戲弄する様に出來ては居ないと云ふ事が、頓て十分に知れて來ました、顧みれば幾百世の間か舊社會の狀態が絶へず人間生の境遇を壓へ付けまして、天使の力も爲に挫かれたかと思はれる程の壓力を逞くして居りました、けれども人間が持て生れた尊貴な性は、未だ根本的に變へられて居りませなんだので、一旦古い境界が除き去られまするや否や、恰も無理に縮曲せられて居た木の様に、忽ち撥返つて本の通り眞直に成りました、

「之を解し易くする爲に一つ比喻を設けて申し上げますと、舊社會の人間を以て一つの薔薇の木に較べますが、此木は沼の中に植えて有つて、黒い泥水に養はれ、晝は有害な水氣を吸ふて、夜は毒ある露で冷されました、幾世幾代の植木屋が、何でも花を咲かせ様と思ふて、骨を折りましたけれども

も、折々蟲の喰た薔薇が開きかける位で、何の甲斐もございませぬ、世間多數の人は、之は決して薔薇ではなひ、有毒有害な草だ、引拔て焼いてしまふが善いと申しました、併し大概の植木屋に言はせますると、矢張薔薇には違ひないが、周りに甚去難い穢ない物が付て有つて、其爲め薔薇は咲かず、勢も萎れて居るのであると、箇様に申しますけれども、又少數の人の説では、幹は良いのだが、泥の中に在るのが悪いのだ、もつと善い場所に置いてやつたら善くならない事は無いのだと、然るに此の少數の人は植木屋で有りませんから、理窟は善いが實地をうは行かなひ愚論だと植木屋に遣込められまして、世の人も亦た愚論家だと思ふたのです、且又名高い倫理學者に言はせましても、假令一步を譲つて場所を換へたら善くなるかも知れないとした所で、善い場所へ移すよりも泥の中で花を咲かせて見る方が、薔薇の爲には結構な習養になるのではなひか、能く咲いた薔薇が少く、其花も青白くて香が無いにもせよ、花園で自由自在に咲くよりも、あの通りにして咲く方が、遙かに徳義に叶つて居る者だと、箇様に申しました、

「植木屋賣の者と倫理學者とは、自分の説を主張して、他の説を聞き入れませなんだで、薔薇は泥の中に依然根を持つて、散々な目に逢て居ましたが、毒氣や惡水はすん／＼と、根に浸み込で來る、澤山な人が思ひ／＼に此法を用ひると毒蟲が死ぬとか、斯々にすれば微菌が無くなると云ひ出して、手を

盡し品を換へて培養しました、選近には薔薇の氣色が些と換つて來た様だと思ふた人もございました、けれども多數の人の目には、却つて以前よりも悪く成た様に見へまして、結局大した變化が有つたと言へませなんだ、斯様に長の月日の間見込が無いと云ふので苦に病み乍ら、之を植へ換へるのは悪いとか善くないとかで、彼此捏合て居りましたが、到頭移植説に同意して來まして、人は皆「一番移して見やうじやないか、外所へ持つて行たら繁茂するかも知れないが、此儘棄置いたら折角培養しても甲斐が有るか無いか覺束ないではないか」と申しました、そこで人類と云ふ薔薇を愈植へ換へることに致して、良ひ暖な乾土に植へる、日光は之を燦ため、暖風は之を戦がし、星月も微光を放つて爛を呈しました、サア斯成ると愈薔薇の本性を露はしまして、毒蟲も微菌も枯死してしまふ、美しい赤い花は蜀紅の錦を織りまして、馥郁たる香氣は到る所に満ちました、

「造化は吾々人間の心に功績を著すべき無限の能力を置きました、此から判斷しますると、吾々が成し遂げました過去の所得は、實に瑣細論するに足らない者で有りまして、究竟の目的に達するのは、未だ遠いことでございます、天下の万民が相共に兄弟同様に暮らしまして、一心同体争ふことなく妬むことなく、相殺さず相欺かず、健康を害せざる限りは、各自好む所の業に従事して明日を憂へず、千古涸れざる河流に濕はさるゝ樹木の如く、思を生計に勞しない社會が有らんとは、實に吾々の祖先

が夢にだも考へなんだ所、否極樂園の外に斯る社會の狀態ありとは考へなんだでしょう、

「今日吾々は祖先が天にこそ在るべしと見詰上げて居りました極樂園に生きて居るとは、果して如何なる思が致しませう、古の有様は決して今日の如くで無かつたと云ふ事は、此度の様な不意の事が有る時で無ければ、吾々の心に殆んど忘れられて居ります、否吾々の近き父祖の時分の世態さへ之を心に想像するのが困難でございましょう、吾々の目には其頃の世態が如何にも可笑く見へまして、心勞もせず罪過も犯さずに衣食すると云ふ位な問題が解けまして、吾々は決して此で最終の目的に達したので無く、必竟眞成の文明へ進み行く準備に過ぎないのでございまして、父祖を妨げて人間生存の眞成の目的を遂げざらしめた障礙物を單に除き去つたのに過ぎないのでございまして、吾々は單に人間らしい人間になる爲に漸く生れ落たのに過ぎないのでございまして、吾々は恰かも立つ事を習ひ歩むことを習はなければ成らない嬰兒同然でございまして、嬰兒から見れば始めて立つて歩くのが一生の大事でございまして、之に越した手柄は無い様に思ひます、けれども、もう一年も経ちますと、以前歩けなかつた事を忘れてしまひます、彼が始めて起ました時は、匍て居た時よりも眼界が擴がりまするが、起て其邊を動き廻はると、眼界が益廣がつて見識が大きく成ります、處が愈足が起ました後は、一步を運ぶのが小供に取て大仕事でございまして、是は必竟眞の大仕事に着手する發端で

有つて、決して目的では無いのです、昔人が唯だ身体の必要物を得る爲に心を勞し体を苦しめました
が、前世紀の時分に其苦勞を免がれて自由となりました、然るにそれは丁度人間が生れ變つて來た様な
者で、曾て苦勞の世の中に生れました報を得たと言つても宜しい、夫より以來人間は精神的の開發——
高尚な智能の開發の新舞臺に乘込みましたので、人の天性に斯る開發があるべしとは、吾々の祖先が
露知らなんだ所でございます、思へば第十九世紀は悲風慘憺として、希望も盡き果てたる世の中で、
未來の成の果を恐れて浮世を捨て心地のした世の中でございました、今は此に引換へて此婆娑に命
を繋ぐ面白さ、未來の人の天性の駿を發達して何時止むべしとも測られざる嬉しさ、人間の心も身も
徳義も、子々孫々に亘つて益善益美ならしめるのが、本統に骨折甲斐のある大目的と承認せられ、
掛卷も賢き神の理想を現實ならしむる針路に乗り掛りまして、將來進むあるも退くことを知らざる不
退轉の位地に來たのでございましょう、

「今より子孫百代千代と續いた曉には、如何なる有様に成りましようか、思ふに奎運益隆盛で行
く末は限りなく遠く、其極端は文明の光明燦爛として眼を眩まし、果して如何なる有様であるかい眩
くて見認るに由がございませぬ、蓋し人が其故郷なる神に復歸するのに二た通りの法がございます、
一つは人が死んで神の許へ戻る事、一つは人種が開發を遂げて神の許へ戻る事でございまして、其節

には今日不審の中に包み隠された神秘が全く闡明せられ、過去の暗黒世界を憐む涙を拭ひ乍ら、眩ゆ
き未來へ押し進みまする、嗚呼今は人間の長い退屈な冬も過ぎ去り暖い夏に成て、人は蛹を破り出ま
した所、見れば天は縁を拭ふが如くに蒼々として前に見へて居りまする、」

第二十七回

何云ふ譯か知らないが、昔日曜日の午後になると、余は別段心が鬱陶敷成つて、浮世の事が何でも漢でも味氣無くなつた、平生は氣がいそ／＼として愉快で有つたから、時間の立のが速くて苦にならないのに、日曜になると時間が長く思われて、殊に日が暮に近付て來ると、中々容易な事で時間が移らないので、無理無態に時間を消すことに盡力した、所が余が第二十世紀へ來てから始めての日曜日なる此日の午後に、心が非常に塞いで鬱陶しうなつたが、此は一つは昔の習慣の爲に今日は日曜日だと思ふに付けて、例の鬱氣癖が起つたのかも知れぬ、

併し此日の氣塞ぎは是ぞと云ふ原因もなく、何かなしに塞いだのではない、余の位地の爲に起つた感情で、加之十分怒せらるべきものであつた、馬藤氏の説教で見ると、前世紀と現世紀の間には、徳義上大きな懸隔があるそうで、之を聞か余は、今此現世紀に唯一人流竄されて心寂しいと云ふ感情が強く成て來た、氏は深思熟慮して哲理的の眼光で演説したが、其言葉が何となく變に聞へて、周囲の人々は惡むべき第十九世紀の代表者なる余を憐み且つ珍しがると同時に、嫌い憎むだろうと強く感じた、

余は折戸一家には非常に親切に待遇せられ、殊更悦子嬢の仁愛は一通りで無かつたから、折戸一家も全國の人が皆余に對すると同じ感じを懷いて居るに相違ない云ふことを今迄知らなかつたので有つた、折戸先生と其愛嬌ある妻との二人丈なれば、幾ら心苦くても堪えて居られるけれども、悦子迄が其通りでありとすれば、實に堪へられないことである、假令全國の人には皆惡まれても、悦子嬢丈けに愛せられたい者であつた、

當時一般の人情の斯くある事は明かな事實であるのに、遅幕ながら今始めて氣が付いて冷やとしたが、之が爲にむら／＼と余の心に起つた者は何であるかと云ふと、外ではない讀者も既に推量の通り實全くは悦子嬢を愛して居たのである、

余が娘を愛したのは妙ではあるまい、抑余が日外の朝氣が狂つて迷ひ切つて居たのに、之を救ひ出し迷を破つて呉れたのは娘の手で、此不思議な縁で娘とは心安くなつたので有る、余の此新生命を繋いで能く之を維持して呉れた呼吸は娘の同情である、娘は余と現世界とを結び付ける媒介者となつて、其父さへ及ばない働きをして呉れたのである、此等の事情が寄り集りて余が思の下地をしたので、娘の人となり云ひ心意氣と云ひ、非常に可愛い所があつて、是丈でも余の心を動かすのであつた、そこで娘が余の眼に無氣の者と見へななのは無理ではない、然るに上に陳べたる通の次第だから、能く

「考へて見て、予の希望は到底愚痴の極みだと悟つて見ると、世間に數ある愛情の奴隷と同様に鮑の貝の片思ひで、頼まれもしないのに無性に心を煩はした、殊に又世に見棄てられた心細さ寂しさは、他に失戀の人ありとも知らない事である、」

主人一家は余の心の塞いで居るのを見抜いて、心を慰め様と骨折つた、格別にも例の悦子嬢が余の爲に心を痛めて居るのが能く見へてある、併し戀する者は兎角根性の歪んだ者で、一層の情が受けたいと望む心は千万無量、唯親切で同情を表する丈では頼む有難くない、

午後は大抵余の室に凹込で居たが、日暮に近い頃、余は花園へ出て散歩をした、折しも秋の夕まぐれ、風は暖かに静かで有つた、其中に例の堀穴の側へ來て地下の寢室へ這入り、椅子に凭りながら「余の故郷は是ばかりで有る、爰に止て居て他へは行くまい」と獨言つた、昔手慣れ見慣れて居た物を弄あそんで心を慰めやうと思ひ、過ぎつる古を思ひ出して見たり、曾て身の周囲を取巻いた人の顔や容姿を想ひ起した、所が無益だ、そんな人はもう生きては居らない、服部悦子や彼此の人は、百年此方古蒼蒼々たる墓の下へ葬られて、物凄くも星月の中に立つて居る、嗚呼哀哉、過つる方は死んで百年の昔となり、目の當りの人には相手にせられず、天地の間何處にも余の居り場所がない、余は勿論死では居らない、と云つて生きて居るといふでもなし、

「尾て参りまして済みませんことで、」

誰かと思へて見ると、地下室の入口に立つて居る悦子嬢、微笑ながら余を見て居たが、目には無限の憐れを含む風情、

娘言ふ「御邪魔に成ますれば彼方へ参りまするが、ごうやら御心が亂れた御氣色、又もそんな事が有りましたら私に御知らせ下さる御約束の筈、なんで又そうは御爲なさいませなんだ、」

余は戸口へ起つて行つて笑うとして見たけれども、却つて苦笑をしたらしい、娘の可愛い姿が見へたのが、益身の不幸を悲ませる原因となつたので、

余言ふ「聊か心寂しい氣が至します、私の身の上は昔から未だ無かつた程變微で、言葉にも示せない者だと御考へなさいませなんだか、」

娘は目に涙含んで「貴下そんな事を言たり、そんな氣に御成り遊ばしてはいけませんね、私等が不及乍ら御友達と成つて居るでは御座いせんか、それに其親切を無にして御友達に成らせて下さいませんどあれば、誠に貴下の胸襟と申すもの、貴下は何にも心細ふ思召には及びませんのに、」

余言ふ「貴下方の御親切は山よりも高く海よりも深くは御座いまするが、併しそれは私を唯哀れに思ふて下さるのみと思ふて居ります、貴女の御目で私を御覽になりますと、定めて妙な人物に見へ

まして、人の知らない海から打上て来た動物の様に思はれて、奇怪乍らに憐れんで下さいますではございませうが、決して大方の世間の人々と様じ様に思し召す筈が御座いませぬ、私も爰に氣が付かない愚物でも有ませんが、餘り御親切の情が過ぎまして、此様知れ切つた道理も忘れてしまい、追付歸化して當世の戸籍に編込まれ、世間普通の人間と見られて、當家の一人と成る時節もあらうと思ひましたのは、全く私の不束から起つた了簡でございます、然るに今日馬藤氏の説教を聴聞致しまして、此様な了簡は詰らない者と解り、貴嬢方の目には當世と私とは月と鼈はと差が有る様に見へる者と解かりました。」

娘は余に同情を寄せて聲を張上げ「何に、あんな下らない説教、私は貴下に御聞かせ申さない様に致したうございました、馬藤は昔の事を陳腐な書物で讀だ位な事で、貴下方の事を何知たことがございませう、あんな者の言つたことを氣にしてくよ、御思成さつてはいけません、眞に貴下方の事を知つておる私共さへそんな考へをしなかつたら善いでは有ませんか、ねえ西様、貴下が御存じも無い事、御考へも成さいません事です、御寂しい御心を御察し申上まするに付けても、私はほんに幾重の思を重ねたか知れませぬ、貴下に對して私共の思ひました事は、御考へ成さいます所と全く違つて居ります、ア、何と申せば御解りなさいませうか、如何したら御合點なさいませうか、」

前日と同じ様に、娘は助けて進ませうと云ふ様子で、兩手を余の方へ擴げたが、余も亦た前日の様に兩手に娘の手を取た、娘の手は強い感動で脹れ、其指はビリ／＼と震ひ、一段打奏れて力なき顔には痛く憐みの色が現れて、其愛らしさは得も云はれぬ風情であつた、

其美しさ、其親切さ、余は身も世もあられぬ思ひて心が鎔けん斗、寧ろその事心の奥に秘めたることを語るが道かと考へた、打明けて言て見た所で、所詮思が叶ふべくもない、ないけれども娘は十分憐を催して居る人、言つたどて立腹する心配はあるまい、そこで余は心を取直して「重ね／＼の御親切を仇に思ふのは實に濟ない事でございしますが、平生の御親切だけでは十分心嬉ふございませぬ、實は貴嬢を愛して、心の駒も狂ふて居るのが御目に止りませんか、無禮の罪は幾重にも御推察下さい、」之を聞た娘は燃る程赤い顔で目を下ろした、けれども握られた手を引かうともせず、暫の間其儘に立てホット溜息した、良あつて益顔を赤らめ破顔微笑して余を見上げた、

娘言ふ「貴下の方が御目に止まらんのでございますか、」

と云つた切りであるが、此でチャンと話が解つて居る、道理に無い事、虚言の様な事に思はれるが、虚言詐りではない、實際に解つた、即ち文明世界の輝く様な娘が余を憐んで呉れた斗りでない、愛情まで掛けて呉れたのである、併し未だ半信半疑で其手を握つて居る間も精神錯亂して嬉しい幻に浮さ

れて居るのかも知れんので「若し私の心が狂ふて居りますなれば、狂ふた儘に此楽しい幻に浮させて下さい」とやつた、

余が娘の丹唇に甘い接吻をするかしないに、娘は余の手より離れて溜息しつゝ、「私の方が心を狂はせて居まする、逢初めてから僅か一週間しか経たない方に、女のあれもない耻を打明すとは、嗚や蓮葉者と思召ませう、斯も早ふ見抜かれる積りでも御坐いませなんだが、何を申しましたやら忘れてしまいました程まで御勞はしう存しましたからでございます、何卒私が何者であるか篇と御合點が参りまする迄は又と身体に御觸れなさいましてはなりませぬ、唯今の處では私が餘りに愛情を懷くのが早過た様に思召ませうけれども、私の何者だ云ふことを打明しました晩は、如何にも最至極だと思召遊ばしませうし、且又御見初申すなり直ぐに思を掛けましたのは、全く私の義務に外ならんので、正當な娘の免れ難い所だと御許し下さいませねばならぬ事が御坐ります、」

誰も想像するだろうが、何と譯を説かされても、余はそんな譯を撥のけてしまいたいのである、けれども早く愛情を表した譯が余に解せられる迄は接吻は決してしないと悦子は頑として應じない、どうも訝な謎だと思議に耐えないが、其儘娘に尾て本宅へ歸つた、娘は直ちに母の居る所へ行つて、赤い顔で母の耳の側で何やら囁き、二人を残して走り去た、

余の閱歷は奇々怪々で有つたけれども、此度は奇中の奇、怪中の怪なることを聞かされるのである、うと思はれたが、果せる哉、折戸夫人が余に話した言葉に曰く「あの悦子は貴下の最愛の服部悦子様の曾孫に當るのですが、服部悦子様は十四年の間貴下を追慕して御悔み成さいましたけれども、到頭御立派な御婚禮が出来まして、其御生みなさいました一子が即ち私の父でございました、私は祖母に當る悦子様を見たことはございせんが、聞たことは澤山ございまして、私が娘を生みました時も之に悦子と云ふ名を附けたのでございます、斯云ふことが有りましたから、あの娘が生立つに連れまして、其高祖母に係ておることに興味を添へましたかも知れませぬ、殊に高祖母は折角嫁し付こうと思込だ人の家は大火で焼けてしまつて、大方死なれたので有うと邪推して、非常に悲しまれたが、此などは格別あの娘の心を感じさせた者で見へまする、左なきだに此話は小説好きな娘達の心に憐れ催す者でございますのに、あの娘に見ますると此不仕合の目に逢ふた高祖母の血が自分の血管の中に通ふて居ると云ふので、殊更其話に一段の興趣を添へたのでございまする、服部悦子様の書像其書類一包の中に、貴下が悦子様へ御送なさつた手紙もありまして、私の家に先祖の遺物として残て居りますが、其書像で見ますると、昔の悦子様は中々の美人で入つしやいまして、定めて温なしい優しい方で有つたかと思ひ遣れます、あの娘は貴下の御手紙で畧ぼ貴下の御人格が解つた次第でござい

まして、其御手紙と画像とを照し合はしまして、悲い昔話が痛ふあの娘の心に感へたので、平生親に向て西重連様の様な戀人を見付ける迄は結婚をしないと冗談半分に申して居ましたが、今日そう云ふ方は一人もございませぬ、

「是は勿論自分に戀愛と云ふことを實際知らない少女の頑是ない思ひで、先きつ朝花園で土の中から室が発見されて其中から人が現はれると云ふ珍事がございませなんだら、格段大した事にも成らず、平生心に懷いて居た見ぬ戀は夢と消へ失せたでせう、處が已に生なき人と見ゆる体を宅へ持つて歸りましたが、胸の飾として掛けてあつた小盒の中に顔が嵌てございまして、家に御座います悦子様の顔と同じだと云ふことが直ぐに知れ、彼や此やを照し合せて見ますと、貴下は取りも直さず西重連様に違ひないと解りました、最初の間は貴下が逆も御蘇生なさる見込はないと思はれましたが、若し夫なりけりに成てしまひましたも、一旦斯云ふ事があつた以上は、大方一生涯悦子の心に感へて生命に掛るとか氣が狂ふと云ふ悲しい事に成つたでしょう、何様神明不思議の運で貴下と宿世の縁が繋がれて居ると心一隨に思ひ込んだ者ですから、如何なる女も心を煩はさすには居られないでしよう、

「倍數時間経て御蘇生を成さしまして、どうやら此家の係り人と御成りなさいます様に思はれま

したので、あの娘の心に愛情が湧て來たので御坐いまするが、夫が早過ましたか如何で有つたか御判斷に御任せ申しまする」と、斯ふ夫人が説明した、成程今は十九世紀でない、全く二十世紀で、情に至つても今は昔より發達が早くも有り、且は打明るにもアツサリして居るのである、

余はそこで折戸夫人から悦子へ渡つて行た、逢ふが早いか先第一番に兩手でつかまへて其顔をじつと見、長い間立つて居た、平生服部悦子の事を思ひ出すに付けて、餘り別れの突然さに打たれて心の張が抜ける氣がしたが、今娘の顔をじつと見詰めて居ると、又候昔の事が思ひ出されて可哀想だと思ふので、心が支離滅裂になつた、けれども先づ／＼仕合せな事で、不意の離別を悲ませた悦子は、今日に至つて昔の損を償つて呉れたと云ふ者、其魂が娘の目の穴から窺いて余を眺め、心の慰めに嫣然笑を含んだ様に思はれた、奇なる哉余の運命は奇中の奇ではあるが、又餘程仕合せな者なので、余の爲には二通りの不思議が出来たと云ふ者である、思へば余は此見知らない世界に打上られて、友なき寂しい境界になつて居るのではなかつた、早や死しけりと夢幻に思て居た人は、余の心を慰める爲に再び現はれて、此悦子の身に宿つて居るのであつた、余は有難いやら可愛いやら嬉しくて堪らないから、兩手で此可愛い少女を拘へ付けたが、恰も二人の悦子が一つの身体に着き交せられて居る思ひ、其より此方は何方が何方やら明かに區別が付か無くなつた、悦子自からにしても、昔の悦子が自

分やら、自分が昔の悦子やら判然しなかつたような、凡そ相思ふ男女の間には、此日の午後の二人の話は、妙な話はないので有つて、娘は自分の事よりも服部悦子の事を話したり、余が娘を愛する事よりも、悦子を愛した事を話して欲しいと云ふ事で、或は涙をこぼし、或は笑を含み、或は手を押付けて、外女に係つた余の睦じき言葉を聞て大層賞めて呉れた、

娘言ふ、「貴下は私の爲だと思ふて餘り可愛がつて下さつてはいけませんね、私は服部悦子様の代りになつて妬ましく思ひますからです、貴下に悦子様の事を忘れさせてはなりません、爰に貴下が妙な事だと思召す事がございます、と申すのは、人の靈が心にかゝる事を果たす爲に再び浮世へ舞戻ることがあるのを御信じ遊ばしませんか、私は服部悦子様の靈が私の身体に宿りまして、私の實名は折戸悦子でない服部悦子だと時々思ひますが、人は勿論の事、自分さへも我身が誰で有ると云ふことが知れないのです、けれども私にしましては、どうも其様に思はれます、抑貴下が此世界へ御越遊ばしませぬ中から、私の一生は悦子様なり貴下に感ぜられた譯がございますから、其様な心持が致しますのでございます、それで貴下が果して服部悦子様にならば、決して態々私を可愛がつて下さるでも宜ふでございます、そうさへなれば私は決して自分の爲に妬むなどは致しませんのです、」折戸先生は其日の午後何處かへ出掛て行て遅く迄逢ふことが出来なんだ、愈逢ふて見て委細の様子

を話して見ると、どうやら前から承知して居られたのを見へて、今更の様に驚く氣色もなく、喜び切つて余に握手をした、

折戸先生言ふ、「是が並々の場合なれば、西様、心安くなると言ても幾ら何でも些と早過ぎるでは無いかと云ふ所でございますが、併し是は實以て非常な場合の事でございますから、別段何とも思ひませぬ、打明て申上ねばなりません、結婚の調議が出来ましたのは、喜んで御同意致します、けれども私の同意は必竟形式だけに止つた事と思ひますから、無暗に私を有難いだの御庇だのと思はれてはいけません、思ふに是は飾りの小盒の書像が出ました時から已に斯様にあるべき事と極つて居りました、若し悦子が居合せて高祖母の片身を救ひ出させなしたら、妻が私に對しましても、日々の機嫌取りに大層苦んだらうと思ひます、」

此日の夕は月夜で、美しい光が花園を隈なく照した、悦子と余とは夜半頃迄其處此處と彷徨て、新しい縁の嬉しさを味つて見た、

娘は云つた、「私は自分の体が早や貴下に献じてある様に感じて居りましたのに、若し貴下が私を疎じて御目掛下さいませなんだなら、私はほんに如何致しましたらう、實は若しや御頼着なさいませぬのかと案じて居ました、最初貴下が御誕生に成るが早い、服部悦子様が自分の代りに貴下と結縁せ

よと私に言つて下さつた心持が致しましたが、併し是は貴下が夫れを私に御計し下さいませなければ出来な事でございます、先朝も私共の宅に居ては大層變だと仰せられました時に、よつばと委細の成行を御話申上たかつたのでございませうけれども、私は謹で口を閉て居りました、又父にも母にも、

余は始め目が覺めかけた時に薄々漏れ聞た話の事を引て来て、「成程、父上にも話さなんだと仰せられますのは其事でございますね、」

娘は笑つて「尤も其事でございますが、只今御推量になりましたか、父は何分男の事でございませうから、貴下と由緒ある家柄だと御聞かせ申せば、心安い者と共に居る様に思召だらうから、實を明かす方が却て善かろうと考へましたもの、私の爲を一寸とも考へては呉れませなんだ、處が幸ひ母は私の胸の中を知つて居りますので、頭私の申しした通りに成まして、實を明さんだ次第でございませう、若し私の身の上を御承知に成つて居りましたら、私は恥しくて御面を得見ませんでございしたろう、左なきだに餘り押付がましい連葉娘と思召すかと案じて居りますものに、あの時實を申しましては、猶更以て大膽であつたろうと思ひます、昔の少女方は思を秘めるのが宜しうございしたそうで、浮薄な御轉婆と思召ては成ませんから、貴下に對して迫まる積は更々ございませなんだ、

偕々昔の少女方が心にある思を不調法でもしたか何ぞの様に、何時も隠れて居らなければなりませなんだとは、嘸や辛いことで有りましたでせう、一体相手の許可が出ない内に、此方から思ふのが恥辱だどでも思たものでしょうか、愛を掛けるのに相手の許可を待つとは、どうも不都合ではございませんか、又は其頃の男は若い女に思はれると腹を立てたと云ふ譯でしたか、男と云ひ女と云ひ、そんな事を思ては成ぬ筈の者で、頓と合點が参りませぬ、總別昔の婦人に付て色々妙な事がございますが、此事も矢張聞かして戴きたい一個條でございませう、服部悦子様などは他の女と同様に愚痴な方でも覺へませんが、

娘は余と別れようとして色々無汰骨折をした揚句の果に、到頭御別れしなければならぬと言ひ張たが、余も愈離別の名残と、其唇に接吻せんとした、娘は伶俐にも次の如く言た、

「一つ心に煩ふ事がございませう、服部悦子様が貴下より他の人と結婚成されたのを屹度御宥し下さいますか、斯く御尋申します譯は、古い遺書に據りますと、昔の人と申す者は、愛情が深いよりは寧ろ嫉妬が深かつたそふでございませうから、私の高祖父が貴下の御意中の佳人を娶られましたのを、未塵も御妬みなさらないと云ふ事が十分慥かになりますれば、私の心が大層落付く次第でございませう、私が部屋へ参りましたら、私の高祖母が貴下に背いて結婚せられました罪を御宥免下さいましたと其

畫像の靈に告ても宜ふございますか、」

娘が果して余に嬌へて戯れる積で有つたかどうだか、何れでもよい、兎に角折戸夫人から服部悦子の結婚の事を聞いて以來、何と無ふ嫉妬がまじう思て居て、不道理にも心を痛めて居たが、今娘の此間の爲に其心痛が癒つた、人の氣心と云ふ者は無理屈な者で、悦子の曾孫なる娘を愛撫して居る間にも、矢張客氣が何となく胸に蟠て居て、昔の悦子が他へ結婚したればこそ今此可愛の佳人と斯して居るのだと云ふ道理が悟れないで、今娘に冷かされて始めて氣が付いた、尤も此様な心意氣は甚だ間違て居る、けれども其解けるのも亦速かで、悦子に冷かされるや否や迷の雲が散り去た、そこで余は一笑して娘に接吻した。

余言ふ「如何にも服部悦子の罪は全く川へ流してしまひます、然し貴下の高祖父で無い人に結婚したと云ふことなれば又格別の事だと悦子の靈に御告なされ、」

意別れて室へ飯つたが平日の様に好い調子を聴て寝る爲に音楽電話を聞かうとせなんだ、と云ふ譯は、第二十世紀の天下無双の奏樂所で無い未だく楽しい音楽が胸の中に奏せられたからで、夜明近く迄兎や角思ひ延らして樂んだ後、遂に眠てしまつた。

第二十八回

「起して呉れと仰しやいました時刻より少々後れて居ります、旦那様、平素の様に速に御氣が付きませなんで、」

聞けば下僕庄兵衛の聲、驚いて床の上に突立上り、四方を見詰めると、即ち地下の寢室に居るのである、何時も其部屋の中にどもしてあるランプの光は壁や諸道具を照して居る、何れも此れも常々見覺のある吾家の者ばかりである、庄兵衛は山井丸齋が調合して呉れた葡萄酒の盃を手に持て余の側に立て居る、

余は驚いて庄兵衛を見詰めたが、庄兵衛は「旦那様、直ぐに之を上召りませ、どうやら逆せて御居でなさる様でございまする、召上らなければなりません」と云た、

余は酒を抛去て何事が起つたのか知らんと考へて見る、處が如何にも明白で、第二十世紀に付て今迄見たことは夢であつた、人は開けて何の心配もなく、國の諸制度は單純な利巧な仕組で、新波士頓市には圓屋根、高塔、花園、噴水が到る處に在て、立派な光景と愉快な生活が満ちて居るなどは、皆是唯一場の夢、余が親密に成た親切な家族——主人たり警告者たる折戸先生——折戸夫人——其嬢なる第二の

悦子——層美い悦子——余の未來の妻——此等も亦一つの幻の片破れに過なんだ、

愈夢に違ないと云ふ事が知れて来て、余は良久しい間床の上に坐して空を見詰め、夢幻に見にし有様や聞にし事件を有頂天に思ひ返して居た、庄兵衛は余の氣色に驚て心配顔で如何なさいましたと尋ね続け、周りの者を御覽成さいませと懇々勧めるから、漸くの事余は心を取直し「否や何にも別情はないが、大變な夢を見た哩、庄兵衛、ソラモウ實に大變な夢を」と言た、

余は頭が輕ふ感じたが、自分は全体誰だか譯の解らぬ心地しながら、機械的に衣服を着け、平生外出前に庄兵衛が用意して置く珈琲と麵包とを食卓で食ふた、其側に朝の新聞紙が置いてある、取上て見ると第千八百八十七年五月三十一日と云ふ日附に目が付いた、第二十世紀で経験した長い細かい事柄が夢で有た事は、已に目が開た時から知て居た、夫れにしても寢てから未だ數時間立た位な事で、決して百年も過て居らないことが、此程目の當り明かに證明されて居たのは今更ながら驚いた、

新聞紙の上にある中味の目録を一寸見ると、次に在る事が書てあつた、

外國事件——佛獨二國間に戦起らんとす——獨逸が陸軍を増加したるを以て、佛國內閣は新たに軍事公債募集を要求す——戦起らば全歐洲は悉く其渦中に投せられん——倫敦の職を失ひたる労働者の大窮困——労働者職を求む——大々的示威運動始まらん——官省不安——白耳義の大同盟罷工——政府は爆烈を鎮制

する準備をなす——同國石炭工の少女使用に關する驚くべき事實——愛國に於ける全國土地取上げ

内國事件——詐欺の蔓延を遏むること能はず——紐育に於て五十萬弗の盗用——破産管財人トラストの資本を誤用す——孤兒一錢を有する者なし——銀行出納掛盗の巧計——五萬弗の紛失——石炭王石炭を購貴せしめて産物を減せんことを計る——市俄高に於て小麦窮乏を見込む投機師——珈琲の相場を騰貴せしむる黨派——西部シンデケート廣大の土地を占取す——市俄高の官吏大醜行の露見——大仕掛の賄賂——紐育市區長の疑獄——商家の大破産——商業危機の恐慌——強盗盜の大利益——ニューヘブンに於て婦人金の爲に故殺せらる——昨夜當市に於て一戸主強盜に銃撃せらる——ウスターの人事事を得ざるが爲に自殺す——一家多口飢渴に逼まる——ニュージャーシーに於ける老夫婦貧民院に入ることを嫌て自殺す——諸大市に於ける日雇女工の慘狀——マツサチューセツに於ける無學者の大増加——癲狂院の大不足——招魂祭日の演説——第十九世紀文明の德義の美、辯士ブラオン教授

余の目が覺たのは實に第十九世紀であることは更に疑へないことで、此日の新聞紙の摘要は、現世紀の雛形を完全に示して、剩さへ自ら文明がつて愚かしくも満足して居る頓馬加減が知れる、其様な時代の謬見と罪惡は、夢の問答で第二十世紀に痛罵嚴責せられた者であるから、滿天下に蔓こつた殘忍貪慾壓虐を書記した唯だ一日の新聞紙も、桀紂に勝る大逆の片た破れであるけれども、今朝此新

聞紙を見た幾十百萬人の中で、之を大逆と見殘忍と認むる者は、恐く余一人より外には無からう、余連も亦た漸く昨日迄は外の人と同じ様に其罪惡を見認め得たのであつて、今日と昨日と簡程眼力が違つたと云ふのは、彼の奇怪な夢の御蔭であつた、此後は良久く周囲の事を忘れてしまつて、彼の華胥の夢を再び幻想に浮かべ、愉快な家庭と華麗な公園を持て居る立派な波士頓市を思ひ返して見ると、身邊周圍に又もや爛雅な文明世界が髣髴として現はれ、人々の顔は傲慢卑屈嫉妬貪慾心勞野心等の風情は一切なく、男女の姿は尊貴高尚に見えて人を恐るゝ模様もなければ、哀を乞ふ氣色も無く、曇に聞た説教中に所謂神前に直立すると云ふ概が有た、

第二十世紀の現象は唯夢で、實際有た事では無いから、其現象が消へても寸毫も損には成て居ない筈であるけれども、矢張實際有た物を失つて取戻の付かない損だと云ふ心持しつゝ、長歎息して此幻が覺め、暫くして外出した、

未來の波士頓の夢の爲に、今日の前に見る波士頓が實に變な様に思はれて、余が家の門から華盛頓町に至る迄に十回以上も立止まつて、亂れかゝる心を纏めなければ成らなんだ、抑も家の門から街上へ出た時からして、町の穢ない事や臭い事が、會てより見知らなんだ事の如く驚かれた、併し絹布を着る者もあれば襤褸の錦を着る者もあり、美味に肥満する者もあれば饑餓に逼つて菜色を帶る者もあ

るのは、漸く昨日迄は當然の事と思はれて居たので、何にも今更乍ら驚くべき事ではない、けれども何が偕一旦華胥の光景に心酔してをる余であるから、往來旁午する男女の衣服なら境界なら、何も彼も雲泥の差があるを見ては、一步進む毎に余が腦天に感應した、それに富貴榮華の徒は貧寒不運の人の有様を見て、一向冷淡で露憐れども思はなかつたのは、尙更以て驚た事で、同胞兄弟の悲慘を目撃して、聊か面色さへ變らない様な者が人間で有るのか、それは木石ではないか、けれども此は世間の人が變たのではない、余の心が變たので有るから箇様に思たのであることは能く承知をして居た、市の人々が皆一族の中の子供の様に相睦び相憐んで何事に付ても相助け合つたことを夢に見たから、現實の波士頓に付て、も一つ奇怪極た事は廣告の流行である、第二十世紀の波士頓では、箇人が廣告をする必要が無つたから廣告をせなんだのである、然るに今の波士頓では、家の壁から窓から新聞の紙面から、或は敷石に至るまで、見る者觸る者、凡そ天を除いた外は、ベタ一面の廣告で、様々な理窟を付けて世人の愛顧を引付けやうとして居る、其人に向て我が長所を勧め掛ける文意は箇様である、其言ひ振りは色々で一樣ではないけれども、

米津善助を御愛顧あれ―決して他店にて御買求有之間敷候―他店は皆來客を詐り申候―米津善助は正直に御扱申候―弊店にて御買求可被下候―弊店へ御注可被下候―弊店へ御來駕可被下候―米津

善助の申上候事を御信任被下同店の販賣品御一覽可被下候、米津善助は他店と相異致し、律義なる人間に有之候間、必ず御誤解被下間敷候——不正直なる他店は饑渴如何様に相成候共、米津善助は必ず御忘却被下間敷候

我が生れ故郷の市中で俄かに他國人同然に成た者であるから、果して感情の爲か或は現世の有様が廢徳であつた爲かは知らないが、此様な不徳無情の徒が相助けることを知らないものだから、富貴貴賤を論せず乞食同然に他人の愛顧を乞ふとは心の賤しい人間だと絶叫したい心地がした、耻をも顧みず我と我手で己の美を賞めて、互に他人を貶さんとする爲に、途方途徹もない謔語を並べ立て、傲慢やら哀願やらで八釜しく譟ぎ立て、鉄面皮にも人の愛顧を要請すると云ふのは何故であらうか、各自天賦の能力に應じて人間社會に勤務を盡すと云ふことを社會組織の第一の目的として、人々に其機會を與へてないからして、各々全力を盡して思ひ／＼に自活の道を講ぜざるを得なんだ故に外ならんので有る、

余は華盛頓町の一番忙はしい處へ行て立止て大聲で笑た所が、通行人に罵詈訕笑せられた、けれども余は笑はざるを得なかつたので、左を見ても右を見ても、目の届く限り向ふを見渡しても、店屋が鱗次比軒して少しの隙間も無く建ち連なり、呼べば答ふる近い距離に同じ物品を商ふ家が何軒も有る、

實に大變な店！幾何千と云ふ店！此澤山の店が皆此一市に入用な物品を分配するのである、余が夢に見た所ではそうでない、唯一軒の本店が有て諸品を貯へてある、各區毎に大支部が有て買手が其處で注文すると、直ぐに之を本店へ通じると云ふ仕掛で、一屋の下に欲しい物が何でも求められ、而かも時間と勤勞の消費は更になかつた、之を分配輸送するにも僅な勤勞で済しまうから、買手に渡る物品も未塵程の價しか加はらず、言はゞ生産費丈で買へるので有た、然るに今爰では如何であるか、物品を此から彼へ渡すだけで、代價が四分一、三分一、二分一、或は夫れ以上も嵩んで来る、加之此何千何万の店は家賃が要る、店の番人に給料が要る、澤山の賣子の賃金が要る、出納方から仲買から丁稚小僧に至るまで相當の雇賃が要る、廣告して他店と戦ふ入費が掛かる、夫れや此れに費ゆる所が大變な事で、詰り其入費が一々物品の代價に掛て來て、買手が高い直を拂はなければならぬ、國全体が乞食根性となるには何たる結構なる方法ぞ、

余の周圍に見ゆる人々は眞面な人で有たが、或は此様な方法で商業する者なら小供で有りはすまいか、物品は産出せられて何時使ふても差支ない様に成ておるのに、消費者に渡す爲め大層な浪費をすることの愚策たるを悟らずしてそれで理性の動物と云へるか、若し皿から口へ持て來る迄に汁が半分も漏れる匙で食ふたら腹が減らいで何としようか、

此時に至る迄華盛頓町を通過商賣の仕方を見たことは幾何百回有るか知れない、然るに今日は未だ曾て見知らなんだ程珍らしく思はれた、店の窓を見ると代物が澤山並べて有て、人目を誘ふ様に苦心して飾り立てゝある、婦人が群衆して窓の中を見て居る、店主は何卒善い鳥が網に掛れかしと熱心に見張て居る、余は中へ這入て見た、スルト鵜の目鷹の目で商賣に氣を付け、手代共を監督して之を勵まして居る、手代も主人に睨まれて居るから、客待ひがオサ／＼如才がない、何卒御求なさいまして、何卒御注文下さいまして、何なりとも御召遊ばしまして、買ふ事計り勧める、金が有れば現金で買はせ、無ければ掛けでも買はせる、客の要ない物、客の入用より澤山な物、客の買ひ得ない物までも押付けて買はせる、余は此の有様を見て暫し茫然として心を取り亂したことが度々であつた、抑も人に勤めて無理に買はせやうと骨折るのは何故であらうか、屹度此は物品の入用な人へ賣ると云ふ正道な商賣をしてゐるので無いのだ、其人の要ない物で他の人に要かも知れない物を門違ひの人に押賣するのは實に浪費極まつたことではないか、其様な事をする度毎に國家は夫れだけ貧乏に成るのである、一体此等の手代は何ぞ心得て居るのであるか、余が夢に見た波士頓市の支店の手代の様に働いて居ないだらう、彼等は社會公衆の利益の爲に勤めて居るのでない、自分直接の利益の爲に働いて居るので、其方針が社會一般の繁榮に及ぼす結局の影響が如何であらう、一切無頓着なのである、併し其物品は

我店の者であるから、澤山賣たら其れ文賣が増へるので、賣れば賣る程其利益が大きいのである、人が澤山浪費をして澤山な物品を買はされる程賣主の利得になる、波士頓一萬の商店は奢侈浪費を勵すのが目的である、

處で此等多數の店主や手代が、他の人よりも惡人だと云ふことは決してない、彼等は生活費も得なければ成らず、妻子も養はなければ成らぬ、若し我一個の利益を後にして他人の利益や全社會の利益を先にする様な商賣をせよと言たら何ぞ考へやうか、余が夢で見た仕組にして天下の民皆其利益を均一にするのは何程結構で有ても、其が行はれるのを待て居る間は食はずに居て何にもするなとも言へない、併し乍ら何ぞ驚たではないか、市中は乱雜極つて人民は粗服を纏ひ、多數の人は襤褸着て饑渴に迫てゐるとは、幾ら目下の仕組にしても甚いじやないか、

此後暫く經て南波士頓へ渡つて、澤山な製造場の間へ來た、余は此邊へも今迄何十回となく來た事が有たが、余の目撃した事物の眞味を認めたのは此度が始めて有た、其處に在る獨立の製造場の數は凡そ四千程も有て、此迄余は當市の此の盛大を實は誇て居たのである、然るに今は之に反し、此通り製造場が澤山有て各獨立してゐるのが、抑も其總産額が僅少である譯なることを認めた、

若し華盛頓街が癡狂院内の細路の様で有たのならば、一層憐れな光景で有た、彼等は分配よりも生産

の方を重なる職業としてをつた、此四千の工場が協同一致して働かず、爲に大に不利益なことをしてをる斗りでない、まだ此で十分勢力を破壊することが不足だと云はぬ斗りに、互の盡力を徒勞に歸せしめんとて有らん限りの手練を盡し、夜となく晝となく他人の企業を破壊して之を餌となさんとしてをつた、

車輪の響や鉄槌の音がゴウ／＼カン／＼周りに聞えて居るが、平和な職業の鼻歌ではなく、敵軍が振舞はす劔の響である、又此澤山な機械場工場は言はれ澤山な城砦で、各皆自家の旗幟を建て、其銃砲を常に周囲の機械場工場へ向けて演習をする、土工兵は土中に働いて周囲の城砦の土臺を掘崩して居ると云ふ始末である、

此澤山な城砦の中には何も嚴重な職業組織があつて、其諸部に割付てある隊伍は、盡く一人の主權者の命令の下に働いて、互に干渉することも出来ねば仕事を兼ねることも許されず、銘々自分に割當られた仕事をして、少しも怠たることは出来ない、全國の職業組織に大仕掛で此筆法を用ひねばならぬことが見へぬとは何故で有るか、若し一工場の組織の欠點ある爲めに工場の成績に疵が付くとして見れば、一國は更に大きくて諸部の關係もドント複雑であるから、一國の職業に害を及ぼす事が更に甚しいと云ふことが見へぬとは何事ぞ、人々の推測力が缺けて居ると云ふ譯であらうか、或は人の心

に推理の連鎖が切れて居ると云ふ譯であらうか、

若し軍勢に規律も組織も無て、小隊中隊大隊聯隊分隊等もなく、僅か下士官位な者が何百人か居るのみで尉官も佐官も將官も無かつたら如何であらう、誰も此軍勢を見て晒はない者はあるまい、今第十九世紀の波士頓の製造業は丁度此様な軍勢である、銘々思ひ／＼の作戦計畫を持て居る四千の各獨立する小隊を統率する四千人の下士官から成た軍勢である、此軍勢を見て笑はないとは抑も亦た何が故であるか、

何方を見ても此處にも彼處にも遊惰な人物が三々五々にぶら付て居る、或者は賃錢に抱はらず仕事が無いから遊んで居る、或者は相當な賃錢を得られないから遊んで居るのである、

余は相當な賃錢が得られないので遊んで居ると云ふ者の幾人かに向て話をして見たが、彼等は其慘憺たる物語を聞せた、余は彼等に對して何程の愉快も與へられず、唯だ斯云た一誠に御氣の毒な事、それでは如何にも聊かな賃錢で、逆も家族を飯含むことは出来すまい、處が今爰でして居る様な職業では、御前様方が食て行ける丈の賃錢を出さない筈で別段不思議はない、若し當り前の賃錢が拂はると云ふことなら却て不審を打たねばならんことですよ」と、

今度は市中の半島に成て居る方へ後戻りして、彼此三時と思ふ頃に國町へ來た、銀行や仲買店や其

外金銭に係た取扱所が澤山有るのを今更珍しそうに見詰めたが、此は夢の國町では全く見なんだ者であつた、早や數分で銀行が閉ると見へて、事務員や書記や使丁が銀行の内と外とに群集して居た、立ておる所の向ひに余が取引をする銀行が有た、頓て余は街の向ひ側へ行て、大勢の人の間に其銀行へ這入り、壁の片隅に立て、金を扱ふ手代や、出納掛の窓の先に群がる貯金者を見て居た、スルト一人の紳士が余の側を通り、物思なる余の態度を見て暫く立止まつた、此は此銀行の支配人で、余が知て居る人である、

彼は言た、「實に面白い者です、ねえ、感心な機械だと思ひます、私も貴下の様に折々立て之を見るのが好でございしますが、此は一の詩でございします、貴下は銀行は商職業世界の心臓だと御考なされたことはございしますか、其絶間ない伸縮の爲に生命の血液が出入しますので、唯今は注ぎ入ておる所、是が明朝になりますと又流れ出ませう」と、聊か自負の風で得意然と笑つて行た、

昨日なら余は之を至極甘い比喩だと考へたであらうが、夫れから此方へ金を知りもせねば用ひもしない而かも今よりまだ、豊富な世界を見て來たのである、今日の世界に金を用ふるのは、國の生計を産する仕事を國家事業として國民全体が行ふので無く、之を個人の一家八かの仕事に委す爲に外ならんからであることを知て來た、斯云ふ根本からの誤りが有るから以て生産物を諸方に分配する爲に

無限の手續を費して交易しなければ成らぬ事に成たのである、當市の借家が並で居る貧乏町からパツク灣に至るまで、皆金で物品の取引をして居るので、金を扱ふ爲に幾何千人に不生産的の勤勞をさせ剩さへ之を運轉する機關たる銀行が絶へず破産するので、金は諸惡の本と云ふ昔からの諺が如何にも尤千萬と知られた、

嗚呼憐れむべし、彼の銀行の老支配人は詩だと言つたが、丁度塵物に熱を含で動悸が打て居るのを、心臓の鼓動だと取違へたのである、彼の所謂感心な機械と云ふのは、癒すに及ばない疵を癒そうと思て、不完全な工夫をして居る如きである、跛足を自ら拵へて不都合な杖を作る如きである、

銀行が閉てから、余は一二時間斗り何の目當もなく商業向きの町々をウロ付て、遂に公有地の一つの長椅子に暫く腰を掛けた、處がドヤ／＼と通て行く大勢の人を見て居る丈けに知らぬ市の人を見る如く興味有た、此は今迄は無つた事で有るが、昨日以來は同市の人や其人の習慣が余に取て奇怪に見へて來たのである、今通て居る人々は三十年此方共に當市に住だ人で、金持も貧乏も文雅風流の人も學者無學者も、其顔が打委れて心配そうに見ゆるなど、云ふことは、此迄氣の付なんだ所である、所が今斯く思はれたのは至極尤もな事で、各の人が一步を運ぶ毎に頭を回らす有様は、其耳の側に無明と云ふ幽霊が來て囁くのを聞く様な風に見へた、其幽霊の囁く言には「決して好く働くなよ、朝早

く起き夜遅く迄勞役し狡猾に廻つて物を盗むも忠實に勤をするも、汝は決して安固と云ふことを請合へない、今は金持で有ても遂には貧乏に成るのだ、子孫の爲に富を残すなよ、息子が汝の下僕に使はれたり汝の娘が麵包の爲に身を賣る事が無いと云ふ保険を掛ることが出来ないから」と、

通り合せた一人が一枚の廣告紙を余の手に投げて行た、見れば今度新規な發案で生命保險會社が立て大層直打のある由を書並べてある、成程社會一般は浮世の有様が安固で無くて何時貧苦に陥るかも知れないから、誰か保證して呉れる者も有ればと待構へて居るのを見込で、責ては少々なりとも今爰に行き通ふ男女を保護してやろうとの工夫で、中々結構ではある、之が爲に有福な身許の者は、我死後に最愛の妻子が暫時の間だけでも他人に蹂躪されない様にと思て、此便ない保險に入る者もあらうけれども、之は此だけの事で、而かも保険料が拂へる人だけに限て、貧乏人の役に立たぬ事である、自分の心に爲たい仕事は出來ず、手でしてをる仕事は心に適はない、苦勞艱難の境遇に沈で居る人間は逆も及ばない事である、是が余の夢に見た國民の間に在るならば、眞實の生命保險が得られるので、各人皆一國民の一分子に成て居る以上は、其格式で如何なる災害も保險して貰へる、而かも一億の同胞國人に保險して貰へるのである、

暫くしてから鳥門町へ來て、とある建物の段の上に立て、觀兵式で聯隊が通るのを見た、朝から此

方へと云ふ者は、何だか物寂しく悲しい心地がしたが、今之を見て始めて悲哀と驚愕との感動が散じて他の感動が湧て來た、今まで見た者は皆不規律極つて道理も何も有た者では無つたが、軍隊は實に紀律嚴重で道理に適て居て、甘く協心戮力すると如何なる立派な事でも出來ると云ふことが一目の下に認められる、許多の人は皆意氣軒昂と云ふ面付で之を見て居るが、唯だ觀兵式が立派だと思て見て居たか、否恐らくは十分に協同の勤勞をして一號令の下に統轄する組織にすれば軍隊は誠に強大な機關で、其十倍もある謀叛人の征服が出来る者だと云ふことに目が着たであらうか、又此道理が明かに解れば、従つて亦た國民其物が學理的で戦へば成功するのに、非學理的で仕事すれば成功しないと云ふことも解るではあるまいか、又人に衣食させるより人を殺す方を肝腎な事とし、殺人事業をば鍛鍊した軍隊にさせながら、生産分配事業を秩序のない一揆兵に委ねると云ふ間違たことは何時頃から始つた事だろうと不審を打ちそうな者ではあるまいか、

今は彼此夕暮に近いて、町々は店や工場や機械場から歸る勞役者で群集した、流るゝが如き通行人の尤も繁しい間に押し去られて、黄昏時に來た處は誠に不潔極た陋巷の真中で、難澁町の尤も難澁な所で丁度南河邊の様な處で有た、今朝以來は人力を無暗に浪費するのを見て來たが、今日の當りに見る貧苦慘憺たる有様は、正しく人力浪費の結果たるものが歴々として認められた、

何方を見ても九尺二間の棟割長屋で、家小屋程に不潔で有る、眞黒に燻ばつた入口や窓から惡臭ある空氣がムウ／＼と出て来る、町も小路も惡臭の氣が蒸し上つて、丁度奴隸船の中甲板に似て居る、其處を通して居ると、家の中に青ざめた水子が空氣の通はぬ熱い惡氣の中に喘々と苦しい呼吸するのが、驚然と見へる、母は艱難の爲に顔は憔悴れ姿は歪み、薄弱と云ふ點を除いたら女らしい所が一寸も無い、一方には少女等が日に焼けて眞鍮色になつた額を出して窓から窺いて居る、碌しか着物も着て居ない多數の小供等が、中庭に散亂する魚や生物の腸を得んとて、打轉ばし合ひの喧嘩をして、叫ぶや罵る聲は餓鬼道の光景と思はれた、

此様な事は何れも皆余に取て目新しい事ではない、是迄此邊を幾度も通て其光景を見たことが有るので、其時は唯だ嫌惡の感情が起つたのと多少哲學的の眼光で見て、人間が斯く迄墮落をする者が斯く墮落してさへ生けて居りたい者かと驚たに過なんだ、然るに第二十世紀の有様に目を染めた以來は、當今の世界が不經濟極まつた愚かな事をして居ると云ふことのみならず、不徳義極まつた殘忍な事をして居る事に氣が付て、昨日と今日と着眼の仕方が大層變てしまつた、ソコで此世からなる地獄に落て居る不幸な人を見るにも、誠に可哀想な心地がして、彼でも人間かと水臭い心で珍しい想に見ることはしない、思へば彼等は余が兄弟たり余が親子たり余が骨肉である、今周圍に見ゆる貧苦の人は、

刀を胸に貫く斗り余が心を痛ましめて、之が爲に流涕大息せざるを得ない、眼前に現はる、光景は、唯だ余の目に映じた斗りではない、實に余の身體に感じたのである、

暫く經て余は周りに居る貧乏人を寫し注意して見ると、何れも皆死でしまつて居る、其身体は言はい生きた墓の様な者で、其凄い面には死だ靈魂の戒名が明かに書き載せて有た、

余はゾットし乍ら一の死人の頭から他の死人の頭を見渡し、餘りの事に變に精神が錯亂した、此等の凄い顔は何れも其上にフワリ／＼とした半ば透明な幽靈顔を被せてある様に見へたが、若し心と魂が共に生きて居る者なら、是が正當な顔であるに相違ない、予は此等を目撃し、又た彼等の眼付は浮世を痛罵して居る様にあるのも無理で無いと云ふことを知て見れば、彼等を斯く零落せしめたことは、實に氣の毒でたまらなくなつた、今迄余は世間の大方の人々の様に、此位な事の有るのは當り前だと思ふて居たから、今此有様を目撃するに付けて、實に痛恨悲哀に堪へられない、嗚呼余は今迄世人と共に謬見を懷て、此くの如き有様が人間世界に有りぞ知り乍ら、之を聞くことをも好まず、又之を考へて一滴の涙を潑ぐことも欲せず、剩さへ余が快樂と利益を貪るに汲々として輕々に看過して居たとは、實に罪なことと有た、理りや今余が衣服を見れば、貧苦に逼る幾千万の同胞兄弟の血潮が付て居る、大地よりは兄弟の血液が聲を揚げて余の罪を鳴して居る、惡氣を蒸し上る敷石も、病毒深

き荒屋も、一時に聲を上げて、「人殺しの悪逆者め、汝の兄弟を如何してしまふたぞ」と、逃ぐる余を呼び掛けたのも理り至極で有た、

其後は如何で有たか明かに覺へては居ないが、兎角する内共富町に在る余が許嫁の婦人悦子の立派な家の前へ来て、彫刻のしてある石段の上に立た、此日余の心は實に騒擾錯亂の間に在たので、唯の一度も悦子の事を思はなんだが、知らず知らず押進められて其門口へ足が向たのである、家族一同飯を食て居る由を聞たが、一緒に食事をして下さいとの傳言を受けて食堂へ行たが、家族一同の外に幾人か客が居て、皆知人斗りて有る、食卓の上には結構な皿鉢が燦爛と光て居る、婦人共は盛服を着飾て高價な寶石を着けて居る、其贅澤榮華な事は言語道斷で、一同は言笑沸くが如く意氣昂然としてをつた、

彼の焦熱地獄を歩いて居る間に、余の血液は涙に變じ、精神は悲哀で鏤けた心地したたが、今は偶然にも縱飲酣歌する連中の間へ來たのである、余は默然と坐つて居た所へ悦子が來て、何を苦にしていなさると冷かし出す、他の者も面白半分に周りから攻め掛て愚弄するやら冷かすやら散々にしてしまつて、「君は一体何處に居たのだ、全体何を見てそんなに鬱陶敷い者に成たのだ」と罵つた、

余は遂に答へた、「ハイ墓地に居りまして人類が十字架に吊上られて居るのを見ました、諸君は當

市に大層悲惨な事が有ることを御存知に成ませぬか、諸君の門の間近には、諸君の血肉を分けた幾千萬の男女が生涯悲痛無殘の生命を送てをるのを御存知に成ませぬか、御聞下さい、彼等の住家は極めて近く、諸君が笑聲を御止めなさつたら其悲哀の聲が聞えます、貧苦に育てられる嬰兒の憐れな泣聲が聞えます、半ば畜生道に陥て皺枯聲で悲鳴する男の聲が聞えます、食物を得る爲に身を賣る幾千の女の愁吟の聲が聞えます、諸君は此等の憂愁の聲が聞えぬとは、一体何で耳の孔を塞いでござるか、私に取ましては其聲の外何にも聞こへませぬ、」

一座水を打た如くに白けて黙つてしまつた、余は憐の爲に身を振はせた、然るに一同を見廻すと、中々感動せられる所ではない、皆冷淡な殘刻な面付で驚て居る、悦子も同じ顔付であるのみならず、非常に鬱悶した有様、其父は憤怒の体である、婦人共は皆悔り顔で互に見合し、一人の眼鏡を掛けた紳士、理窟張た不思議そうな顔付で余を白眼で居る、嗚呼余には堪へられない程可哀想な事は微塵も彼等の心を動かすに足らず、言ふさへ心を鏤かす程悲しい言葉も徒らに彼等を怒らせるに止つて、余は驚きも驚き、今は望も絶へ果て、心がグンナリとした、思へば思慮ある男や優しい女さへ此慘狀の爲に感動されないとして見れば、貧苦な者を救ふ望は何處にあるか、世界を救ふ望は何處にあるか、そこで余は考へ直した、或は余が眞直に言はなかつたから斯様に成たのであらう、全く示し

様が惡かつたのに違ひない、余が彼等を嘲罵したのだと思ふて怒つたのである、けれども余に在つては只管悲酸な有様を考へて居て、決して之が彼等の爲たことだと言ふた積は無いのであるけれども、彼等は余の本意を解せんだったのである、

余は怒りを抑さへ、何かして彼等の誤解を直はそうと思つて、心を落付て論理的に話して見た、其言に「諸君なり世間一般の金持が世界が貧乏に苦しんで居る責任を負ふて居るから云て諸君等の罪を問ふと云ふ心では有ませぬ、成程金持が浪費する贅澤物を外の事に用ひたら、幾ら世人の困苦が救へるか知れませぬ、爰にある高い食物や結構な酒、或は立派な織物や燦爛たる寶石は、幾何の生命を救へるか知れませぬ、諸君は恰も飢饉に難んで居る國で贅澤を極める人の様に決して無罪たることは得ませぬ、併し乍ら金持が浪費する物を悉皆儉約して世界中の貧苦を救ふた所で、丁度焼石に水で何の効も有りませぬ、何程博愛的の慈善心で之を天下の貧乏人に配分しましても、一人前に麵包皮一片位にしか當りませぬ、

「世界が貧窮である大原因は、人心が殘忍刻薄で有るからではない、人が愚痴なからで有まして、人間を極めて不幸ならしめる者は、何にも世界中の人の罪過でも無ければ、一部分の人の罪過でも無く、甚しい恐ろしい誤謬でございます、世界を暗黒ならしめる大過失でございます、若し労働者の間

に紀律と一致が無くして、互に競争戦闘しますときは、人間の勢力の五分の四は全く無益に消費します、今此事を明瞭ならしめる爲に、乾燥した土地を例に引て申しませうなれば、溝渠を以て水を注ぐことに注意する丈で十分肥沃の土に成ますので、此の如き國に於ましては、個人が我が私慾や無知の爲に水を浪費しない様に趣向するのが政府の至要な職分でございます、苦し之を忽にして個人の自儘にさせたら饑饉が起るのです、そこで水の使用を嚴重に定めて紀律を立て置きまして、個人が勝手に之を堰留たり向け變へたり、或は之に手をさへることを許しませぬ、

「人の勤勞は恰も土地を肥沃にする水流で、之があるから土地が住めるので、之なければ住むことが出来ませぬ、所が此は甚だ貧しい水流でありますから、豊かに世界を養ひますには、各一滴でも十分の効果を著はせる様に用ふる方法を立てなければなりません、然るに實際はそんな方法を用ひて居るのでなく、各人は我収穫を増し他人の収穫を潰して我粟を良い價に賣らうと云ふ氣が有て、此重寶な水流を銘々思ひ／＼に浪費をします、夫れを許す者であるから或は貪慾から或は怨恨から、或る田野には洪水が出る、或る田野は旱魃になると云ふ風で、貴重な水は半分も無益に流れ去ります、此の如き國では少數の人が力や狡猾で贅澤をする資本を得るかは知りませぬが、大方の人民は貧困に陥りまするし、薄弱な者や無智な者は命旦夕に逼ると云ふ窮狀に陥て、年中の飢饉でございます、

「然るに今飢饉に困む國をして、是迄怠慢にした方法規律を以て、生命の源泉たる勤勞を公共の利益に用ひしめしましたなれば、世界は恰も花園の如く花盛りになつて、幸福な生活を得ない者は一人も有りすまい、況んや此方法に據りますると、天下の人民は悉く身体は無病健康で心は聰明で、德行も高尚になると云ふ利益がございます、」

余は熱心に新社會の利益を論じ去た、即ち實物が豊富で公平と博愛が満ちて有る社會を説いたので、此様な有様は唯だ夢で見たのに過ぎないが、之を現實にしようと思へば容易に出来る事である、余が説を聞て人々の顔は定めて余と同様な感動を表するだらうと思て居たのに、案に相違して益怒り益輕蔑して来る、婦人等は熱情を示さずして憎惡と恐怖を示した様子で、男は罵詈雑言の聲を揚げて余の論を妨げ「氣狂だ」「惡漢だ」「狂熱者だ」「社會の公敵だ」などと、四方八方から散々に愚弄する、先刻から眼鏡で見居た者は「世界に貧乏が無いようにしよう」と云ふのだな、ハ、ハ、ハ、と言つた、余が愛婦の父は「野郎を摘み出してしまへ」と叫ぶ、オット合點と銘々椅子から立て吾に向て來た余に取ては至て明瞭で至て重要な事も、此輩には無意味で有て、何と云ても悟らせることが出来ないとは誠に悲いことで、胸も張り裂く様に思はれた、余が熱情の熱度は劇烈なもので、其光輝で氷山も鎔さぬ斗りに思て居たのに、豈圖らん遂には嚴寒の爲に打勝れて、余自らの命脈さへ絶へなるとし

た、彼等は余に對して敵意を挾だが、余は彼等に對して決して敵意を挾まない、否な彼等の爲め世界の爲めに哀憐の心を挾たのである、

余の望は已に絶へなるとしたけれども、未練の心は未だ全く望を絶ち去るに忍びず、全力を以て彼等と争ひつゝ、余が目は涙滂沱として流れ、余が熱心は語ること能はざらしめ、或は喘ぎ或は咽び或は呻吟して居ると思ふと、折戸氏の宅の一室に床の上に坐て居て、旭日眩ゆく開ける窓より照り入た、自ら顧れば長嘆息して數行の涕淚は兩頬を流れ、全身の神經は慄然として震つた、

第十九世紀へ戻たのは全く夢で有て、今第二十世紀に居るのは現實であることが解つた嬉しさは、丁度逃亡した罪人が再び捕へられて暗い穢ない獄屋へ投せられた夢を見て、目が覺めて頭上に縁を拭ふ晴天を見た嬉しさと同じ様である、

余が夢幻に目撃した殘逆な有様は、昔曾て實際に有た事で、世の惻隱の心ある者は回顧して涙を流す悲惨な事であるけれども、有難い事には永久に過ぎ去て、壓虐した者も壓虐せられた者も、預言者も誹謗者も、遠の昔に北邙の塵と成てしまひ、貧乏だの金持だのと云ふ語は數代忘れられて、人の使ふ必要が無くなつた、

併し余は世界の貧苦が救済せられた功業の偉大な事や、余が此昌平世界を目撃する特權を得たこと

を熟思すれば、言ふに言はれぬ程感謝の心が起るのであるが、夫れと同時に慚愧痛恨自ら責める心が刀を以て胸を貫く如く簇り起て、余は頭を垂れて打つ伏し、舊友と地下に葬られたら善かつたにと思ふた、何故かと云ふのに、抑も余は舊社會の人間で、今日の樂境を開くに何等の助をもせなんだ者である、彼の殘逆無情な日に生きた人間で、之れを改革するに何等の勤をもせなんだ者である、余が同時の人と同じく兄弟の窮狀を見て少しも憐むことを知らず、社會の改良を聞て少しも信ずることを知らず、混沌たる暗夜を崇拜して赫々たる文明を賤んだ者である、余が身の勢力の及ぶ限りは當夜已に萌芽を生じて居た人身救済の爲に助力せずして、却て之を妨げんと勉めた者である、然るに余は余と氷炭相容なんだ世界救済主義を歡迎して余が輕蔑罵詈した文明の曙光を喜ぶの權利は無いのである、此時心の中に聲が聞こへた、其聲は言ふた「此惡い夢が眞正で、此現實の事が夢である方が汝の爲に善いのだ、汝は今こゝに在て結構な井の水を飲んで居るけれども、其井は汝が掘出したので無いではないか、又結構な木の實を食ひ居るけれども、此木を培養する人に汝は石を擲たではないか、一そ昔に立戻り人類を磔にして而も之を嘲笑する人々と共に其惡虐を辨護するが汝に相應して居る」と、余は漸くにして俯したる頭を擡て窓から外を眺めると、悦子は爽快な風采で花園で花を摘んで居た、余は急いで其側へ行き、土に顔を付けて其前に跪き、余は此黃金時代に生きる直打なき事、増して其

美しい花を胸に着ける直打なき事を涙乍らに白狀した、嗚呼余の如く萬死免れ難き罪を以て慈悲海の如き判官に逢ふ者は、幸福此上もない事である、

1579/37

明治三十六年十二月廿九日印刷
明治三十六年十二月三十日發行

百年後之社會與附
定價金六十錢

譯者 平井廣五郎

發行者 福永文之助

印刷者 村岡平吉

印刷所 橫濱市山下町八十一番地
福音印刷合資會社



發行所

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
(電話新橋 五七八)
警醒社書店

大西博士全集

○第五卷近刊豫告○

故文學博士大西祝先生遺稿

第五卷

良心起原論 完

良心の起原如何。此の問題の解釋如何は以て道德の基礎を揺るがす人生の價值を一變せしむるに足るべき倫理學上至大至要の問題たるに係らず、今日に至るまで明瞭確實毫も非難を容るべからざる考説あるを見ず。蓋し倫理の難問中最も不明不審なるものの一たるべし。先生此の大問題を捉へて研鑽せらるゝを多年、乃ち此の論文に於いて、從來の諸説を批評辯難し、更に自家の新見を掲げて、此の古今未了の問題を解決せむと試みらるゝ最もよく批評、建設の両方面に於ける先生を顯はし、先生の宇宙人生觀また窺ふに足るものあり。全體として世に公けにせらるゝは實に今回を以て始めす。蓋し先生の遺稿中最も興味あり、最も渴望せられつゝあるもの也。

第六卷 雜 著

寄木上太郎先生著

傳 (定價五十錢 郵税六錢)

米國神學士ゼー

10

定價二十五錢
郵稅四錢

定價二十五錢
郵稅四錢

定價二十五錢
郵稅四錢

定價二十五錢

定價四角

定價四角
郵稅四角
定價二十八錢

定價三十錢

定價三十錢

郵稅六
定價二十五

郵稅六錢
定價三十五錢

郵稅六
定價十五

郵稅二
定價五
十

定價五十五元

定價五十八

定價三十

定價三十

定價四十錢
郵稅六錢

定價 三十五 錢	郵費 四錢	定價 三十五 錢
----------------	----------	----------------

郵稅四錢
定價五錢
十

定價十六元

郵定價稅二十四
五
錢錢

定價四十元

定價三十錢

定價二十四錢

郵稅四十二錢

郵稅六錢

定價一六三圓

郵稅二十
定價六十

五十五

定價三十

定價四十

定價二十五元
郵稅四元

大賣捌所

大坂市心齋橋筋南久太郎町
大坂市東區備後町四丁目七八
大坂市心齋橋筋博勢町四丁目
京都市三條通寺町四丁目
京都市三條通宮小路四丁目北側
京都市河原町通二條下二丁目
神戶市北長六
神戶市元町五丁目二三
廣島市高松市丸龜町四丁目
廣島市鹽屋町
周防國岩國町
福岡市博多中島町
福岡市博多龜屋町
久留米市米屋町
熊本市新町二丁目
鹿兒島市仲町四六
鹿兒島市松山通仲町
沖繩縣那覇區久茂六一
名古屋市中區三丁目
名古屋市中區通鉄砲町二丁目
三河國豐橋町吳服町
三河國岡崎町連尺町
靜岡市葵服町二丁目一六
遠江國濱松連尺町
甲府市柳町二丁目
甲府市常盤町一〇
甲府市櫻町四丁目
橫濱市港大瀨町
橫濱市吉田町一丁目五
橫濱市松ヶ枝町

福音社 寶文軒 聖書房 便利屋 大黒屋 寶文館 龜友堂 日新堂 金文堂 樂善堂 文花堂 金光堂 博愛堂 豐川堂 環翠閣 金蘭閣 谷正屋 柳正屋 溫故堂 眞盛堂 起明堂 弘集堂

矢部善岡 藤幸次 中井太郎 今村彌二 福音舎 北郷彌 積善兵衛 白銀伊兵衛 積善兵衛 善海屋 菊竹幸兵衛 長崎幸兵衛 吉崎幸兵衛 久田幸兵衛 小澤金次郎 川澤金次郎 三輪文次郎 伊藤源三郎 吉田源三郎 齋藤源三郎 坂本源三郎 山本源三郎 渡邊源三郎 天野源三郎

橫濱市伊勢佐木町二丁目一六
加賀國金澤市片町
越後國新潟市古町通七番丁
越後國新潟市古町通六番丁
越後國新潟市古町通五番丁
越後國長岡市表四ノ丁
越後國水原
信濃國長野市大門町
信濃國上田町原町二丁目
信濃國松本町大名町
信濃國松本町曲輪町
上野國前橋市曲輪町
上野國前橋市馬場町一
上野國伊勢崎町東丁
下野國宇都宮市馬場町一
下野國足利町一丁目
常陸國水戸市泉町二丁目
常陸國水戸市南町
仙臺市新傳馬町一〇
陸奥國一ノ關町五八五
岩代國若松市大町堅丁四
羽前國山形市
秋田市茶町菊ノ丁
陸奥國弘前市土手町三〇
陸奥國青森市米町一〇六
北海道札幌區南一條西二丁目
北海道札幌區南一條西三丁目

勉強堂 萬松堂 上田屋 萬松堂 小松屋 鶴林堂 松榮堂 耕雲堂 煥心堂 臨雲堂 文港堂 文曙堂

齋藤國造 宇都宮書 北都支 西村支 北越支 覺張支 目黒支 西村支 西村支 小成支 九松支 高松支 柴田支 磯部支 田邊支 青木支 川又支 寺田支 起明支 佐藤支 二見支 九見支 成見支 今泉支 福貴支 進振堂



F33

B33

終